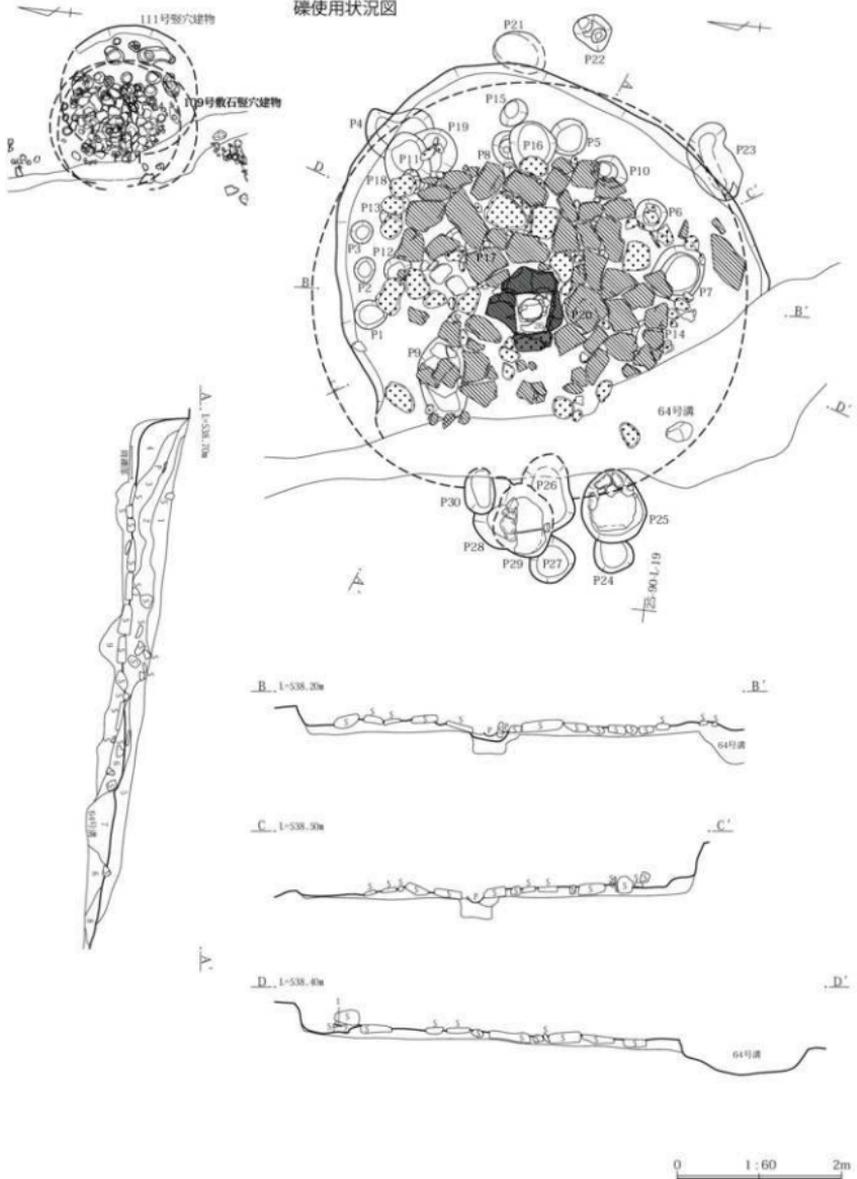
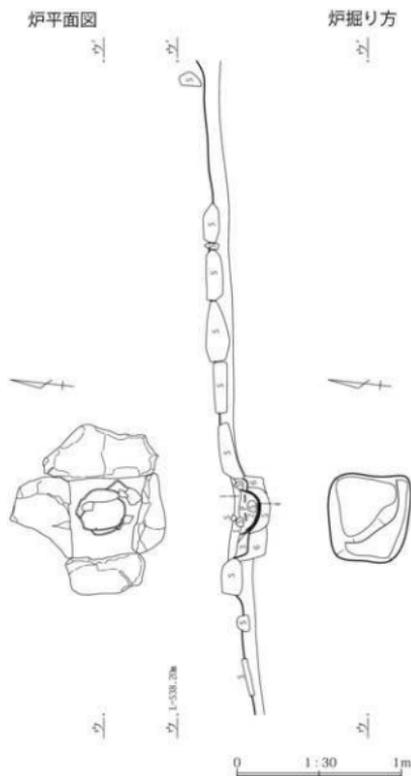


礎使用状況図



第178図 109号竪穴建物(1)



第179図 109号竪穴建物(2)

109号竪穴建物(第178～182図、PL.62～64)

調査年度 平成30年度

位置 90区V-20

経過 6区南西部の沢治いで確認した。この北側には95号竪穴建物に伴う1号列石があり、その南西部を追跡すると台地縁辺部に大きな黒色土の範囲があり、土器が分布することから調査となった。

重複 本建物の下に111号竪穴建物があり、これを切っている。1号列石と重複している可能性があるが、明確な切り合い関係は確認できなかった。また、西側の沢治いには後世の64号溝があり、これに切られている。

**形状** 直径5.3m前後の円形状を呈する柄鏡形敷石タイプの建物で、西側の沢に向かって柄部が付くが、確認されていない。沢治いには後世の溝等もあり、すでに切られていた可能性が高い。

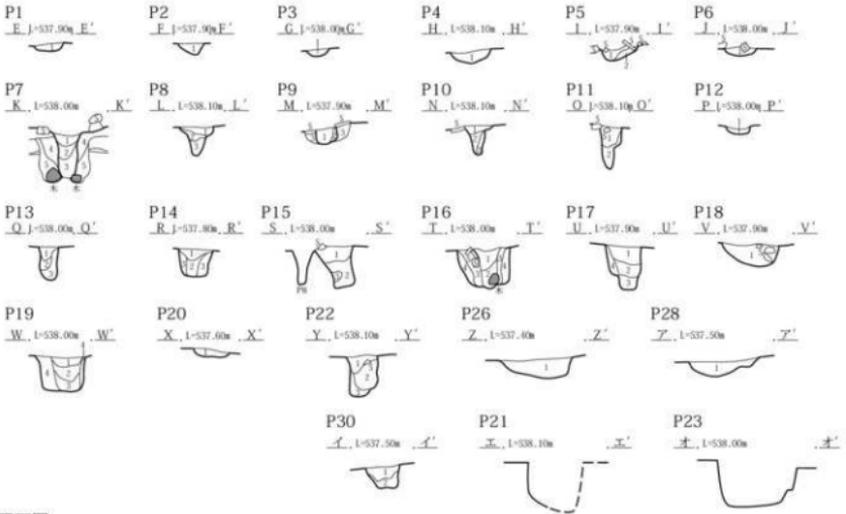
**床面** 柱穴の間をつなぐように六角形状の範囲に敷石を施している。敷石には鉄平石を主体に扁平な川原石を組み合わせてほぼ全面に敷いており、石の間には小さな石で根詰めをしている。

**炉** 方形の石囲炉であるが、側縁を立てて組んだ炉石は確認できない。抜き取られたのか。炉内には鉢状の大きな土器破片が据えてあった。炉石は無いが、炉の周囲は大型の敷石の縁を方形に囲っており、炉の周囲は被熱で変色・劣化しており、明瞭な痕跡を留めている。

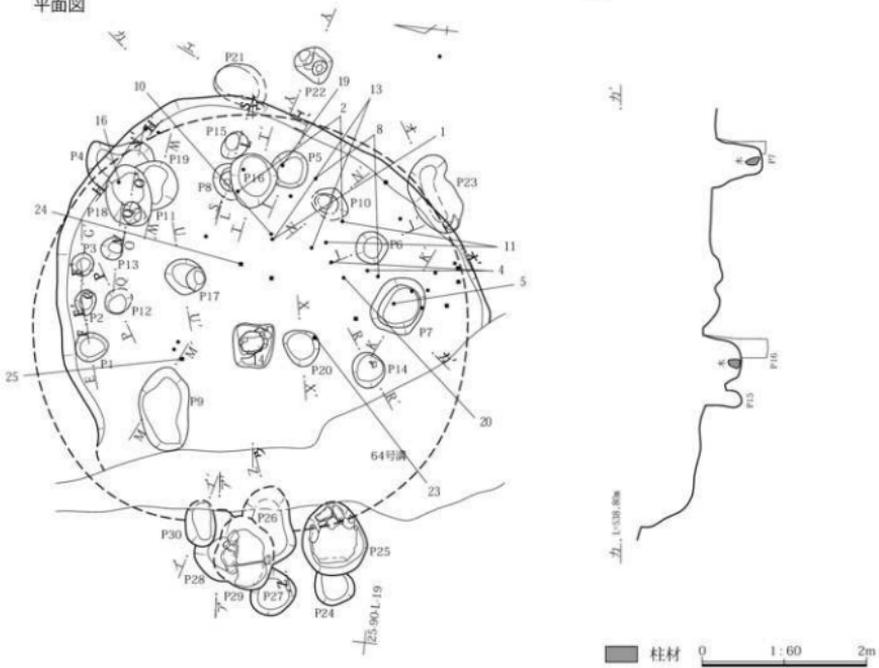
**柱穴** 建物の周囲も含めて合計30本を確認した。このうちP1・P7・P8・P10・P16・P18・P19は主柱であった可能性が高い。このうちP1・P7・P9・P16・P18の底面付近から柱材そのものと考えられる木質部が検出された。また、その後の調査で沢から数本の柱穴が確認された。このうちP25とP29は底面に大きな扁平礫が敷いてあり、明らかに柄部を示す対ビットであるが、炉の位置と背面のP16を結んだ建物の主軸からややズレており、P26・P28・P30がこの建物の対ビットであったと想定される。

**遺物** 奥壁部周辺からまとまった状態で比較的多くの土器が出土している。また、P8の下層から欠損した石棒が出土している。

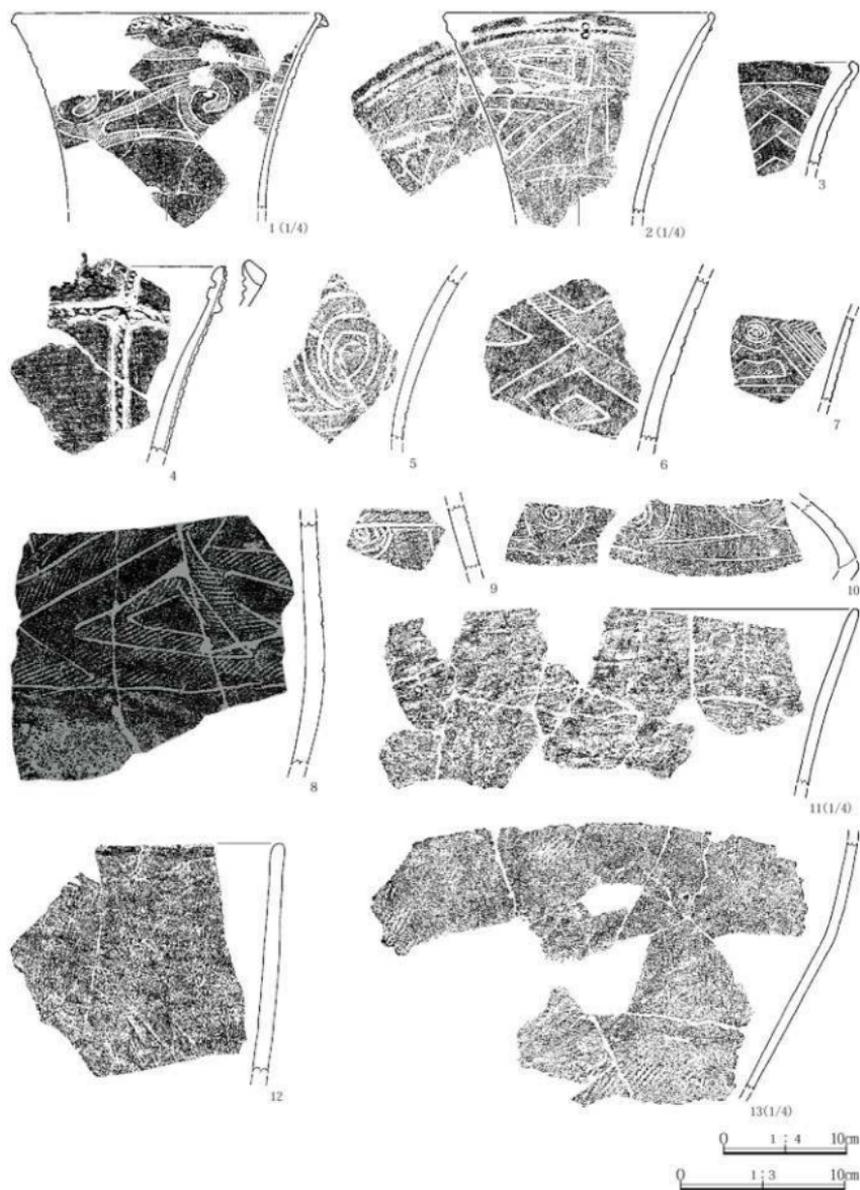
時期 後期堀之内2式期



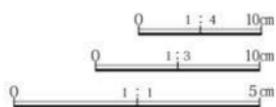
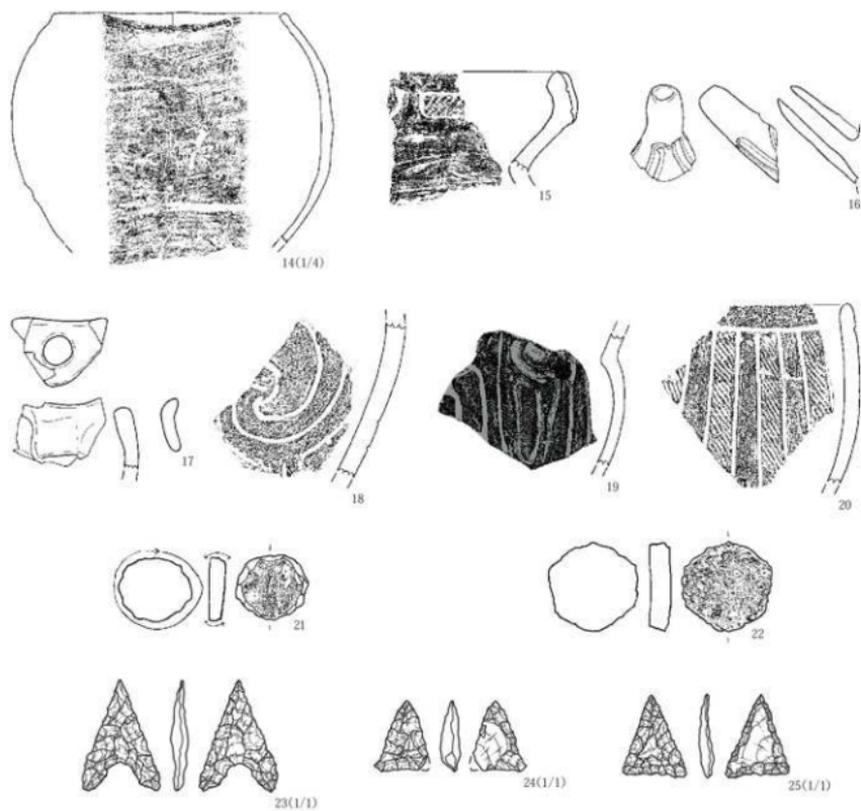
平面図



第180図 109号竪穴建物(3)

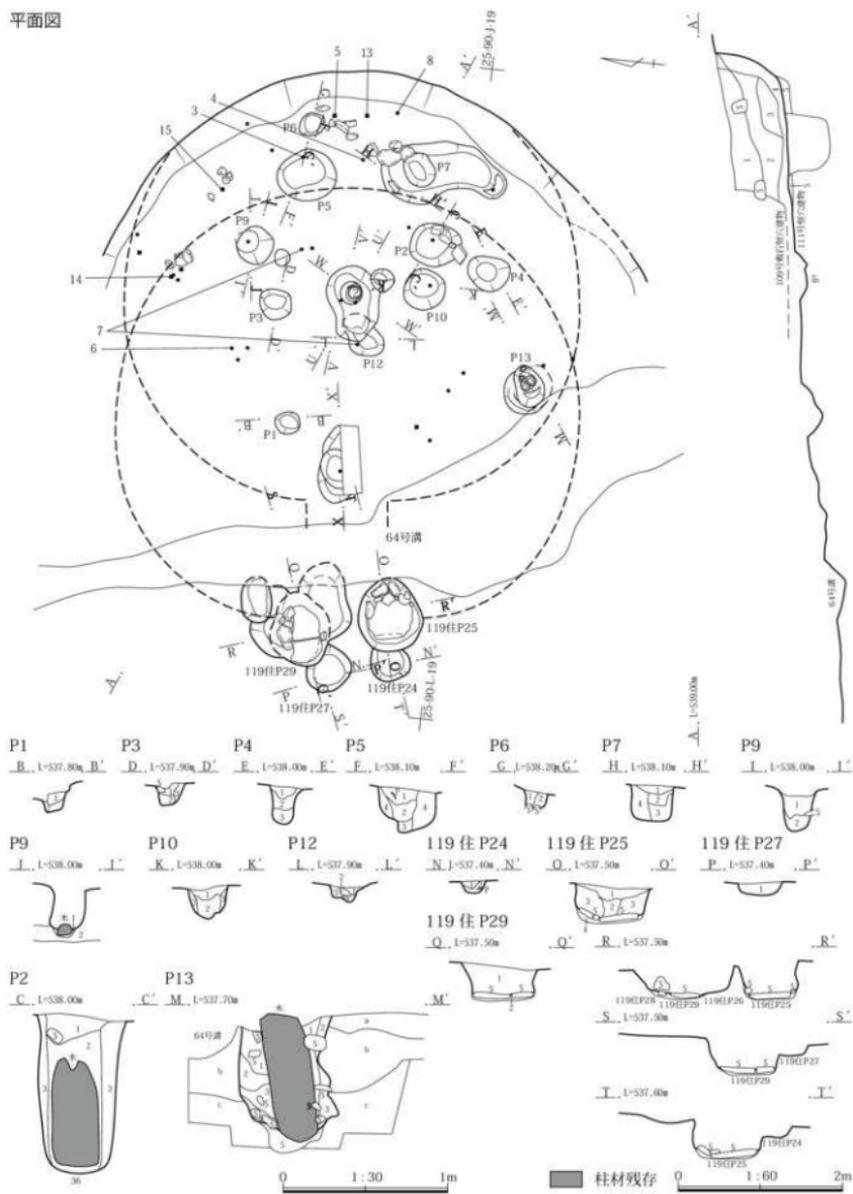


第181図 109号竪穴建物(4)



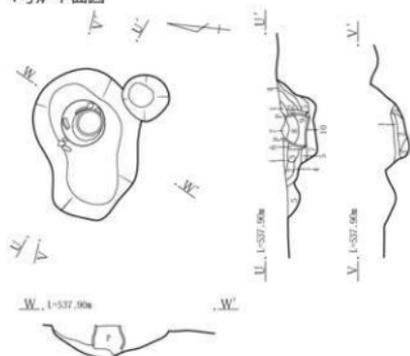
第182図 109号竪穴建物(5)

平面図



第183図 111号竪穴建物(1)

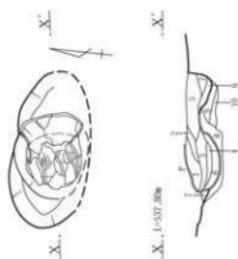
## 1号炉平面図



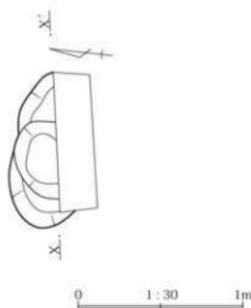
## 1号炉掘り方



## 2号炉



## 2号炉掘り方



第184図 111号竪穴建物(2)

## 111号竪穴建物(第183～188図、PL.65～67)

調査年度 平成30年度

位置 90区V-19・20

経過 109号竪穴建物の下で確認した。当初は109号より大きな建物と見られたが、炉と埋土の位置およびその後確認された沢のなかの対ピットの位置に不都合が生じ、2軒重複の可能性も考えるに至った。

重複 95号竪穴建物と重複し、これに切られている。

形状 炉を中心に直径5.5m前後の円形状を呈し、沢に向かって柄部が付く形状(A)と、埋土付近を中心に直径5.5m前後の円形状を呈し、底面に鉄平石を敷いたP25とP29を対ピットとして沢に向かって柄部が付く形状(B)の2軒の建物を想定した。

床面 Aは109号竪穴建物の床よりやや下がった位置に

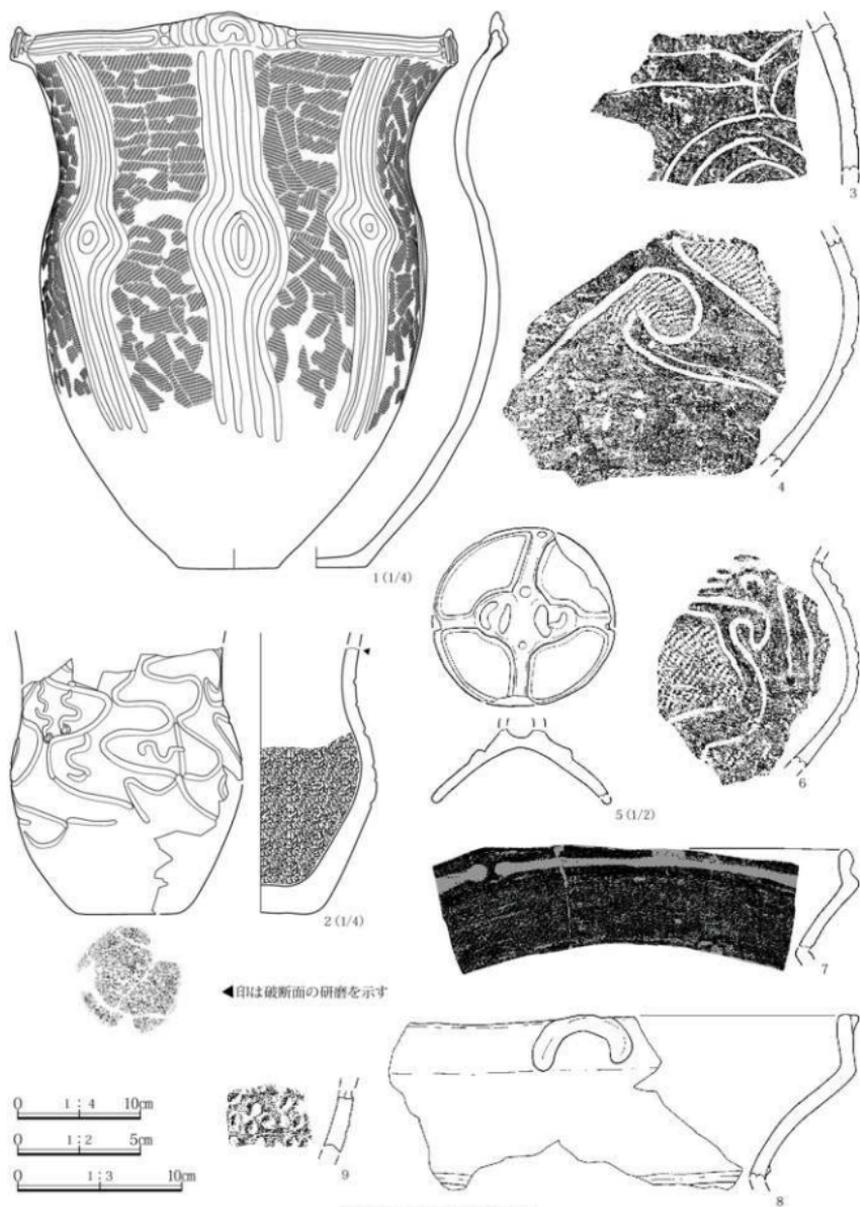
平坦面がある。敷石があった可能性が高いが残っていない。Bは堀方の状態であり、判然としない。

炉 Aは口縁部を失った深鉢が正位に埋設されているが、炉石は残っていない。埋土とされた深鉢は口縁部が残るもので、横転した状態で残されたが、これがBの炉内埋土であった可能性もある。

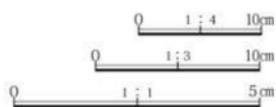
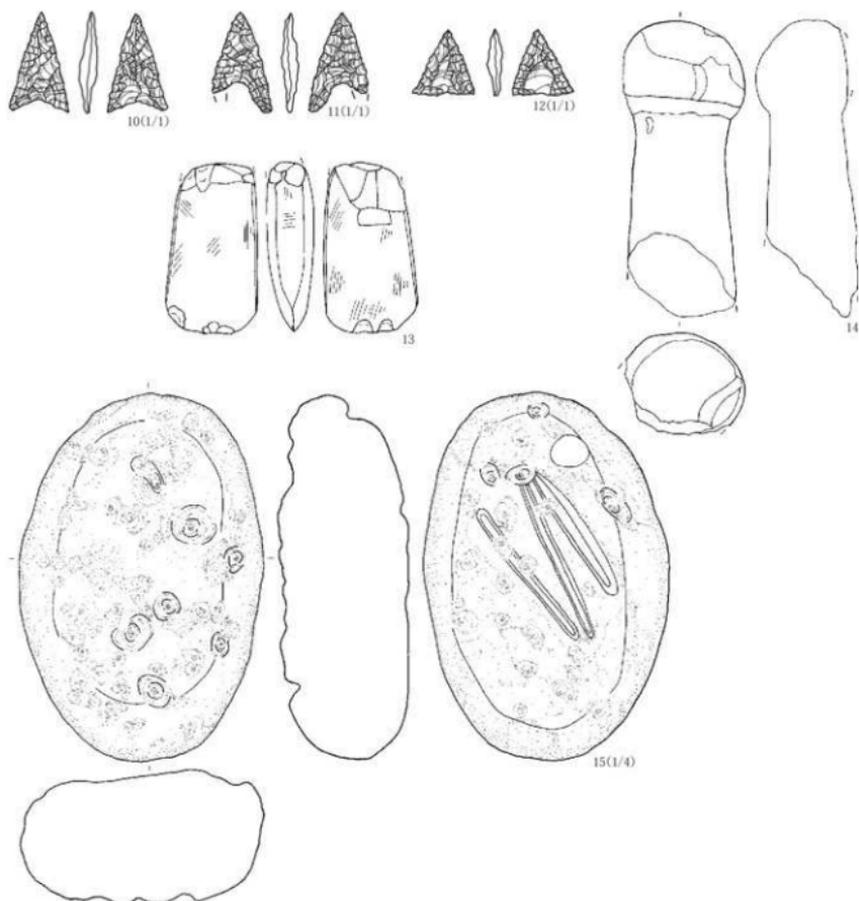
柱穴 主柱の確定は難しいが、P2とP13から柱材そのものが検出され、P9から木質が確認された。この3本はほぼ等間隔の配置を示しているが、このうちP2とP9はAの柱としてはやや内側にあり、Bの柱であった可能性が高い。

遺物 1が埋土とされた深鉢、2が炉内に埋設されていた深鉢で、その他に少量の土器と石器が出土している。

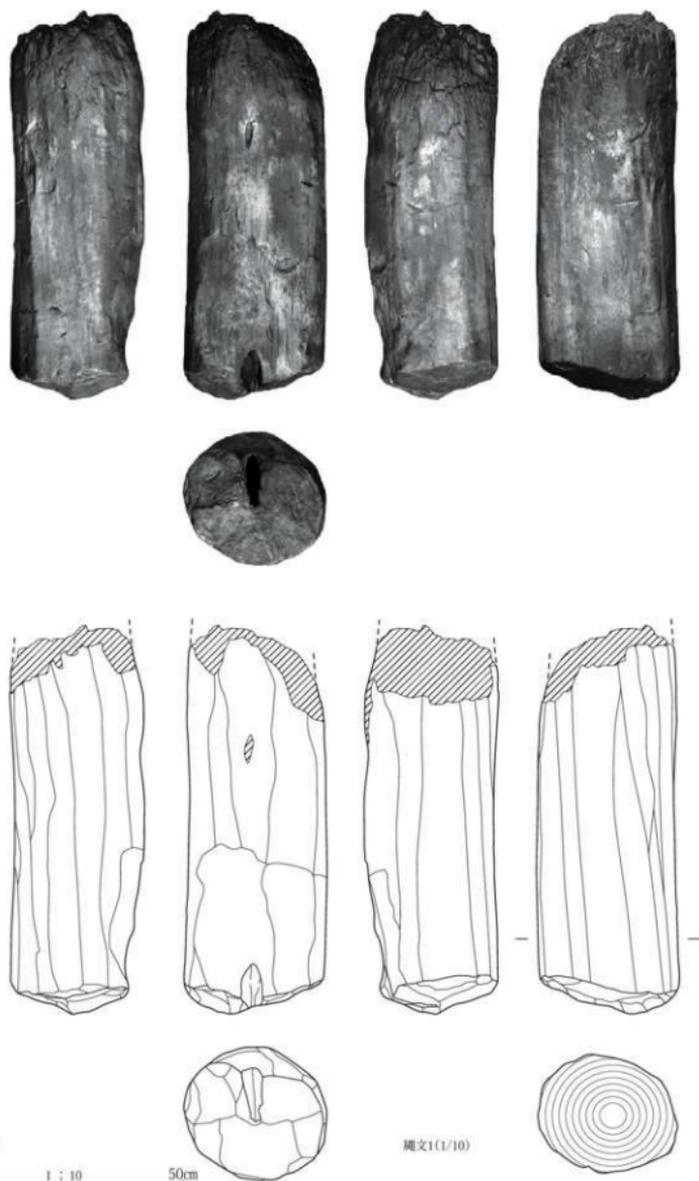
時期 後期縄文1式期



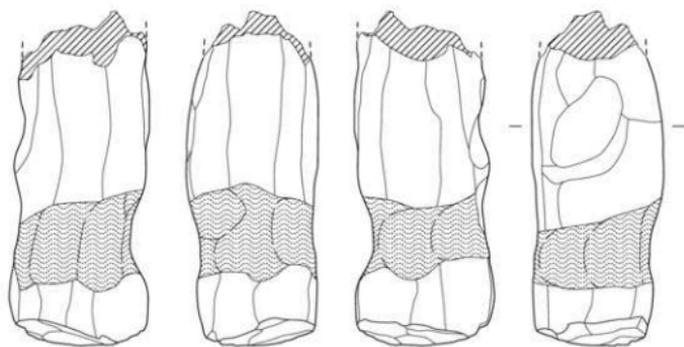
第185図 111号竪穴建物(3)



第186図 111号竪穴建物(4)



第187図 111号竪穴建物(5)



縄文2(1/10)

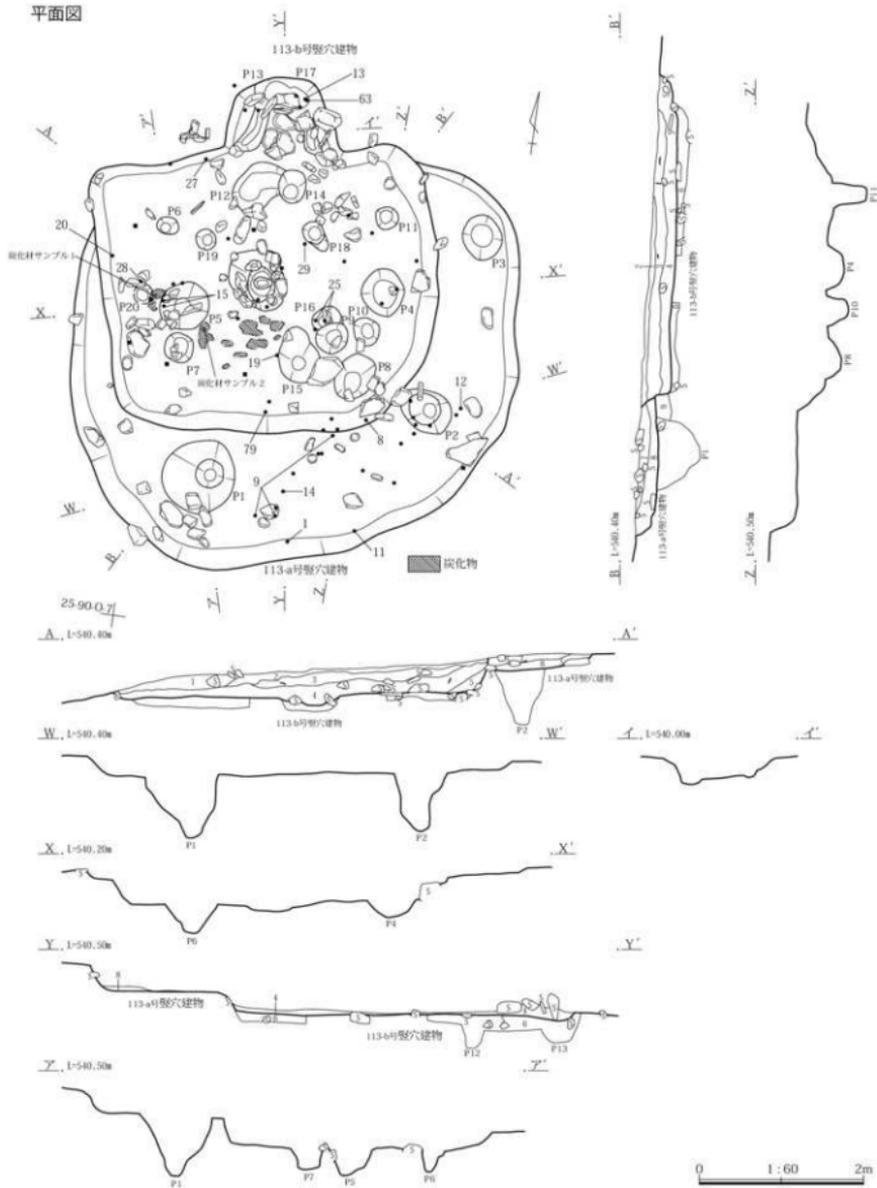


斜線 欠損 波線 厚減

0 1 : 10 50cm

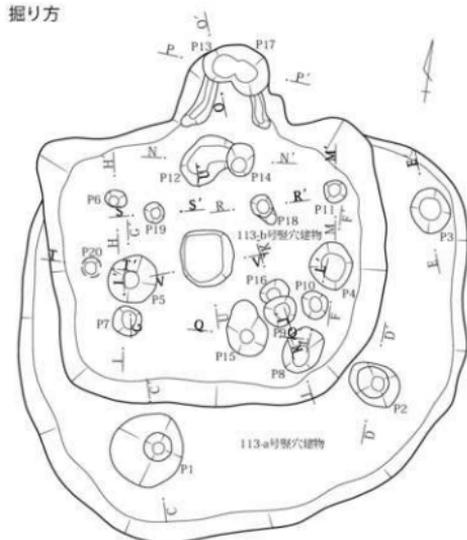
第188図 111号竪穴建物(6)

平面図

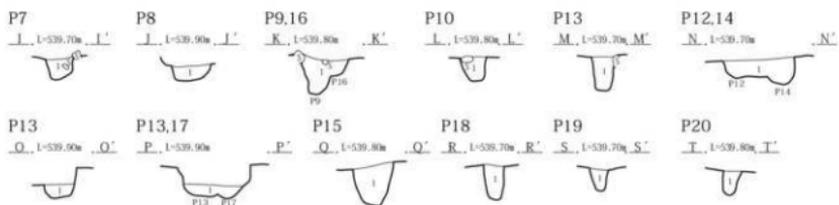


第180図 113号竪穴建物(1)

掘り方

P1  
C, l=540.10m C'P2  
D, l=540.20m D'P3  
E, l=540.10m E'P4  
F, l=539.80m F'P5  
G, l=539.70m G'P6  
H, l=539.70m H'

25.90 0.77



0 1:60 2m

第190図 113号竪穴建物(2)

113号竪穴建物(第189～197図、PL.68)

調査年度 平成30年度

位置 113a号竪穴建物: 90区-M・N・O-7・8

113b号竪穴建物: 90区-N・O-7・8

経過 90区東側の緩傾斜地、沢の西側縁辺部に位置し、120号竪穴建物の東側に隣接する。当初、1軒の竪穴建物と想定し、調査を開始したが、2軒の重複であることが判明し、113a号と113b号とした。

規模 113a号竪穴建物: 545×(490)×28

113b号竪穴建物: 430×410×42

重複 113a号が新しく、113b号古い。1号自然流路よりも新しい。

形状 113a号竪穴建物: 隅丸方形状

113b号竪穴建物: 柄部付隅丸方形状

床面 113a号竪穴建物: 貼床、敷石は確認されていないが、地山礫層を整理して床面としたと考えられる。竪穴建物縁辺部に40cm程の扁平礫が横位の状態で散在しており、壁寄りには、敷石が伴った可能性もある。

## 炉平面図



## 炉掘り方



第191図 113号竪穴建物(3)

113b号竪穴建物：貼床、敷石は確認されていないが、地山礫層を整地して床面としたと考えられる。竪穴建物縁辺部と柄部に40cm程の扁平礫が横位の状態で散在しており、壁寄りと柄部には、敷石が伴った可能性もある。南側から建築部材とみられる炭化材が確認されている(第3章参照)。

**柄部** 113b号竪穴建物には、幅120cmほどの長方形の柄が伴っている。床面には、床面に横位に扁平礫を据えた敷石がみられる。下位には、両側面部とP13、P7を連動させ、U字状の対ピットを構築している。P12、P14も同一の施設と考えられる。

**炉** 113b号竪穴建物において、方形石囲が確認された。規模は、80×76を測る。炉石の依存状態は悪いが、河原石を用いて、縦位に配置している。西辺と東辺に火熱痕が認められる。

**方位** 113a号竪穴建物：N-21°-W

113b号竪穴建物：N-1°-W

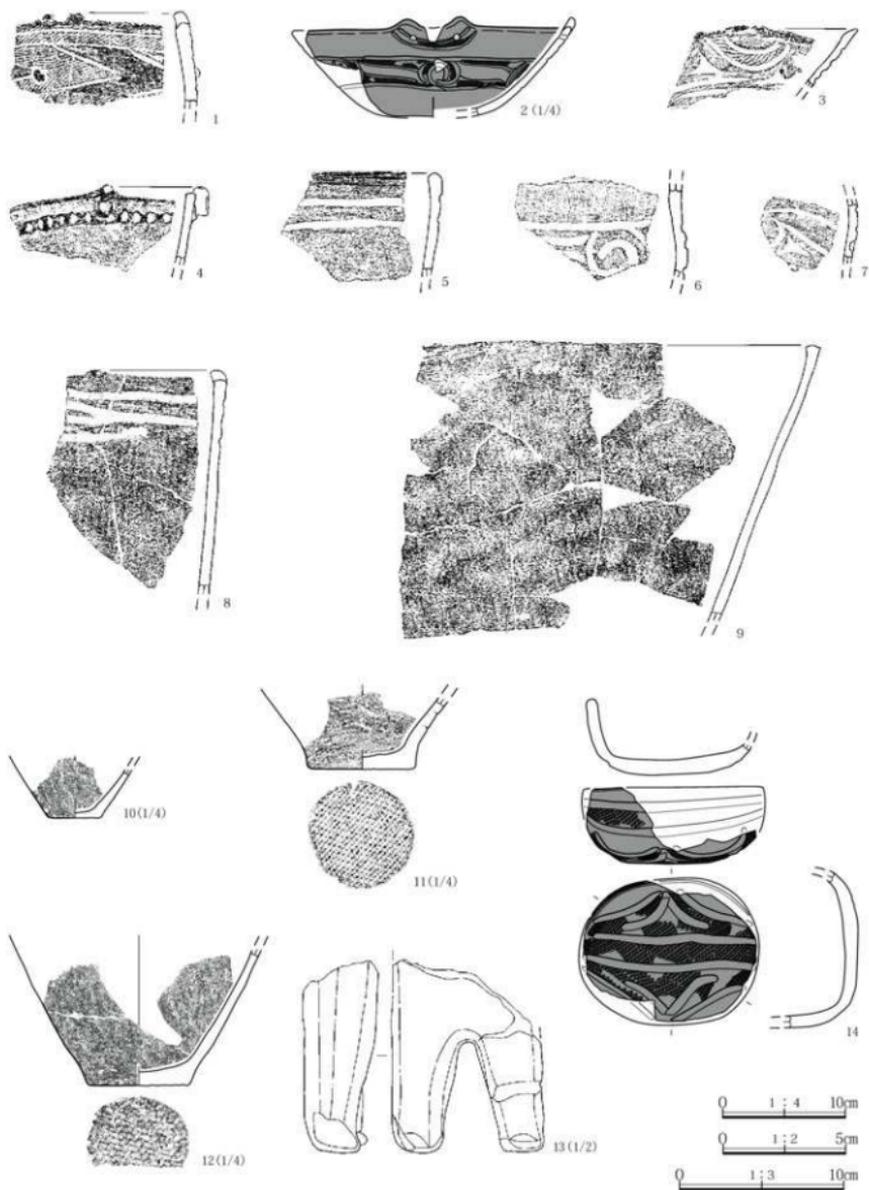
**柱穴** 19基礎確認されたP1～P5は113a号竪穴建物の柱穴、P7、P15、P18、P19は113b号竪穴建物の主柱穴、P12、P14、P13、P17は入口施設と考えられる。それぞれの規模(長辺×短辺×深さ)は、P1：90×90×73、P2：65×50×73、P3：55×45×40、P4：30×30×20、P5：50×50×30、P6：25×20×25、P7：45×35×25、

P8：60×45×20、P9：40×40×45、P10：30×30×70、P11：25×25×40、P12：(60)×60×45、P13、17：80×60×70、P14：40×34×40、P15：70×50×45、P16：35×(20)×15、P18：40×25×40、P19：25×25×25、P20：20×20×30である。

**遺物** 土器は、a b 含めて380点出土している。113a号竪穴建物は佐野I b式、113b号竪穴建物は佐野II式古段階が主体を占める。113a号竪穴建物では、佐野I b式(2、3、6、7)とともに佐野式併行の粗製土器(5、8)が出土した。土製品は手燭形土製品(14)と土偶(13)が出土した。土偶は左脚部が、72号配石墓の床面から出土しており、場所も離れていることから混入ではないと考えられる。両遺構の関連性が想定される。113b号竪穴建物では、佐野II式古段階(15、16、20、21)の他に中屋2式(23)、大洞C2式(25)、天神原式新段階(26)が出土した。他地域の土器は一括から榎原文様を伴った長竹式が出土した(45)。

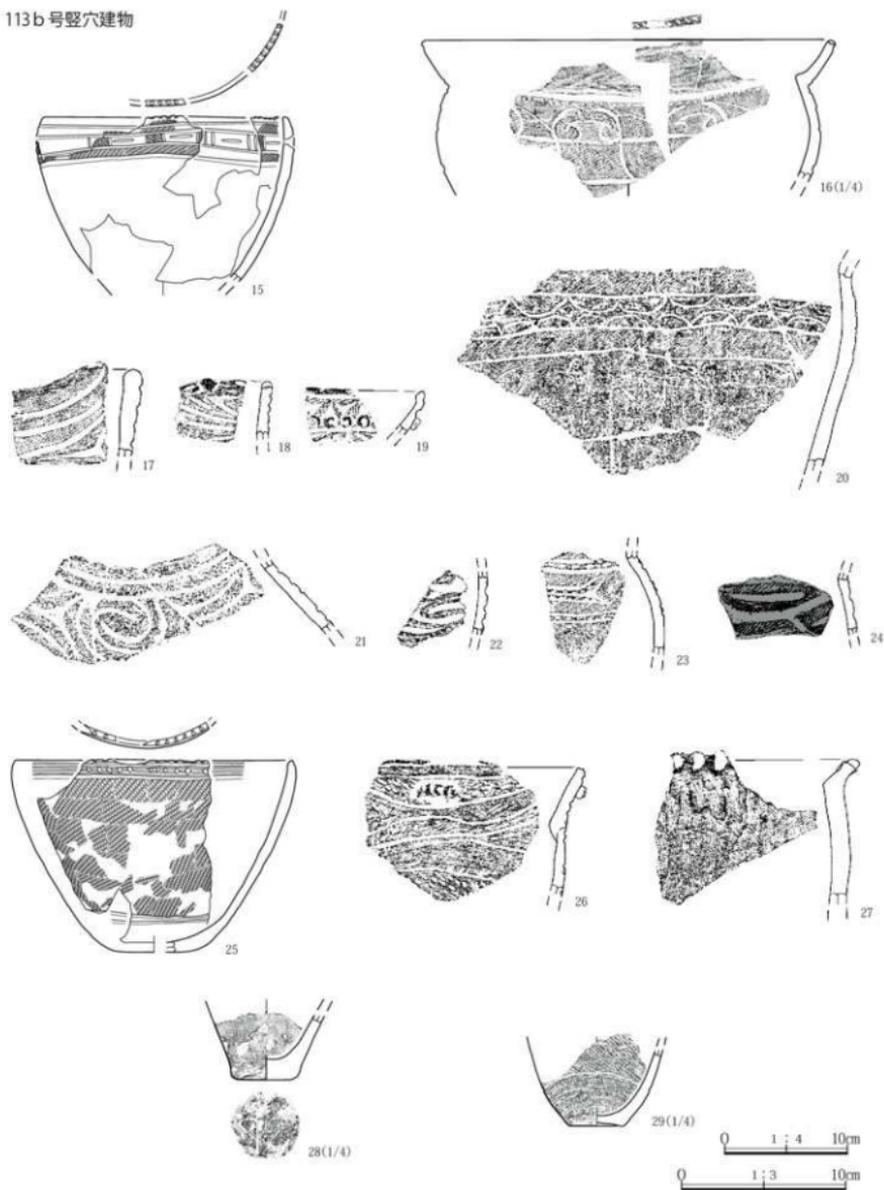
**時期** 113a号竪穴建物：佐野I b式

113b号竪穴建物：佐野II式古段階

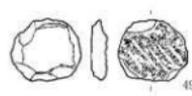
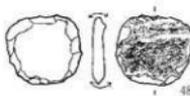
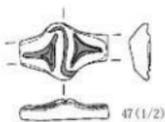
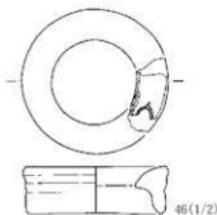
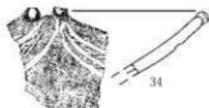
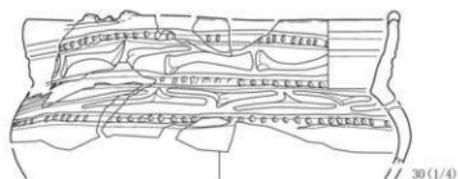


第192図 113号竪穴建物(4)

113b号竪穴建物



第193図 113号竪穴建物(5)



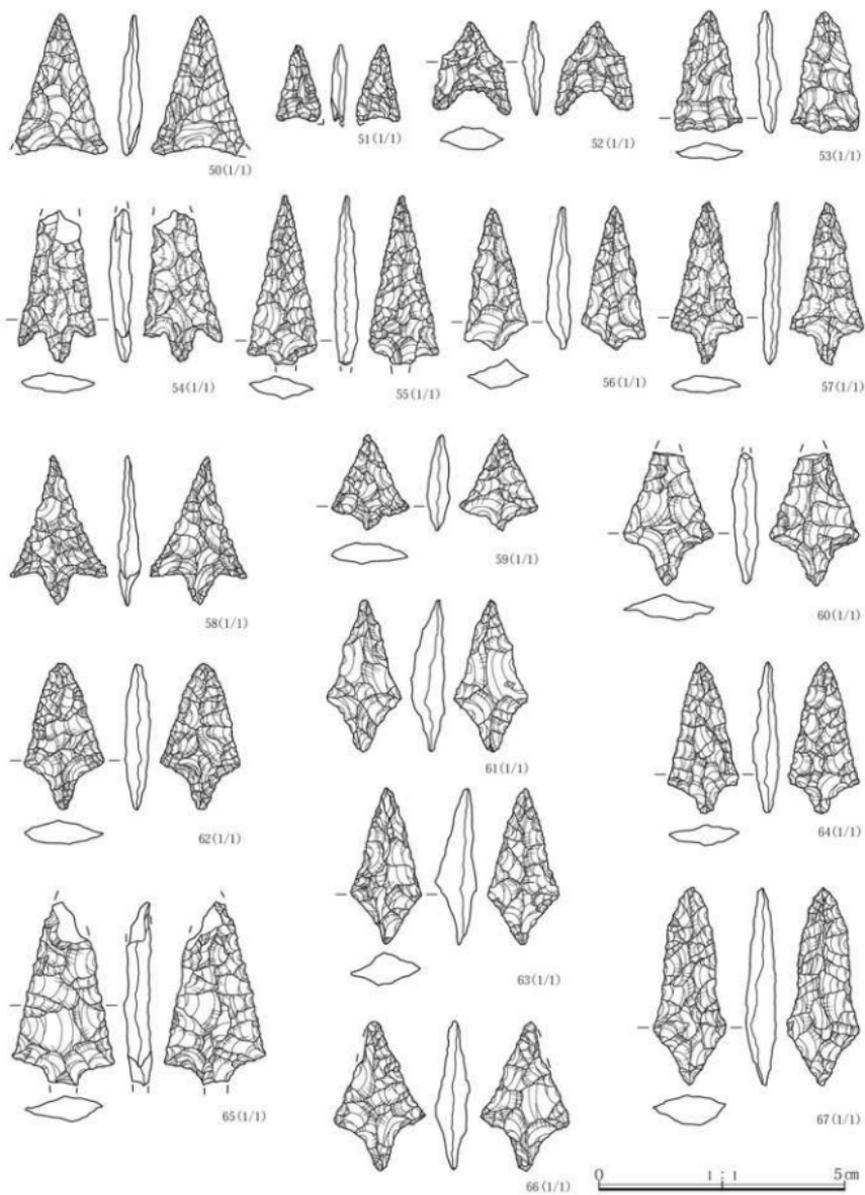
0 1:4 10m

0 1:2 5m

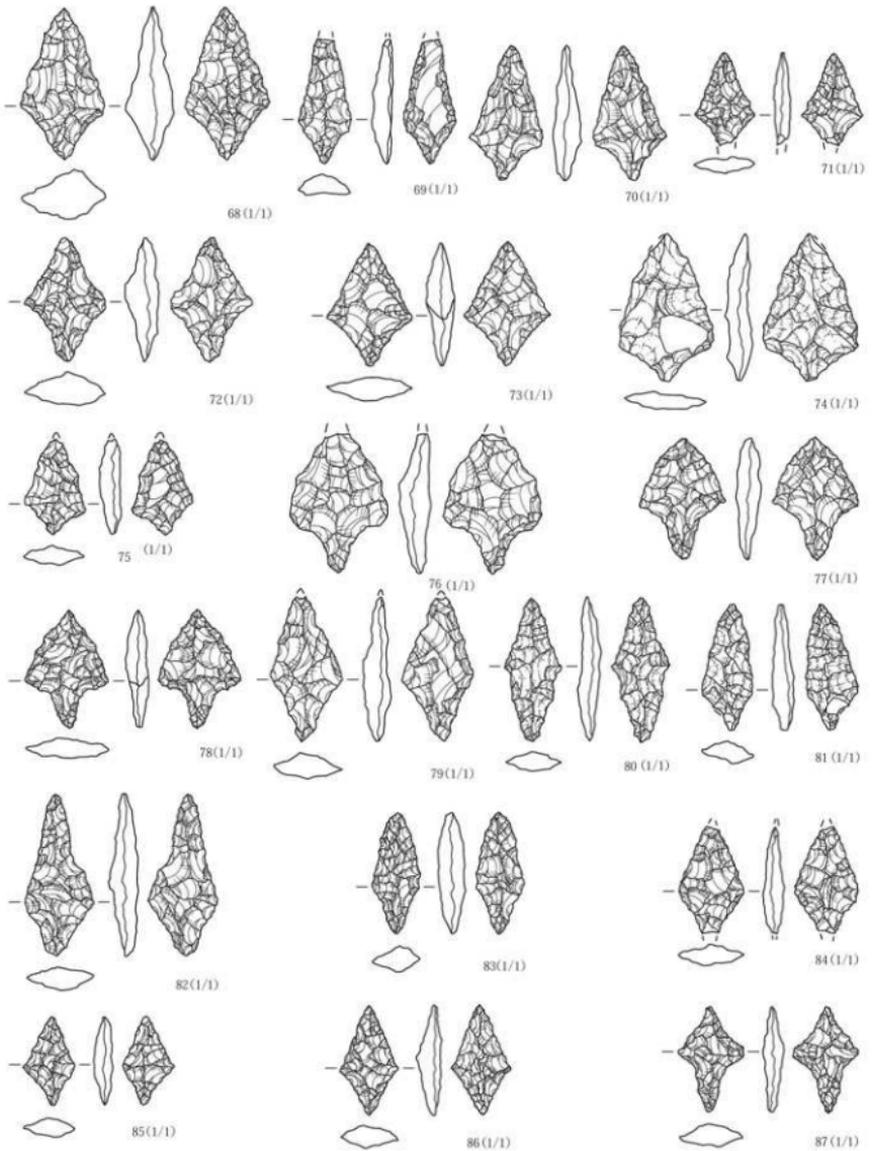
0 1:3 10m

第194図 113号竪穴建物(6)

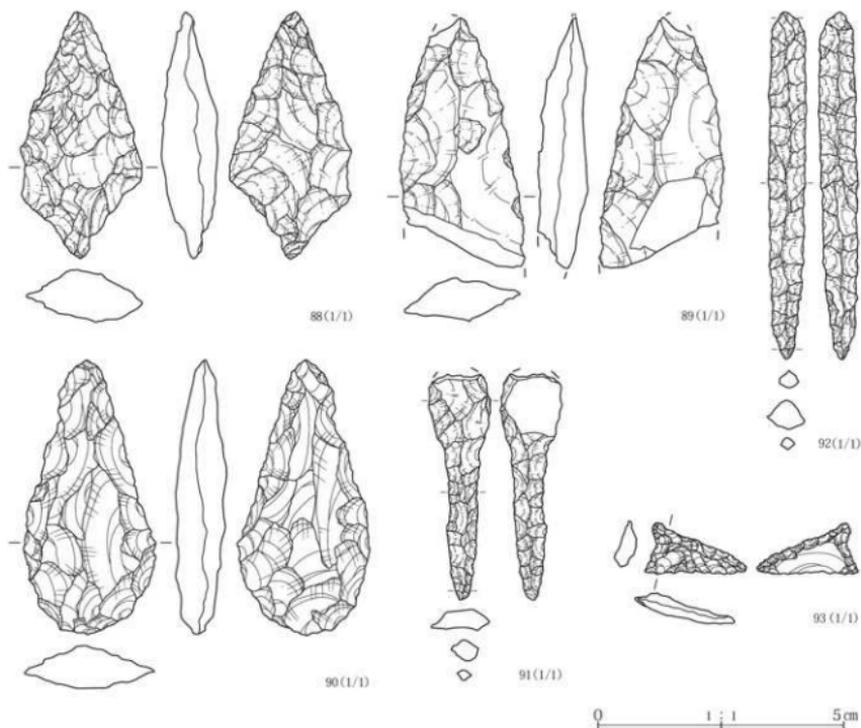
第2章 発掘された遺構と遺物



第195図 113号竪穴建物(7)



第196図 113号竪穴建物(8)



第197図 113号竪穴建物(9)

117号竪穴建物(第198図、PL.69)

調査年度 平成30年度

位置 90区-N・O-2・3

経過 90区東側の緩傾斜地、沢の西側縁辺部に位置する。4号列石の南側に位置する。竪穴建物として調査を行った。

規模 (500)×(500)

重複 南側には4号列石が隣接しており、関連性が想定される。

形状 隅丸方形と想定される。

床面 床面は確認できず、確認時にはすでに堀方面までに及んでいる。

炉 建物中央部に底部を入れ子状にした状態の竪穴土器を確認した(PL.69-3)。竪穴土器のNo 1とNo 2の間層に

は、焼土、炭化物を含まないことから、同時に設置されたとみられる。規模は60cm×60cmである。

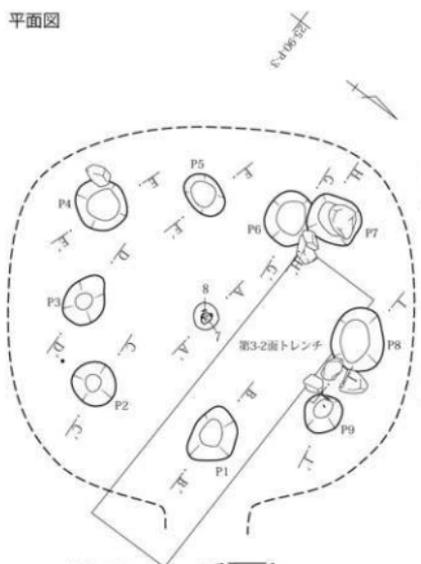
方位 N-52°E

柱穴 柱穴は9基確認された。柱穴内に根積み石は確認されていないが、地山礫層中に礫が混在しており、根積み石の役割を果たしていたと想定される。それぞれの規模(長辺×短辺×深さ)は、P 1 : 65×55×30、P 2 : 55×55×40、P 3 : 65×50×35、P 4 : 75×60×40、P 5 : 55×40×15、P 6 : 70×(50)×20、P 7 : 65×65×25、P 8 : 77×75×20、P 9 : 48×45×35である。1間の長さは35~45cmを測る。

遺物 土器は51点出土し、高井東式古段階が主体を占める。

時期 高井東式古段階

平面図



炉平面図



炉掘り方



A-A', l=541.00m

A-A'

A-A'

0 1:30 1m

P1

B-B', l=541.00m

B-B'

P2

C-C', l=541.00m

C-C'

P3

D-D', l=541.00m

D-D'

P4

E-E', l=541.30m

E-E'

P5

F-F', l=541.50m

F-F'

P6

G-G', l=541.50m

G-G'

P7

H-H', l=541.40m

H-H'

P8

I-I', l=541.40m

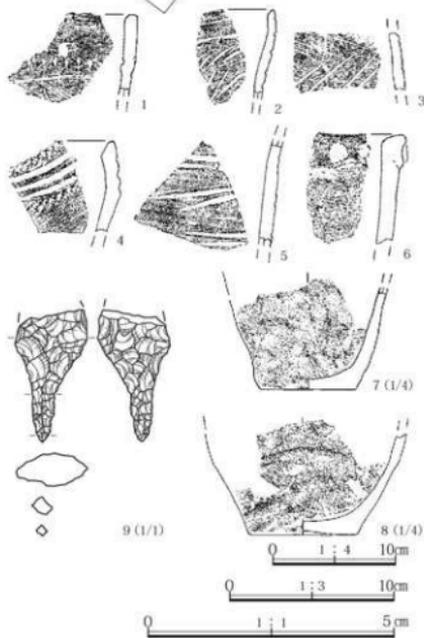
I-I'

P9

J-J', l=541.30m

J-J'

0 1:60 2m



第198図 117号竪穴建物

## 119号竪穴建物(第199～201図, PL.69, 70)

調査年度 平成30年度

位置 90区-L・M-7・8

経過 90区東側の中段段丘面から埋没沢へ下る緩傾斜縁辺部に位置し、3号列石調査中に確認した。

規模 推定 南北600cm×東西580cm

重複 なし

形状 隅丸方形?

床面 硬化面はなく、不明瞭であるが、横位に敷設された炉石と同じ高さだったと想定される。

炉 河原石を60cm四方の石圍炉を形成し、縦位の炉石縁辺部には横位に敷設した鉄平石で囲む。

方位 N-49°-E

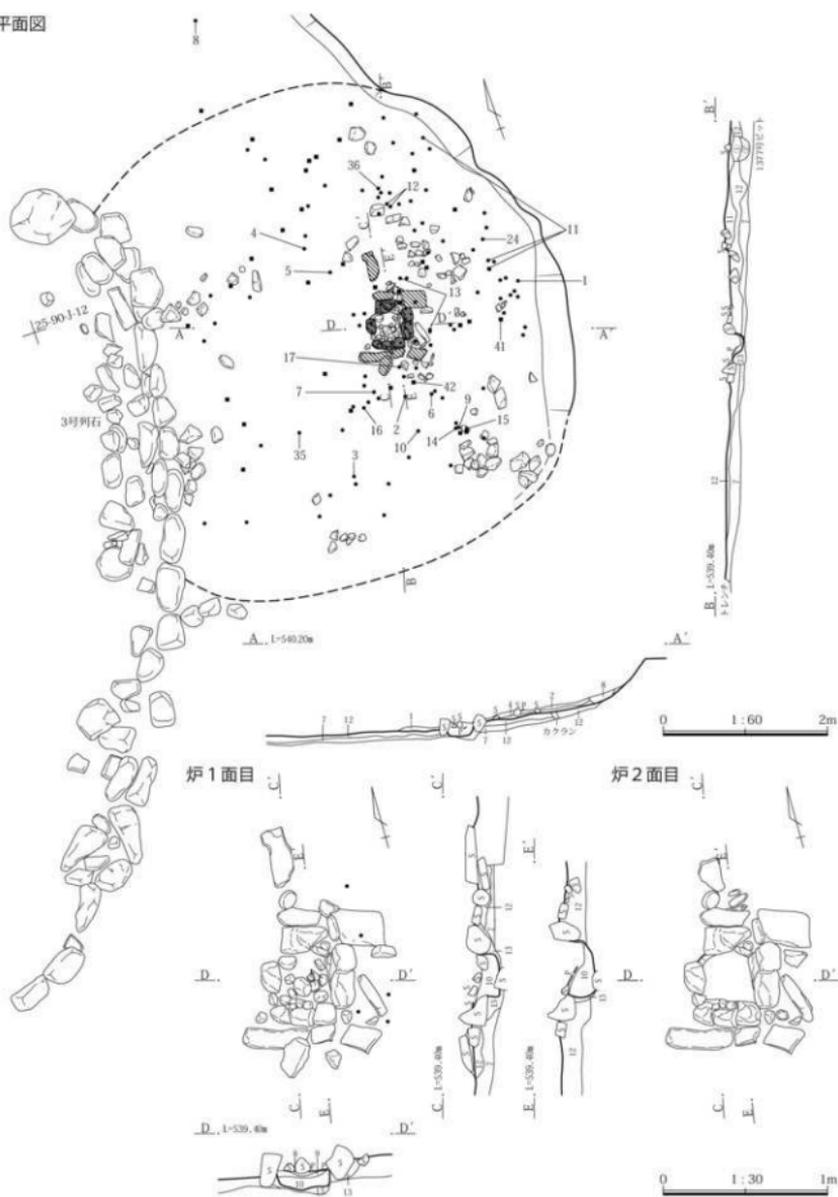
柱穴 確認できない。南東隅に小礫を円形状に囲んでおり、根詰め石の可能性が考えられる。

列石 単独列石として調査を行ったが、確認状況から、建物に伴うと判断した。60cm程の河原石を中心に弧状に構築されている。建物と接する部分は、2列構築され、当初は2～3段構築されていたと判断される。

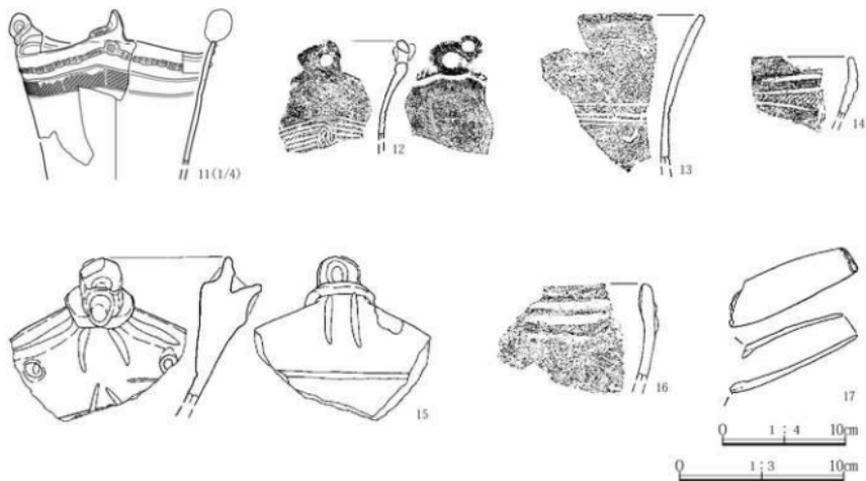
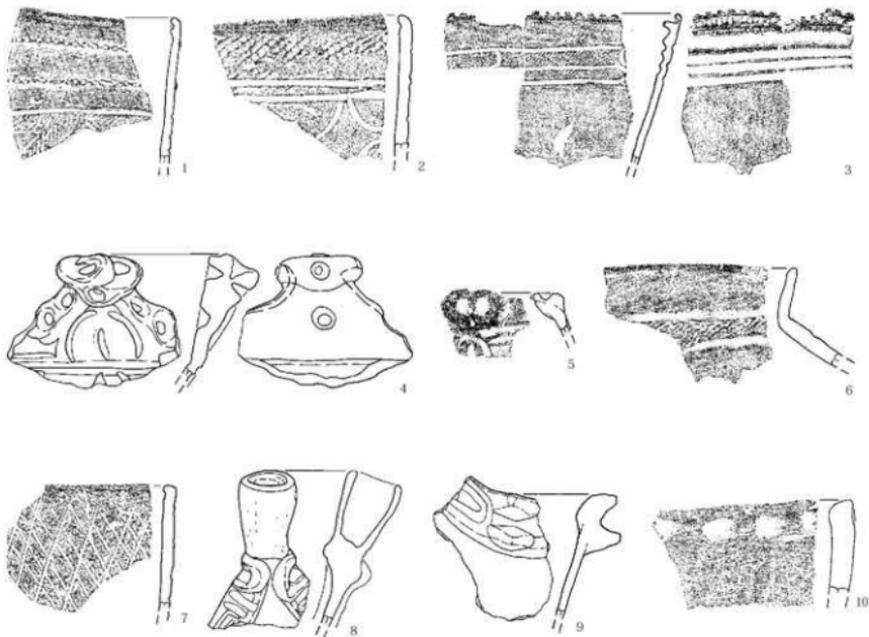
遺物 50点出土し、炉の周辺に集中する。堀之内2式から加曾利B1式が主体で、この段階に建物が帰属する。

時期 堀之内2式から加曾利B1式

平面図

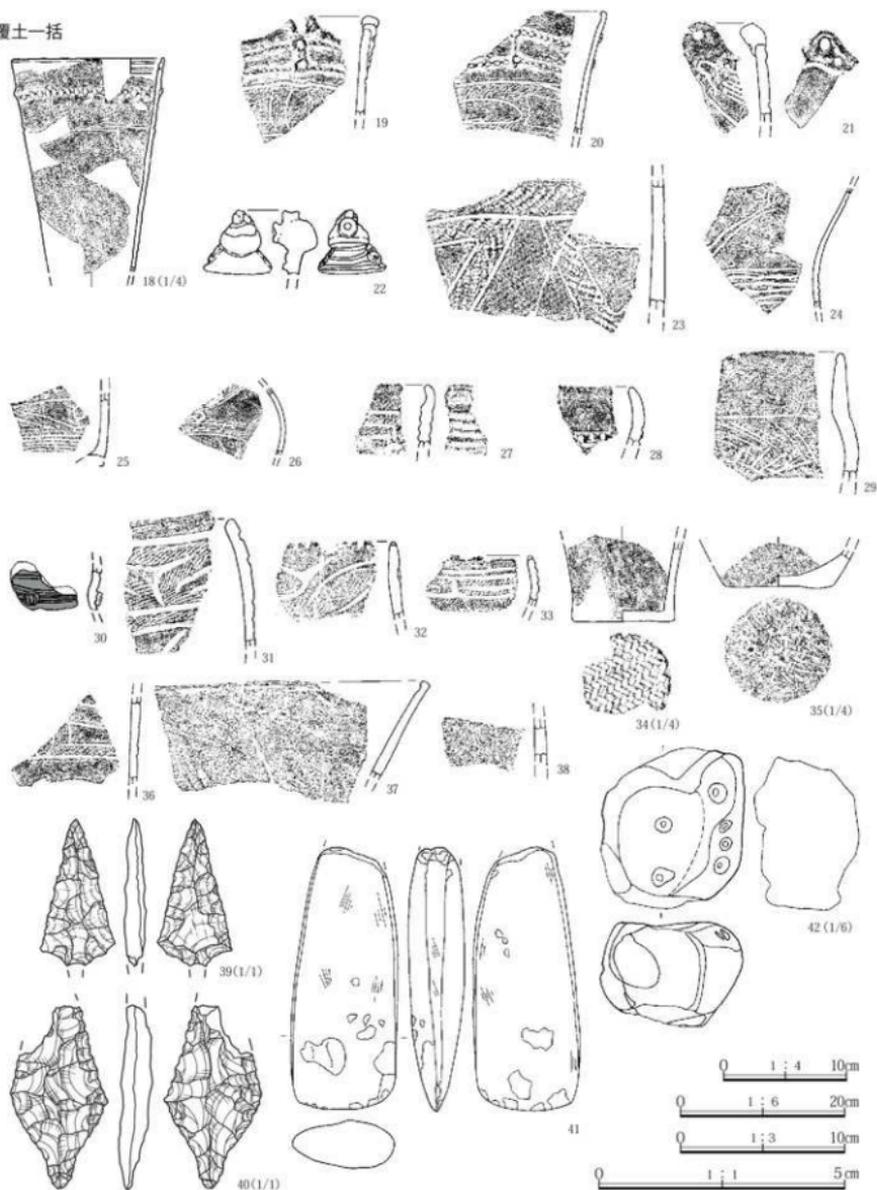


第199図 119号竪穴建物(1)



第200図 119号竪穴建物(2)

覆土一括



第201図 119号竪穴建物(3)

## 120号竪穴建物(第202～209図、PL.71)

調査年度 平成30年度

位置 90区-L・M-7・8

**経過** 90区東側の緩傾斜地、沢の西側縁辺部に位置する。121号竪穴建物の東側で、107号竪穴建物の北側、113号竪穴建物の南東側に位置する。

規模 510×460×52

**重複** 北東側は、2024号土坑に切られ、2025、2026号土坑に南側の覆土上面の一部を切られる。

形状 楕円形

**床面** 貼床、敷石は確認されていないが、地山礫層を整地して床面としたと考えられ、堀方覆土には褐色土が多く含まれる。

**炉** 床面調査時に確認できなかったが堀方調査時に中央部に不整形の掘り込みが確認されている。掘り込みは、160cm×110cmを測り、竪穴建物廃絶時に抜き取った可能性も想定される。しかし焼土など確認されていないため、断定はできない。

方位 N-1°E

**柱穴** 柱穴は10基確認された。P1からP9は壁柱穴、P10とP11は主柱穴と考えられる。根積み石は確認されていないが、地山礫層中に礫が混在しており、根積み石の役割を果たしていたと想定される。それぞれの規模(長辺×短辺×深さ)は、P1:40×40×54、P2:30×30×60、P3:30×25×50、P4:30×30×40、P5:50×50×35、P6:30×30×50、P7:40×35×65、P8:60×40×58、P9:45×45×75、P10:70×55×70、P11:80×45×40である。

**遺物** 土器は922点出土した。上層では、高井東式中段階(4～7)が主体を占め、下層、床面では加曾利B3式から高井東式古段階(34～40)が占める。P1、P8から瘤付土器第2段階(47.51)、P6から加曾利B3式(50)が出土している。下層になると、高井東式古段階とともに上ノ段式第3段階(37、39)、安行1式(76、77)が客体的に出土する。

時期 加曾利B3式～高井東式古段階

## 121号竪穴建物(第210～216、PL.72、73)

調査年度 平成30年度

位置 90-L・M-5～7

**経過** 7区東側の緩傾斜地、沢の西側縁辺部に位置する。121号竪穴建物の東側で、107号竪穴建物の北側、113号竪穴建物の南東側に位置する。上面は、黒色土が方形に落ち込み、径5～20cmの礫と遺物を多量に含む

規模 675×510×30

**重複** 西側は125号竪穴建物、北東部は2054号土坑を切り、中央部を風倒木によって切られる。

形状 不整楕円形状。

**床面** 床面は、敷石、硬化面は確認できず、風倒木、土坑の影響により判別が難しいが、獣骨集中面、炉確認面が、当該面に相当する。

**獣骨集中** 獣骨は、床直もしくは床面において建物南東部に集中する。焼けた状態のイノシシの下顎骨が密集集中していた。動物遺体の分析の結果、8個体分の幼獣が確認され、そのうち雄3個体、雌1個体であると判明した(第3章参照)。その他に鹿角も多くみられ、火熱を受けた磨石も多く伴う。獣骨集中は、風倒木の影響範囲内に位置するため、建物に伴うかは不明瞭であるが、建物内での祭祀行為が想定される。

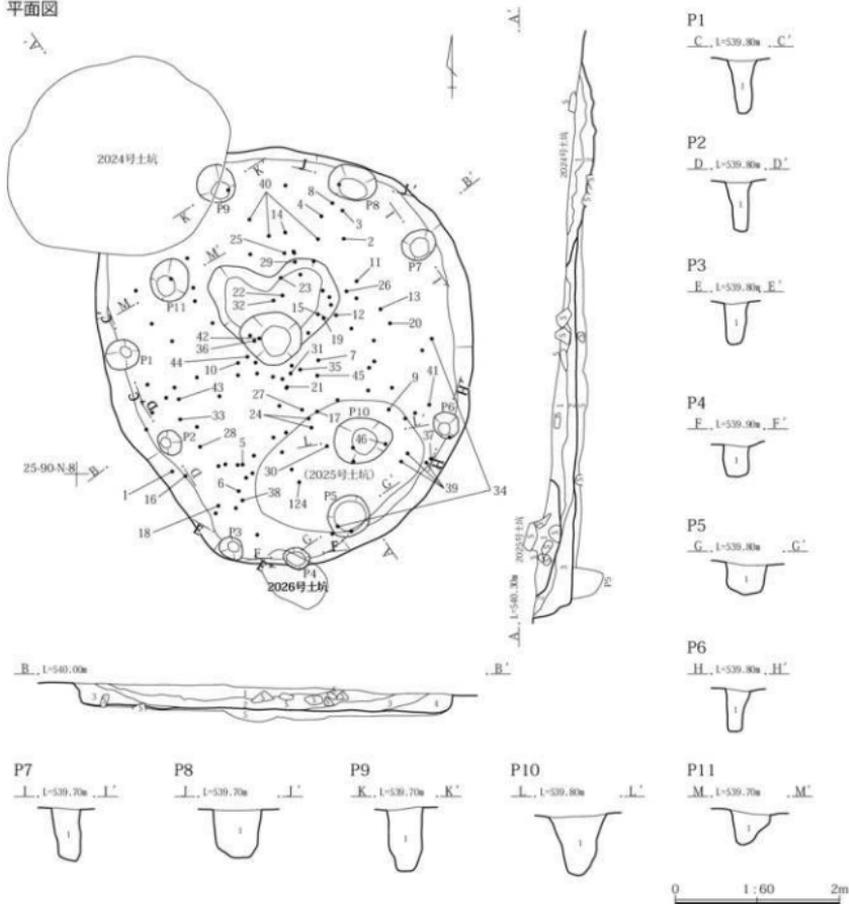
**炉** 風倒木の影響で状態は悪いが、南、東側には、火熱を受けた河原石を伴い、おそらく石囲炉であったと捉える。

**柱穴** 6基確認され、5本柱で構築されたと捉える。P1からP3は、柱痕側面に根積み石が認められた。それぞれの規模(長辺×短辺×深さ)は、P1:65×50×65、P2:65×50×65、P3:93×87×70、P4:60×40×22、P5:50×(30)×25、P6:50×(40)×20である。一間分の幅は、250cmである。

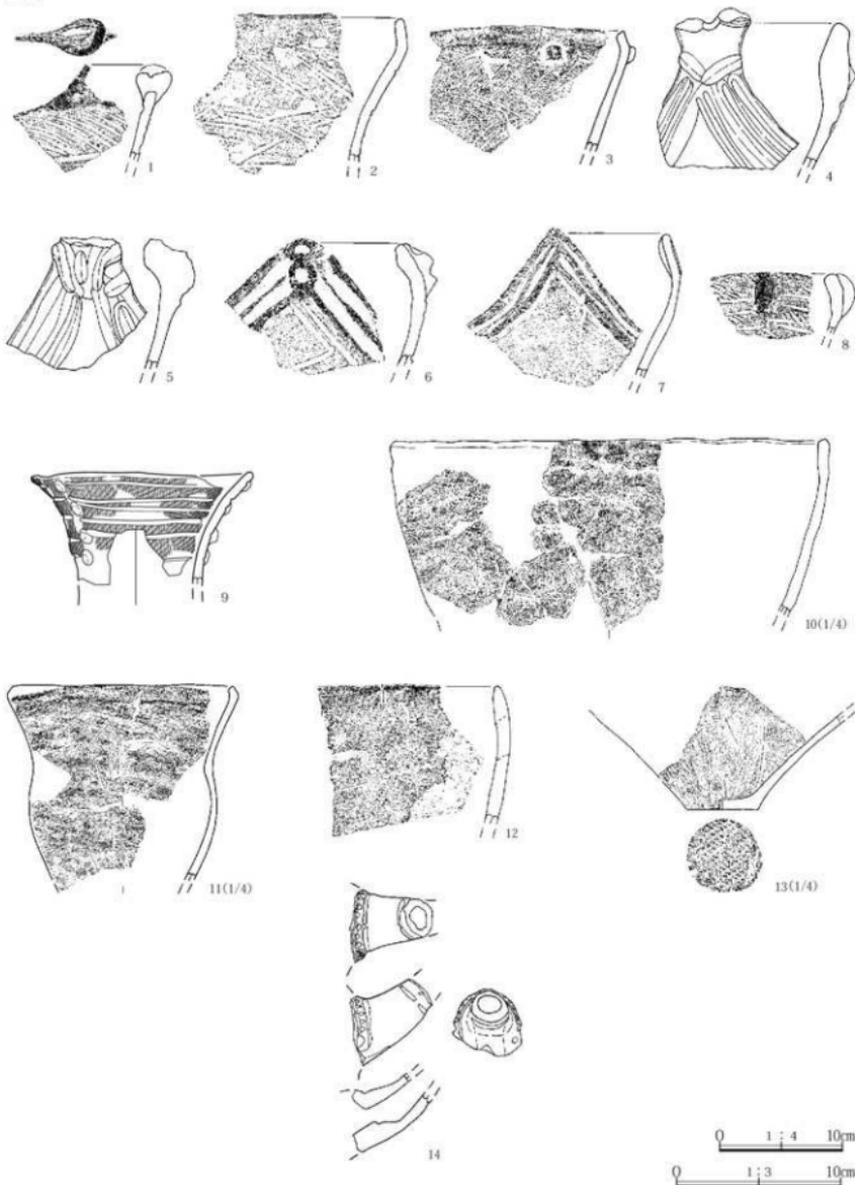
**遺物** 土器は、641点出土し、上層から床面にかけて晩期中葉の佐野1b～佐野Ⅱ式中段階にかけて多い傾向にあるが、中から瘤付土器第3段階(第213図-19)、P11内から高井東式中段階が出土しており、晩期中葉の遺物は風倒木による混入と考えられる。

時期 高井東式中段階

平面図

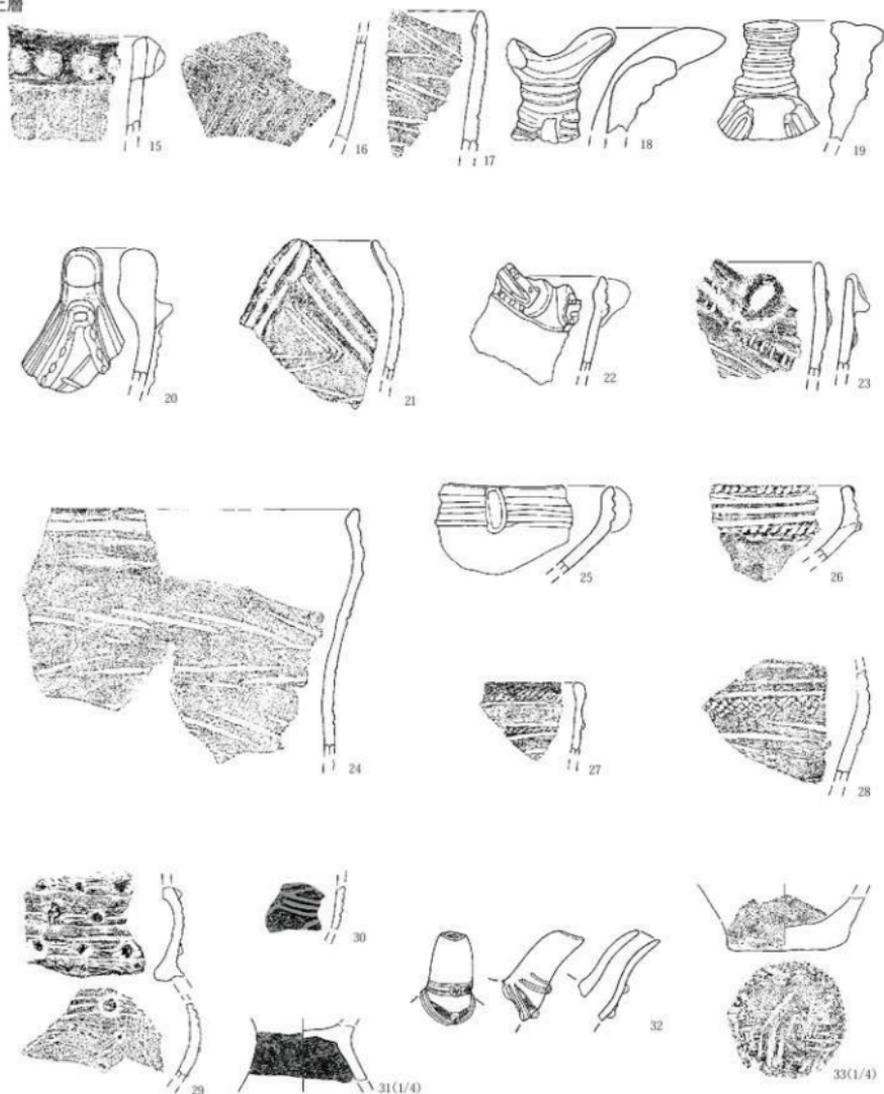


第202図 120号整穴建物(1)



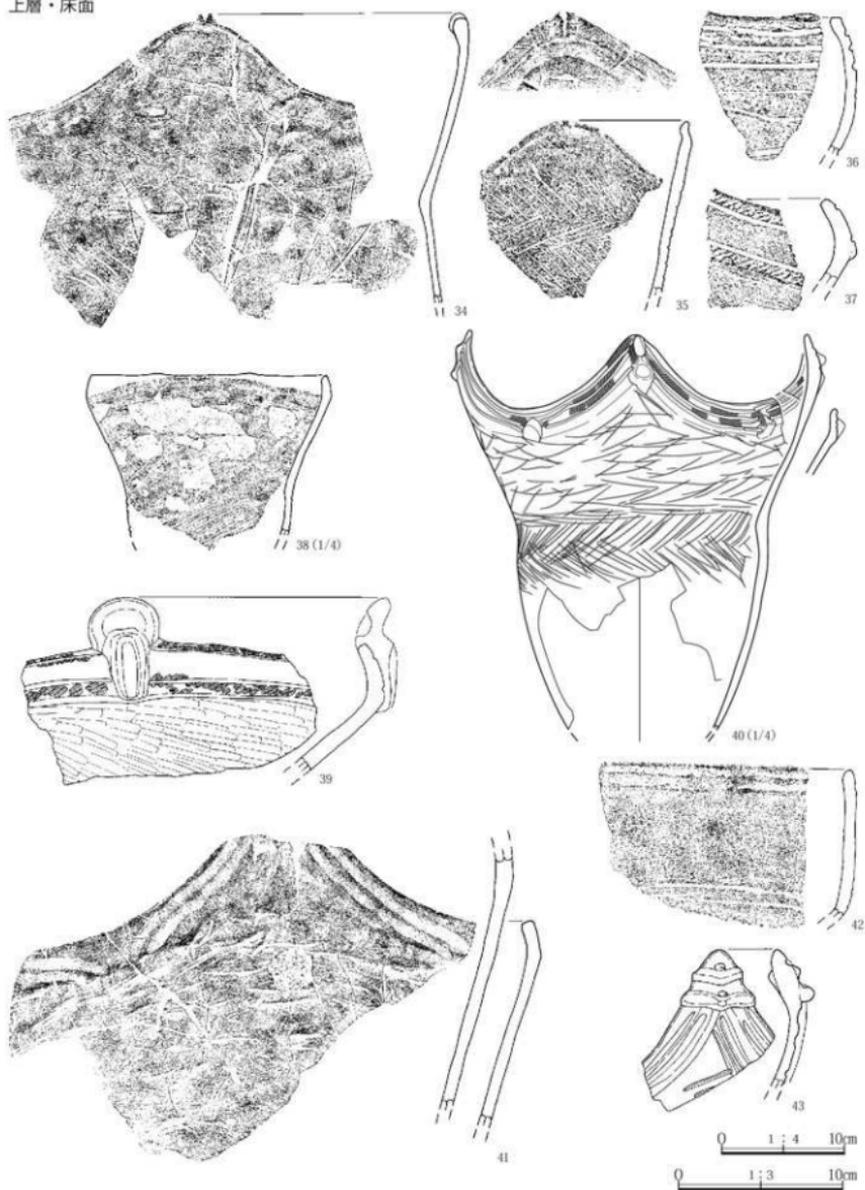
第203図 120号竪穴建物(2)

上層



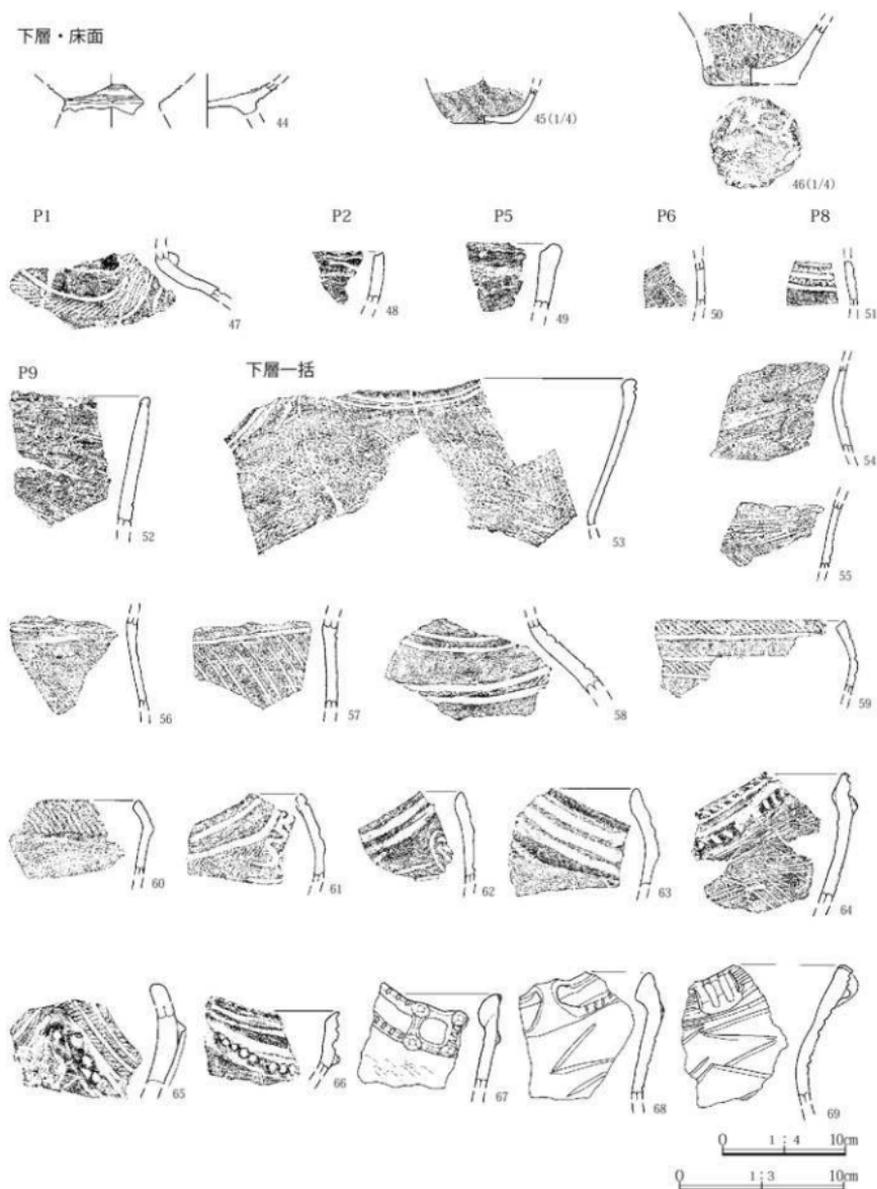
第204図 120号竪穴建物(3)

上層・床面

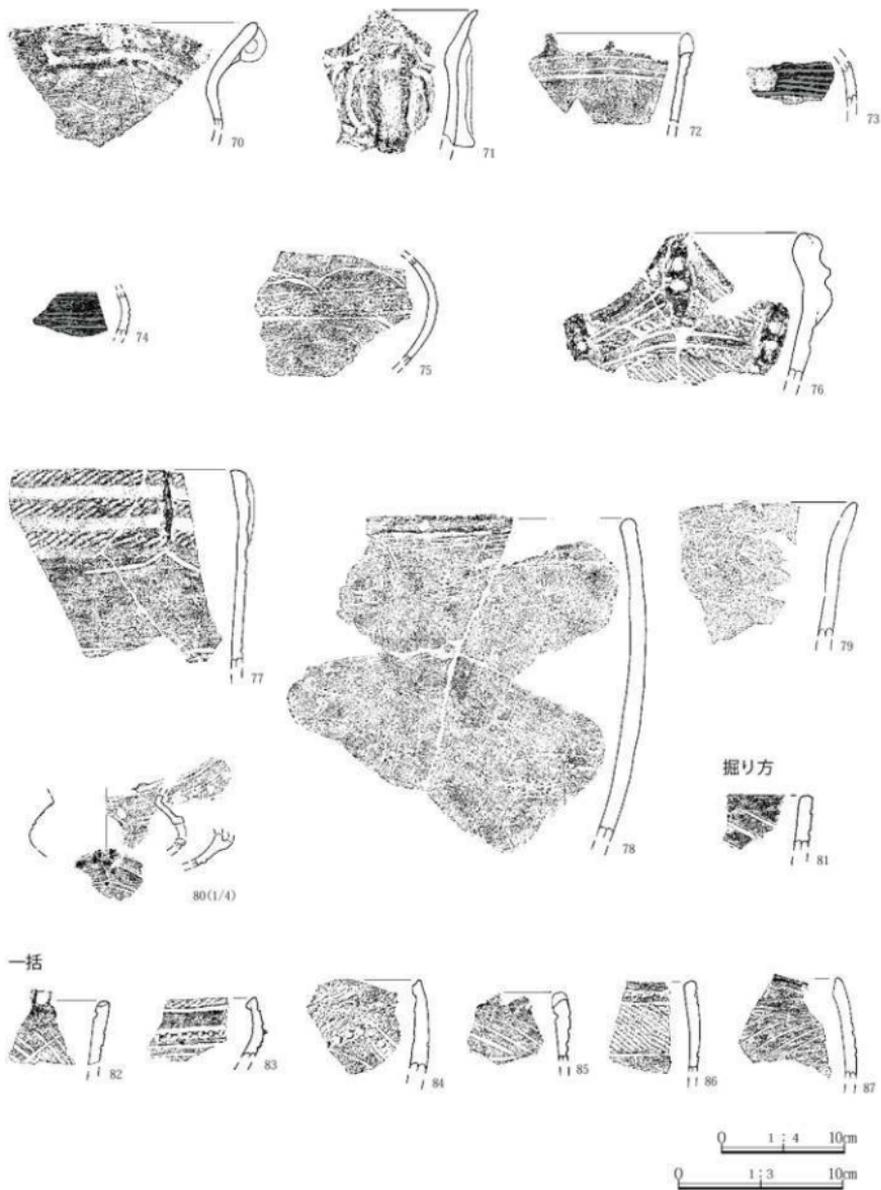


第205図 120号竪穴建物(4)

下層・床面

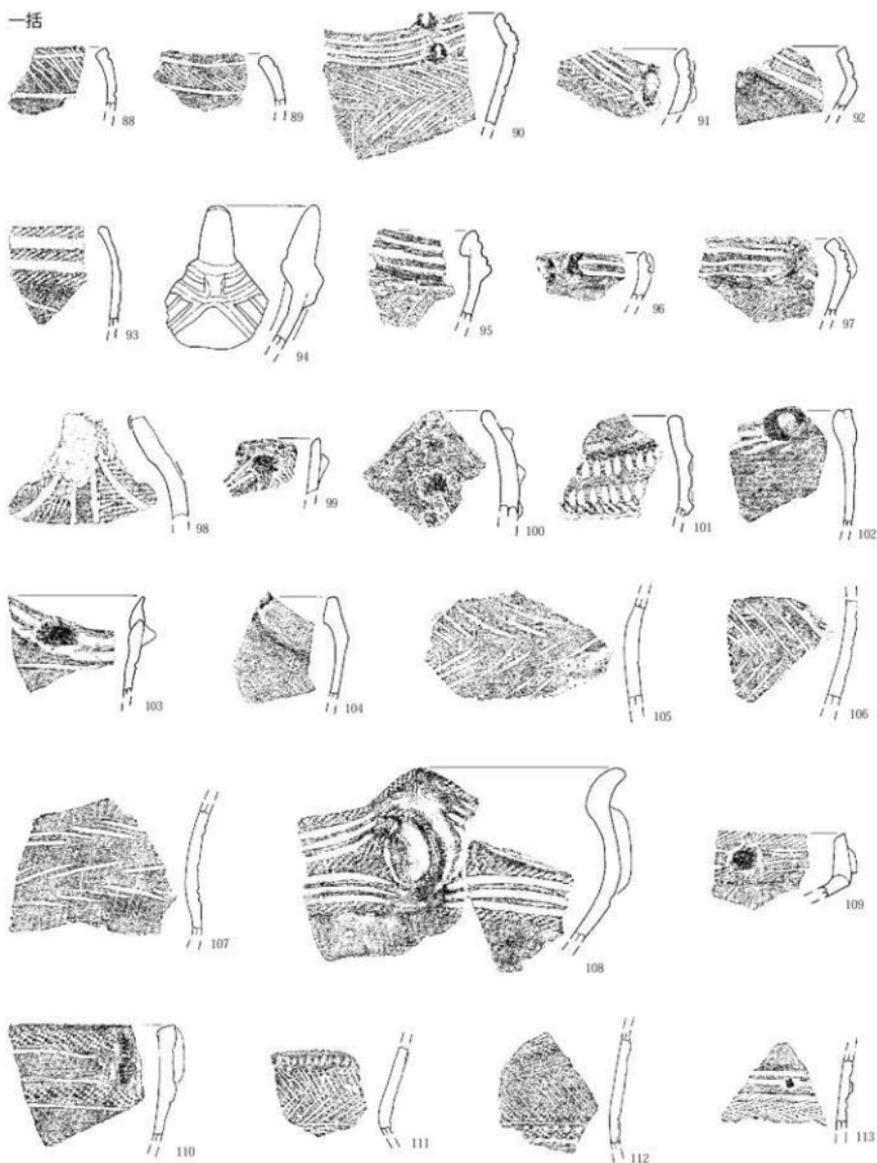


第206図 120号竪穴建物(5)



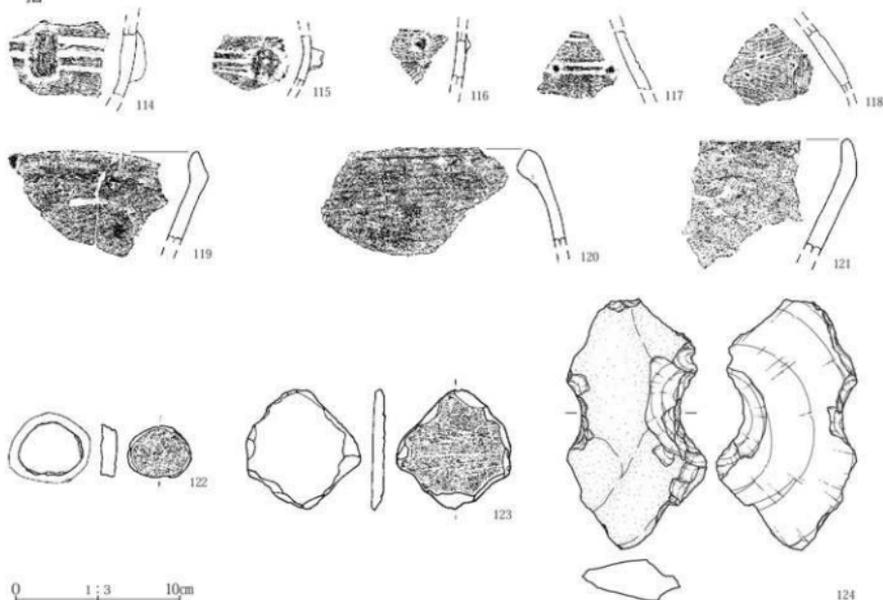
第207図 120号竪穴建物(6)

一括



第208図 120号竪穴建物(7)

一括



第209図 120号竪穴建物(8)

## 122号竪穴建物(第217～223図、PL.72～75)

調査年度 平成30年度

位置 90区-K・L-5・6

経過 7区東側の緩傾斜地、沢の西側縁辺部に位置する。121号竪穴建物の東側で、長方形に落ち込み、径5～30cmの礫と遺物を多量に含み中央付近は褐色土がさらに落ち込んでいるのを確認し、竪穴建物として調査を行った。

規模 525cm×410cm×50cm

重複 125号竪穴建物を切り、南東部を1858号土坑によって切られる。

形状 隅丸方形状

周礫 北側、西側に確認された。石材は地山礫が多く、前後の大きさのものを用いる。南側には、周礫は確認できていない。後世の造成による消失か、あるいは入り口付近と想定される。

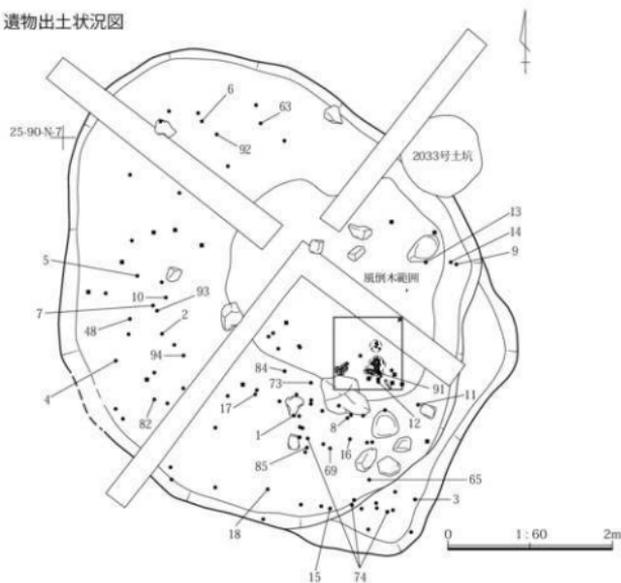
床面 敷石や硬化面は確認できなかったが、1号が検出面を床として利用されたと想定される。堀方は、床面相当面下に6cm前後の掘り込みを有している。竪穴建物構

築時に地山に含まれる礫を除去したと捉える。

床面調査時に南東隅に敷石が確認された。敷石は、40cm前後の河原石を横位に据えられており、どの段階かで、敷石を伴っていたと想定される。壁際に縦位に河原石がみられるが、覆土を伴っており、流れ込みによるものと判断される。

炉 床面相当面において火熱痕のある礫、焼土、を確認し、炉と認定した。炉と認定したものは4基で、1、2、4号は石囲炉、3号は地床炉である。1号炉は、炉の掘り込み外縁部に方形に扁平礫を縦位に据えている。炉内には焼土が堆積し、中央部には、横位の状態の土器片が出土している。2号炉は、1号炉の北側で切られた状態で確認できた。中央部には焼土が堆積し、側面部位には縦位の礫を伴うことから、石囲炉と想定される。3号炉は、P6に切られた状態で確認され、上面にわずかに焼土を含む。4号炉は、3号炉によって切られている。焼土正面には、火熱を受けた礫が確認され、本来は石囲炉だったと想定される。それぞれの規模(長辺×短辺×

遺物出土状況図



獣骨集中部1面目

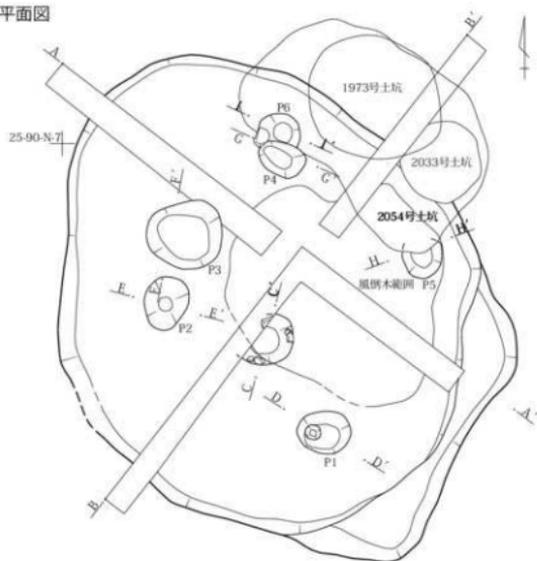


獣骨集中部2面目



0 1:10 0.25m

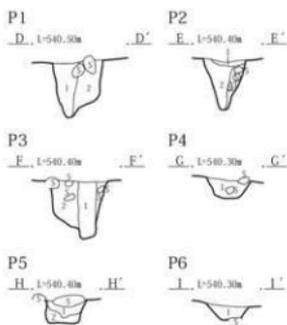
平面図



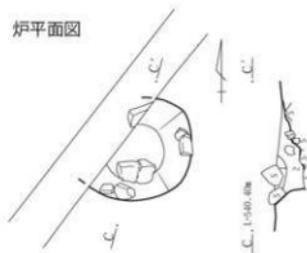
A, 1:50, 70m



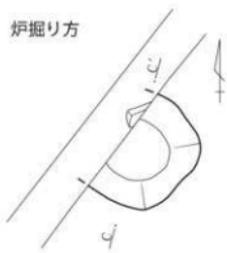
B, 1:50, 80m



炉平面図



炉掘り方

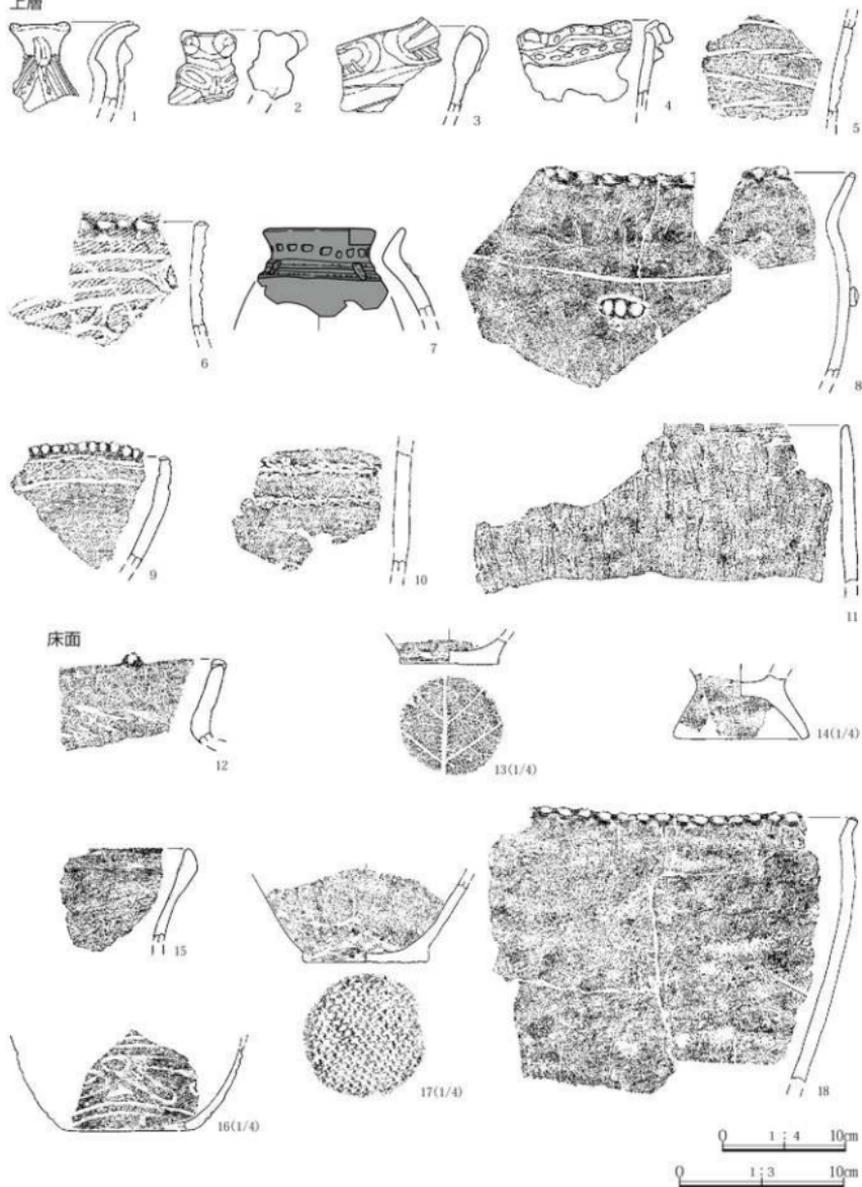


0 1:30 1m

0 1:60 2m

第211図 121号竪穴建物(2)

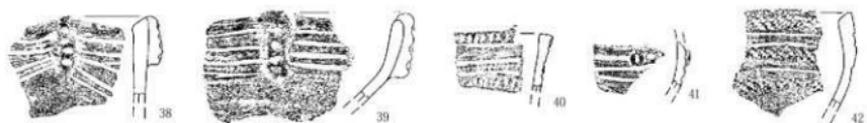
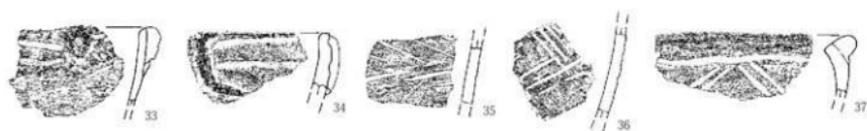
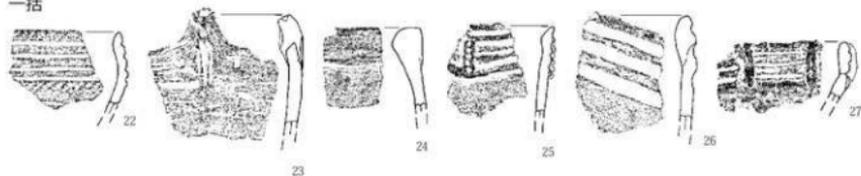
上層



第212図 121号竪穴建物(3)



一括



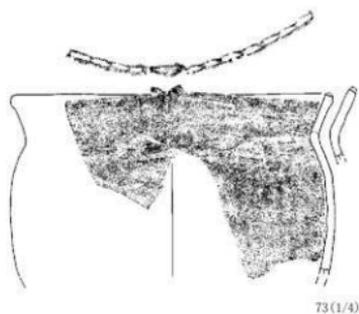
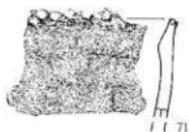
0 1:3 10cm

第213図 121号竪穴建物(4)

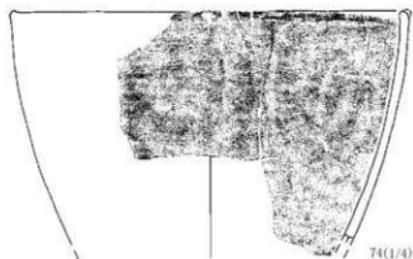
一括



第214図 121号竪穴建物(5)



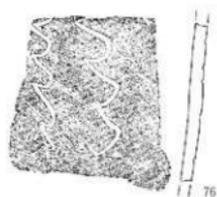
73(1/4)



74(1/4)



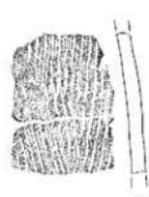
75(1/4)



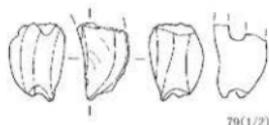
76



77



78



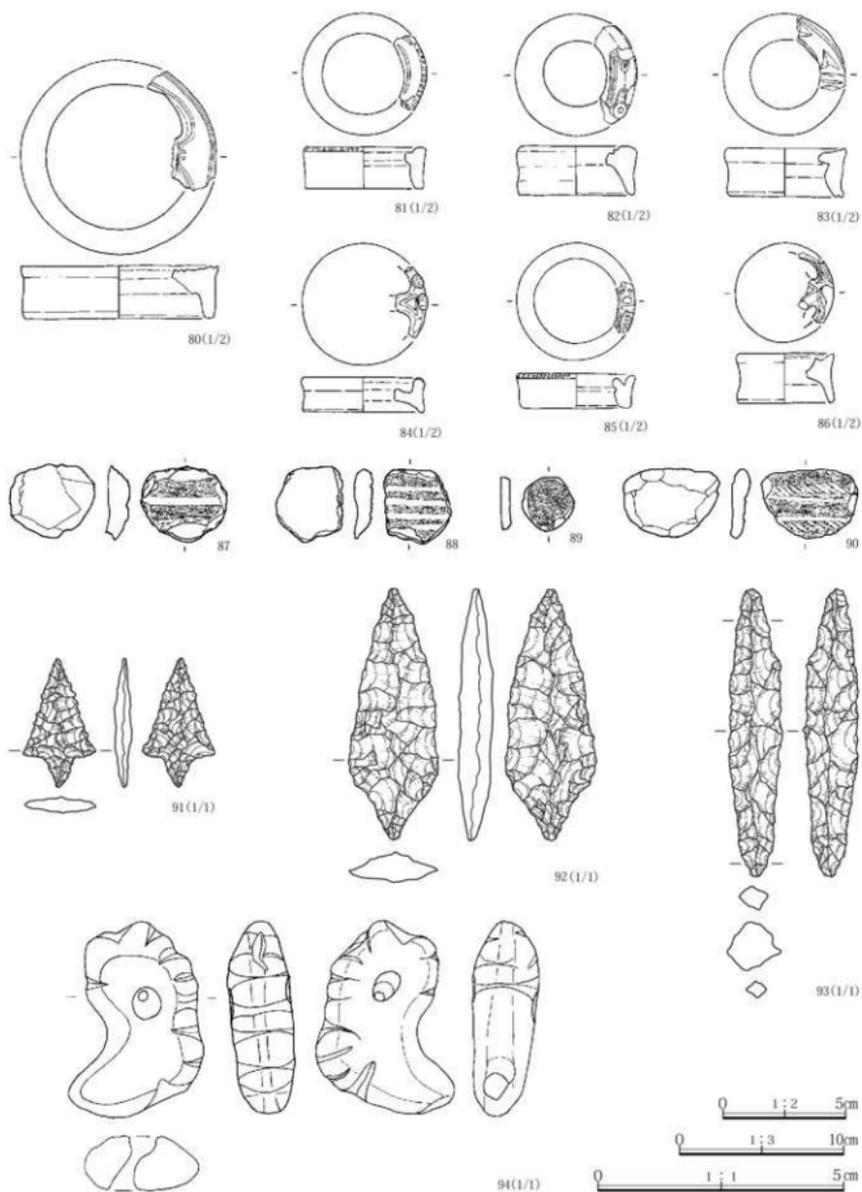
79(1/2)

0 1:4 10m

0 1:2 5m

0 1:3 10m

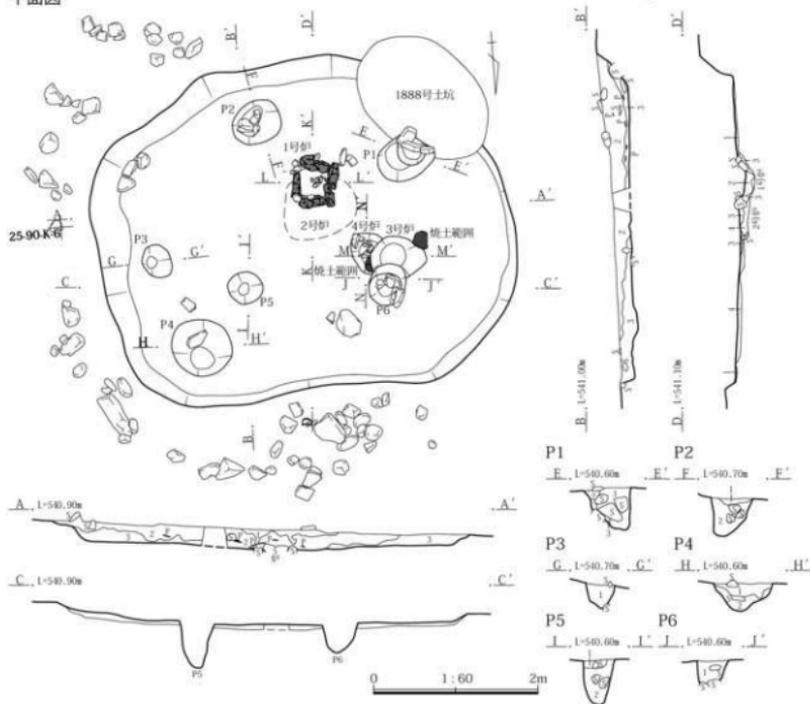
第215図 121号竪穴建物(6)



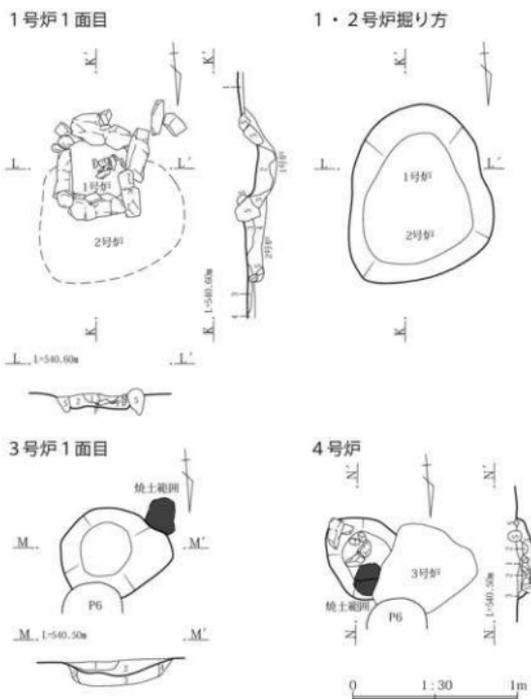
第216図 121号竪穴建物(7)



平面図



第217図 122号竪穴建物(1)



第218図 122号竪穴建物(2)

深さは、1号炉：64×55×16、2号炉：92×64×12、3号炉：70×54×15、4号炉：50×42×10である。

**方位** N—8—W

**柱穴** 柱穴は、6基確認され、1号炉に伴う柱穴は、P1、P2、P5、P6と想定される。柱穴間の一边は110cmを測る。P3とP4はどのように伴うか不明だが、1号炉時の入口施設の可能性も考えられる。各柱穴には、根積み石が伴う。それぞれの規模(長辺×短辺×深さ)は、P1：80×60×50、P2：65×65×45、P3：33×38×47、P4：70×68×35、P5：38×37×55、P6：35×35×20である。

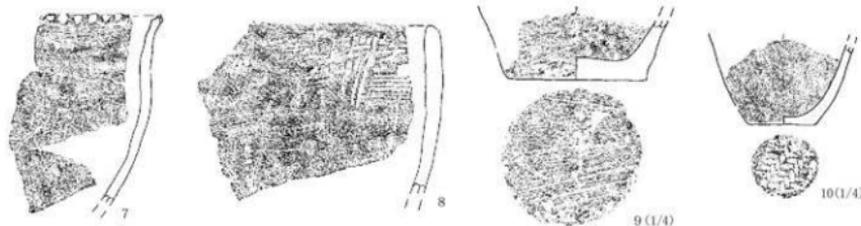
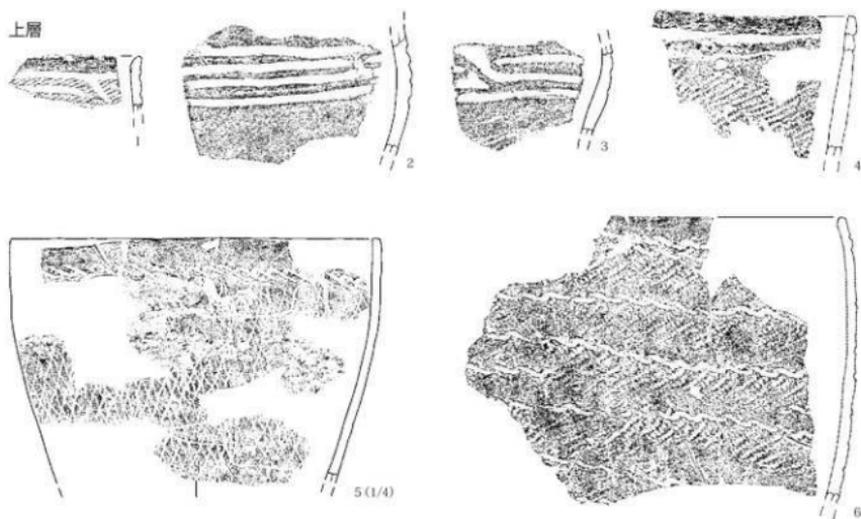
**遺物** 土器は610点出土している。上層では、佐野Ⅱ式新段階が多く(2, 3)、下層では、佐野Ⅰb式から佐野Ⅱ式古段階が多い傾向にある。1号炉内から佐野Ⅱ式古

段階の皿(62)が出土している。佐野Ⅱ式新段階が主体を占める上層では、礫が多量に投棄されており、混じってイノシシの顔を模した石棒の柄部(76)が出土した。特徴は線刻によって顔を表現し、たてがみを1文字で表現している。

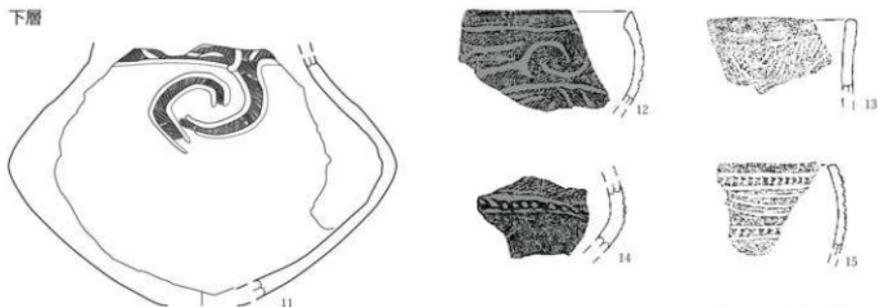
**所見** 122号竪穴建物は、少なくとも3回の立て替えが行われている。最終段階の1号炉からは、佐野Ⅱ式古段階が出土していることから、上限は佐野Ⅱ式古段階だと想定され、埋没過程で窪地になっていたところに、佐野Ⅱ式新段階に礫や遺物を投棄したと想定される。下限は、床下から佐野Ⅰb式土器が出土し、下層からもある程度出土していることから、佐野Ⅰb式まで遡ると想定される。

**時期** 佐野Ⅰb式から佐野Ⅱ式古段階

上層

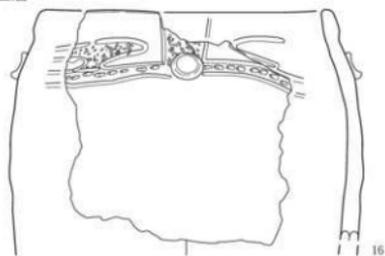


下層

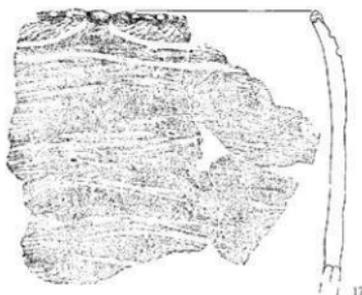


第219図 122号竪穴建物(3)

上層



16



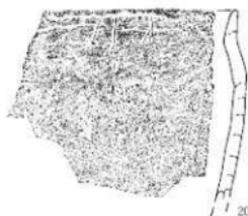
17



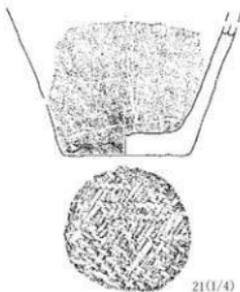
18



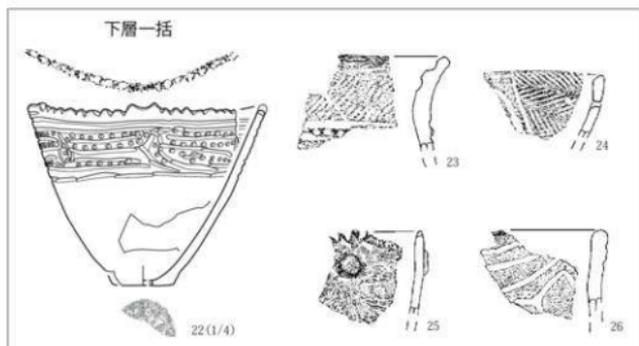
19



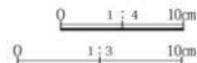
20



21(1/4)



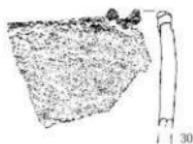
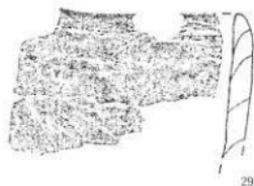
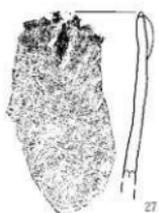
22(1/4)



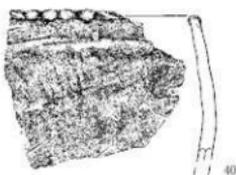
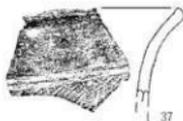
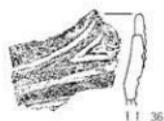
第220図 122号竪穴建物(4)

下層一括

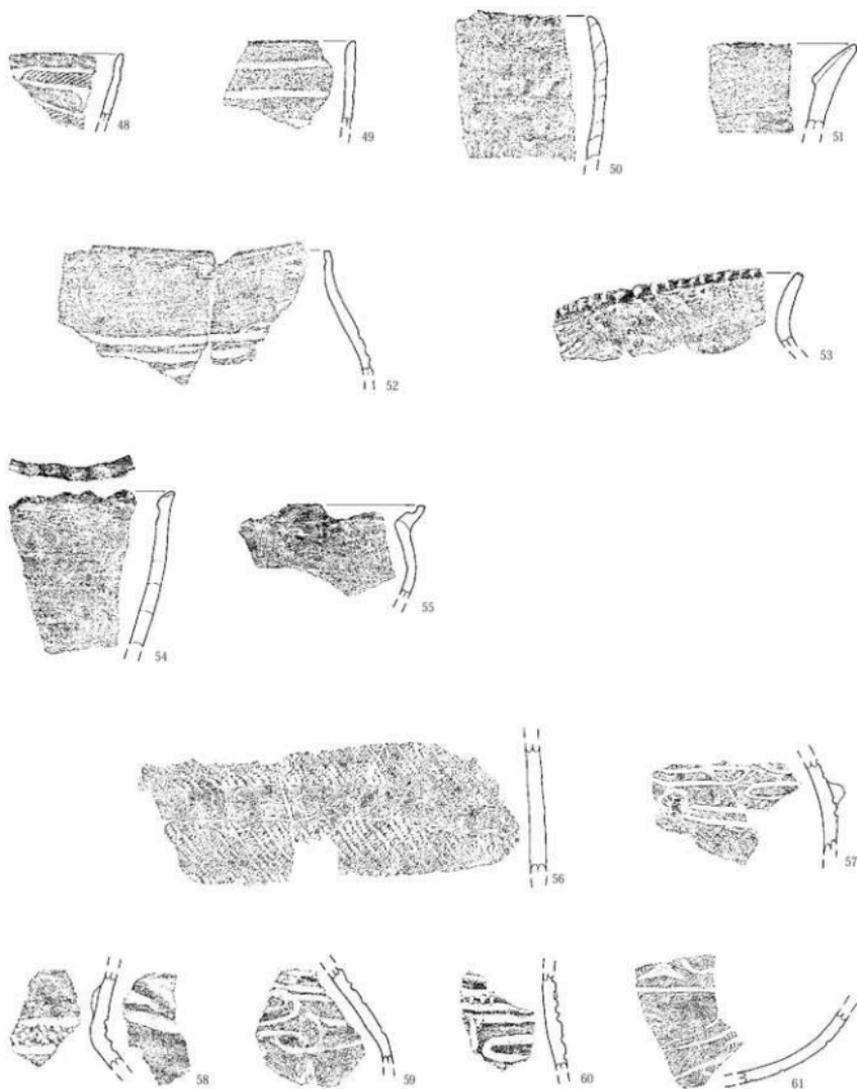
第1節 縄文時代の遺構



一括



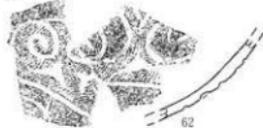
第221図 122号竪穴建物(5)



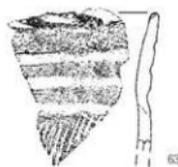
0 1:3 10cm

第222図 122号竪穴建物(6)

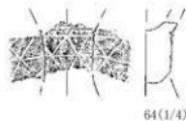
炉



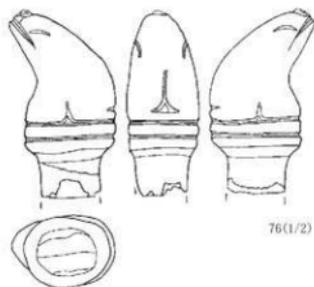
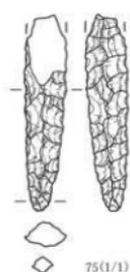
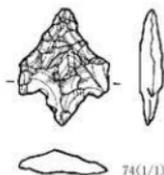
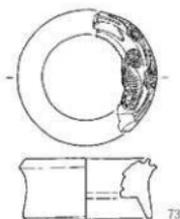
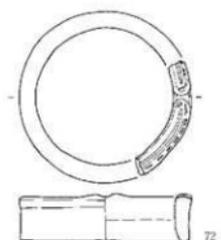
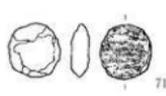
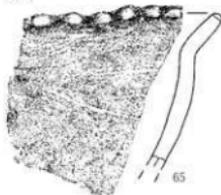
P2



床下



床下



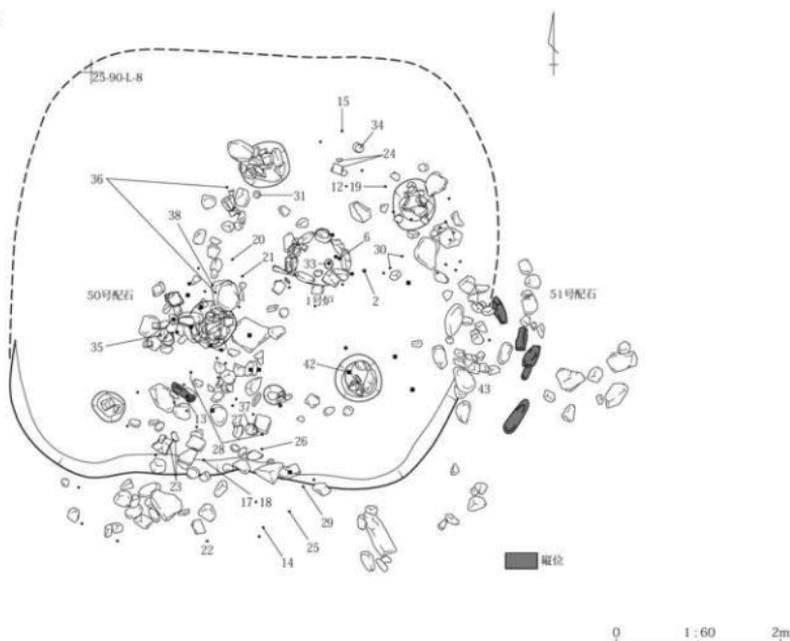
0 1:4 10cm

0 1:2 5cm

0 1:3 10cm

0 1:1 5cm

## 平面図



第224図 124号竪穴建物(1)

124号竪穴建物(第224～229図、PL.75～76)

調査年度 平成30年度

位置 7区90-L-8

経過 7区東側の緩傾斜地、沢の西側縁辺部に位置する。南側には122、125号竪穴建物が位置する。竪穴建物の外縁部に石列が確認され、「50号配石」として調査を行ったが、竪穴建物の周礫と判断される。

規模 (585cm)×(520cm)×40cm

重複 北東側の125号竪穴建物を切り、2028～2031号土坑によって切られる。本竪穴建物では、炉が3基確認されている。2号炉は、1号炉に帰属するP2に切られている。そのことから炉には時期差があると考えられ、1～2軒の重複、あるいは改築がなされたと想定される。

形状 隅丸方形。北側は、削平されており、掘り込みは残っていないが、南側に深さ最大40cmほど残されている。確認された掘り込みと1号炉、P1～P4のセット

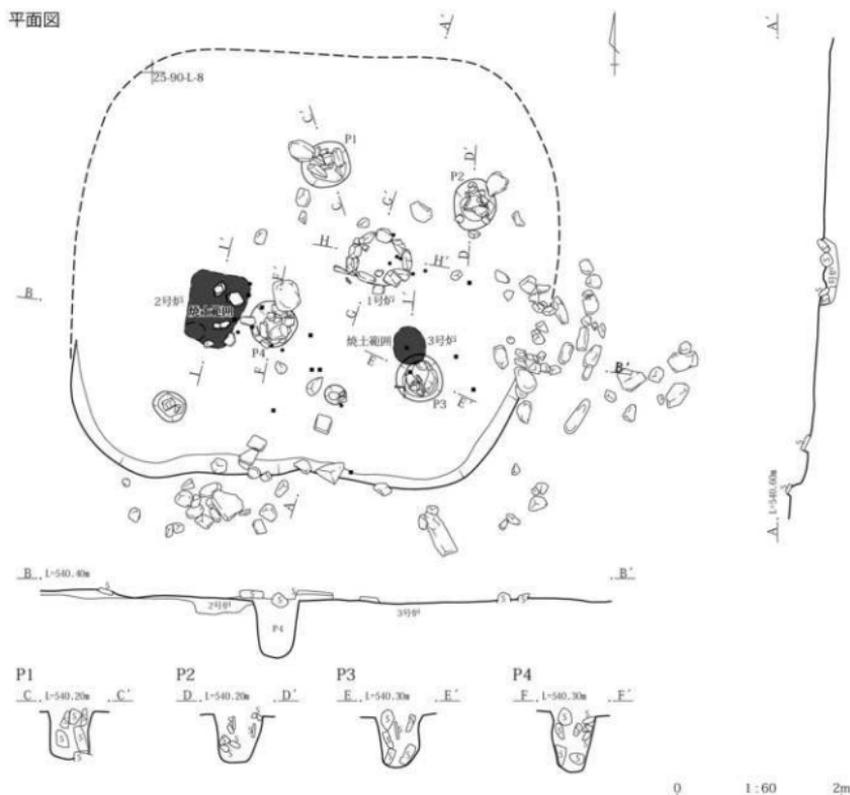
との関係が整合しないため、おそらく2、3号炉も確認されたことから、これらの炉に帰属すると考えられる。1号炉に帰属する形状については、竪穴建物の外縁部に周礫が確認されており、柱穴の方向と併行する。周礫の形状から隅丸方形と想定される。

周礫 周礫は、南側と東側で確認された。東側は、南北軸に沿って弧状に沿って、縦位に並べている。石材は40cm前後の河原石が主体を占める。南側はやや弧状に据える。角礫が主体を占める。縦位に据えた礫もみられる。

床面 敷石を伴わない竪穴建物と想定される。竪穴建物内に扁平礫を主体とした礫集中が認められる。基本的に廃棄されたものもみられるが、敷石状のものも認められる。これらの礫は、3号炉を中心とした外縁部に認められることから、3号炉に伴う可能性が想定される。

炉 1～3号炉が確認され、1号炉は石囲炉である。石囲炉は、六角形状に河原石を縦位に配置して構築される。

## 平面図



第225図 124号竪穴建物(2)

が体土器は確認できない。堀方は円形を呈する。2、3号竪穴は、不整形の地床が2号竪穴はP4によって東側を切られている。

**方位** N-7°E

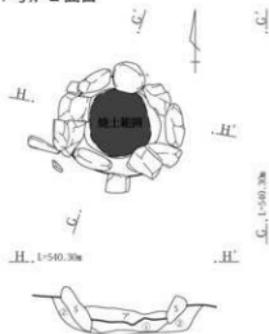
**柱穴** 柱穴は4基確認され、すべてに根積み石を伴う。それぞれの規模(長辺×短辺×深さ)は、P1:60×60×55、P2:60×50×55、P3:55×55×55、P4:55×55×55である。

**遺物** 土器は124点出土している。土器は後期後葉から

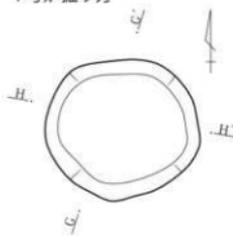
晩期中葉までみられ、佐野Ⅰb式から佐野Ⅱ式古段階が主体を占める。第227図-5は、下野2式である。1、2号竪穴からは、佐野Ⅰb式から佐野Ⅱ式古段階の7、8が出土している。土製品は、耳飾りが3点出土している。

**所見** 1号竪穴から3号竪穴に時間幅がある場合、3号竪穴は外縁部に、敷石を伴った配石が確認でき、1号竪穴上面に構築されていることから、124号竪穴建物で一番新しいと考えられる。次に東側、南側に周縁を伴う1号竪穴が続くと考えられる。掘り込みを伴う2号竪穴は、1号竪穴に伴

1号炉 2 面目



1号炉掘り方



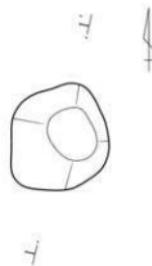
2号炉 1 面目



2号炉 2 面目



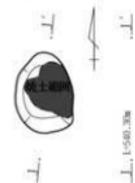
2号炉掘り方



3号炉 1 面目



3号炉 2 面目



3号炉掘り方



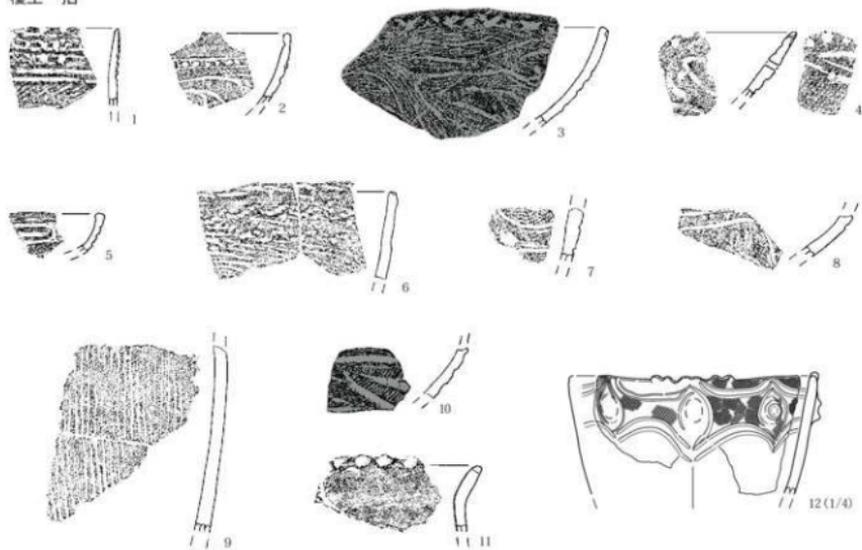
0 1:30 1m

第226図 124号竪穴建物(3)

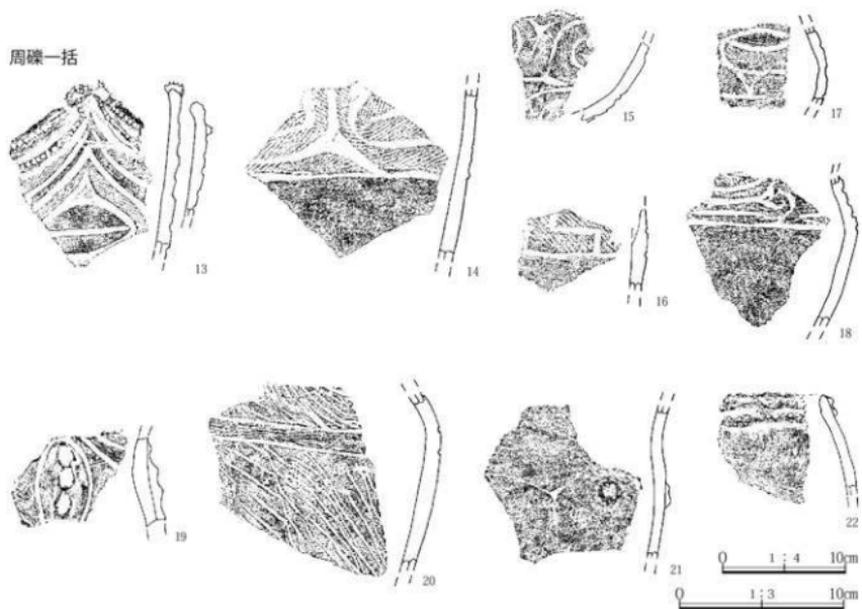
うP 4に切られていることから最初にも構築されたと思定される。

時期 佐野Ⅰb式～佐野Ⅱ式古段階

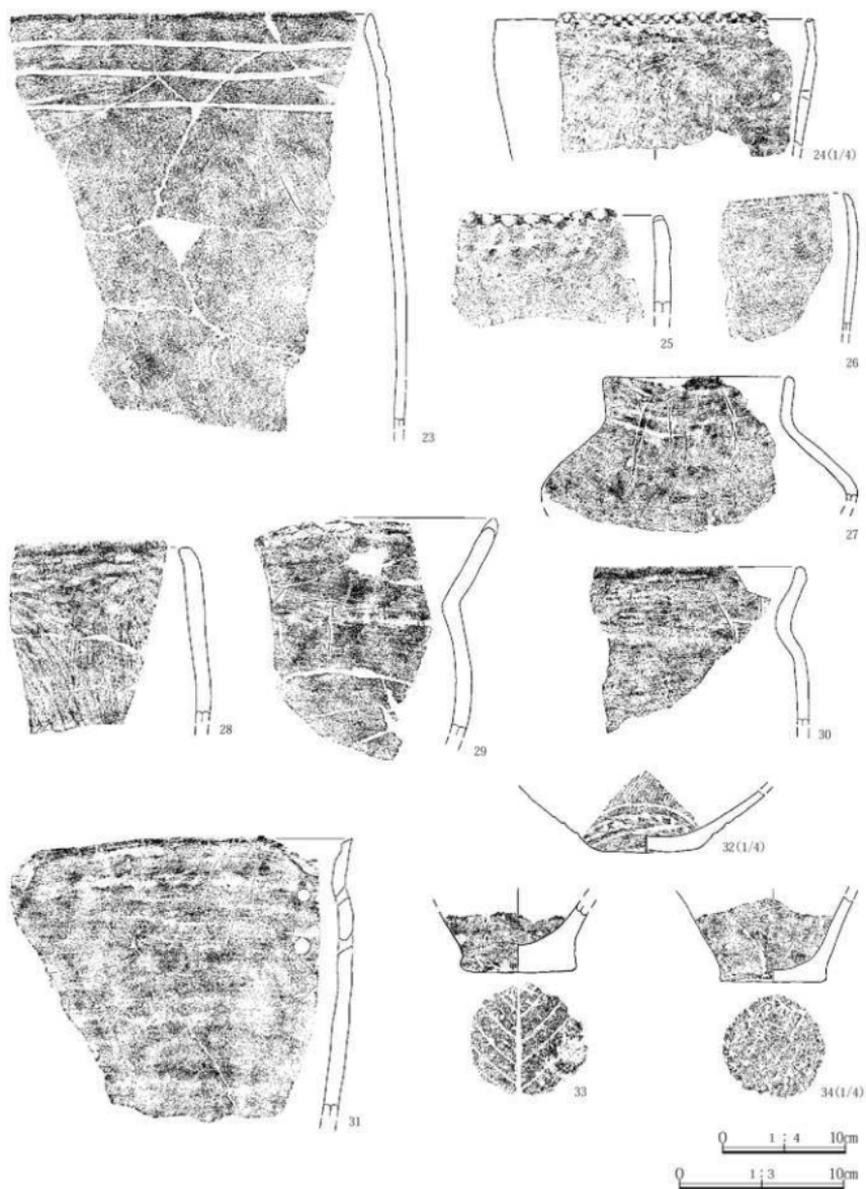
覆土一括



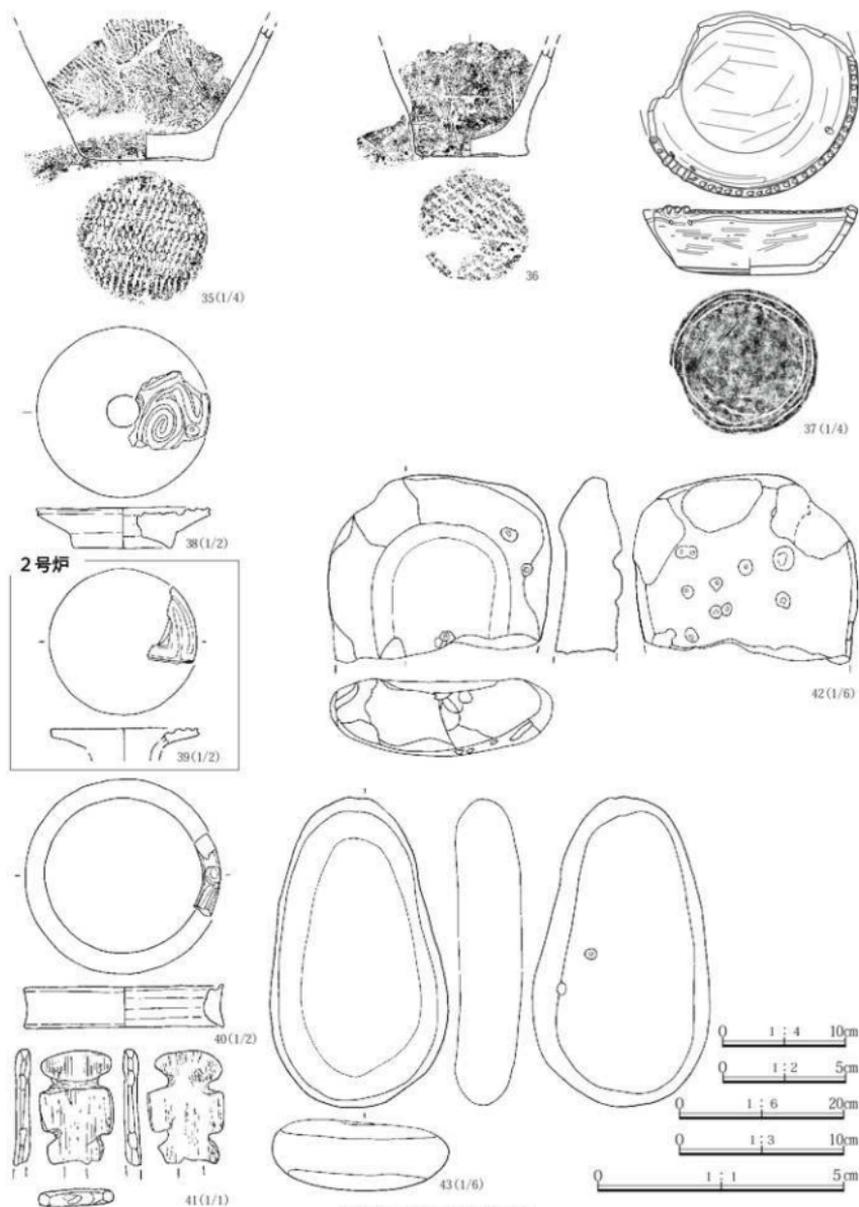
周礫一括



第227図 124号竪穴建物(4)

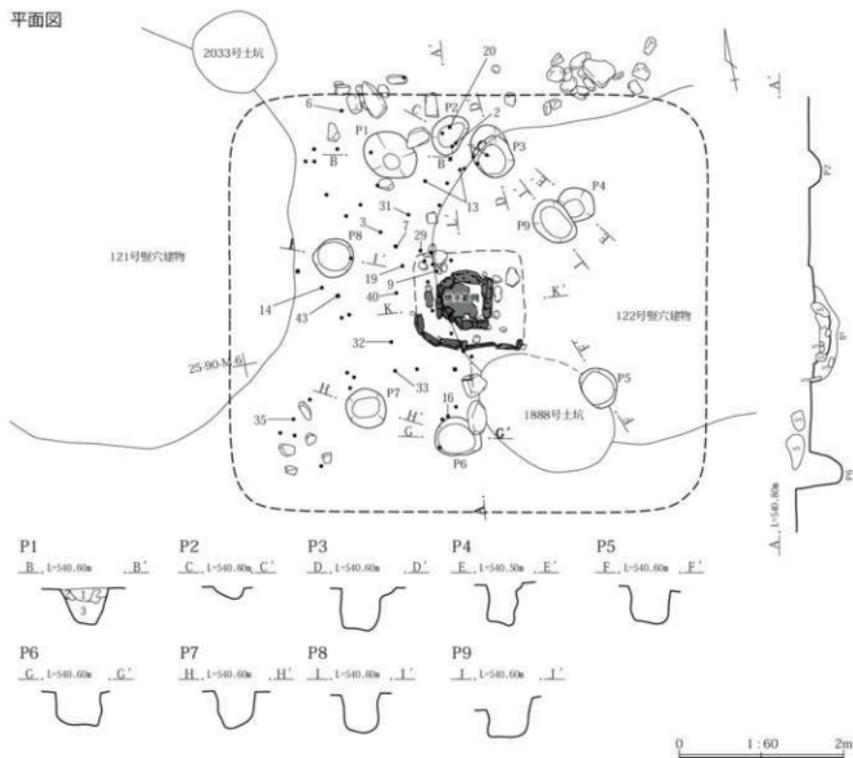


第228図 124号竪穴建物(5)



第229図 124号竪穴建物(6)

平面図



第230図 125号竪穴建物(1)

125号竪穴建物(第230～234図、PL.77)

調査年度 平成30年度

位置 7区(90区M-6)

経過 7区東側の緩傾斜地、沢の西側縁辺部に位置する。当初125号竪穴建物上面に認められ、礫集中を123号竪穴建物として調査した。しかし、125号竪穴建物の上面に該当することがわかったため、一連の遺構としてとらえた。

規模 510cm×570cm

重複 東側を121号竪穴建物、西側を122号竪穴建物によって切られる。

形状 隅丸方形が想定される。

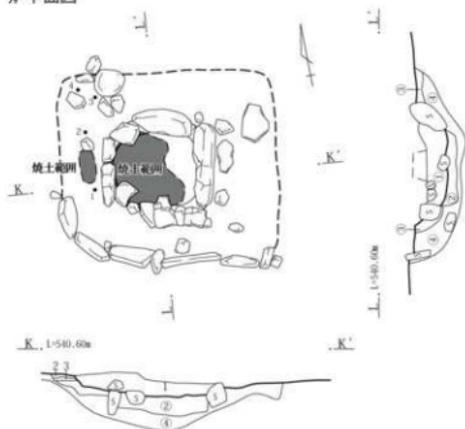
石列 北側に40cm前後の角礫を主体とした石列を確認した。東西軸に伸び、400cm程の長さで構築される。石列の南側には、入口施設と想定されるP1～P3が構築されており、関連が想定される。

床面 削平されており、確認できない。

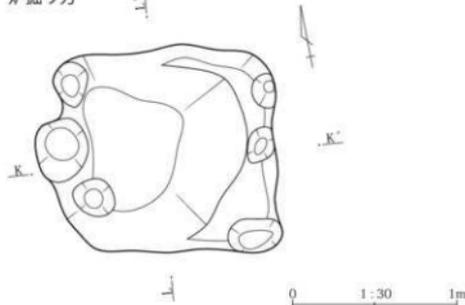
炉 2重石囲炉。河原石と鉄平石を用いて、1重、2重ともに縦位に据える。縦位の石列間に扁平礫を横位に認められることから、全面に敷石していたと想定される。炉内には炉体土器はなく、焼土のみである。

柱穴 柱穴は9基確認され、P1～3は、形状から入り口施設と想定される。柱穴には、柱痕の周りに根積み石を伴っている。それぞれの規模(長辺×短辺×深さ)は、

## 炉平面図



## 炉掘り方



第231図 125号竪穴建物(2)

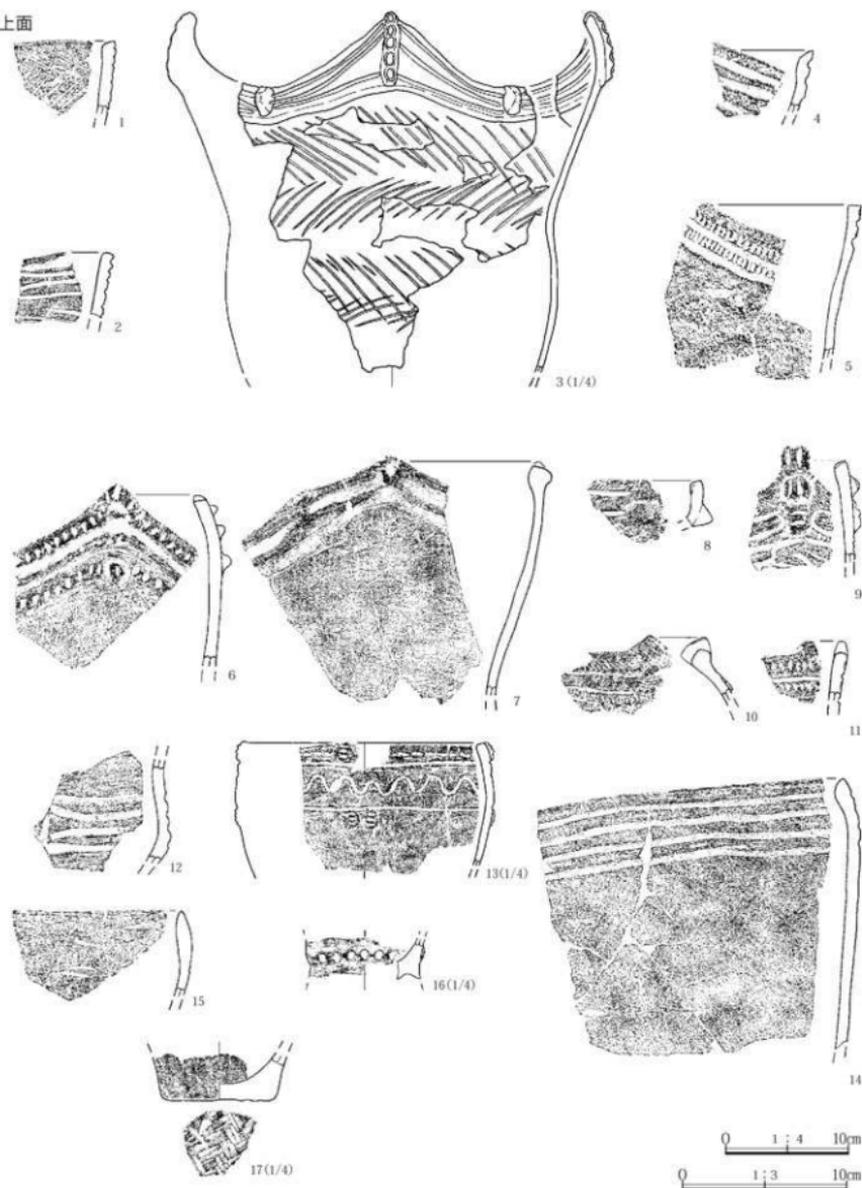
P 1 : 60×55×45, P 2 : 50×40×10, P 3 : 65×45×50, P 4 : 45×40×50, P 5 : 50×40×40, P 6 : 55×50×40, P 7 : 50×50×50, P 8 : 45×50×50, P 9 : 60×45×50である。柱穴間は、1.1m程を測り、七角形を呈する。

**遺物** 土器は238点出土し、高井東古段階が主体を占める。遺物は、第232～233図に掲載した。3～6、18、21は高井東式古段階、8、27は上ノ段式第3段階、9、10は安行2式、11は瘤付土器第3段階である。炉内からは21が出土している。前後型式の遺物は、中部高地新段階(1、2、28)や晩期前葉から中葉に相当する土器

(12～16)が出土した。後者は、上層からの出土で、周囲に当該期の遺構が集中している。佐野1a式(12)、佐野II式古段階(13、16)が出土している。土製品は、耳飾り(29～36)と土器片加工円盤(37～42)が出土し、確認された竪穴建物の中では多く所持していた。

**時期** 後期後葉(高井東式古段階)

上面

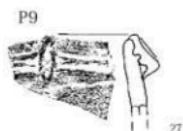
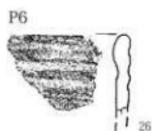
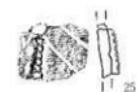
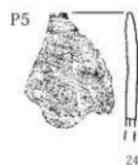
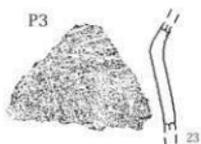
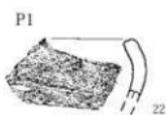


第232図 125号竪穴建物(3)

床面

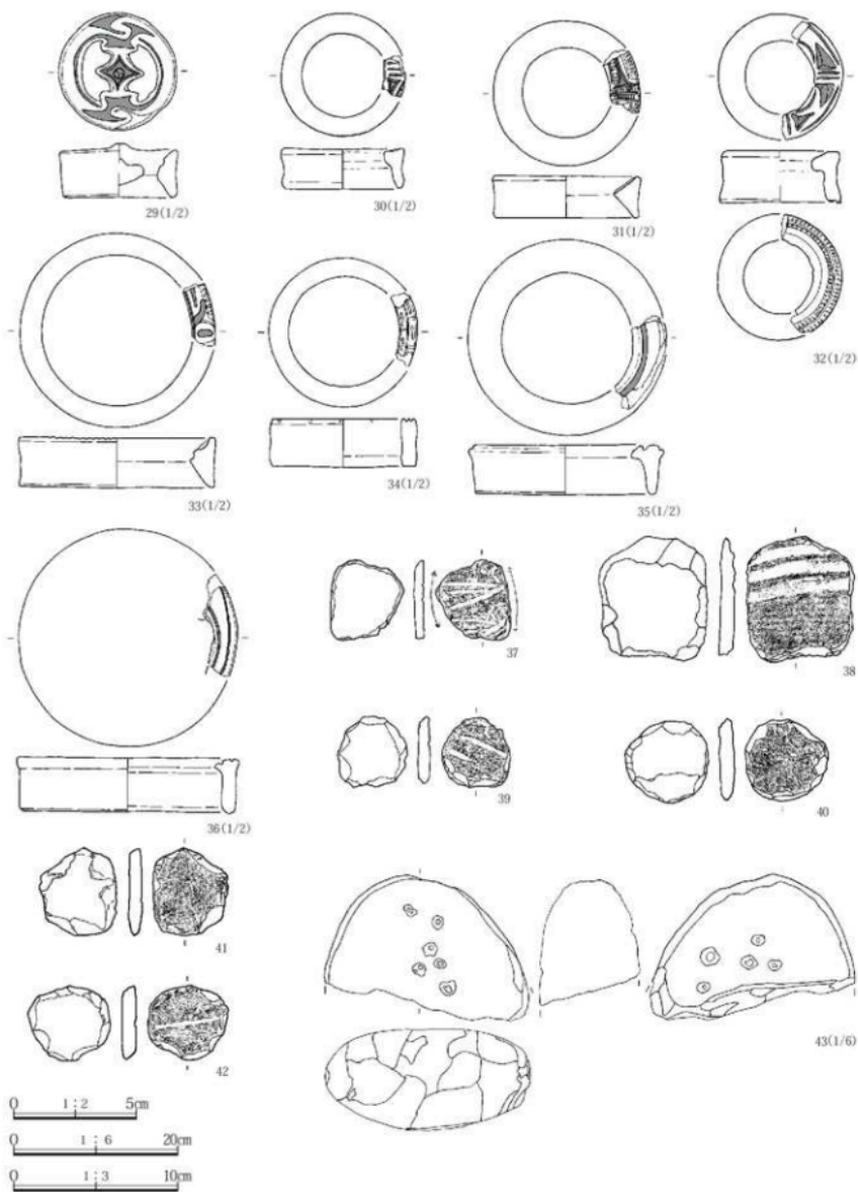


炉



0 1:3 10cm

第2章 発掘された遺構と遺物



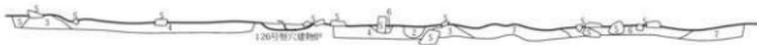
第234図 125号竪穴建物(5)

平面図



A, 1:541.80m

A'



B, 1:541.80m

B'

E, 1:541.90m

E'



C, 1:541.80m

C'

F, 1:541.80m

F'



D, 1:541.80m

D'



P1

P2

P3

P4

P5

P6

G, 1:541.60m G'

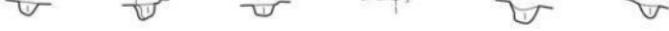
H, 1:541.60m H'

I, 1:541.60m I'

J, 1:541.30m J'

K, 1:541.00m K'

L, 1:541.00m L'



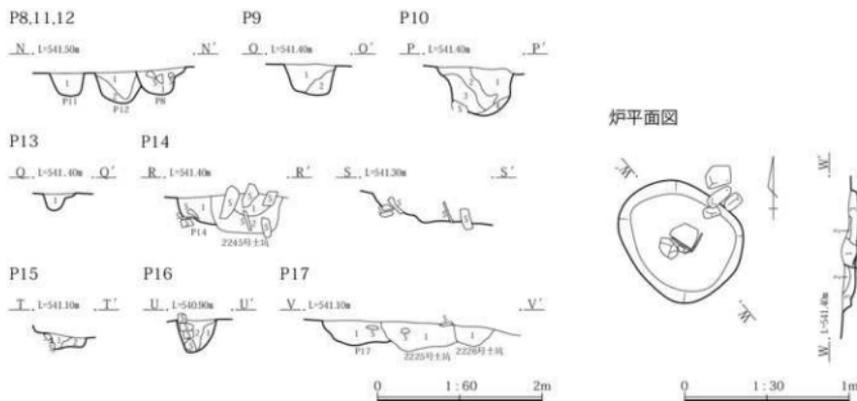
P7

M, 1:541.90m M'



0 1:60 2m

第235図 126号竪穴建物(1)



第236図 126号竪穴建物(2)

126号竪穴建物(第235～238図、PL.77)

調査年度 平成30年度

位置 7区(90区I-3)

経過 7区東側の緩傾斜地に位置し、127号竪穴建物の北側に隣接する。炉と外縁部に石列が認められたことから、126号竪穴建物として、調査を行った。

規模 長軸670cm×短軸500cm

重複 171号竪穴建物を切り、3号掘立柱建物に切られる。

形状 外縁部の石列の状態から隅丸方形と想定される。

石列 東、南、西側に60cm前後の鉄平石や河原石を横位に据えて、石列を構築している。東側は3号掘立柱建物によって、壊されている。南側は、一部に石列が確認でき、状況から、入口部が南側にあったと想定される。

床面 床面には、建物一面に50cm前後の鉄平石を主体として、敷石が確認されている。掘り込みも浅いことから、敷石の平地式建物と想定される。

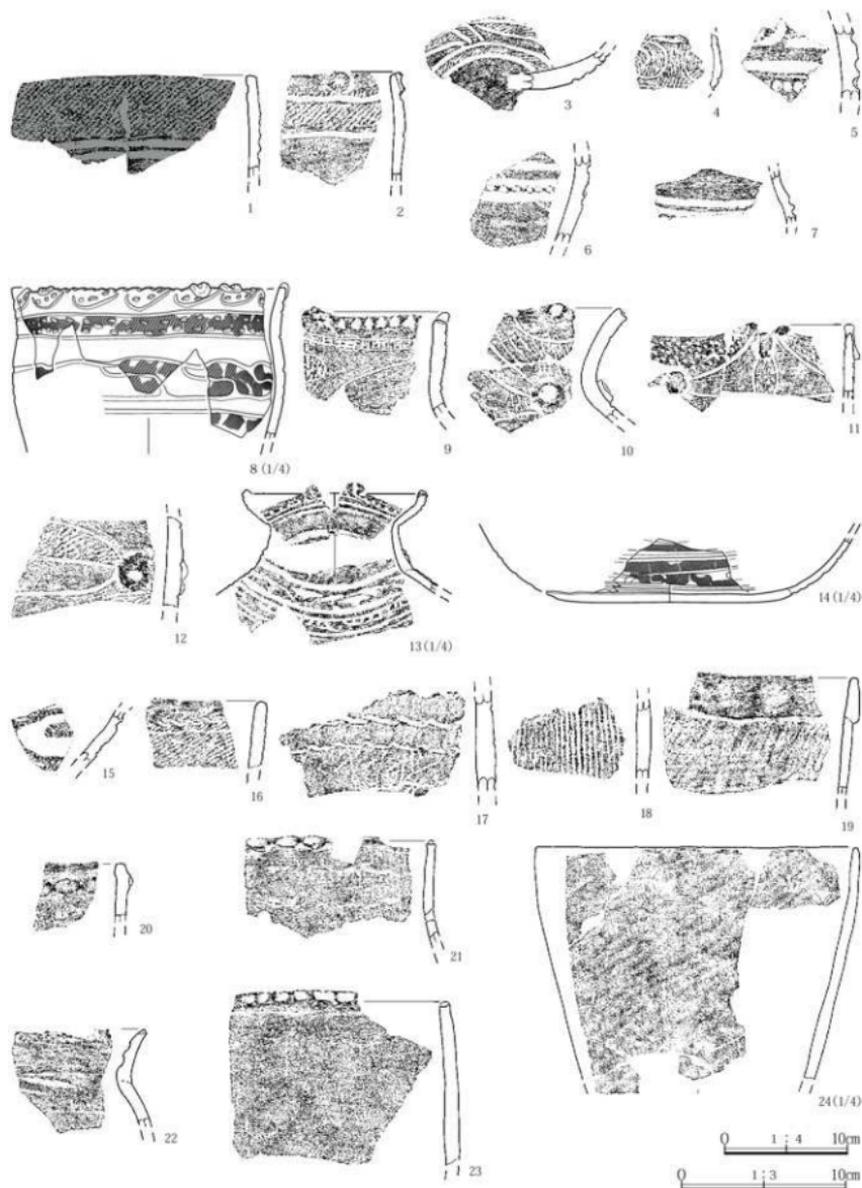
炉 建物中央部に地床炉が確認された。炉の規模(長辺×短辺×深さ)は、70×70×10である。中央部には、大形破片を利用した炉体土器が出土した。

柱穴 17基が確認された。主柱穴と確認できなかった。P14、P16には、根積み石を伴う。P1～4は、壁柱穴と考えられる。それぞれの規模(長辺×短辺×深さ)は、P1：20×20×15、P2：25×20×15、P3：20×20×

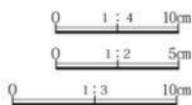
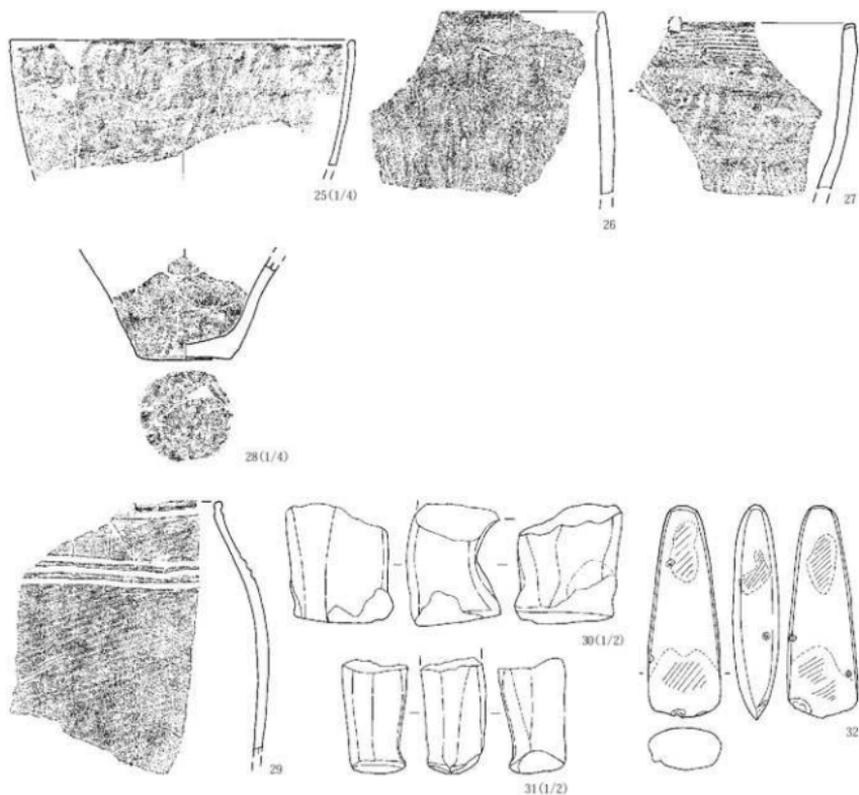
15、P4：20×15×5、P5：25×20×15、P6：30×25×10、P7：80×60×20、P8：60×60×20、P9：60×55×35、P10：20×20×60、P11：80×40×25、P12：55×50×30、P13：40×35×10、P14：(80)×(80)×30、P15：50×50×20、P16：60×50×30、P17：60×(60)×30である。

遺物 土器の総数は227点出土している。時期は晩期前葉から後葉まで幅広くみられるが、炉内から晩期後葉の佐野Ⅱ式新段階の岡ノ峰段階相当の土器が出土している。1～2は佐野Ⅱ式中段階、3～5は天神原式新段階、6は天神原式古段階、7と8は大洞C2式に相当する。

時期 晩期後葉(佐野Ⅱ式新段階)

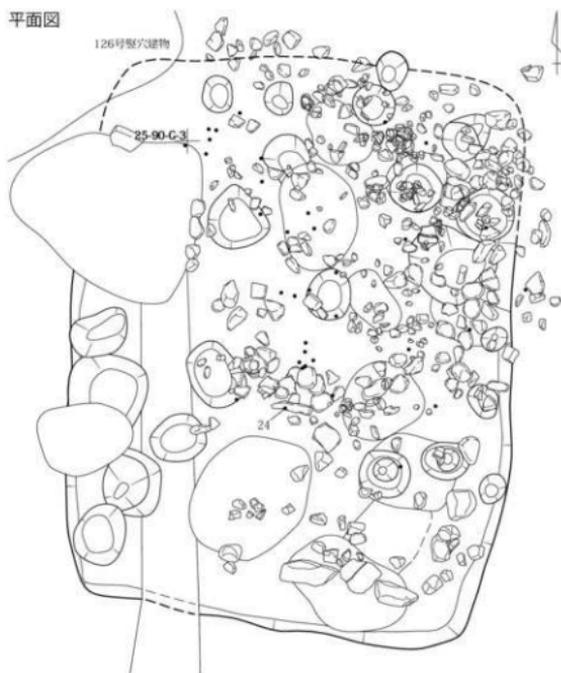


第237図 126号竪穴建物(3)



第238図 126号竪穴建物(4)

平面図



0 1:60 2m

第239図 127号竪穴建物(1)

127号竪穴建物(第239～242図、PL.80)

調査年度 平成30年度

位置 7区(90区G-3)

経過 127号竪穴建物は、7区南側の緩傾斜地に位置する。竪穴建物の中央部に葎、外縁部に50cm前後の川原石を配列している。掘り込みがないことから平地式建物として調査を行った。

規模 長軸700cm×短軸640cm

重複 4号掘立柱建物によって切られている。

形状 隅丸方形の平地式敷石建物

床面 床面には、建物北部に50cm前後の鉄平石を主体として、敷石が確認されている。掘り込みも浅いことから、敷石の平地式建物と想定される。

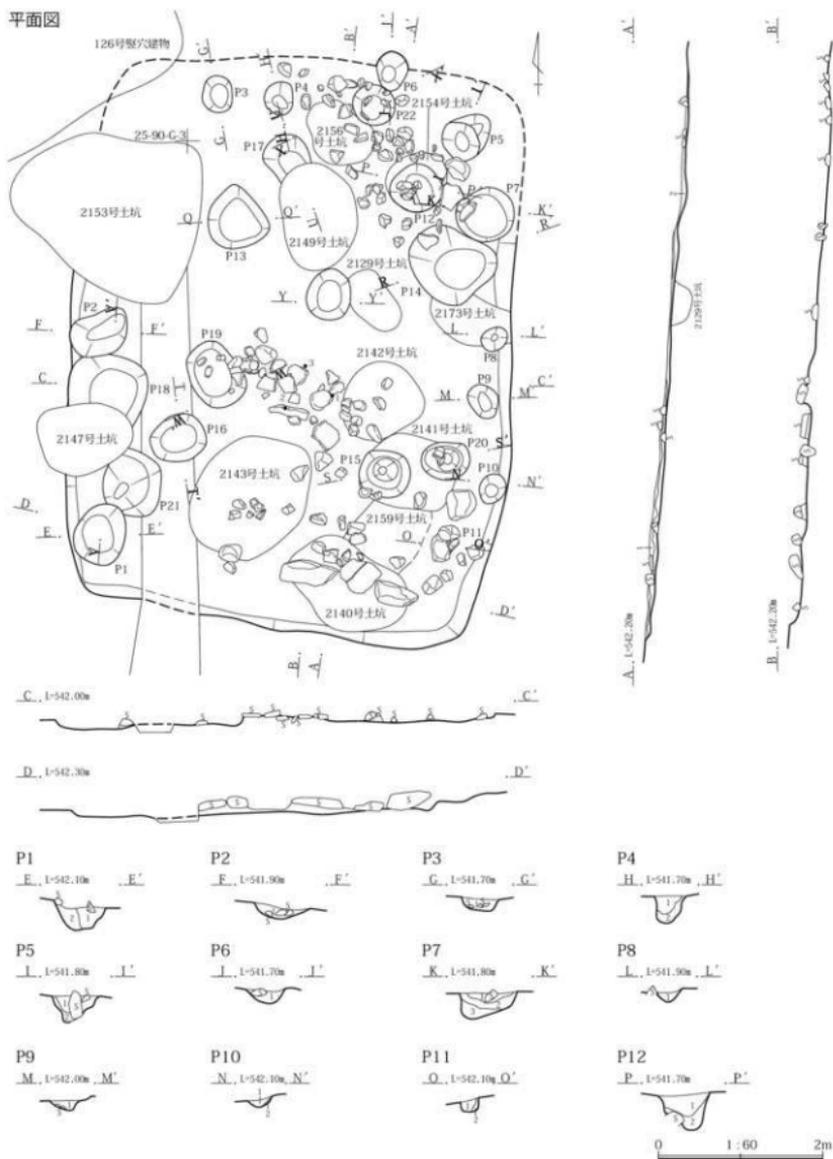
炉 建物中央部に地床葎が確認された。葎の規模(長辺×短辺×深さ)は、a:80×80×50である。

柱穴 22基が確認された。P13～P16は主柱穴、P1～12は、壁柱穴である。主柱穴の一边は、360cm、を測る。それぞれの規模(長辺×短辺×深さ)は、P1:75×60×30、P2:70×50×15、P3:45×40×15、P4:40×30×30、P5:55×55×30、P6:50×40×15、P7:70×65×30、P8:30×30×10、P9:40×40×10、P11:20×20×15、P12:75×70×45、P13:80×75×30、P14:105×100×90、P15:80×80×50、P16:80×65×35、P17:80×65×35、P18:80×65×20、P19:80×60×35、P20:60×45×35、P21:95×70×35、P22:50×50×35である。

遺物 土器の総数は180点出土している。晩期前葉が主体を占め、1～7は佐野1a式、9と10は天神原式である。

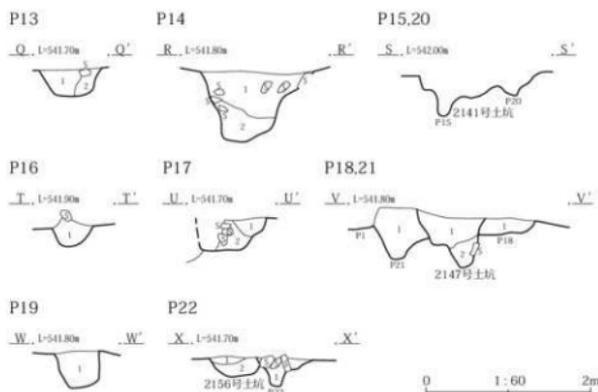
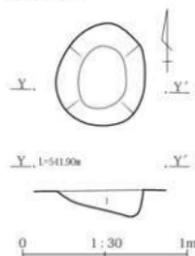
時期 晩期前葉

平面図



第240図 127号竪穴建物(2)

## 炉平面図



第241図 127号竪穴建物(3)

128号竪穴建物(第243～245図、PL.81、82)

調査年度 平成30年度

位置 7区(90区D-3)

経過 7区南側、緩傾斜地に位置し、130、131号竪穴建物が東側に隣接する。二重に巡る石列と炉とみられる焼土を確認し、扁平礫が散在する範囲を129号竪穴建物として調査を行った。調査時には、炉、P1tの関係から2軒の重複が明らかとなり、128号竪穴建物a、bとした。

規模 128号竪穴建物a：推定750cm×730cm

128号竪穴建物b：790cm×(730cm)

重複 aよりもbが新しく、1号掘立柱建物はaとbよりも古い。

形状 128号竪穴建物bには、外縁部に2重の石列が確認され、石列の状況から隅丸形状の建物だったと想定される。128号竪穴建物も同様の形状だったと想定される。

石列 石列は、西壁と南壁に確認され、東壁にも認められるが、乱れている。おそらく石列として機能し、北側には、石列の痕跡がないことから、南側を開くコの字状だったと想定される。石列の石材は、鉄平石を主に用い、横位に据えている。外縁と内縁の石列の幅は、80cm前後を測る。

床面 床は明確ではなく、南側に浅い掘り込みが確認されたが、石列と炉の面の高さに変わりはなく、平地式の

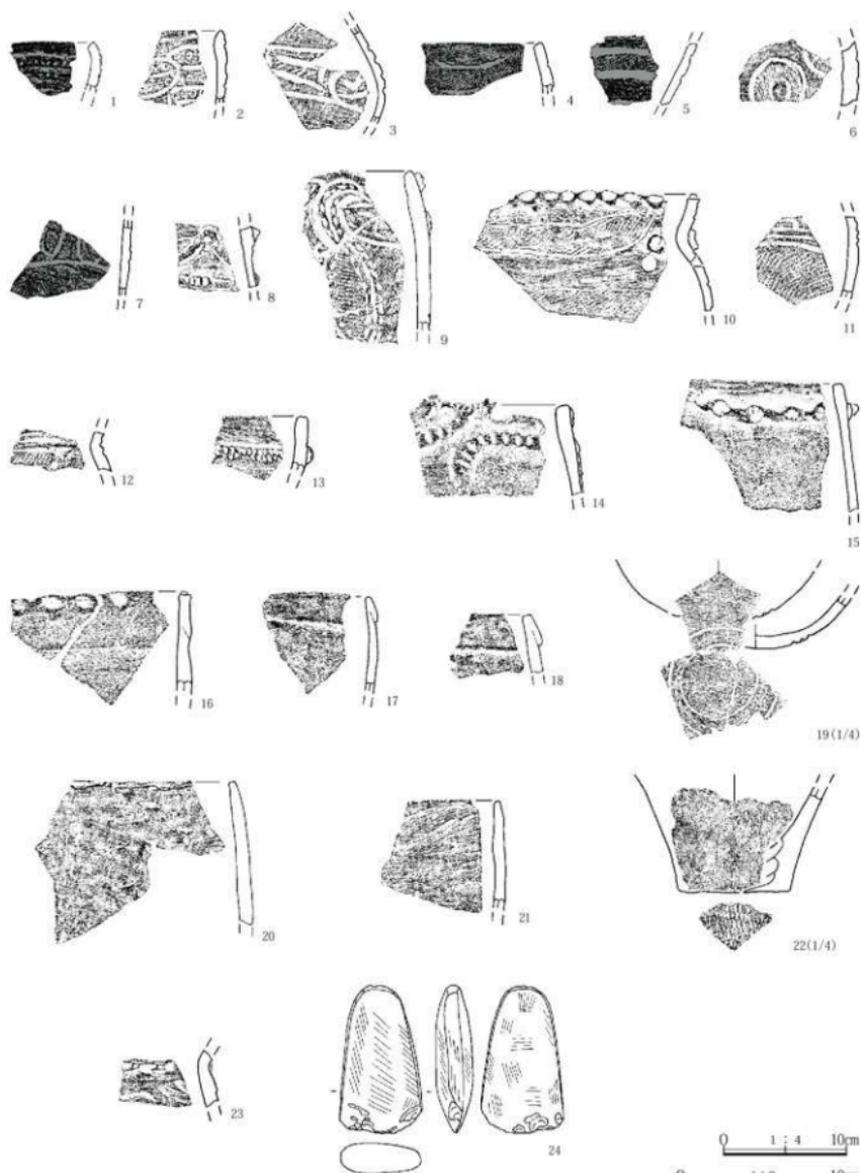
竪穴建物であったと想定される。

炉 128号竪穴建物a、bの炉の規模(長辺×短辺×深さ)は、a：80×80×50、b：80×70×60である。両者ともに周囲に石を有するが、意図的な掘り込みはなく、地床だとは想定される。

柱穴 17基が確認された。AP1からAP4は128号竪穴建物aの主柱穴、BP1からBP4は128号竪穴建物bの主柱穴、P7～9、11は壁柱穴、P4～6は対ビットと想定される。主柱穴の一边は、Aが360cm、Bが330cmを測る。それぞれの規模(長辺×短辺×深さ)は、AP1：100×90×60、AP2：95×75×50、AP3：100×90×85、AP4：90×80×45、BP14：170×150×60、P1：140×130×40、P2：95×85×20、P3：105×95×35、P4：85×50×25、P5：90×80×20、P6：55×40×15、P7：105×65×20、P8：40×30×20、P9：55×35×15、P11：60×55×20、P12：55×35×30、P13：50×40×20である。

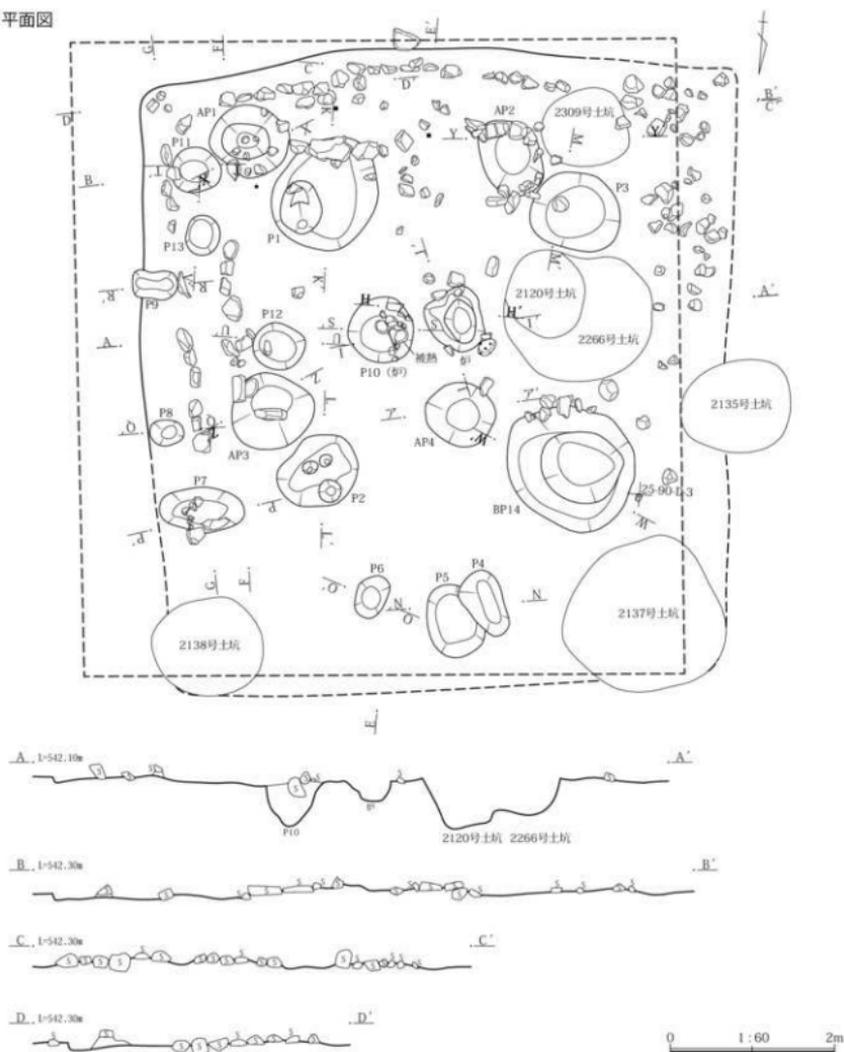
遺物 土器の総数は69点出土している。晩期中葉の佐野Ⅱ式古段階が主体を占める(4～6)。

時期 晩期中葉(佐野Ⅱ式古段階)

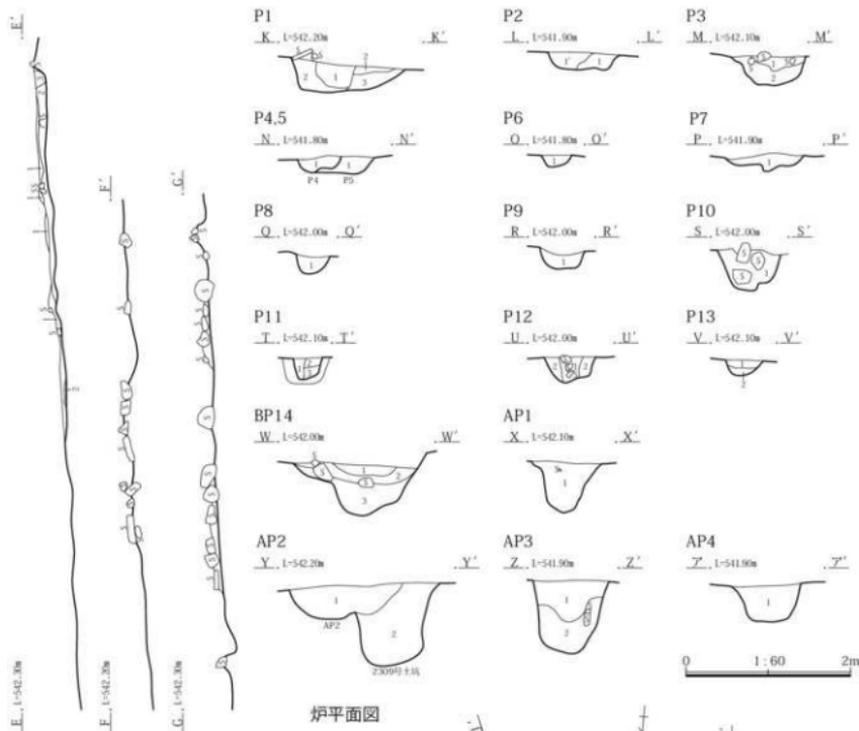


第242図 127号竪穴建物(4)

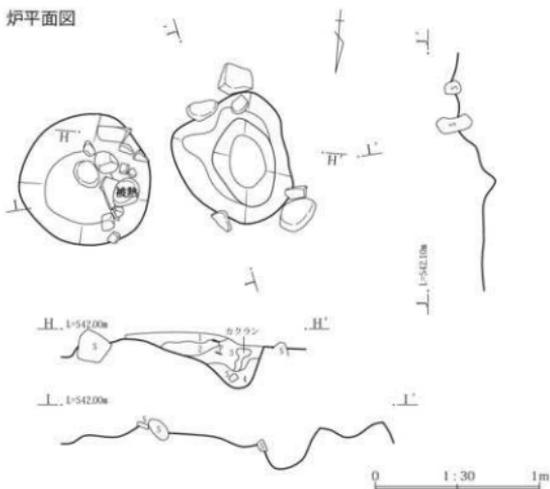
平面図



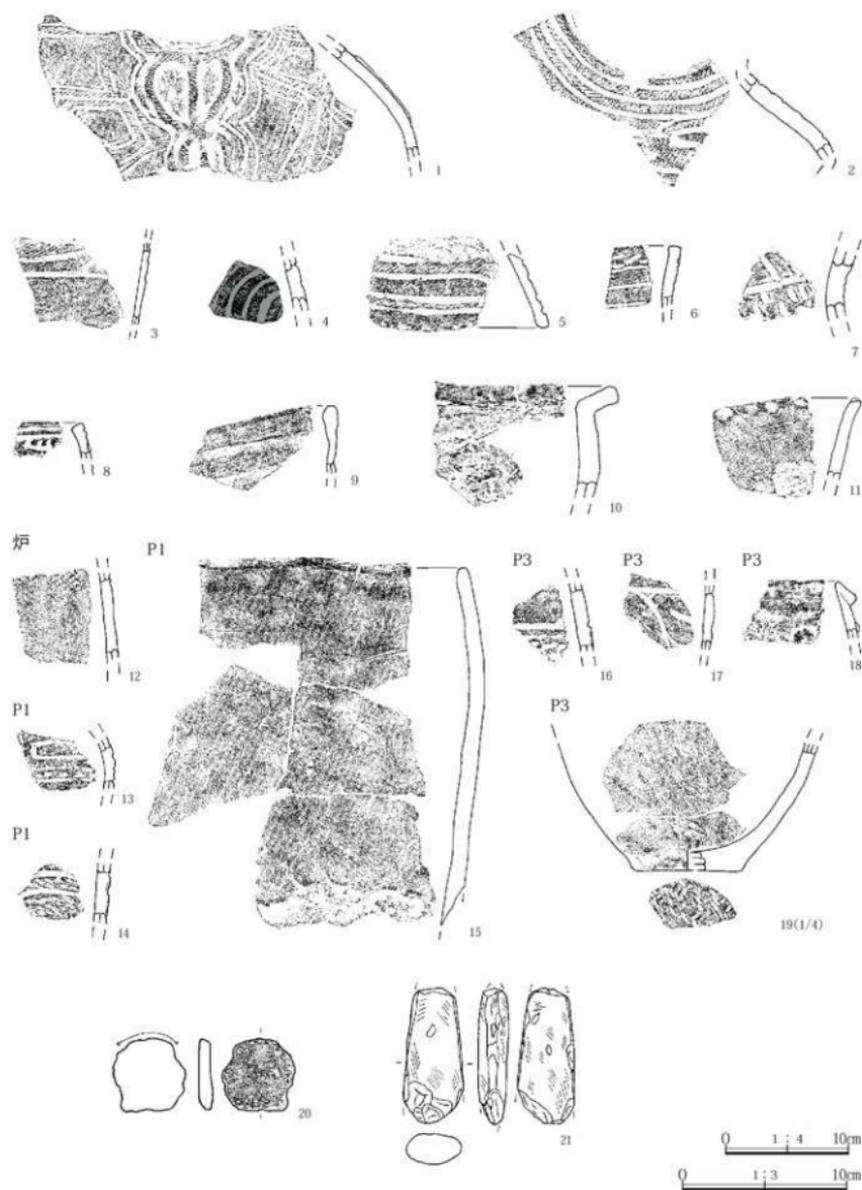
第243図 128号竪穴建物(1)



炉平面図

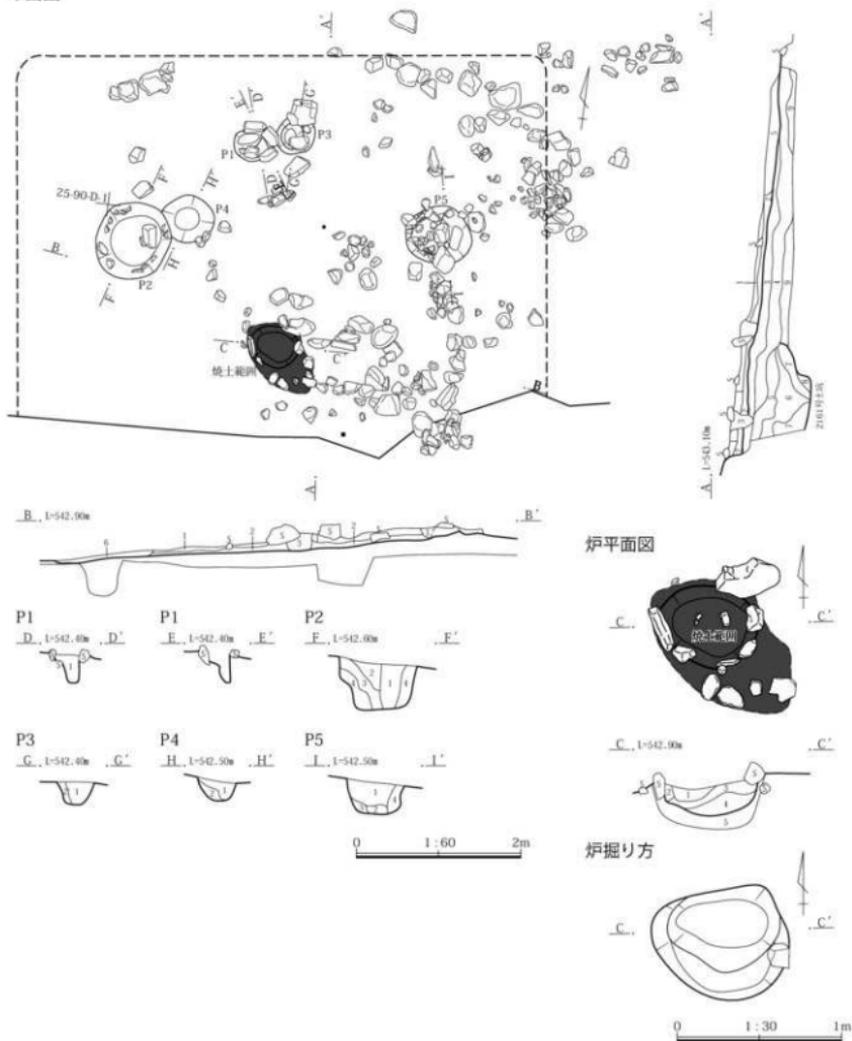


第244図 128号竪穴建物(2)



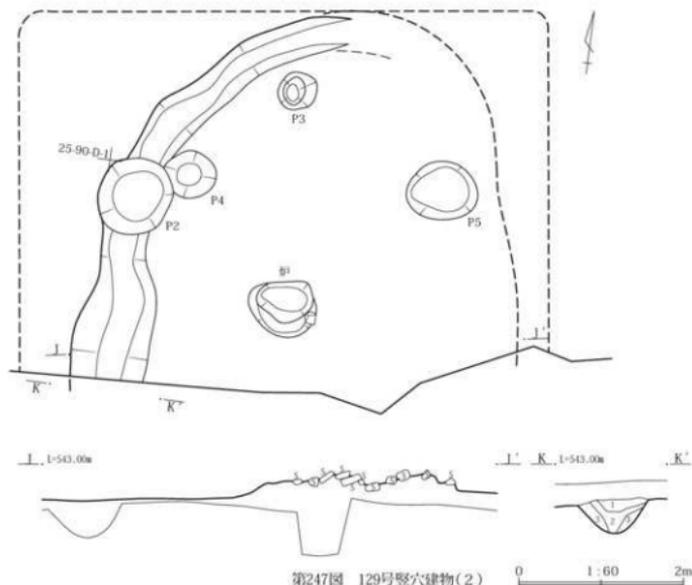
第245図 128号竪穴建物(3)

平面図



第246図 129号竪穴建物(1)

## 掘り方



第247図 129号竪穴建物(2)

## 129号竪穴建物(第246～249図、PL.82)

調査年度 平成30年度

位置 7区(90区D-1)

経過 7区南側、緩傾斜地に位置し、東側には9号列石北側に128号竪穴建物が隣接する。か<sup>1</sup>とみられる焼土を確認し、扁平礫が散在する範囲を129号竪穴建物として調査を行った。

規模 推定650cm×(470cm)

重複 土層は残っていないが、晩期中葉に比定される128号竪穴建物が北側に接しており、影響を受けていると想定される。

形状 敷石の状態から隅丸方形だと判断される。北端部に地山礫を東西軸に並列させる。中央部には弧状に礫を据える。

床面 中央部には、礫が散在しているが、周礫が崩落したものと考えられることから、敷石の伴わない平地式建物と想定される。硬化面は確認できなかったが、か<sup>2</sup>の確認面の周辺が平坦面を形成しており、床面として利用していたと考えられる。

炉 規模(長辺×短辺×深さ)120×100×35の石囲炉が中央部で確認されている。北側の石は、欠落しているが、南側は弧状に30cm程の扁平礫を縦に組んでおり、本来は円形だったと想定される。

壁溝 西側に深さ40cmの溝が確認され、129号竪穴建物に伴う壁溝と考えられる。東側は欠落しているが、小判状の形態を呈していたと想定される。

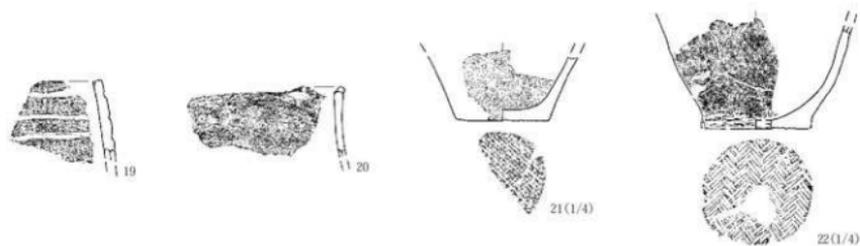
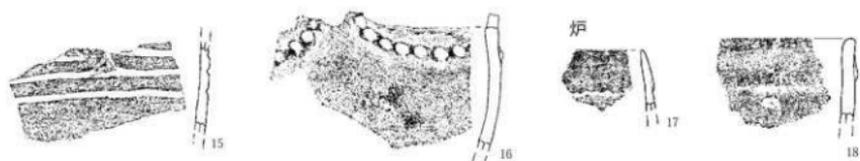
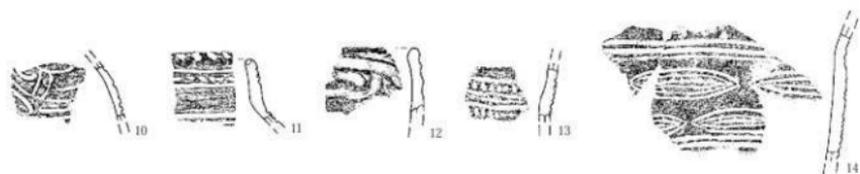
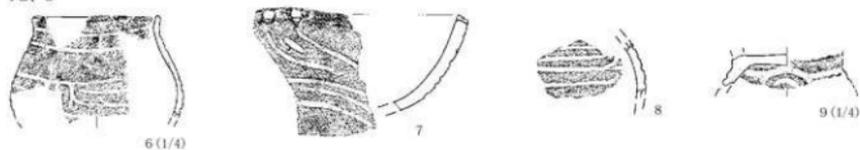
柱穴 P1～5が確認された。それぞれの規模(長辺×短辺×深さ)は、P1:20×20×30、P2:90×90×55、P3:20×20×30、P4:60×60×25、P5:90×90×50である。P1、P3、P4には根詰め石を柱穴縁辺に詰め込んでいた。P2とP5は主柱穴と考えられ、P1とP3も根詰め石を伴っており、入口部の補助材と考えられる。確認された柱穴から五角形の亀甲形が想定される。

遺物 土器の総数は26点出土している。晩期前葉が主体を占め、6～10は佐野I b式、11～13は佐野II式古段階である。

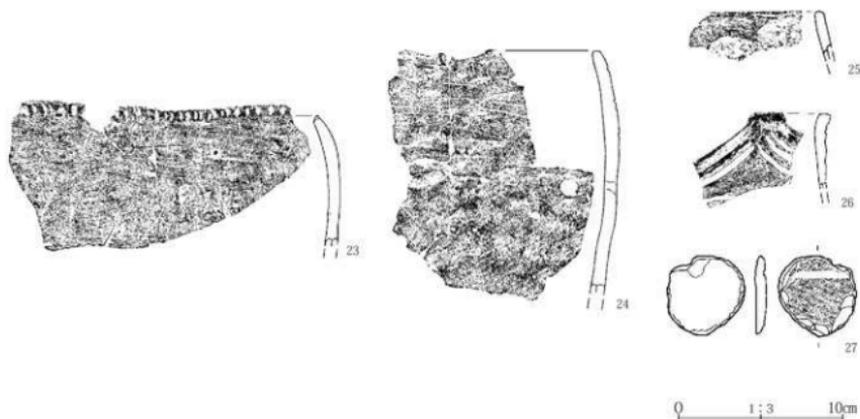
時期 晩期前葉(佐野I b式)



P2、5



第248図 129号竪穴建物(3)



第249図 129号竪穴建物(4)

130号竪穴建物(第250～253図、PL.83、84)

調査年度 平成30年度

位置 7区(90区A-4)

経過 7区西側、緩傾斜地に位置し、10、11号掘立柱建物の南側に隣接する。炉とみられる焼土を確認し、扁平礫が散在する範囲を130号竪穴建物として調査を行った。

規模 720cm×430cm

重複 131号竪穴建物を切る。

形状 敷石の状態から隅丸方形だと判断される。西限は、東端部には南北軸に河原石、鉄平石を横位に並列させる。付近には、壁に直交する形で、壁材とみられる炭化材が出土した。西端部には、鉄平石を主体とする敷石が確認されており、その付近とみられる。柄状に敷石が認められることから、柄が伴ったと想定される。

床面 中央部北より河原石を横位に据えた敷石が確認されており、敷石の伴った平地式建物と想定される。

炉 規模(長辺×短辺×深さ)80×60×20の地床炉が中央部で確認されている。

柱穴 P 7、P 9、P10、P13が建物の東側で確認された。それぞれの規模(長辺×短辺×深さ)は、P 7:50×50×110、P 9:75×70×10、P10:130×(75)×60、P 13:100×75×65である。P 7、P 10、P 13は、隣接する掘立柱建物に伴う可能性がある。

遺物 土器の総数は94点出土している。16のように瘤付

土器の注口土器も出土するが、主体は晩期中葉の佐野式古段階～中段階である。1は、安行3b式、2・3は天神原式新段階、7・9・10は佐野式古段階、5、6は佐野式中段階、11～14は大洞式A併行、17～19は晩期中葉に伴う無文粗製土器である。掘り方からは、2のような佐野式古段階の土器のほかに瘤付土器も出土する(5、6)。三叉文を伴う土偶も出土している(27)。

時期 晩期中葉(佐野Ⅱ式古段階～佐野Ⅱ式中段階)

131号竪穴建物(第250、251、254図、PL.83、84)

調査年度 平成30年度

位置 7区(90区A-4)

経過 7区西側、緩傾斜地に位置し、10、11号掘立柱建物の南側に隣接する。当初130号竪穴建物として調査を行ったが、SPA-SPA<sup>1</sup>の土層断面の状態から、もう1軒重複することがわかり、130号竪穴建物南側を131号竪穴建物として調査を行った。

規模 推定700cm×450cm

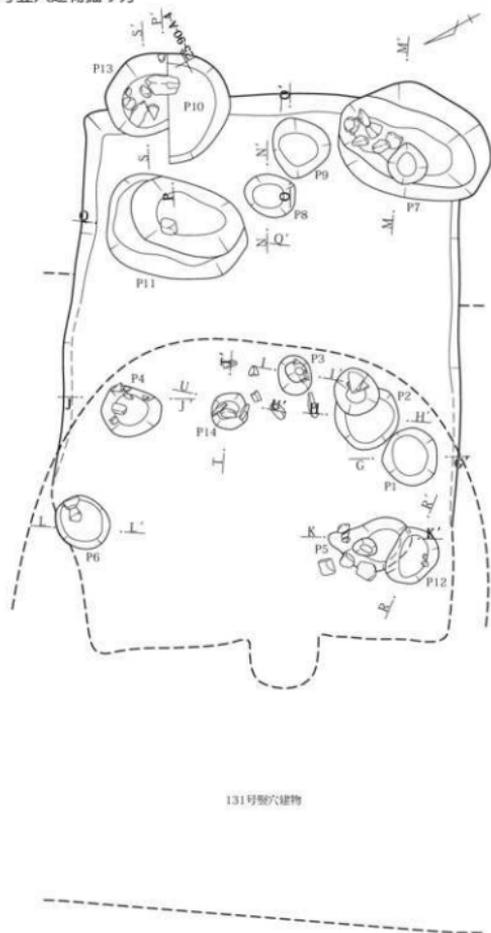
重複 130号竪穴建目に切られる。

形状 P 1～6、P 12、P 14の状況から隅丸方形だと判断される。西限は、130号竪穴建物の北東部に扁平な礫が横位に据えられており、その付近だったと想定される。

床面 130号竪穴建目に埋されており不明確であるが、本来掘り込みを持たない平地式建物であった可能性が

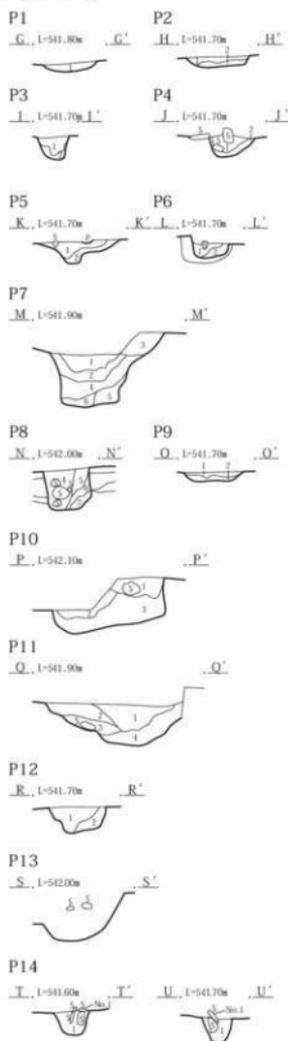


130号竪穴建物掘り方



131号竪穴建物

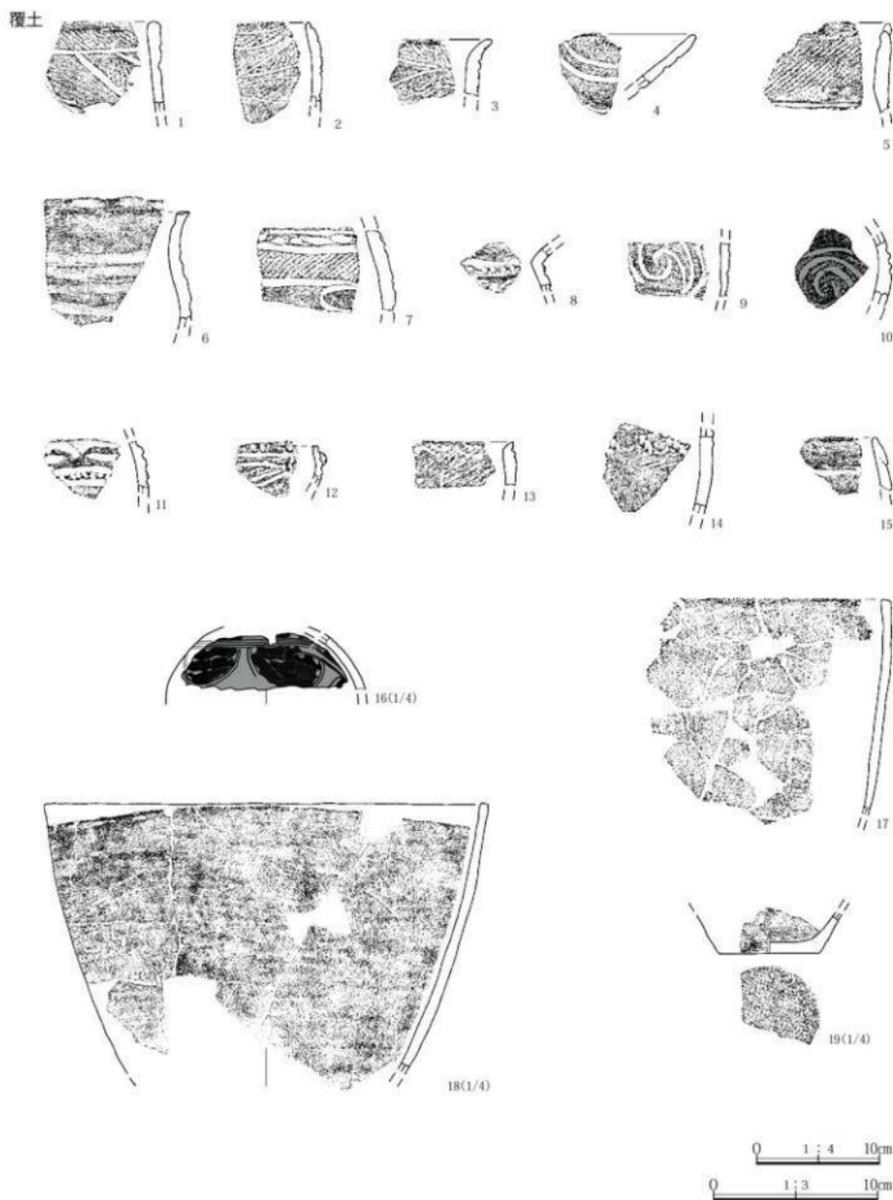
130号竪穴建物



0 1:60 2m

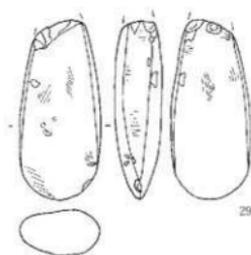
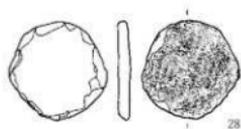
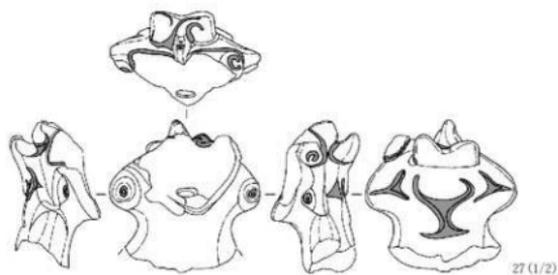
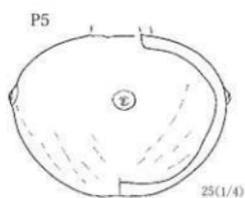
第251図 130・131号竪穴建物(2)

第2章 発掘された遺構と遺物



第252図 130号竪穴建物(1)

掘り方

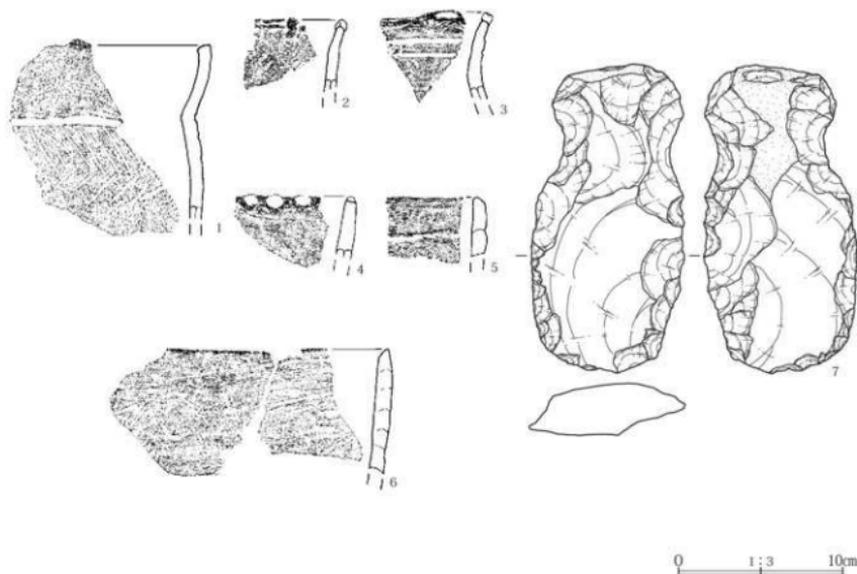


0 1:4 10m

0 1:2 5m

0 1:3 10m

第253図 130号竪穴建物(2)



第254図 131号竪穴建物

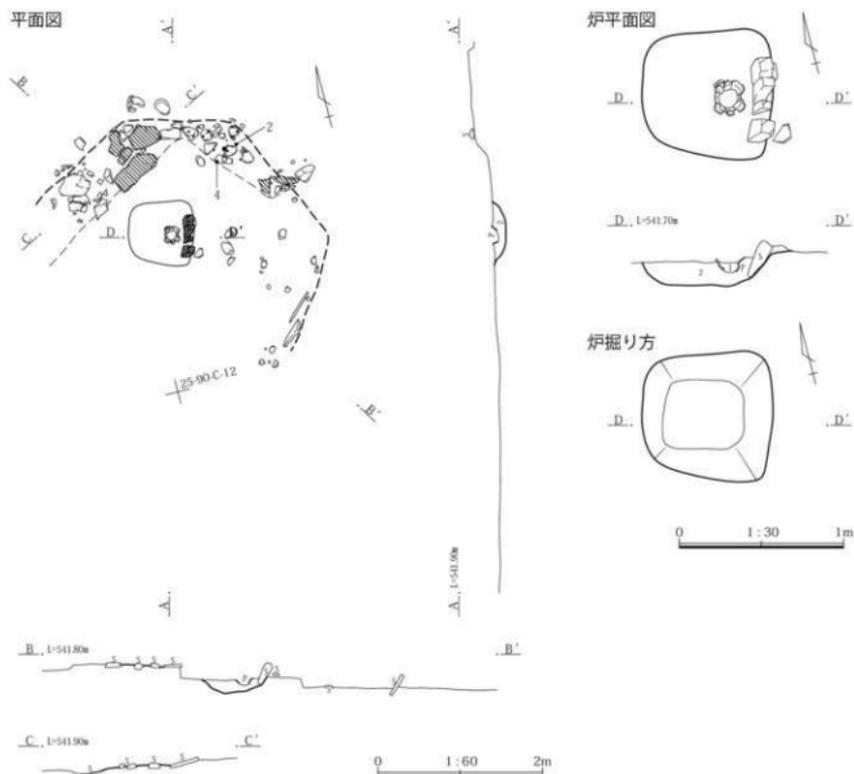
る。

**炉** 確認されていない。

**柱穴** P 1～6、P12、P14が西側に開口する形で、半円状に並ぶ。それぞれの規模(長辺×短辺×深さ)は、P 1：70×70×10、P 2：80×80×15、P 3：50×40×10、P 4：75×65×30、P 5：(100)×65×26、P 6：65×65×25、P12：80×60×30、P14：70×65×27である。P 3、P 4、P14には根詰め石を伴う。

**遺物** 土器の総数は6点で、1は加曾利B 3式、2は、高井東式系の晩期初頭の土器である。3は、佐野Ⅱ式新段階、4～6は、晩期中葉に伴う粗製土器である。

**時期** 出土遺物から、晩期中葉の土器は130号竪穴建物に属する可能性があるため、後期後半の可能性が高い。



第255図 132号竪穴建物(1)

132号竪穴建物(第255、256図、PL.85)

調査年度 平成30・31年度

位置 7区(90区A-12、B・C-11・12・13)

経過 7区北東部にある12号列石の北西部で確認された。12号列石は、確認当初に北西側を平安時代の竪穴建物に切られており、その北西部に大きな扁平平原石等を平坦に敷き込んだ部分があり、調査時には2号配石コと仮称した。その後、平安時代の竪穴建物の下から石囲炉と敷石の一部が検出され、先に確認されていた配石はこの建物の出入り口部にあたると想定するに至った。

重複 平安時代の竪穴建物に切られており、12号列石にも切られていると思われるが、明確な証拠は得られてい

ない。

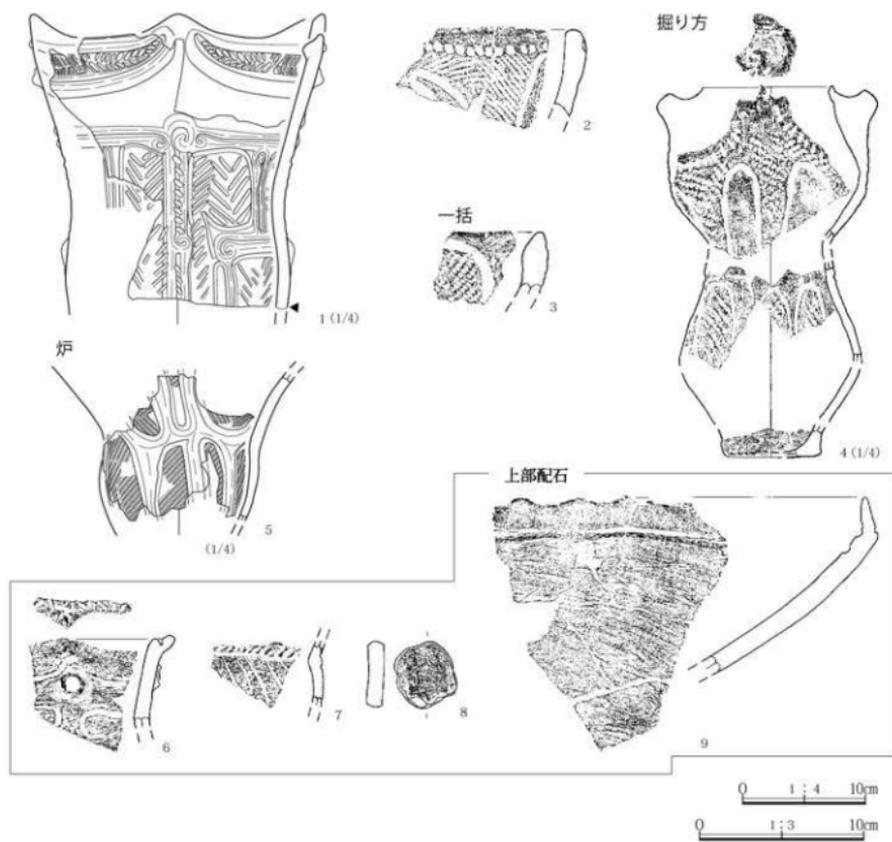
形状 西側に出入り口部をもつ柄鏡形竪穴建物と考えられるが、多くは失っている。

炉 4石を方形に組んだ石囲炉で、炉内東側に寄せて口縁部と胴部下半を打ち欠いた深鉢を埋設する。炉石は3方を失っているが、炉石には明確な被熱痕跡が認められる。

柱穴 主柱と見られるものは認められなかった。

遺物 炉内埋設土器の他に、中期後半および後期中葉期の土器が出土している。

時期 炉内埋設土器から、中期後半加曾利E 4式期に比定されよう。



第256図 132号竪穴建物(2)

## 133号竪穴建物(第257～262図、PL.55～58)

調査年度 平成31年度

位置 89区X-11・12、Y-10-12、90区A-10-12

**経過** 7区北東部にある12号列石の中央部段上で確認された。12号列石の確認当初に、中央部段上で方形に区画された敷石面の中央に立石を伴う配石(93号配石)があり、その東側にも敷石面の一部が確認された。調査の進捗に合わせて東側の一部を拡張して調査を進めたところ、敷石面の北側で焼土が確認された。この焼土には埋裏が2個伴っており、調査段階では100号焼土と56号・57号埋裏と仮称したが、その後の調査でこれらが一体の竪穴建物であり、これが12号列石を構築する契機となった竪穴建物であると判断した。

また、12号列石の南西側3mのところに大きな石4石が並んでおり、調査段階では13号列石と仮称したが、その位置関係からこれは本建物の出入口施設であると考えに至った。

**重複** 本住居の竪の南西部で検出された93号配石とその下で確認された61号配石墓、竪の南東側に重複する135号竪穴建物の出入口口部の敷石、および北西部に重複する115号配石、2396号土坑は、いずれも本建物を切る。また、本建物の南側に位置する焼土を炉とする160号～163号竪穴建物も一部が重複していると想定されるが、これらとの切り合い関係は不明である。

**形状** 南西側に出入口部が付く柄鏡形竪穴建物であると判断した。主体部の大きさは敷石面の輪郭と柱穴の位置、および竪の位置等の検討から、直径8m以上であったと想定する。

出入口口の形態は、時期に近い106号竪穴建物を参考に推定した。本建物に伴う12号列石は段上から段下まで50cm前後の落差があり、段下はその後配石墓群の構築に伴って相当な改変を受けていると思われるが、出入口口に伴うものと推定した4個の石は移動はしていないと判断した。その理由は移動しがたい大きさがあるが、参考にした106号竪穴建物との類似性、および本建物の竪を通る主軸が4個の石の中央を貫いている配置も、理由として挙げておきたい。

**床面** 南東側の縁辺部に小さな鉄平石を敷いた面が確認されたが、その他の敷石は残っていないかった。

**炉** 調査時に100号焼土と56号・57号埋設土器としたも

のが本建物の炉と判断した。焼土は当初、大きな楕円形の形状で淡い焼土が確認されたが、それを除去すると方形の形状に変化し、その段階で埋裏2個が検出された。さらに掘り進むとその下から方形を斜めにずらして重ねたような形状の濃密な焼土が確認された。

こうした状態から、おそらくこの炉は3回以上にわたって改修されたことを示していると考えられる。

**柱穴** 南東側縁辺部の敷石周辺から5本の柱穴が検出された。このうちP1とP4、P5とP2の2組が主柱だった可能性が考えられる。なお、柄部との接合部にある対ピットが確認できていない。

**遺物** 炉内埋設土器2個体の他に、調査に伴って後期縄文之内1式期の土器が少量出土している。

**時期** 炉内埋設土器および床面付近出土の土器から、本建物の時期は後期縄文之内1式期に比定されよう。

## 134号竪穴建物(第262、263図、PL.88)

調査年度 平成31年度

位置 90区D-11・12

**経過** 7区北東部にある132号竪穴建物の西側で確認された。この地区は西側に段差があって削平が大きく及んでおり、遺構の分布が少ない地区だが、焼骨破片と炭化物が比較的濃密に分布する範囲があり、掘り下げてみると土器少破片が多く分布することから、竪穴建物の一部であると判断した。

**重複** 北東部に中世の1398号ピットが重複する。

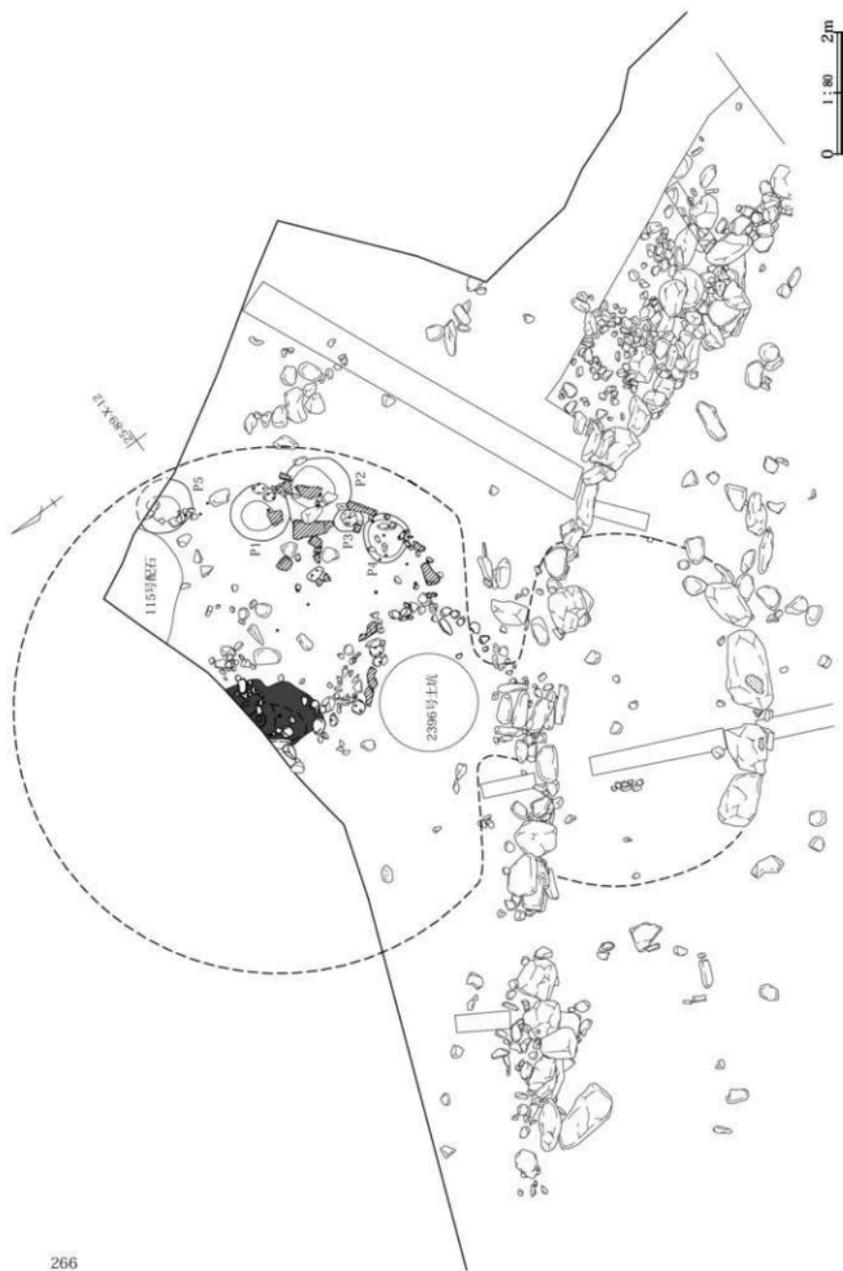
**形状** 南北3m前後の方形ないし長方形を呈する。

**炉** 確認されていない。

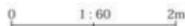
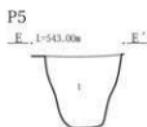
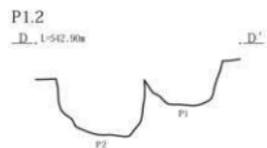
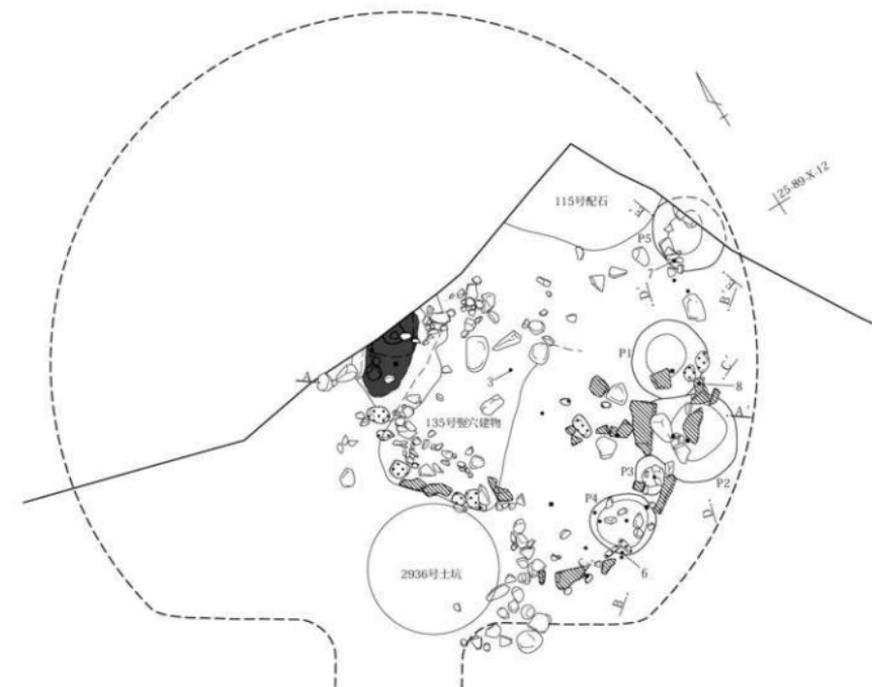
**柱穴** 確認されていない。

**遺物** 覆土中から後期加曽利B2式期の土器が少量出土している(1～14)。

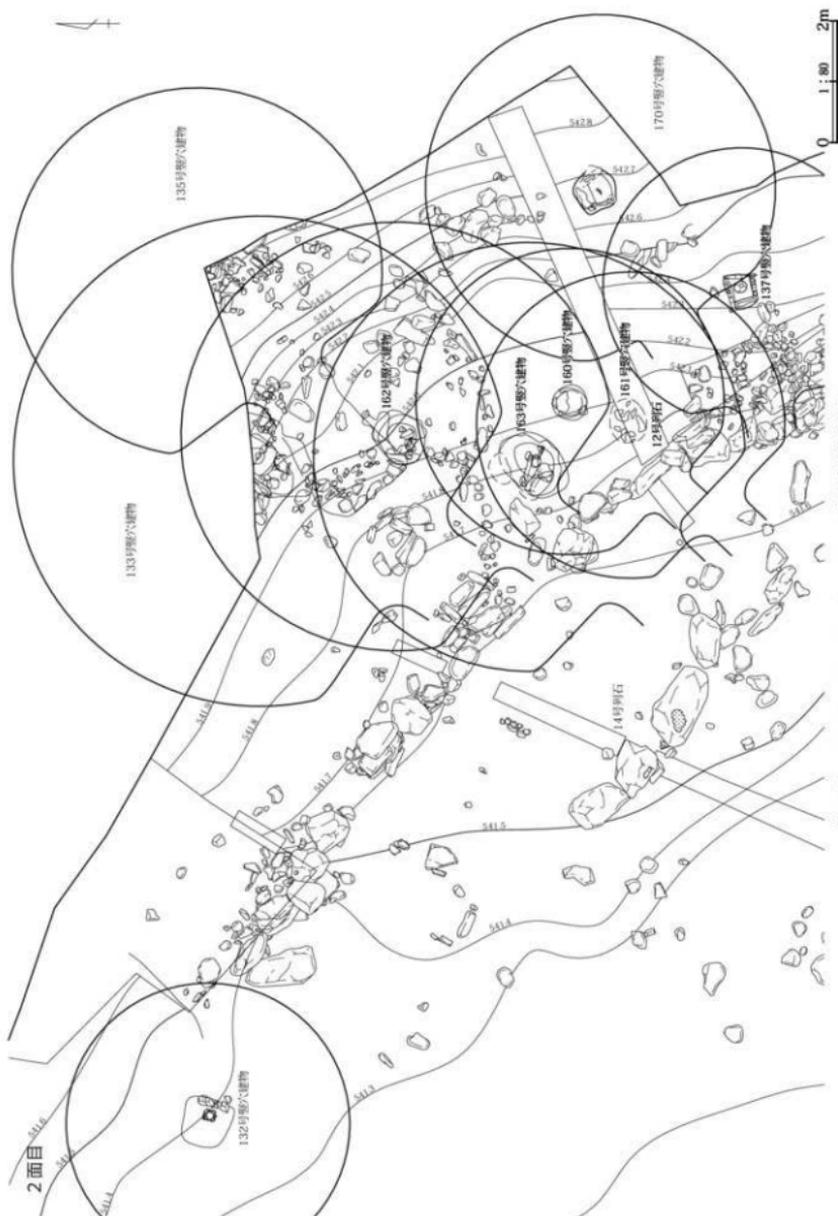
**時期** 覆土中からの出土遺物から、後期加曽利B2式期に比定されよう。



第257図 133号竪穴建物(1)



第258図 133号竪穴建物(2)



第259図 132・133・135・137・160・163・163・170号窟穴建物全体図

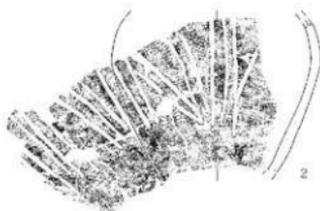
炉（7区100号焼土）1面目



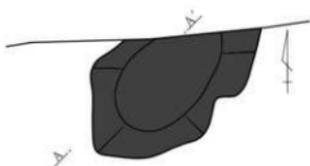
炉（7区100号焼土）2面目



炉（7区100号焼土）3面目

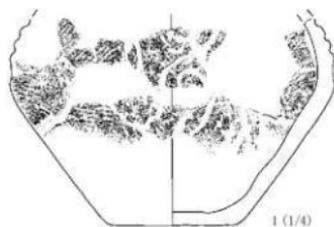


炉（7区100号焼土）掘り方

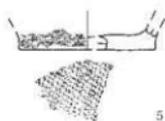
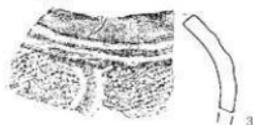


第260図 133号竪穴建物(3)

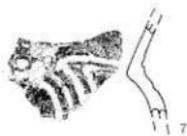
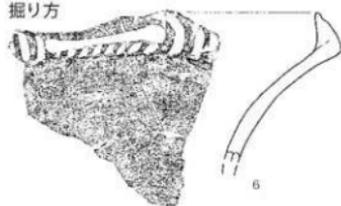
炉



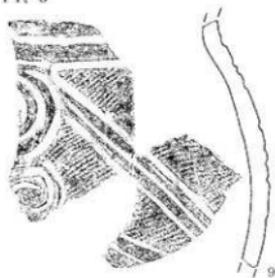
床面



掘り方



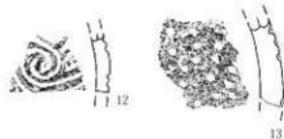
P1、5



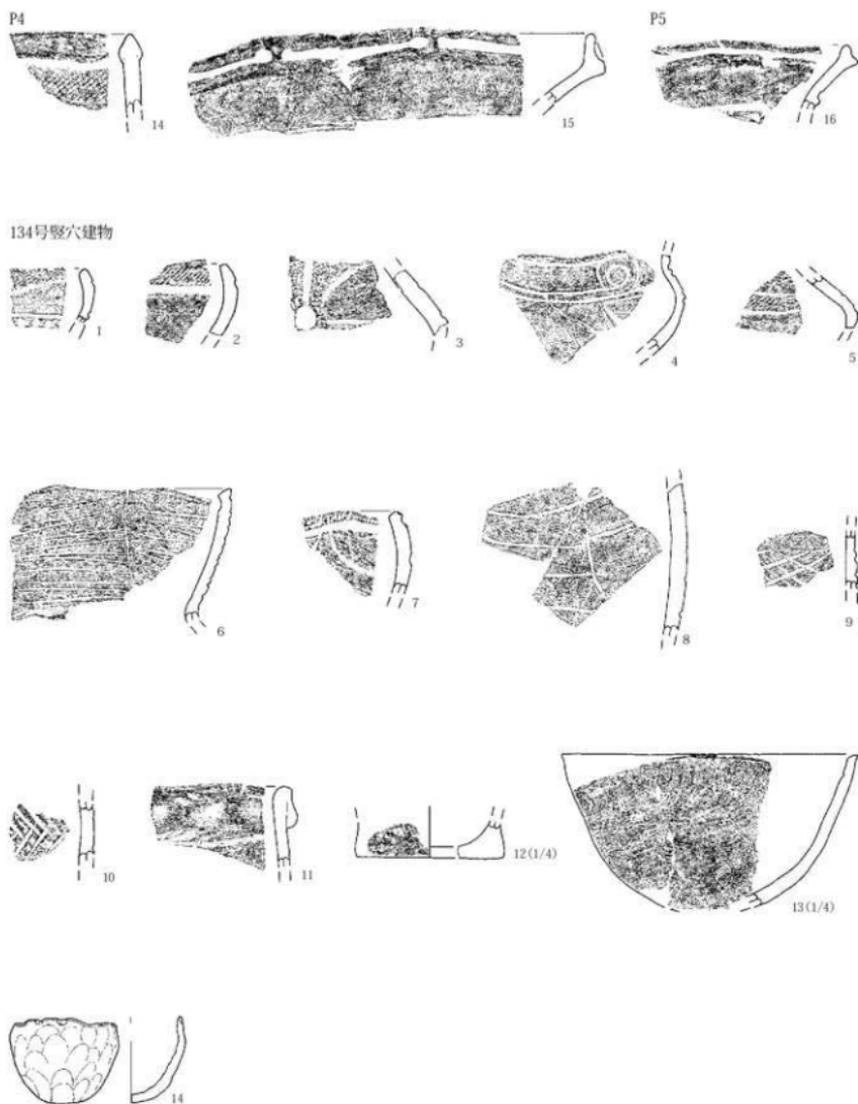
P2



P3

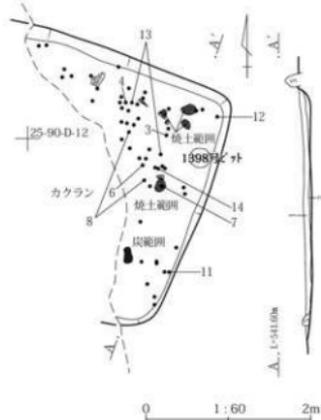


第261図 133号竪穴建物(4)

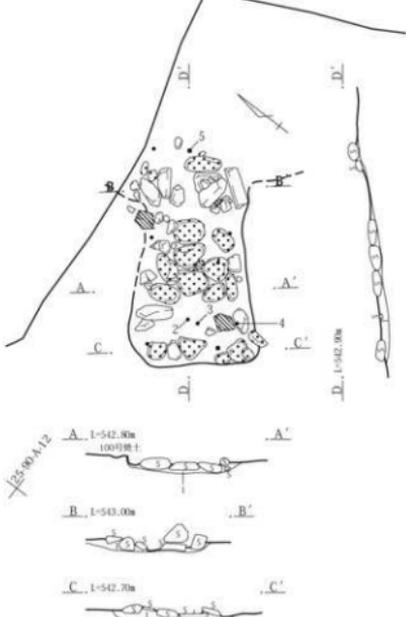


第262図 133・134号壑穴建物

平面図 (134号竪穴建物)



平面図 (135号竪穴建物)



135号竪穴建物(第263、266図, PL.88)

調査年度 平成31年度

位置 89区XY-11・12

**経過** 133号竪穴建物に重複する93号配石を取り除くと、東西に細長い敷石面が現れた。この敷石面は133号竪穴建物の床面より下位にあり、同建物の柱を切っていた。この敷石面は形態の特徴から柄鏡形竪穴建物の柄部だと判断した。

**重複** 133号竪穴建物を切り、93号配石に切られる。162号・163号竪穴建物と一部を重複するとみられるが、切り合い関係は不明である。

**形状** 敷石面を柄部とする柄鏡形を呈するものと想定する。柄部の敷石は扁平な川原石を主体に構築している。

**炉** 確認されていない。

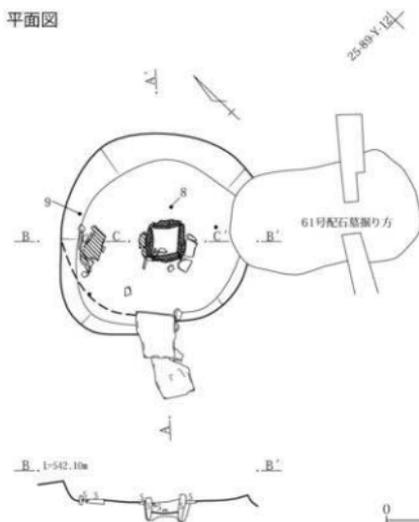
**柱穴** 確認されていない。

**遺物** 柄部敷石面から後期縄之内1式期の土器破片が少量出土している(1、2)。また、柄部敷石面の北東端部

掘り方



平面図



第264図 136号竪穴建物

から多孔石(5)が出土した。

**時期** 柄叢敷石面出土の土器から、後期堀之内1式期に比定されよう。

**136号竪穴建物**(第264、266図、PL.89)

**調査年度** 平成31年度

**位置** 89区Y-11・12、90区A-11・12

**経過** 7区北東部にある12号列石の調査が終了し、礫を除去したところ、地山面に敷いた状態の鉄平石があり、これを追ってみたところ、一段上にもう1枚の鉄平石が見つかり、その奥で石囲炉が確認された。

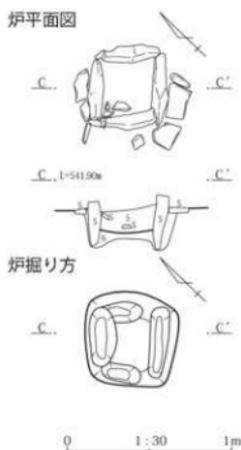
**重複** 南東側上面を133号竪穴建物および61号配石墓と重複し、これらに切られる。

**形状** 南西側に入り口部をもつ柄鏡形の竪穴建物で、主体部の直径は2.6m前後と小さい。入り口部には階段状に段差をつけて2枚の鉄平石が敷いてあり、本体側の1段目は床面より20cm高い位置にあり、2段目は床面と同じ高さに設置されている。

なお、炉の周囲と周縁部に数枚の鉄平石が敷いてあり、本来は敷石が施されていた可能性が高い。

**炉** 鉄平石4石を方形に組んだ石囲炉で、炉内に焼土はほとんど残っていなかったが、炉石には明瞭な被熱痕跡

炉平面図



炉掘り方



A... 1.945.30m

0 1:60 2m

が認められた。  
**柱穴** 確認されていない。

**遺物** 覆土中や床面付近から後期称名寺1式期の土器が出土した。

**時期** 出土土器から、後期称名寺1式期に比定されよう。

**137号竪穴建物**(第265、266図、PL.89)

**調査年度** 平成31年度

**位置** 89区X-9・10

**経過** 7区北東部にある12号列石の調査が終了して礫を除去し、段上を掘り下げた段階で、133号竪穴建物の南東で石囲炉が検出され、調査となった。

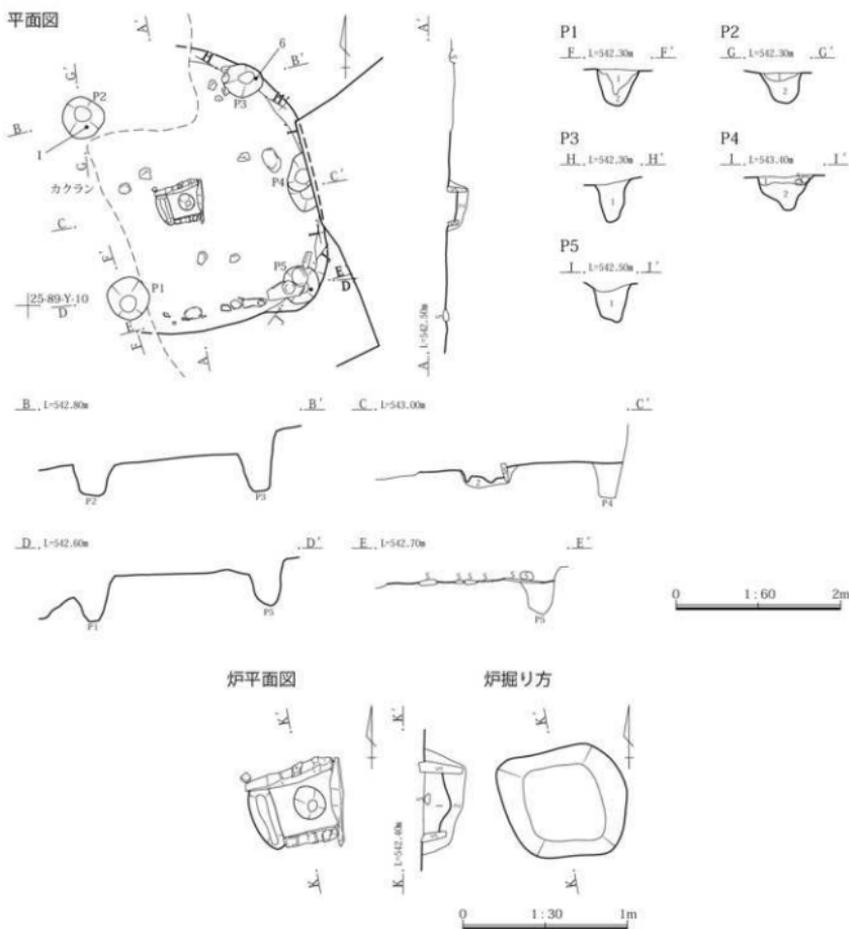
**重複** 12号列石と重複し、これに切られる。

**形状** 南西側に入り口部を持つ柄鏡形の竪穴建物と想定されるが、柄部は12号列石に切られており、不明である。主体部は円形状を呈すると思われるが、西側は12号列石と攪乱に切られている。なお、P1とP5を繋ぐように小さな鉄平石等を並べており、本来は敷石が施されていた可能性もある。

**炉** 鉄平石を方形に組んだ石囲炉で、西側の炉石を失っている。炉内には中央よりやや東側に丸いくぼみがあり、土器を埋設していた可能性が高い。炉内には焼土はほと

第2章 発掘された遺構と遺物

平面図



第265図 137号竪穴建物

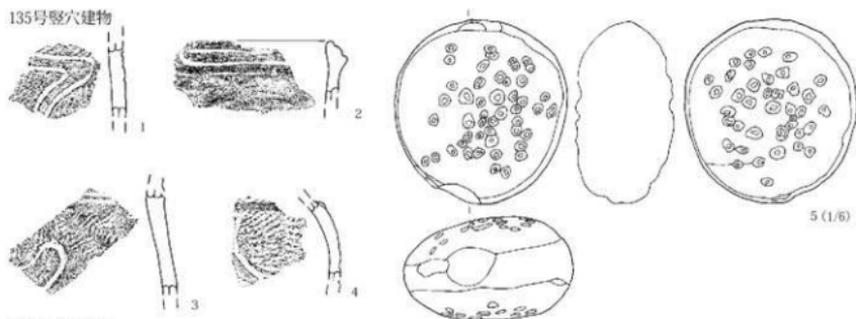
んど残っていなかったが、炉石には明瞭な被熱痕跡が認められた。

**柱穴** 5本確認されており、これらが主柱になるであろう。

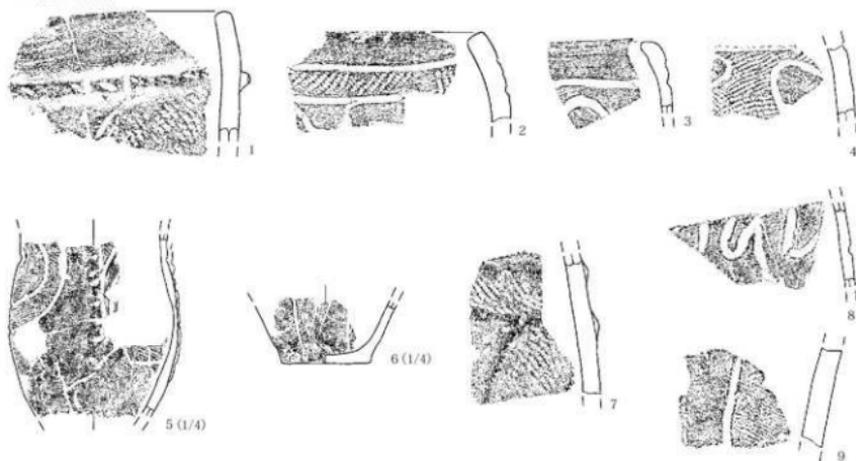
**遺物** 覆土中および床面から後期称名寺1式期の土器(1~3)が少量出土している。

**時期** 出土土器から、後期称名寺1式期に比定されよう。

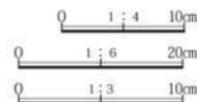
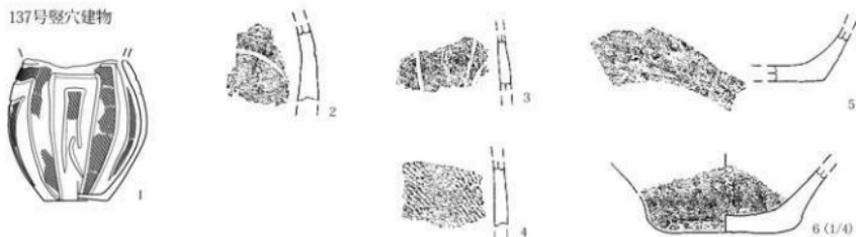
135号竪穴建物



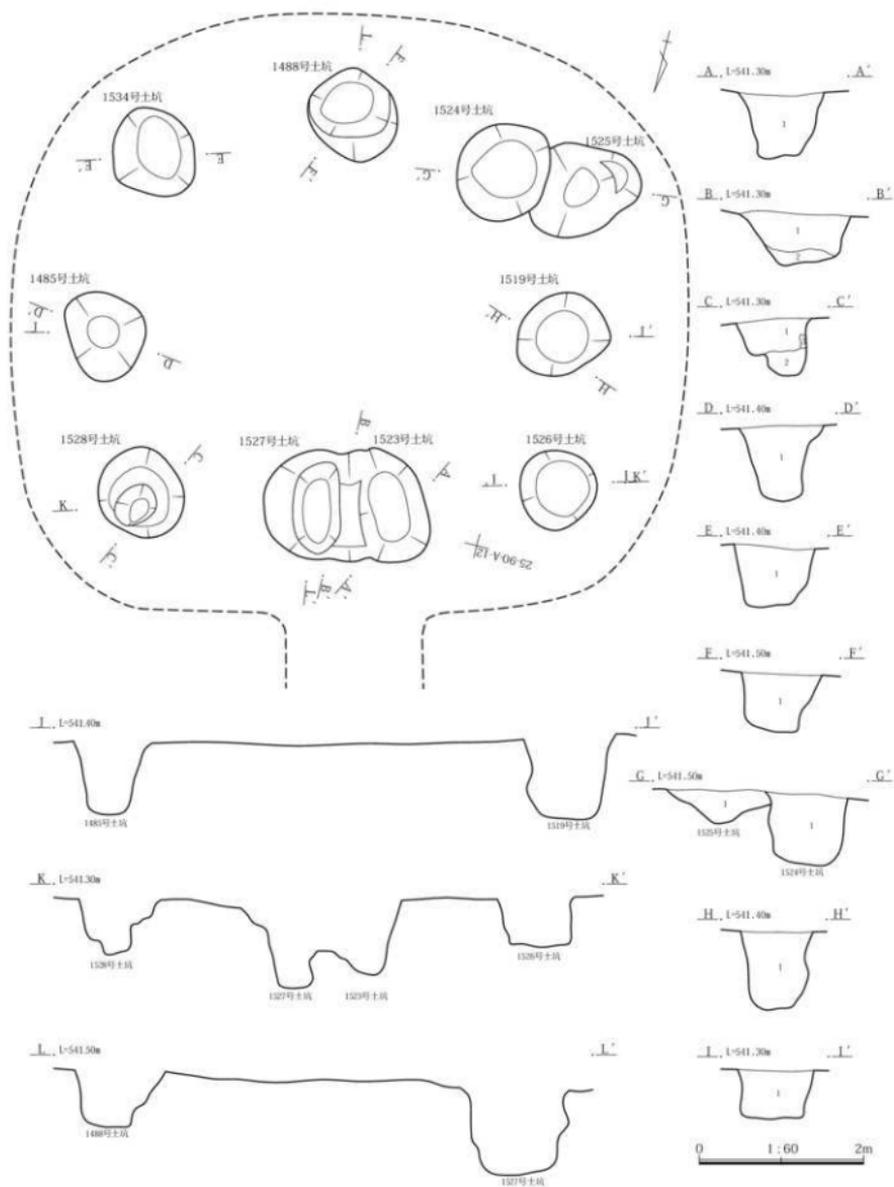
136号竪穴建物



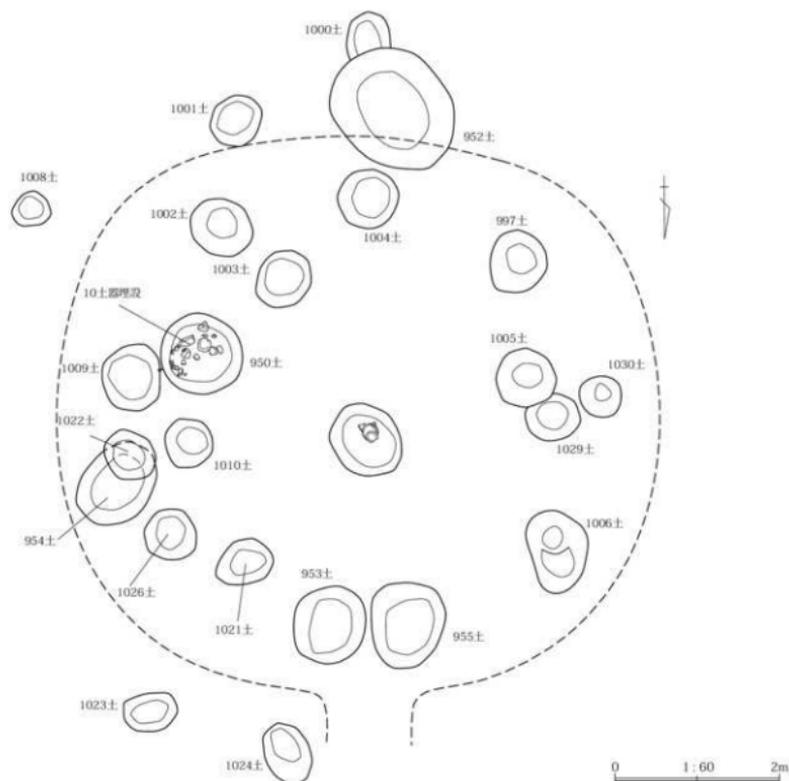
137号竪穴建物



第266図 135～137号竪穴建物



第267図 138号竪穴建物



第268図 139号竪穴建物

138号竪穴建物(第267図、PL.89～90)

調査年度 平成29年度

位置 8区(89区X・Y-10・11・12、90区A-10・11・12)

経過 8区台地で確認した。東側の6区谷から上がった台地上にあり、北側の吾妻川へ下る斜面の手前に位置する。8区で確認された竪穴建物の多くは6区との境を流下する沢沿いで見つかっており、台地上は削平が進んでいることから、縄文時代の遺構は少ない。この遺構も大型の土坑が円形状に並ぶことから、調査時には1号円形柱穴列とされたが、柱穴の配置等を検討した結果、竪穴建物と判断した。各柱穴の名称は、混乱を避けるため調査時の土坑名称を使用する。

形状 9本の大きな柱穴が東西6.5m、南北6mの方形

状に並び、傾斜する北側中央に対ビットにあたる1523号・1527号土坑が位置する。対ビットの中央を通る中軸線上の対向する位置に1488号土坑がある点も、柄鏡形敷石タイプ建物の特徴の一つである。確認された土坑の深さはいずれも確認面から50cm以上あり、建物の規格としても申し分ない。以上のことから、本建物は東西8m、南北7m前後の大型の柄鏡形竪穴建物であったと考えてよいだろう。

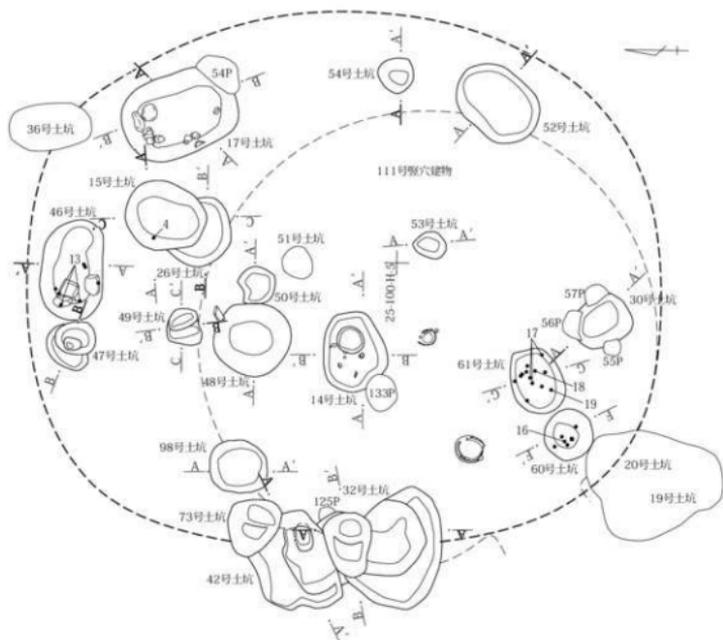
床面 確認できていない。

炉 確認できない。

柱穴 確認された9本が主柱穴に該当する。

遺物 1519号・1524号・1526号・1527号土坑から後期前半の堀之内1式土器が出土している。

平面図



15・26号土坑



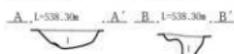
17号土坑



30号土坑



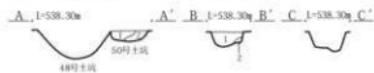
46号土坑



47号土坑



48・50号土坑



49号土坑



52号土坑



53号土坑



54号土坑



60号土坑



61号土坑

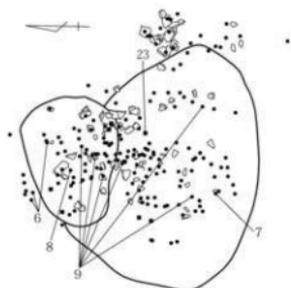


98号土坑

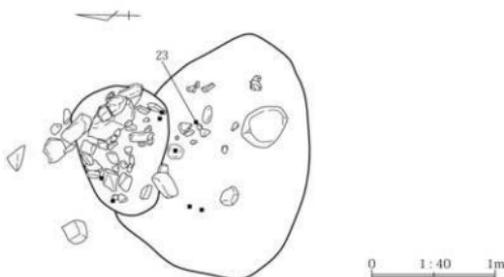


第269図 140号整穴建物(1)

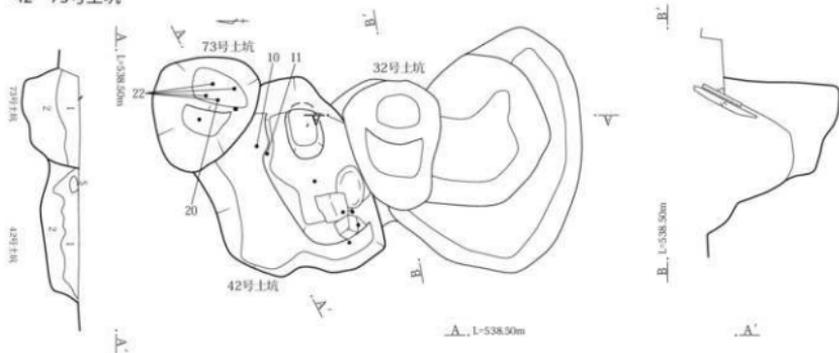
32号土坑遺物出土状況図



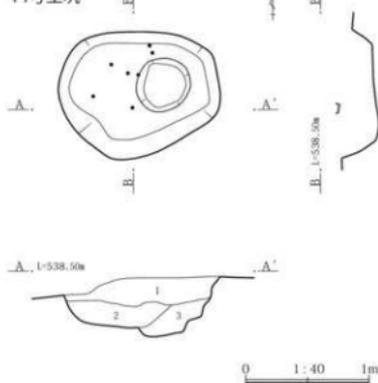
32号土坑礫出土状況図



42・73号土坑



14号土坑



時期 後期前半堀之内1式期に比定されよう。

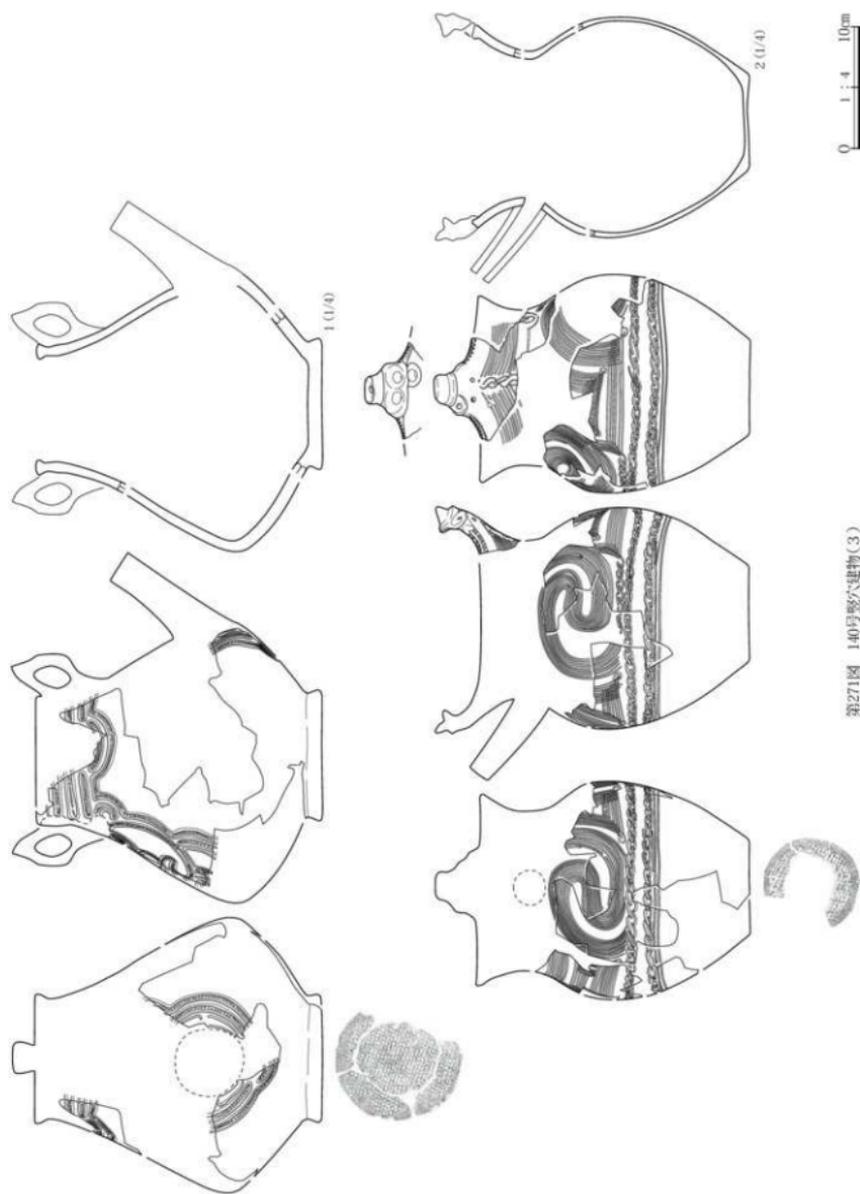
139号竪穴建物(第268図、PL.90)

調査年度 平成28年度

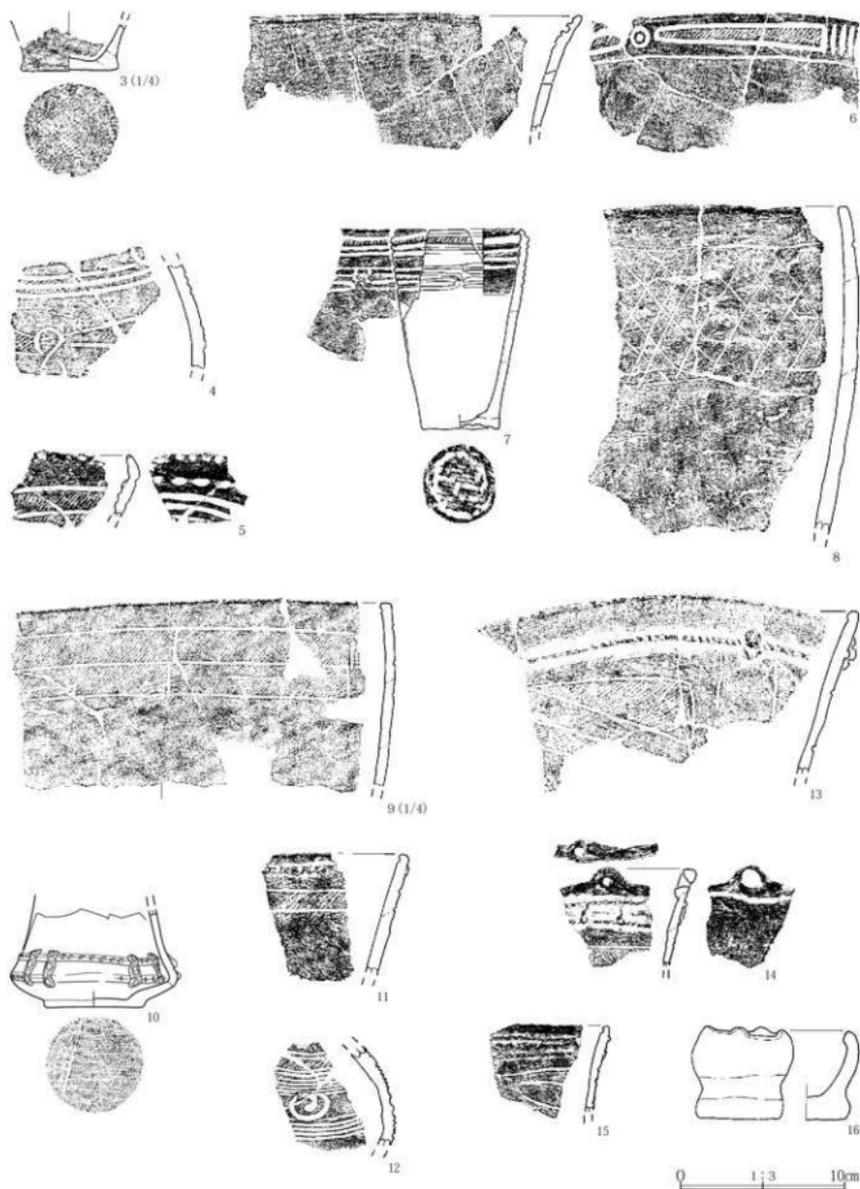
位置 7区(80区U・V-18・19)

経過 7区の南西隅の沢沿いに土坑や埋設土器などが集中する一角があり、枊が確認できないことから調査時には土坑群として扱ったが、傾斜する方向に対ピットがあり、その中軸線に沿って対向する位置にほぼ規定通りに9基の土坑(953号・955号・997号・1002号・1004号・1006号・1009号・1026号・1030号)が並ぶことから、竪

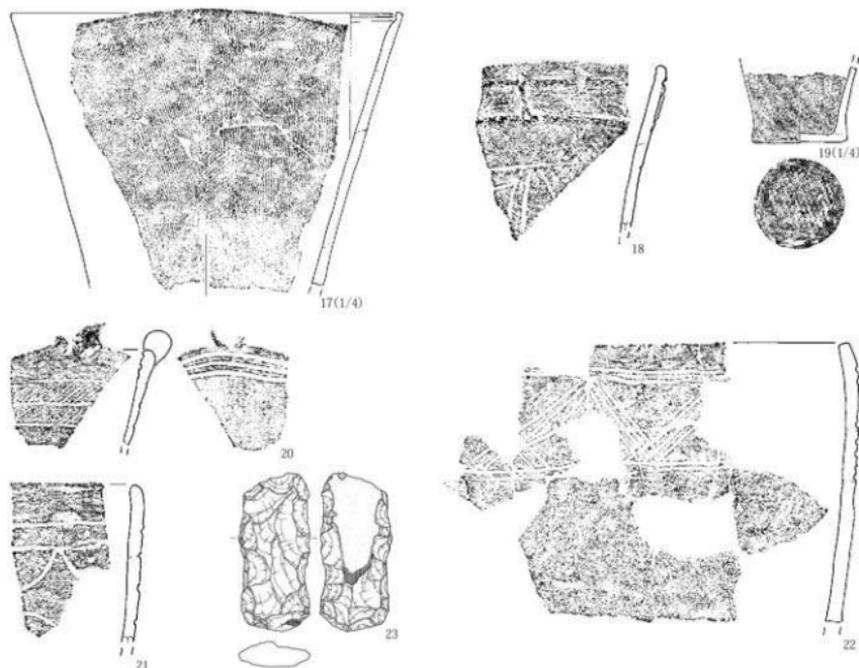
第270図 140号竪穴建物(2)



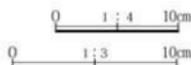
第271図 140号整穴建物(3)



第272図 140号竪穴建物(4)



- |            |         |       |         |
|------------|---------|-------|---------|
| 1、2、6～9、23 | : 32号土坑 | 13    | : 46号土坑 |
| 3          | : 14号土坑 | 14～16 | : 60号土坑 |
| 4          | : 15号土坑 | 17～19 | : 61号土坑 |
| 5          | : 30号土坑 | 20～22 | : 73号土坑 |
| 10～12      | : 42号土坑 |       |         |



第273図 140号竪穴建物(5)

穴建物と判断した。

**形状** 柱穴に相当する土坑は全部で9本あり、対ピットに対向する中軸線上の位置に1004号土坑がある点も規格通りである。各柱穴の外側をめぐるラインを想定すると、東西7.3m、南北6.8m前後の円形状を呈し、傾斜する北側に対ピットを伴う柄部が付くプランが想定される。

**炉** 対ピットを通る中軸線は中央にある946号土坑の中央を通っており、この土坑が炉に該当するとみてよいだろう。また、炉の位置が中央より出入り口側にやや寄っている点も、柄鏡形タイプの建物に共通する特徴の一つ

である。

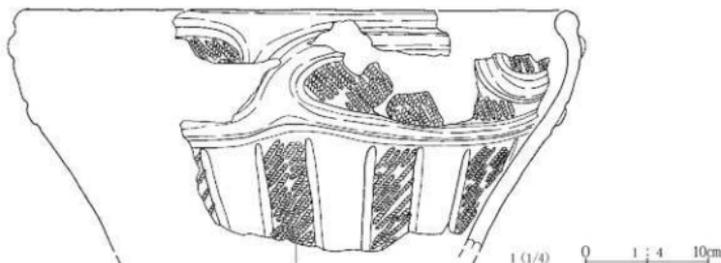
946号土坑は長軸95cm、短軸80cmほどの楕円形を呈し、確認面からの深さは35cmである。炉の掘り方としては申し分ない。

**柱穴** 先述の9基の土坑が該当する。確認面からの深さは30～50cm前後でやや浅いものもあるが、これは遺構確認面が低かったためである。

**遺物** 1026号土坑および炉に該当する946号土坑から後期前半の堀之内1式土器が出土している。

**時期** 後期前半堀之内1式期に比定されよう。

142号竪穴建物



第274図 142号竪穴建物

**140号竪穴建物**(第269～273図、PL.91～93)**調査年度** 平成20年度**位置** 6区(100区G・H-4～6、I-4・5)

**経過** 6区台地上では堀之内2式を中心とする土坑が数多く確認されているが、それに比べて竪穴建物が少ない。そうしたなかで大小2組の対ピットが重複した状況を想定させる土坑(32号・42号・73号)があり、その中軸線を基準に建物を想定すると、7基の土坑(17号・30号・46号・47号・52号・54号・60号)が想定ライン上に並んだ。また、中軸線上にある14号土坑はこの建物の炉の位置にあり、以上の11基の土坑をもとに竪穴建物を認定した。

**重複** ここで想定した建物の範囲には、調査時に認定された111号竪穴建物があるが、それは埋設土器を炉とするもので、両者の関係は今後の委ねたい。

**形状** 対ピットを含めた10基の土坑を柱穴と見立ててプランを想定すると、図のように南北10.8m、東西8.6mの楕円形を呈する大型の建物となり、傾斜する西側の沢に向かって出入り口(対ピット)があったことになる。

**炉** 想定する建物の中軸線上にある14号土坑を炉と想定した。大きさは長軸95cm、短軸75cm、深さは確認面から25cmほどである。この土坑は東西に細長い楕円形状を呈し、東側の底面に丸い凹みが残っている。この凹みは炉内に埋設された土器の痕跡であり、おそらく土器埋設方形石囲炉であったことを示している。14号土坑はその掘り方にあたるわけだが、土坑内に焼土等の痕跡は残念ながら残っていなかった。

**柱穴** 32号・42号・73号が出入り口部を構成する対ピット、17号・30号・46号・47号・52号・54号・60号土坑が外縁をめぐる柱穴にあたる。

対ピットは2対が重複しているものと考えており、42号と32号が一对、73号と対になるものは32号の北側にある未明名の土坑が該当する。この対ピットを構成する土坑群からは、大量の土器と敷石に使用されたとみられる石が数多く出土しており、本建物の内容の一端を示している。

また、外縁をめぐる土坑群では、17号・46号・52号土坑の3基が楕円形を呈しており、本建物の特徴の一つと考えられる。

**遺物** 1・2・6・7・8・9・23が32号土坑、3が14号土坑、4が15号土坑、5が30号土坑、13が46号土坑、10～12が42号土坑、14～16が60号土坑、17～19が61号土坑、20～22が73号土坑からの出土である。

**時期** 後期中葉堀之内2式新段階から加曽利B1式古段階に比定されよう。

**141号竪穴建物**(第275図、PL.94)**調査年度** 平成20年度**位置** 5区(99区U・V-12・13)

**経過** 5区北西側の台地縁で確認した。この一帯は後世に様々な形で使用されたこともあって、縄文時代の遺構面にまで削平が及んでおり、確認された遺構は限られている。そのため、炉内に埋設された埋裏だけかろうじて残されたものもある。これもその一つで、調査時に6号埋裏としたものであるが、竪穴建物の炉に伴うものと判断した。

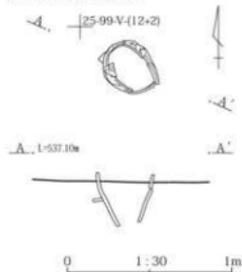
**形状** 炉と判断した6号埋設土器を中心に直径5.4mの円形状の建物を想定した。

**炉** 炉内に埋設されたと想定する土器は中期加曽利E3

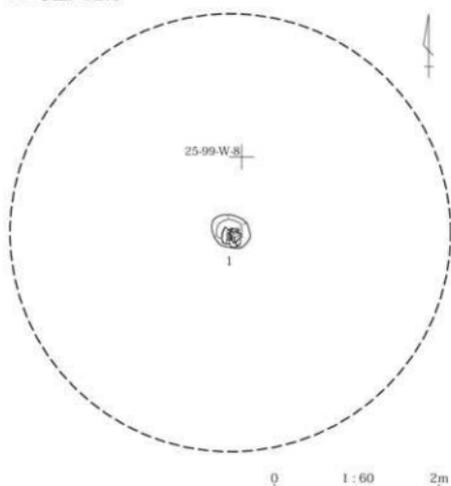
141号竪穴建物



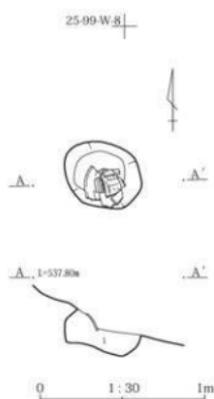
炉 (5区6号埋設土器)



142号竪穴建物



炉 (5区11号埋設土器)



第275図 141・142号竪穴建物

式期の深鉢で、上半部と底部を打ち欠いた状態で正位に埋設していた。なお、掘り方から焼土等の痕跡は確認されていない。

**時期** 中期後半加曾利 E 3 式期に比定される。

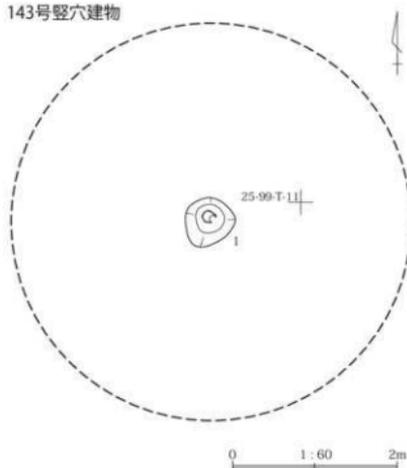
**142号竪穴建物**(第274、275図, PL.94)

**調査年度** 平成29年度

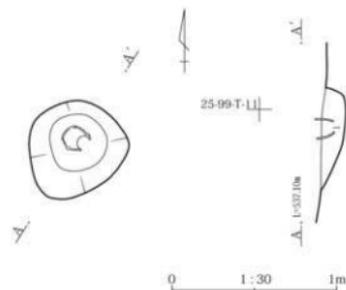
**位置** 5区(99区V・W-7・8)

**経過** この建物も141号と同様の経過で5区で確認されたもので、調査時に11号埋裏とした。やや大きな深鉢だが、

143号竪穴建物



炉 (5区12号土器埋設遺構)



143号竪穴建物



第276図 143号竪穴建物

竪穴建物の炉に埋設したものと判断した。

**形状** 炉とした11号埋裏を中心に直径5.4m前後の円形状の建物を想定した。

**炉** 炉内に埋設されたと想定する土器は中期加曾利E3式の大型深鉢で、胴部下半を打ち欠いたものを正位に埋設しているが、約半周分ほどしか残っていない。なお、この掘り方にも焼土等の痕跡は認められなかった。

**時期** 中期後半加曾利E3式期に比定される。

143号竪穴建物(第276図、PL94)

**調査年度** 平成29年度

**位置** 5区(99区S・T-10・11)

**経過** この建物も141号と同様の経過のもので、5区41号竪穴建物の北西5mに近接する。中期後半加曾利E3式の小型深鉢を埋設したもので、調査時には12号埋裏としたが、竪穴建物の炉に埋設したものと判断した。

**形状** 炉とした12号土器埋設を中心に直径5m前後の円形状の建物を想定した。

**炉** 胴部下半を打ち欠いた中期加曾利E3式の小型深鉢

を正位に埋設したもので、1.2×1.1mほどの隅丸方形の掘り方内のほぼ中央に配置されていた。掘り方内に焼土等の痕跡は確認されていないが、埋裏は口縁に被熱痕跡が認められた。

**時期** 中期後半加曾利E3式期に比定される。

144号竪穴建物(第277図、PL94)

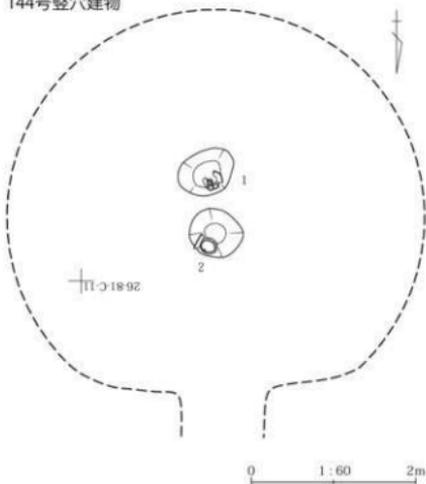
**調査年度** 平成29年度

**位置** 8区(26地区81区B・C-10・11)

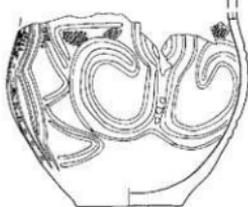
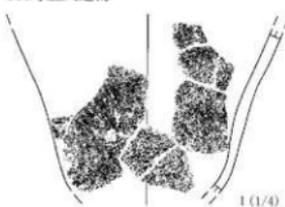
**経過** 8区中央の台地上、138号竪穴建物の西側10mで確認した。調査時に17号・18号埋設土器としたが、両土器は80cmほどに近接して南北に並んでおり、いずれも周囲に明瞭な焼土を伴うことから、竪穴建物の炉であったと判断した。おそらく建物の建て替え等に伴って炉も造り替えたのであろう。なお、周囲に柱穴等の施設は確認されていないが、この時期の建物であれば柄鏡形敷石の建物であったと考えられる。

**形状** 傾斜する北側に出入り口が付く柄鏡形敷石タイプの建物を想定した。

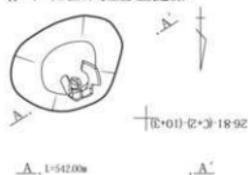
144号竪穴建物



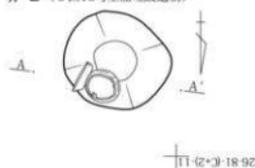
144号竪穴建物



炉1 (8区17号土器埋設遺構)



炉2 (8区18号土器埋設遺構)



第277図 144号竪穴建物

**炉** 17号埋設土器は口縁部と底部を打ち欠いた深鉢を正位に埋設したもので、南西側に一部を失っており、土器の周囲を取り巻くように焼土が多量に残っていた。そのためか、土器は強い被熱で変色・摩耗が著しく、接合・復元作業は難儀であった。また、埋裏は長軸70cm、短軸55cm、確認面からの深さ14cmほどの楕円形状の掘り方の北西に寄った位置に埋設されていた。

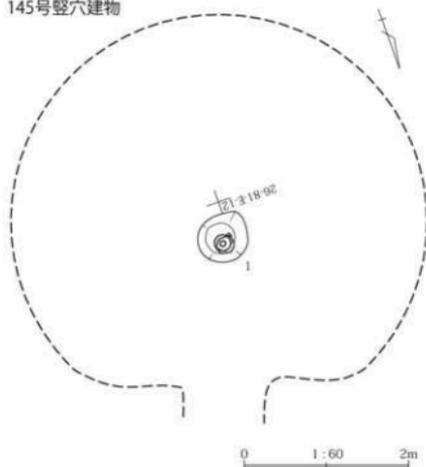
18号埋設土器は胴上半部を打ち欠いた深鉢を正位に埋設しており、上半部を中心に変色は認められるものの、その後の欠損等は認められない。埋裏は長軸64cm短軸58

cm、深さ18cmほどの隅丸方形の掘り方内の北側に寄って位置に埋設されており、土器の東側に接して長さ20cmの鉄平石が添えてあった。また、掘り方の周縁を取り巻くように多量の焼土が認められた。

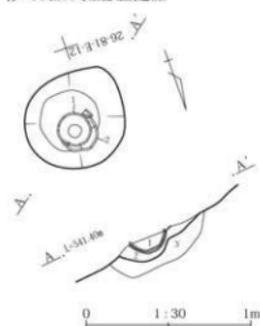
両埋裏は南北に60cmの距離で並んでおり、掘り方は15cmの距離でほぼ接するような位置にある。おそらくは炉の作り替えが行われたものと想定するが、その場合は17号から18号へ変更されたと想定したい。

**時期** 後期前半堀之内1式期に比定される。

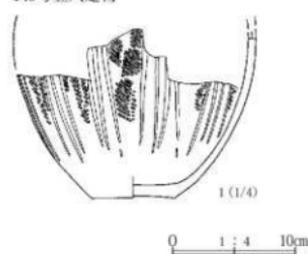
145号竪穴建物



炉 (8区19号土器埋設遺構)



145号竪穴建物



第278図 145号竪穴建物

145号竪穴建物(第278図、PL.95)

調査年度 平成29年度

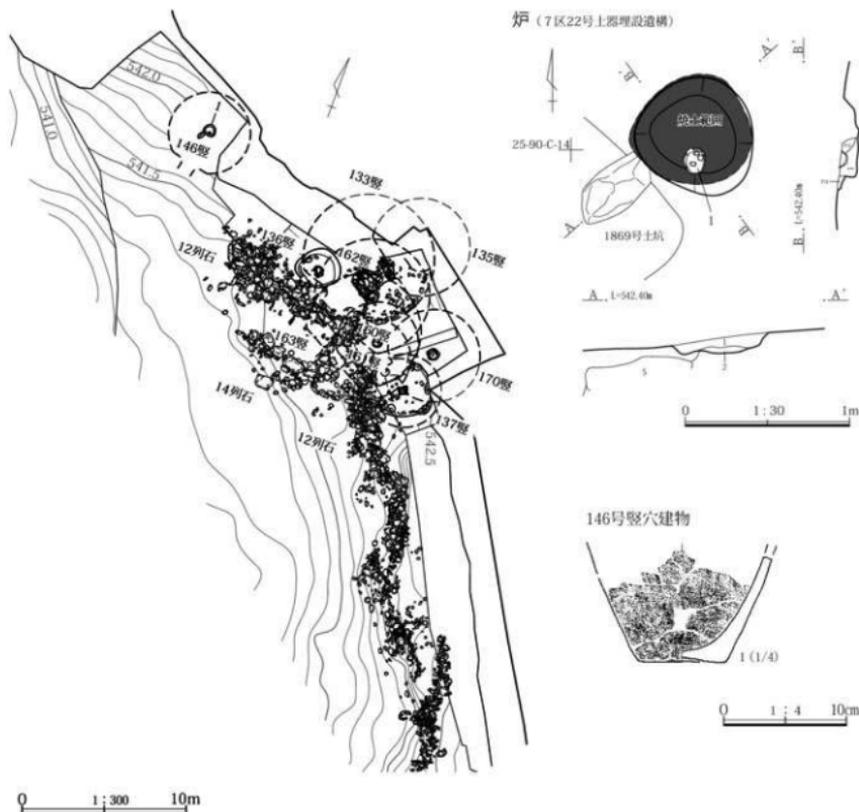
位置 8区(26地区81区D・E-11・12)

経過 8区中央の台地上、145号竪穴建物の北西5mほどのところで確認した。調査時に19号埋設土器としたが、大きな掘り方を伴う点や埋設状況などから、竪穴建物の炉と判断した。

形状 傾斜する北側に入出口をもつ柄鏡形敷石タイプの建物を想定した。

炉 埋設は胴上半部を打ち欠いた深鉢を正位に埋設したもので、土器の上位部分半周分を添えて入れ子状に組み合わせさせた状態で検出された。掘り方は一辺60cmほどの隅丸形状を呈し、深さは確認面から20cmである。埋設はその中央よりやや北側に寄せて埋設してあった。掘り方の埋土中に明瞭な焼土はほとんど認められなかったが、埋設には被熱痕跡が認められた。

時期 後期前半堀之内1式期に比定されよう。



第279図 146号竪穴建物

146号竪穴建物(第279図、PL.95)

調査年度 平成29年度

位置 7区(90区B-14)

経過 7区132号竪穴建物の北側5mで確認した。調査時は22号埋設土器としたが、大きな焼土範囲内に埋設されており、竪穴建物の竪と判断した。

形状 傾斜する南西方向に出入り口が付く柄杓形敷石タイプの建物を想定した。

炉 22号埋設土器は小型深鉢の胴下半部を正位に埋設したもので、直径80cmほどの円形状の掘り方内の南側に寄せて設置している。掘り方は周縁部を多量の焼土が取り

巻いており、埋裏にも明瞭な被熱痕跡が認められた。

時期 後期前半堀之内式期に比定されよう。

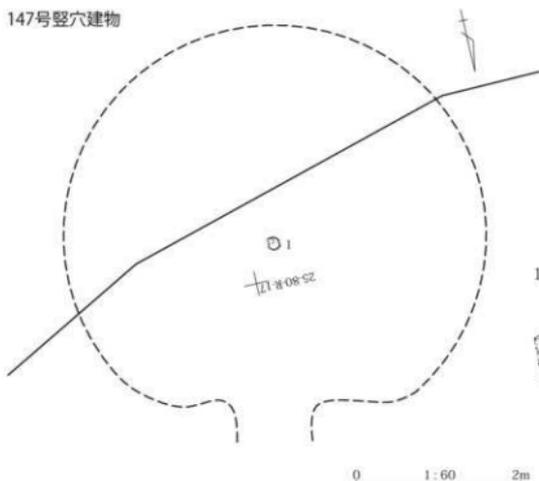
147号竪穴建物(第280図、PL.95)

調査年度 平成29年度

位置 7区(80区Q・R-16・17)

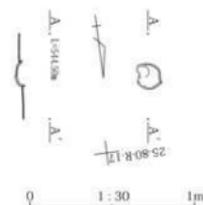
経過 7区南西隅の沢沿いに土坑が集中する一画で確認した。やや大きな深鉢の胴下半部を正位に埋設した状態で検出し、調査時に24号埋設土器としたが、土器の確認状況や周辺の状況を検討した結果、竪穴建物の竪と判断した。この地区は上層部を削平されており、その他の施

## 147号竪穴建物



第280図 147号竪穴建物

## 炉 (7区24号土器埋設遺構)



## 147号竪穴建物



設等は確認されていない。

**形状** 傾斜する北側に出入口が付く柄鏡形敷石タイプの建物を想定した。

**炉** 24号埋設土器は深鉢の胴下半部を正位に埋設したもので、埋裏自体の上半部を失っている可能性がある(PL.95-6)。そのため、明瞭な掘り方も認められなかった。

**時期** 後期前半期之内1式期に比定されよう。

## 148号竪穴建物(第281図、PL.95)

**調査年度** 平成29年度

**位置** 7区(80区R・S-18・19)

**経過** 7区147号竪穴建物の北側8mほどのところで確認した。この場所は土抗等が集中する一角ではあるが、地山の暗褐色土中に多量の礫を含んだ荒地のような場所で、遺物の出土も少なかった。そんななかで、深鉢の上半部を正位に埋設した状態で出土したことから、調査時に25号埋設土器として取り上げられた。整理段階で確認状況や周辺の状況を検討した結果、竪穴建物の炉と判断した。

**形状** 炉と判断した25号埋設土器を中心に直径5.2mの円形の建物を想定した。

**炉** 小型深鉢の胴上半部を逆位に埋設したもので、一部

を失っている(1)。調査時に掘り方や明瞭な焼土等は確認できていないが、埋裏には一部に被熱痕跡が認められた。

**時期** 中期後半加曾利E3式期に比定されよう。

## 149号竪穴建物(第281図、PL.96)

**調査年度** 平成29年度

**位置** 8区(90区R・S-24・25)

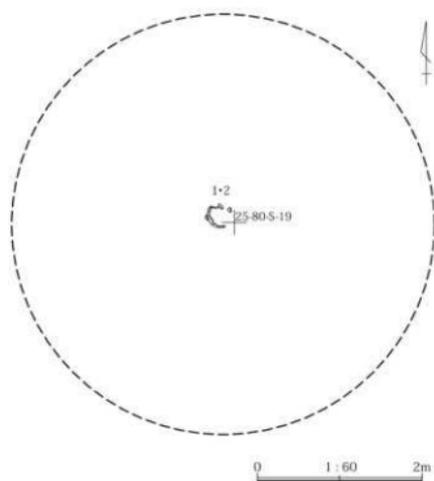
**経過** 8区沢沿いにある77号竪穴建物の北側で確認した。深鉢の胴下半部を正位に埋設していることから、調査時に27号埋設土器としたが、整理段階で埋設の状況等を確認・検討して、竪穴建物の炉に埋設したものと判断した。

**形状** 傾斜する北側に出入口をもつ柄鏡形敷石タイプの建物を想定した。

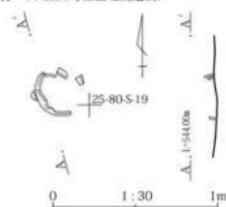
**炉** 深鉢の胴下半部を正位に埋設したもので、土器の約半分を失っているが、しっかりと埋設された状態を留めている。残っていたのは無文部分で、外面を入念に研磨しており、底部も一部は付いている。調査時に掘り方や明瞭な焼土等の痕跡は確認されていないが埋裏には一部に被熱痕跡が認められた。上方を削平されているものと思われることから、単独の埋設土器の可能性もある。

**時期** 後期前半期に比定されよう。

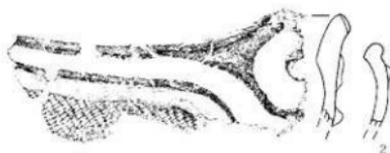
148号竪穴建物



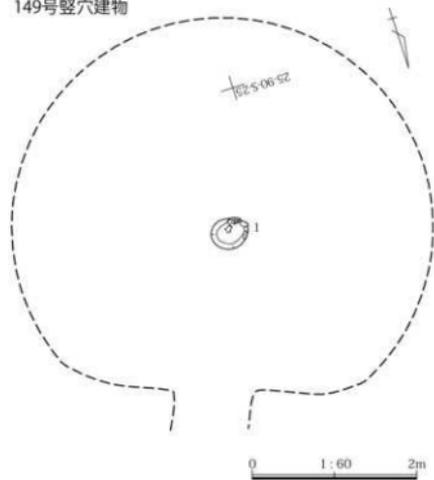
炉 (7区25号土器埋設遺構)



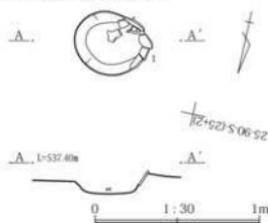
148号竪穴建物



149号竪穴建物



炉 (8区27号土器埋設遺構)

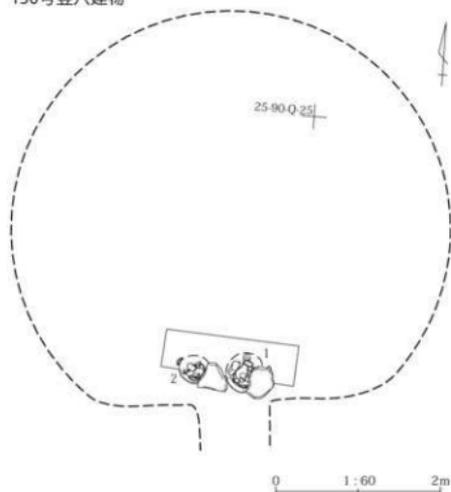


149号竪穴建物

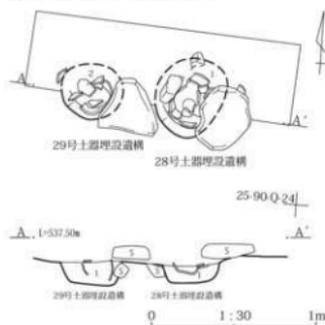


第281図 148・149号竪穴建物

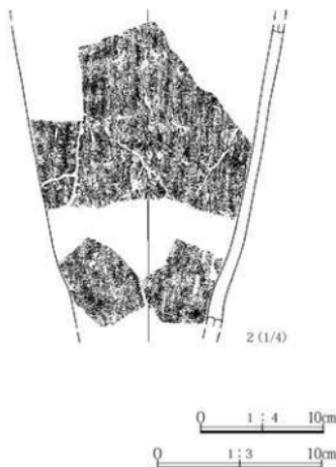
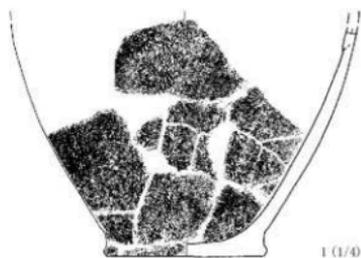
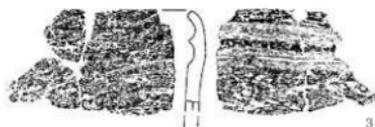
150号竪穴建物



埋篋 (8区28・29号土器埋設遺構)



150号竪穴建物



第282図 150号竪穴建物

150号竪穴建物(第282図、PL96)

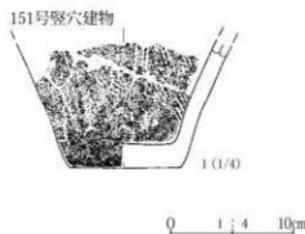
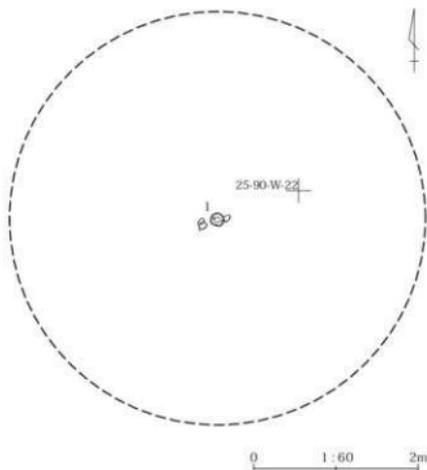
調査年度 平成29年度

位置 8区(90区P・Q-24・25)

経過 6区沢沿いの77号竪穴建物のすぐ東側上面で確認

した。77号竪穴建物の上面に楕円形状の156号土坑があり、その東側で大きな厚手の扁平礫2石と土器埋設遺構2個が確認された。埋篋は東西に30cmの至近距離で並んでおり、その埋篋に一部接するように扁平礫2石があっ

## 151号竪穴建物



第283図 151号竪穴建物

た。調査時には28号・29号埋設土器としたが、整理段階で確認時の状況等を検討した結果、柄鏡形敷石タイプの建物の出入口に伴う埋設土器とするのが妥当であろうと判断した。

**形状** 南側出入口をもつ柄鏡形敷石タイプの建物を想定した。その場合、西側に隣接する77号竪穴建物と大きく重複することになる。両建物の明確な切り合い関係を示す証拠は得られていないが、77号は東側を弧状に失っていることから、本建物が77号を切っている可能性が高いと判断したい。

**炉** 確認されていない。

**埋裏** 埋裏は共に深鉢胴下半部を正位に埋設したもので、いずれも残っていた部分は無文である。大きな厚手の扁平礫は、一つは両埋裏の間であって29号に接しており、もう一つは28号の東側に接した状態で確認された(PL.96-2~4)。検出時の扁平礫2石のレベルは一致しており、周囲にはほぼ同レベルで置かれた厚手の扁平礫や破損した鉄平石等もいくつか散在していた。また、埋裏は双方とも上位部分が欠損し、いくつかの破片は横転していることから、建物廃絶時に手が入っている可能性

も否めない。

**時期** 後期前葉堀之内1式新段階~堀之内2式古段階に比定しておきたい。

**151号竪穴建物**(第283図、PL.96)

**調査年度** 平成29年度

**位置** 8区(90区V・W-21・22)

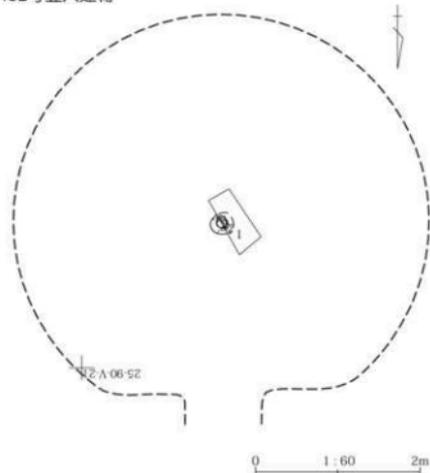
**経過** 8区台地から一段下った緩斜面で埋裏を確認した。この埋裏は加曾利E3式古段階の深鉢の胴下半部を正位に埋設したもので、調査時には30号埋設土器としたが、整理段階で確認時の状況等を検討した結果、竪穴建物の炉に伴う埋裏と判断した。

**形状** 炉と判断した30号埋設土器を中心に直径5.1mの円形状の建物を想定した。

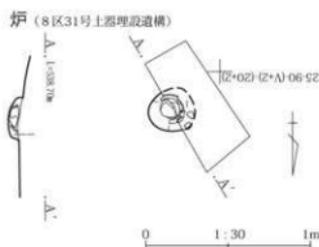
**炉** 埋裏は深鉢の底部付近を正位に埋設したもので、上面を大きく削平されている可能性もあるが、正位でしっかりと埋設されていた。また、調査時に掘り方や明瞭な焼土等は確認されていない。

**時期** 中期後半加曾利E3式古段階に比定されよう。

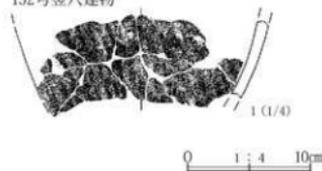
152号竪穴建物



第284図 152号竪穴建物



152号竪穴建物



**152号竪穴建物**(第284図、PL.76)

**調査年度** 平成29年度

**位置** 8区(90区V-20・21)

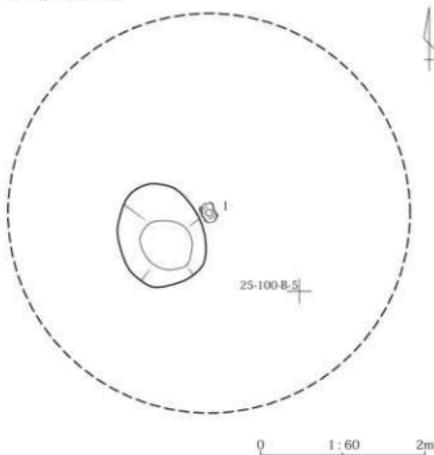
**経過** 8区30号の南側6mでもう一つの埋裏を確認した。この埋裏は後期前半期深鉢の胴部(1)を正位に埋設したもので、調査時には31号土器埋設としたが、整理段階で検出状況や使用された土器等を検討した結果、竪穴建物の残りに伴う埋裏と判断した。

**形状** 傾斜する北側に入出口をもつ、直径5.1mの円形状の柄鏡形敷石タイプの建物を想定した。

**炉** 埋裏は胴上半部と底部を打ち欠いた深鉢を正位に埋設したもので、一部を失っている(1)。使用された土器は無文のもので、内面は研磨されて光沢を帯びる。また、埋裏の底面に一辺10cmほどの扁平礫を敷いており、礫の上面が被熱変色していたが、埋裏の掘り方や焼土等の痕跡は確認されていない。

**時期** 後期前半期に比定されよう。

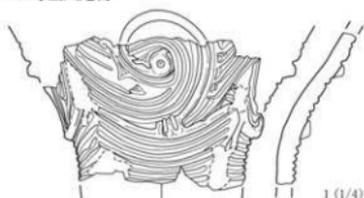
153号竪穴建物



炉 (6区32号土器埋設遺構)



153号竪穴建物



第285図 153号竪穴建物

153号竪穴建物(第285図、PL.96、98)

調査年度 平成29年度

位置 6区(100区A・B-4・5)

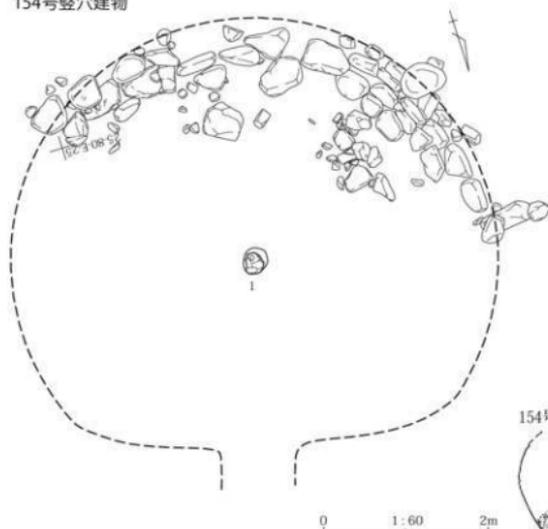
経過 6区東側台地中央付近で埋喪を確認した。この埋喪は中期焼町土器の小型深鉢の体部上半を正位に埋設したもので、調査時には32号埋設土器としたが、整理段階で検出状況や使用された土器を検討した結果、竪穴建物の如くに埋設されたものと判断した。

形状 如と判断した30号埋喪を中心に直径4.9mほどの円形状の建物を想定した。

炉 埋喪は口縁部と胴下半部を打ち欠いた小型の深鉢を正位に埋設したもので、土器は上半部の一部を失っており、上面をかなり削平されたものと思われる。この埋喪は断ち割り調査を行っていないため、掘り方は未検出である。

時期 中期中葉勝坂2式段階に比定されよう。

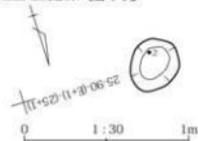
## 154号竪穴建物



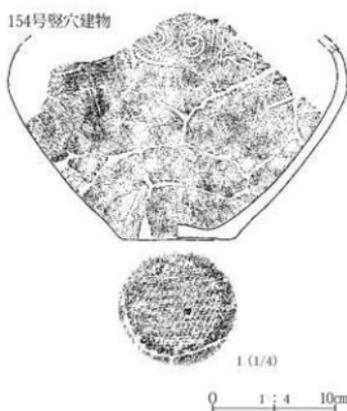
## 炉 (7区34号土器埋設遺構) 平面図



## 炉 (7区34号土器埋設遺構) 掘り方



## 154号竪穴建物



第286図 154号竪穴建物

## 154号竪穴建物(第286図、PL.97)

調査年度 平成29年度

位置 7区(80区E-25)

経過 7区北側にある106号竪穴建物の北東で確認された。106号に先立ってこの地区では1号配石を調査したが、その中で小さな弧状配石が確認され、当初は1号配石-Bとして個別化された。この配石は山側(南側)の数mだけが明瞭に残り、斜面の北側は東西方向の配石(15号別石)で切られていた。やがて東西方向の配石が撤去されると、弧状配石の中央部分で埋篋(1)が見つかった。これが34号埋設土器である。調査時にはそれぞれ個別に

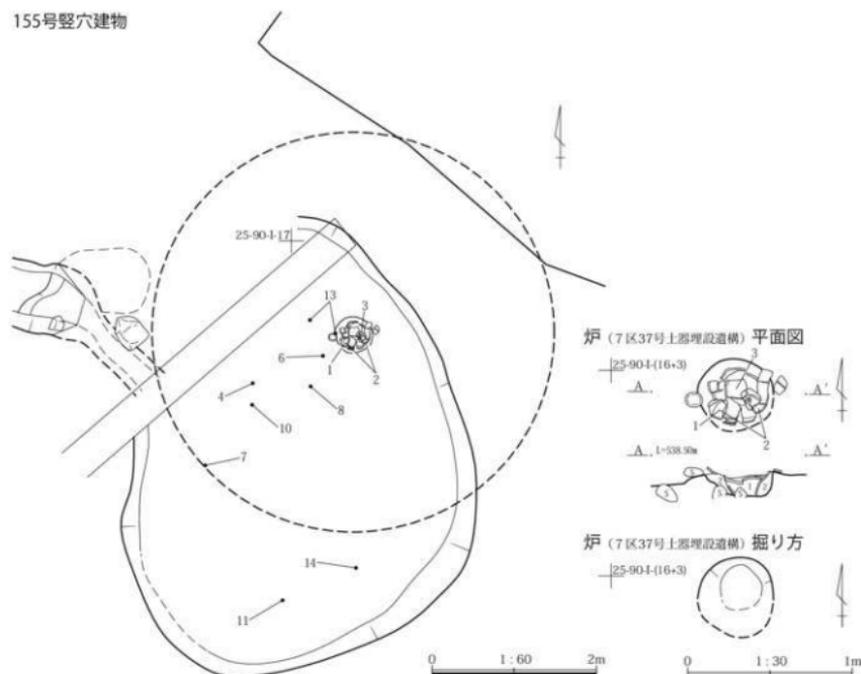
記録されたが、両者を合わせて竪穴建物の一部と判断した。

形状 弧状配石は埋篋を中心に半径3m前後の規模があることから、本建物は直径6m前後の規模を有し、傾斜する北側に入りが付く柄杓形敷石タイプの建物であったと想定したい。

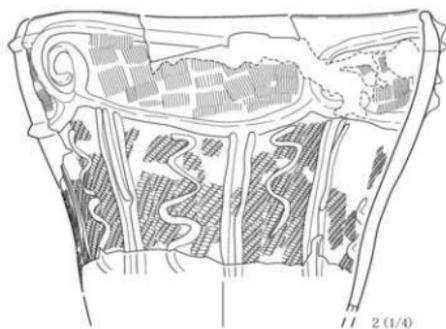
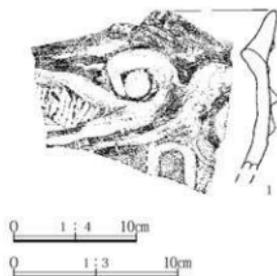
なお、本建物は南西側に重複する159号竪穴建物の一部を切っており、重複関係は156号<157号<154号と想定する。

時期 後期前葉 堀之内1式

155号竪穴建物



155号竪穴建物

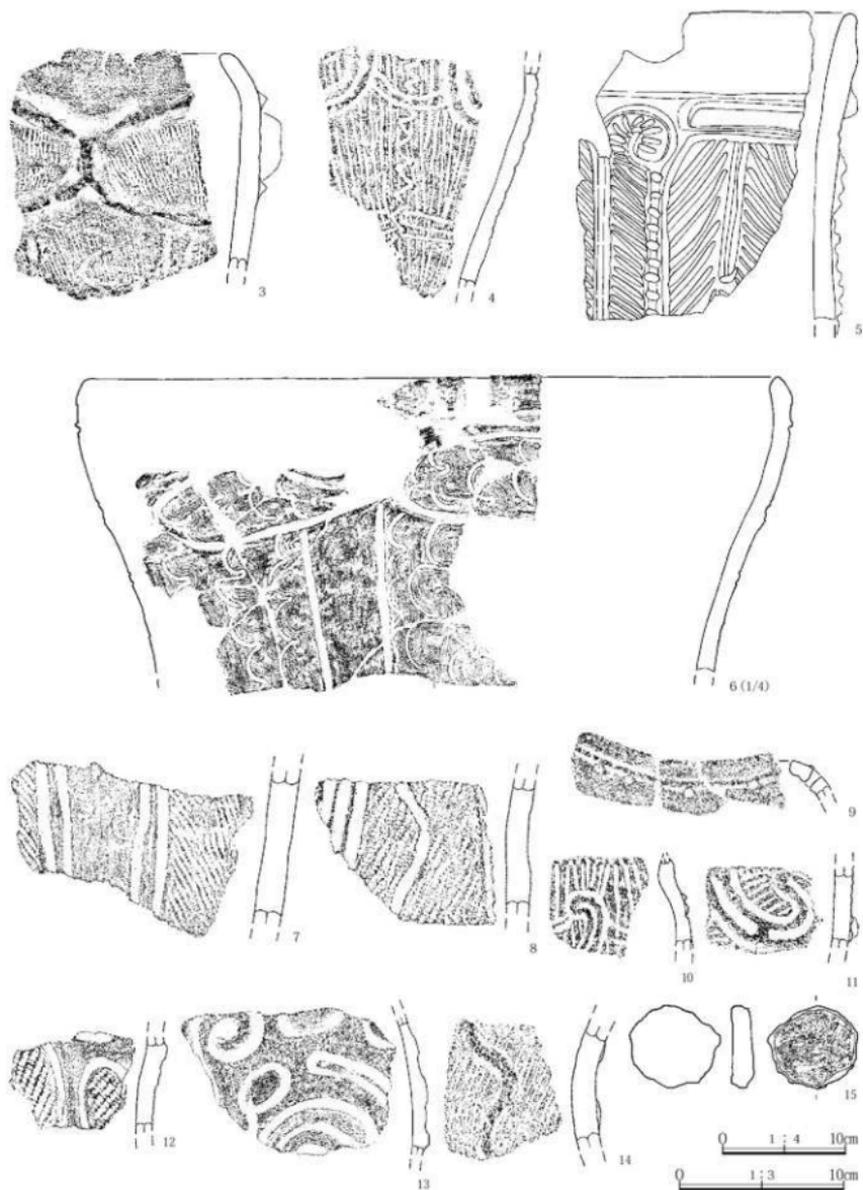


第287図 155号竪穴建物(1)

155号竪穴建物(第287、288図、PL.98)

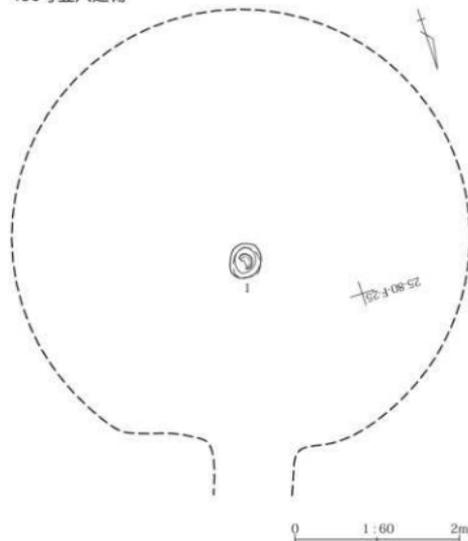
7区北側のI-16グリッドで埋裏を確認した。ここは台地から1段下がった沢沿いの傾斜地で、縄文時代の遺構は少なく、南側8mに6号水場遺構がある。この埋裏

は大きな落ち込みを掘削中に確認したもので、中期加曾利E3式期深鉢(2)の上半部を正位に埋設している(PL.98-4)。調査時には37号埋設土器としたが、竪穴建物のがと判断したい。使用された土器は口縁部が押し潰



第288図 155号竪穴建物(2)

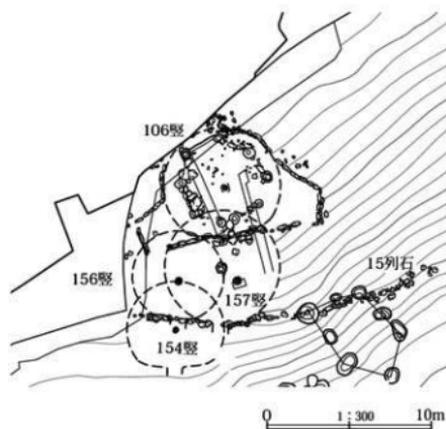
156号竪穴建物



炉 (7区48号土器埋設遺構)



156号竪穴建物



されたように破損していたが、比較的よく残っていた。周囲は不明の落ち込みで壊されており、埋裏以外は残っていなかった。

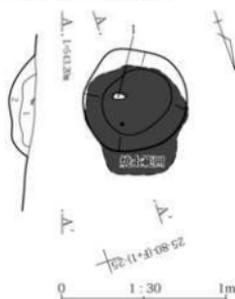
時期 中期後葉 加曾利E3式

156号竪穴建物(第289図、PL.97)

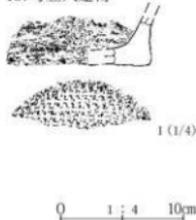
7区北側の1号配石調査中に確認された。106号竪穴建物の前面右手に位置し、周囲に13号・34号・49号埋設土器が近接する。深鉢の胴下半を正位に埋設しており、調査時に48号埋設土器としたが、この埋裏は焼土中に小型深鉢の胴下半部を正位に埋設したものであり、竪穴建物の炉と判断した。155号竪穴建物に伴う敷石などと重複する位置にあり、失った部分も多いと想定される。確認されたなかでは、この地区に集中する竪穴建物のなかで最も古い遺構と考えられ、その後の活動に伴って本建物の大半の施設は失われたと想定する。

第289図 156号竪穴建物

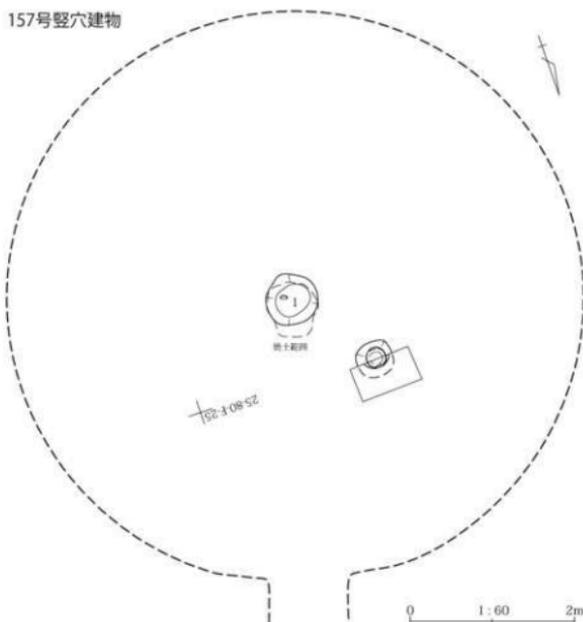
## 炉 (7区49号土器埋設遺構)



## 157号竪穴建物



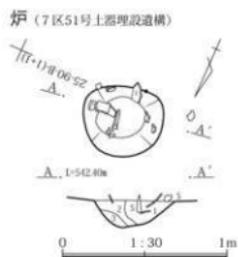
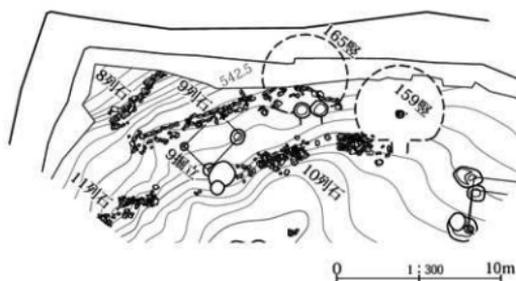
## 157号竪穴建物



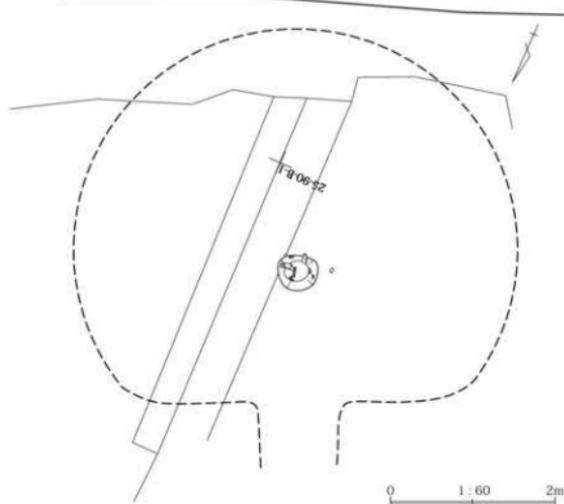
第290図 157号竪穴建物

## 157号竪穴建物(第290図、PL.99)

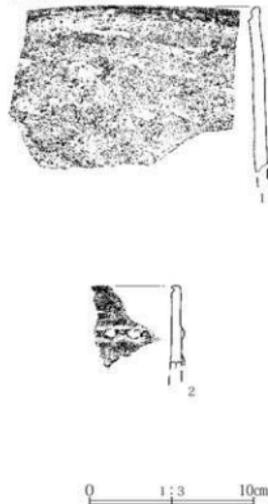
7区北側の1号配石調査中に確認された。34号・48号埋設土器と共に配石下で確認されたもので、調査時に49号埋設土器としたが、明瞭な焼土を伴うこと、そして本埋設土器が東西5.5m、南北5mほどの範囲に並ぶ敷石状配石の中心に位置することから、竪穴建物の炉と判断した。本建物も154号と同様に柄鏡形敷石タイプと想定される。



159号竪穴建物



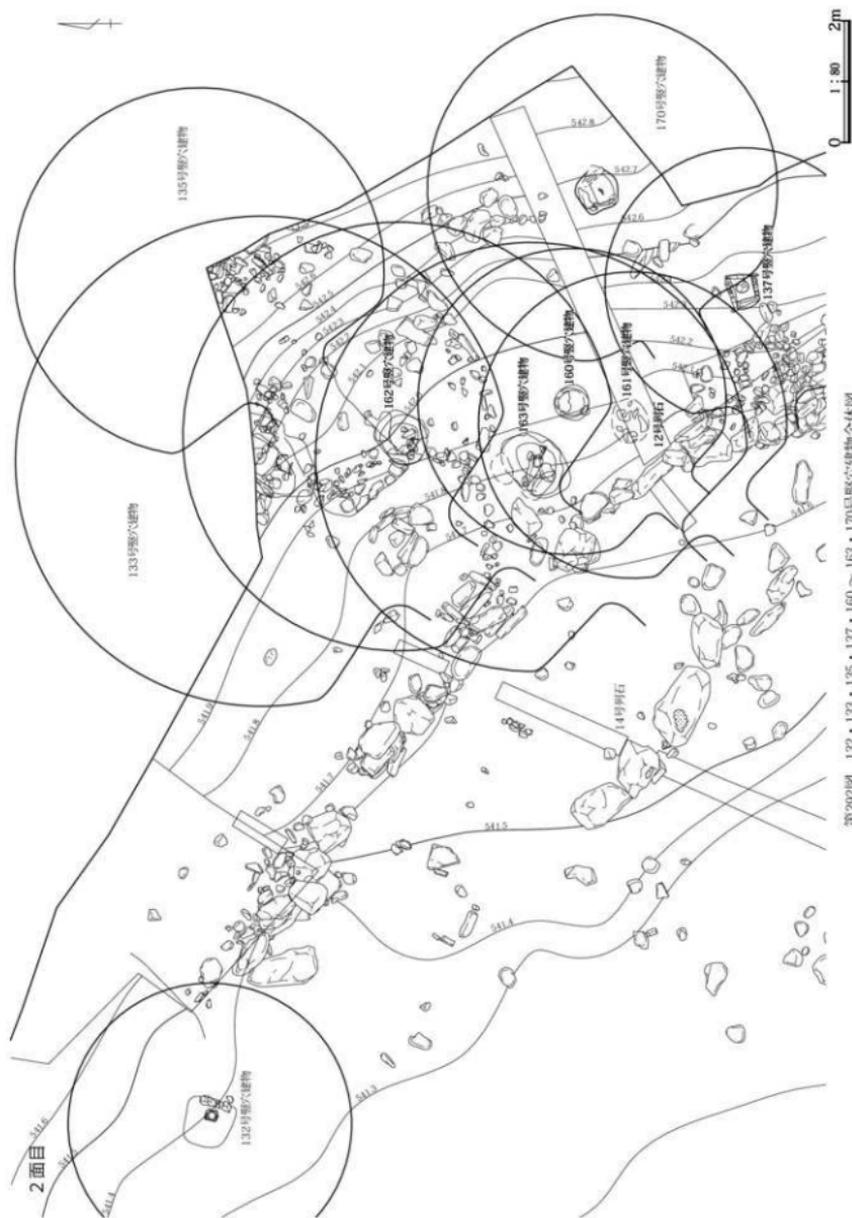
159号竪穴建物



第291図 159号竪穴建物

159号竪穴建物(第291図、PL.99)

7区の南東側、79号配石のすぐ北側で埋裏を確認した。後期堀之内2式深鉢(1)の体部を正位に埋設したものが、土器はその後の削平等で破損し一部を失っているが、竪穴建物の椀と判断したい。傾斜する北側2mに10号列石の西端部があり、この列石に取り付く竪穴建物だった可能性が考えられる。



第202図 132・133・135・137・160～163・170号掘穴建物全体図

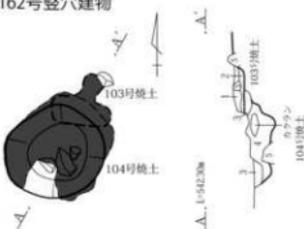
160号竪穴建物



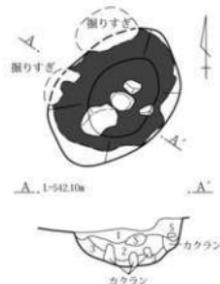
161号竪穴建物



162号竪穴建物



163号竪穴建物



第293図 160～163号竪穴建物

160号竪穴建物(第293図、PL.99-5、6)

7区133号竪穴建物と137号竪穴建物の間で焼土が確認され、調査時には101号焼土としたが、竪穴建物のがと判断したい。この地区には101号の他にも102号・103号・104号・105号焼土があるが、これらはいずれも南西側に近接する12号列石に伴う柄鏡形敷石タイプの建物と考えられる。いずれも上面を削平されて残っているのはがの焼土部分のみである。

101号焼土は直径50cmほどの円形を呈しており、本建物は直径5m前後の柄鏡形を想定したい。

161号竪穴建物(第293図、PL.100-7、8)

調査時に102号焼土としたもので、101号焼土の南1mに近接する。これも直径50cmほどの円形を呈しており、160号竪穴建物と同様に直径5m前後の柄鏡形を想定したい。

162号竪穴建物(第293図、PL.100-1～3)

調査時に103号・104号焼土としたもので、101号焼土の北側2.5mに位置する。長軸90cm、短軸80cmの隅丸形状をしたやや大きな焼土で、上面と下面に質の異なった焼土があり、上面を103号、下面を104号とした。おそらくがの作り替えが行われて長期にわたって使用されたのであろう。このうち、103号焼土から後期称名寺1式土器が出土しており、この時期の建物と考えられる。建物の規模は直径7mの柄鏡形を想定した。

163号竪穴建物(第293図、PL.100-4、5)

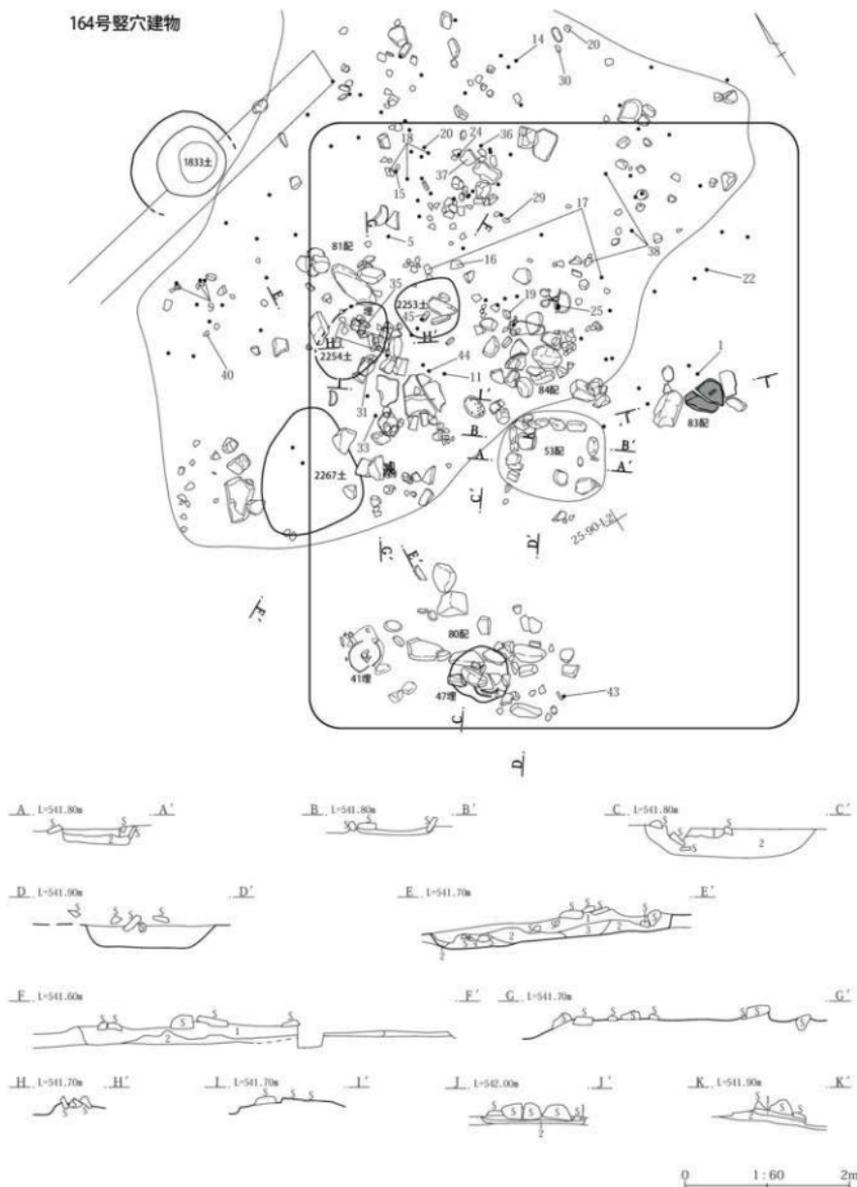
調査時に105号焼土としたもので、101号焼土の北西1mに近接する。長軸110cm、短軸75～89cmほどの楕円形状を呈する大きな焼土で、厚さも30cm前後ある。時期を特定できる遺物は認められなかったが、162号竪穴建物と同様の直径7mの柄鏡形を想定したい。

164号竪穴建物(第294～297図)

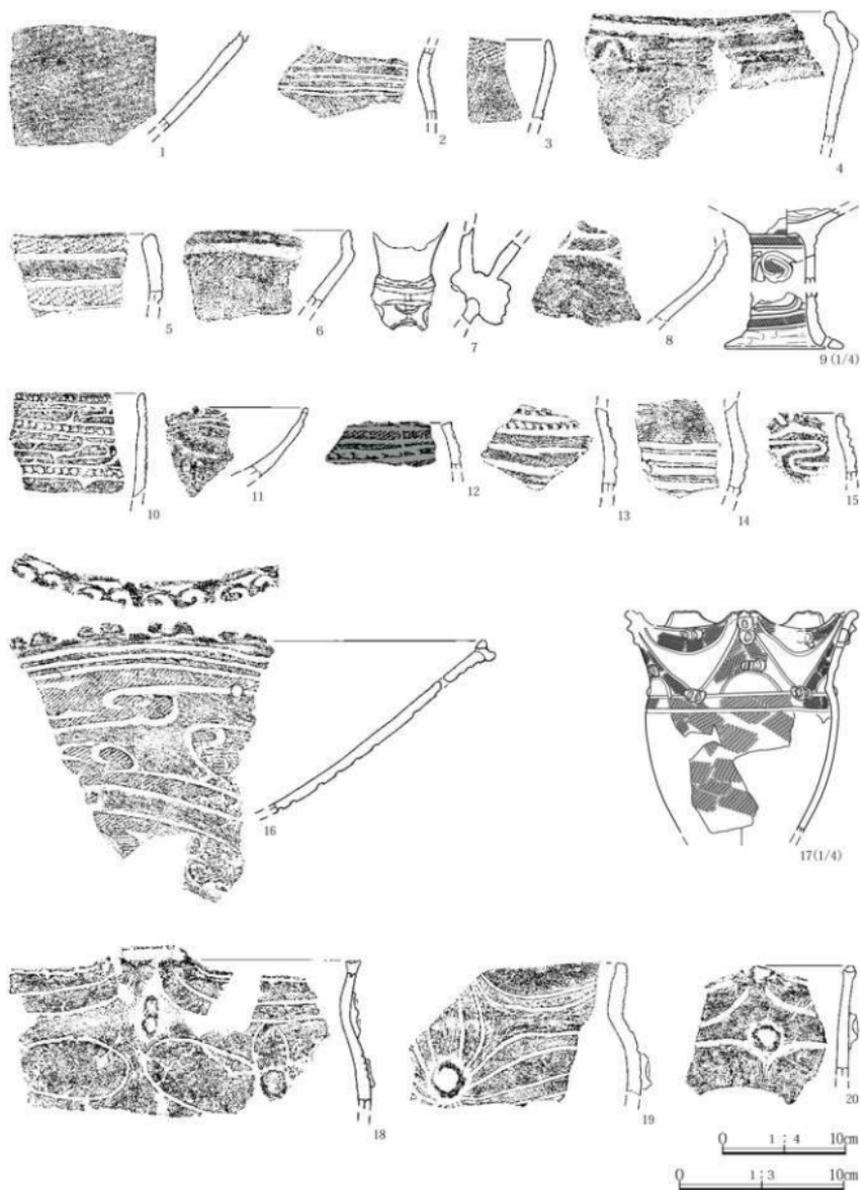
調査年度 平成31年度

経過 7区の南西部にある126号竪穴建物の南西側で確認された。この地区には礫や遺物が数多く分布しており、調査時にはまどまりごとに53号・80号81号83号配石としたが、調査が進むなかで晩期の竪穴建物のなかには掘り

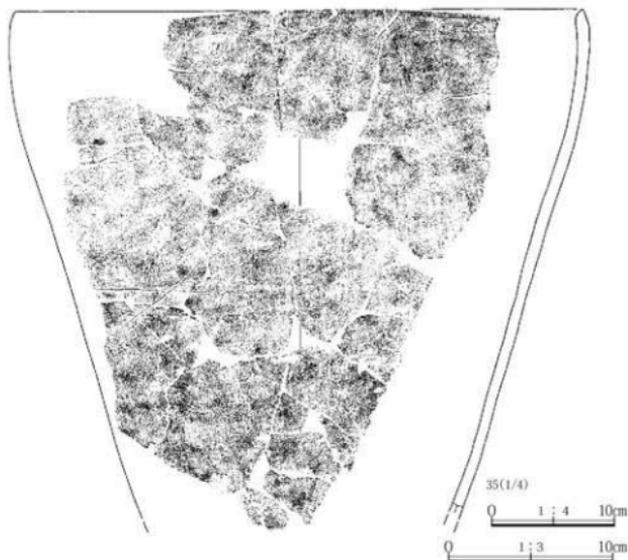
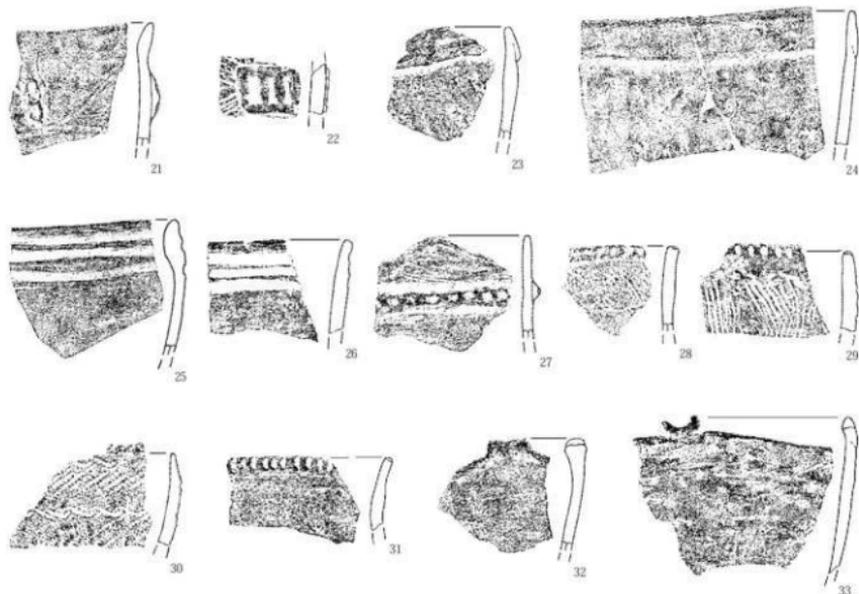
164号竪穴建物



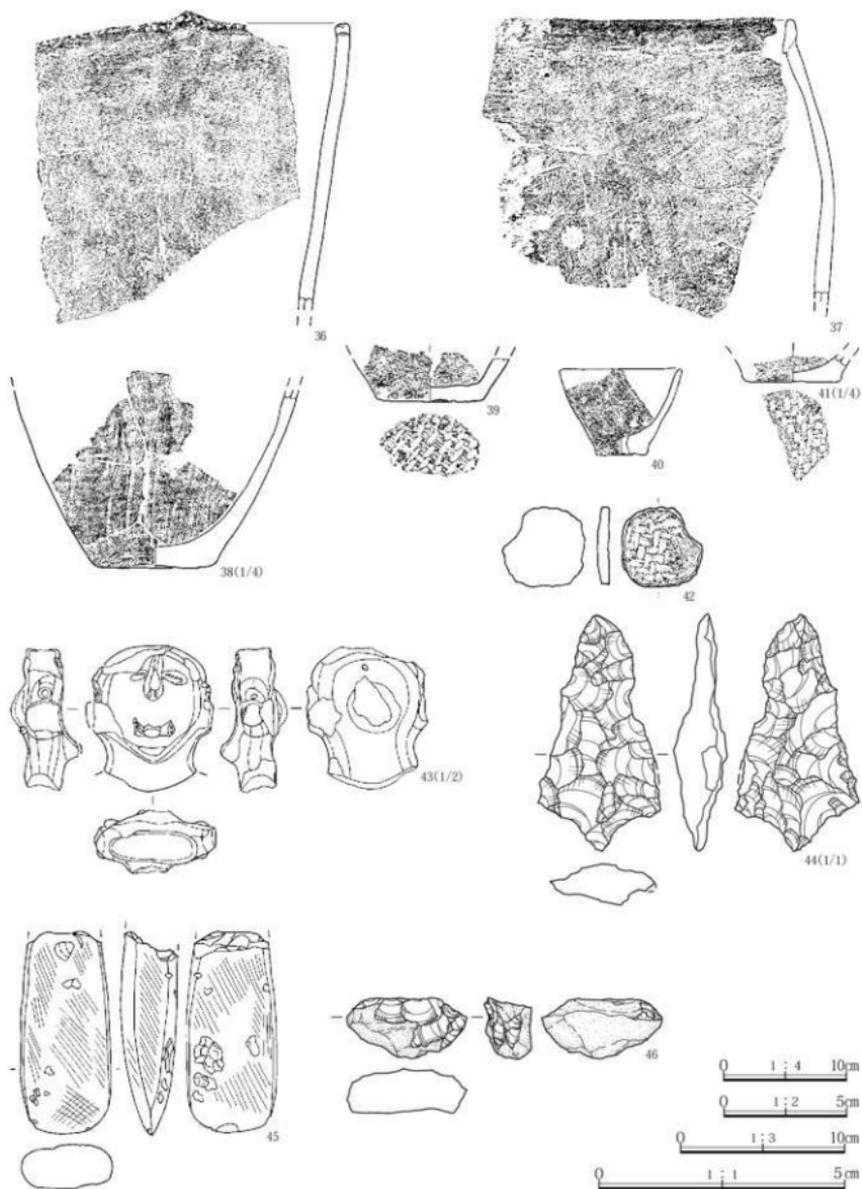
第294図 164号竪穴建物(1)



第295図 164号竪穴建物(2)

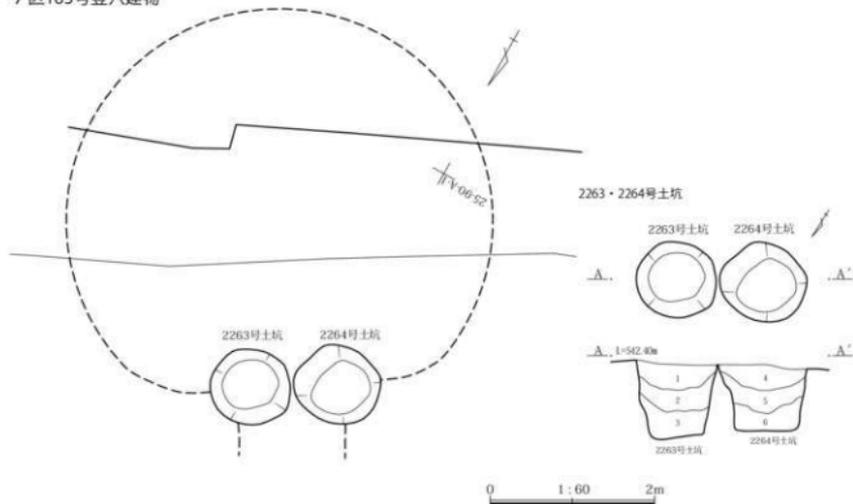


第296図 164号竪穴建物(3)



第297図 164号竪穴建物(4)

## 7区165号竪穴建物



第298図 165号竪穴建物

込みがほとんど無く、周縁部に沿って石が列状に並ぶタイプの存在が判明し、これもそうしたタイプの竪穴建物であろうと判断した。

**重複** 南西部に41号・47号埋設土器が、北西側に2253号・2254号・2267号土坑がそれぞれ重複するが、切り合い関係は確認していない。

**形状** 長軸7.4m、短軸6m前後の長方形を呈するものと想定した。中央よりやや南西側に石囲炉(53号配石)があり、南西側の短辺に沿って石列(80号配石)が一部ではあるが並び、北西側の長辺に沿って石列(81号配石)が並んでいる。

**炉** 板状の礫を1辺1.1mほどの方形に組んだ石囲炉で、南西側の炉石を失っている。炉内に焼土はほとんど残っていないが、炉石には被熱痕跡が認められた。

**柱穴** 確認されていないが、重複する2253号土坑は本建物の柱穴となる可能性がある。

**遺物** 各配石の調査に伴って後期高井東式期～晩期後葉期の遺物が出土している。

**時期** 出土土器から、晩期中葉期(佐野Ⅱ式新段階)に比定しておきたい。

## 165号竪穴建物(第298図)

**調査年度** 平成31年度

**位置** 89区Y-1、90区A-1

**経過** 7区南東部の端にある9号列石の段下で、直径90cm前後、確認面からの深さが80cm前後の土坑が2基並んだ状態で確認された。調査時には2263号・2264号土坑としたが、規模と形態から柄鏡形タイプの建物の特徴でもある出入り口部の対ビットであると判断した。

残念ながらこれらに伴う調査は未着手のため、その他の所見は得られておらず、対ビットからの出土遺物もない。

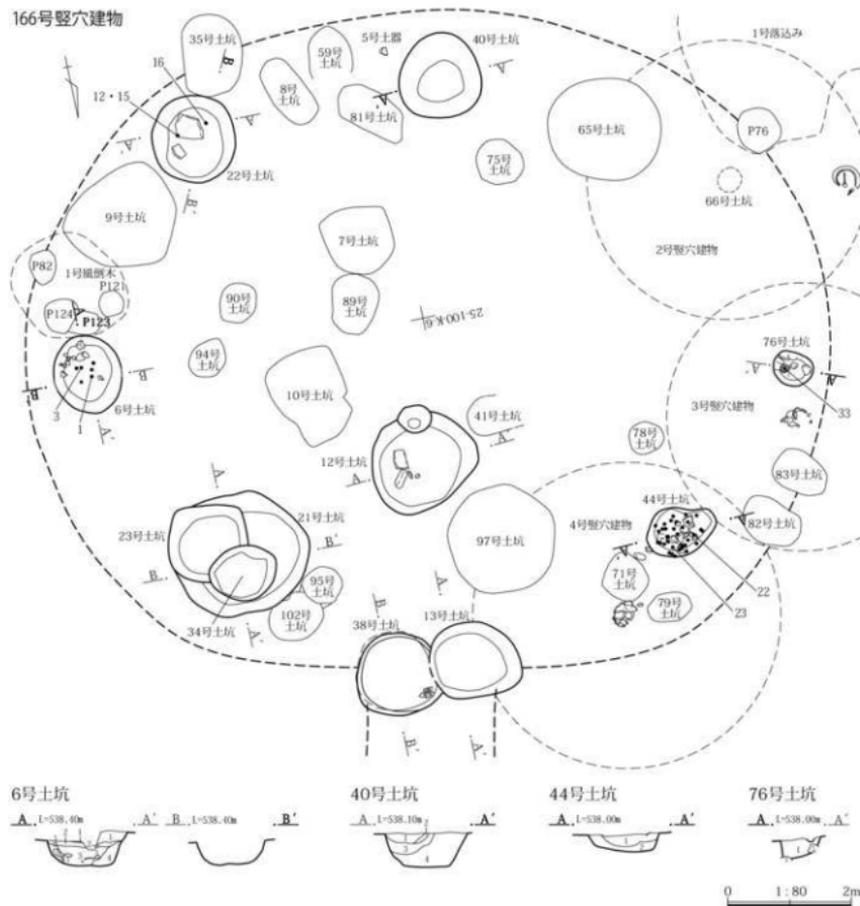
**時期** 後期前半に比定されよう。

## 166号竪穴建物(第299～303図、PL.101～103)

**調査年度** 平成20年度

**経過** 6区台地の北西部で確認された。平成20年度に調査された一面は、削平がかなり及んでいたために、竪穴建物の壁が確認できないものが多かった。そのため、石囲を失った炉や柱穴も土坑として扱われたものが多く、本建物と判断した遺構もそうしたものである。

166号竪穴建物



第299図 166号竪穴建物(1)

**重複** 166号竪穴建物西側に2号・3号・4号竪穴建物が重複し、これらを切っていると判断する。

**形状** 主体部は長軸13m前後、短軸12.2m前後の東西方向に長い楕円形状を呈し、北側の台地縁辺部に柄部が付く柄鏡形タイプの竪穴建物と判断した。

北側に大きな対ピット(13号・38号土坑)があり、その裏側の40号土坑を通る主軸線上のかなり柄部寄りに炉(12号土坑)が位置する。この主軸を基準に、対ピットから時計回りに21号・23号・34号土坑、6号土坑、22号土坑

がほぼ等間隔の位置にあり、その対向する位置に44号土坑、76号土坑がある。22号土坑に対向する土坑は未確認だが、対ピットの存在と各土坑の位置の規格性から、竪穴建物を想定した。

**炉** 12号土坑を炉の堀方であろうと考えた。この土坑が想定する中軸線にあることも大きな要因だが、決め手となったのは埋土の縁辺部に焼土が残っていた事である(PL.101-3)。どのような形態の炉であったのかについては手掛かりがないが、堀方の規模から、かなり大型の

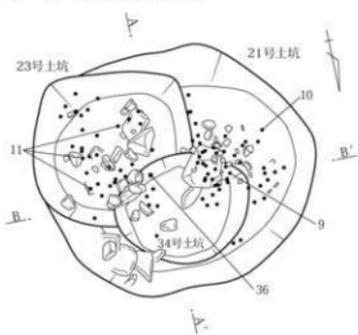
12号土坑



A. 1/538.20m



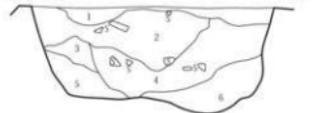
21・23・34号土坑平面図



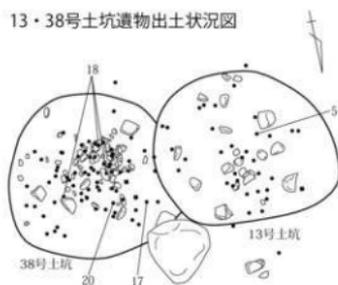
B. 1/538.30m



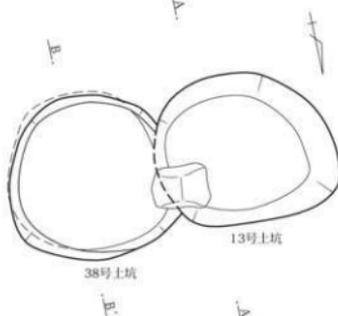
A. 1/538.30m



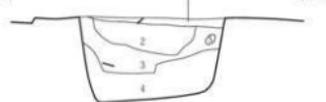
13・38号土坑遺物出土状況図



13・38号土坑掘り方



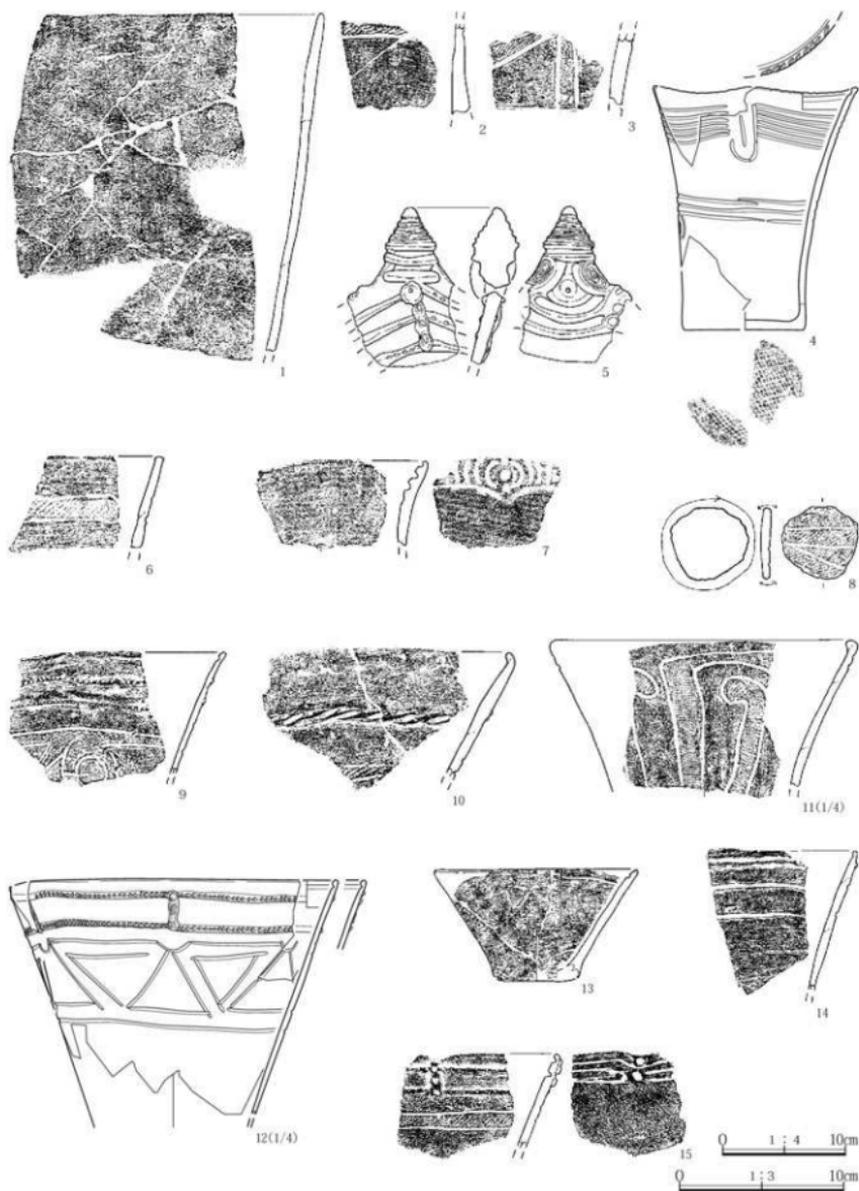
A. 1/538.20m



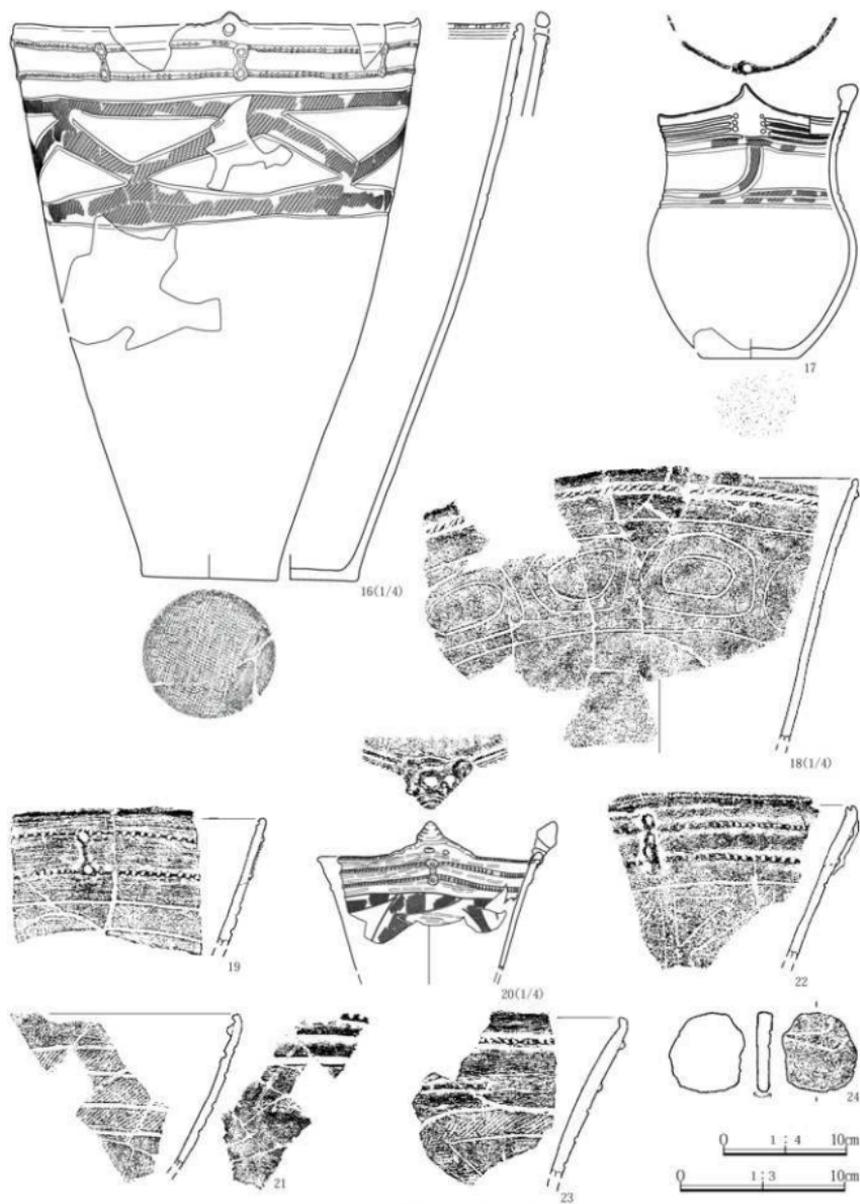
B. 1/538.20m



0 1:40 1m

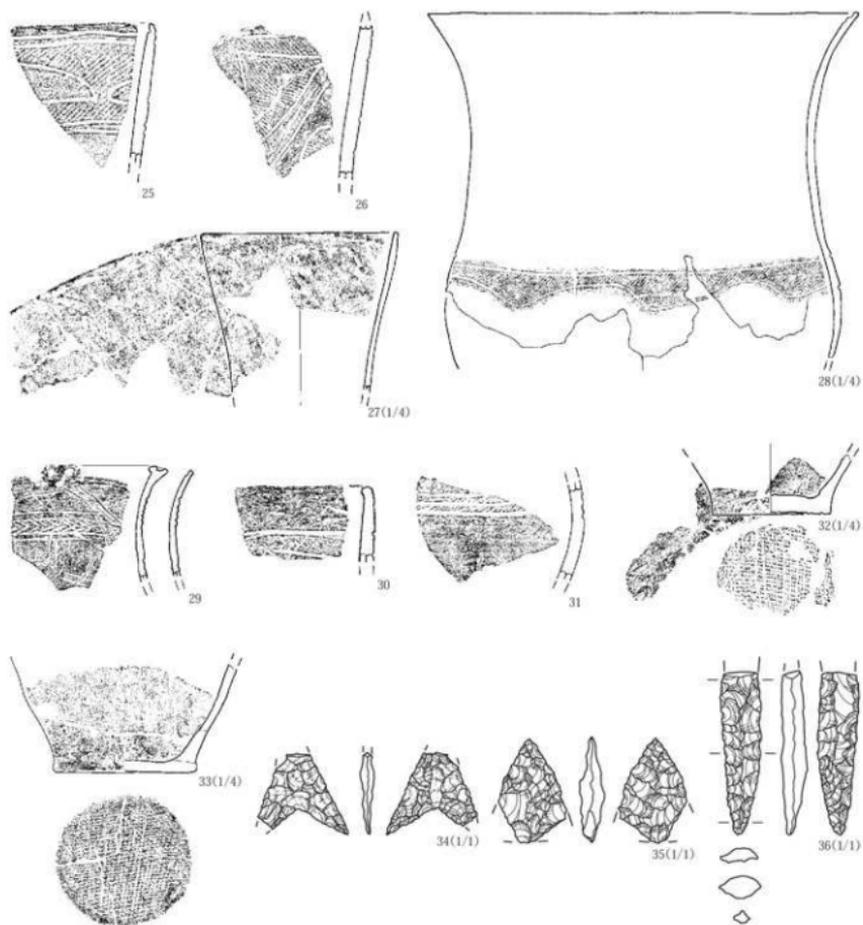


第301図 166号竪穴建物(3)



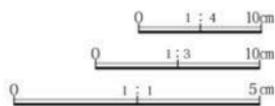
第302図 166号竪穴建物(4)

第2章 発掘された遺構と遺物

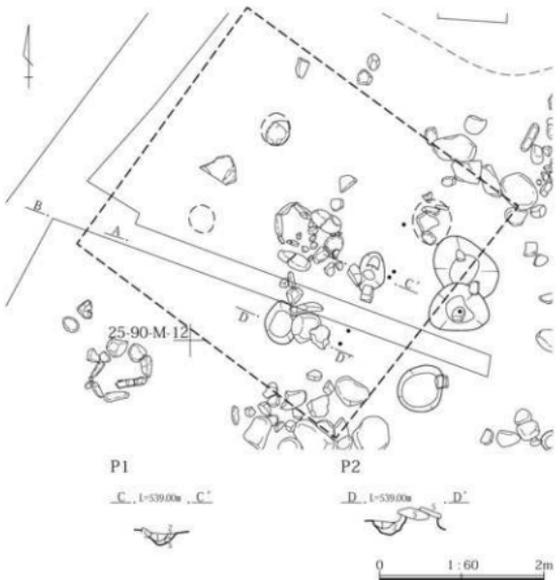
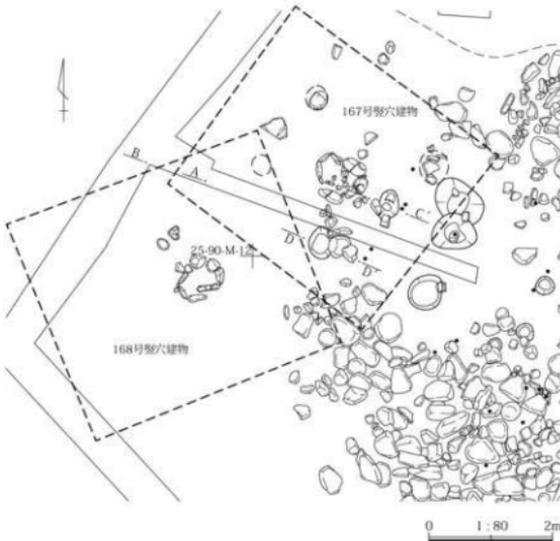


- |            |         |          |          |
|------------|---------|----------|----------|
| 1、2        | : 6号土坑  | 17~20、35 | : 38号土坑  |
| 3          | : 7号土坑  | 21、34    | : 40号土坑  |
| 4、25~28、32 | : 12号土坑 | 22~24    | : 44号土坑  |
| 5~8        | : 13号土坑 | 29、30    | : 114号土坑 |
| 9~11、36    | : 21号土坑 | 31       | : 142号土坑 |
| 12~16      | : 22号土坑 | 33       | : 76号土坑  |

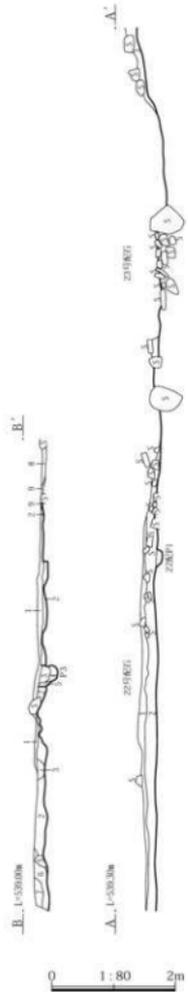
第303図 166号竪穴建物(5)



167号・168号竪穴建物全体図

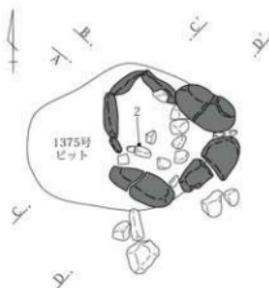


第304図 167号竪穴建物(1)

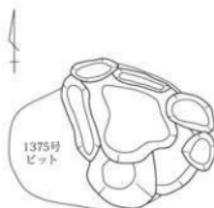


## 第2章 発掘された遺構と遺物

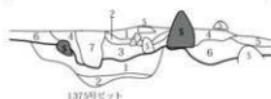
### 平面図



### 掘り方

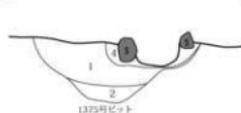


A, L=530.00m



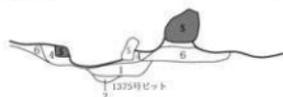
A'

C, L=530.00m



C'

B, L=530.00m



B'

D, L=530.00m



D'



第305図 167号竪穴建物(2)

炉が想定される。また、ここには多量の土器が投げ込まれているが、いずれもほぼ同様の特徴を備えている。

**柱穴** 13号・38号土坑を対ピットとし、21号・23号・34号土坑、6号土坑、22号土坑、40号土坑、76号土坑、44号土坑が主柱穴だったと想定する。これらの土坑からも多量の土器が出土しているが、その多くはほぼ同時期のものである。なかでも22号土坑ではほぼ完形の大形深鉢(16)が正位に立った状態で出土しており、注目される。また、対ピットの土坑では、底面に多量の礫が敷いたような状態で出土しており、これも注目に値する。

**遺物** 各土坑から多量の土器が出土しており、その他にも土器片加工円盤や石鏃等の石器類も出土している。

**時期** 各土坑出土の土器から、後期堀之内2式期に比定されよう。

167号竪穴建物(第304、305、307図、PL.100-6、7)

調査年度 平成30年度

位置 90区M-12

**経過** 7区東側、沢沿いの微高地に位置し、石囲い内に焼土がみられ、調査状況等から竪穴建物として認定した。

**規模** 推定450cm×350cm戸：長軸90cm×短軸80cm

**重複** 出土遺物から、168号竪穴建物よりも古いと想定される。

**形状** 方形平地式建物

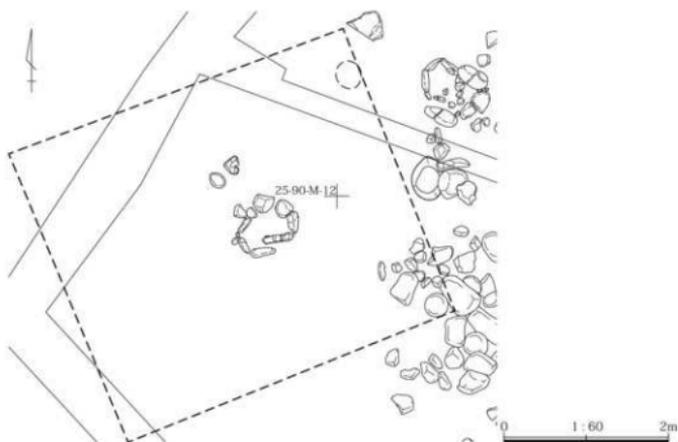
**床面** 掘り込み、床は、確認されていない。周辺の状況から、簡易的な平地式建物だったと想定される。

**炉** 30cm前後の扁平な河原石を入れ子状に縦位の状態で配置する。

**柱穴** P1、P2が確認され、両方とも、側面部に根固め礫を伴う。その他に2箇所等間隔に扁平礫を対置しており、掘り込みは、確認できなかったが、根詰め石の可能性はある。P1は最大長40cm、P2は最大長50cmを測る。

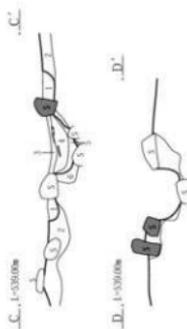
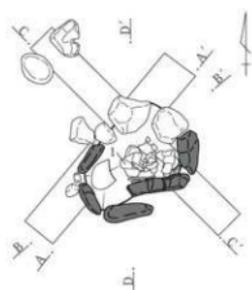
**遺物** 1・2は、加曾利B3式、3は、無文粗製土器で、Pit 2から出土している。

時期 後期後葉



平面図

掘り方



A, 1:500.0m A'

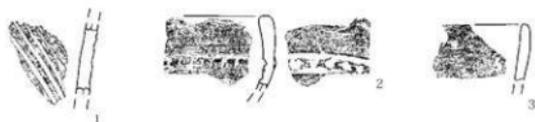


B, 1:500.0m B'

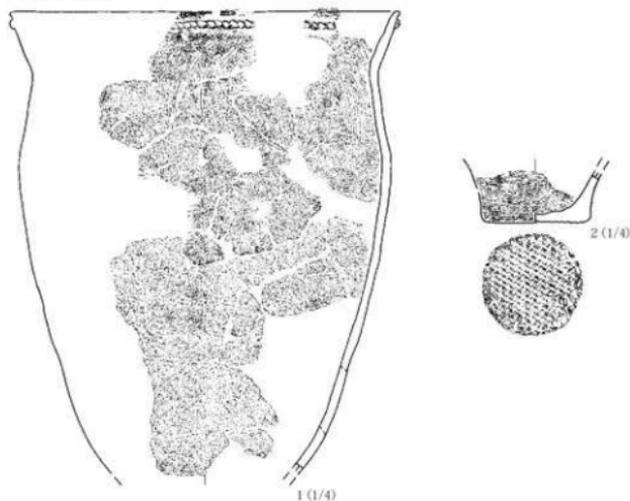


第306図 168号壘穴建物

167号竪穴建物



168号竪穴建物



第307図 167・168号竪穴建物

168号竪穴建物(第306、307図、PL.101-6、8)

調査年度 平成30年度

位置 90区

経過 7区東側、沢沿いの微高地に位置し、石囲い内に焼土がみられ、調査状況等から竪穴建物として認定した。

規模 推定450cm×350cm<sup>2</sup>：長軸80cm×短軸70cm

重複 167号竪穴建物よりも新しく、27号配石とは同時期と考えられる。

形状 方形平地式建物

床面 掘り込み、床は確認されていない。27号配石を壊していないことなど周辺の状況から、簡易的な平地式建物だったと想定される。

炉 30cm前後の扁平な河原石を入れ子状に配置する。南側には、縦位に据えた河原石が認められる。内部には縦

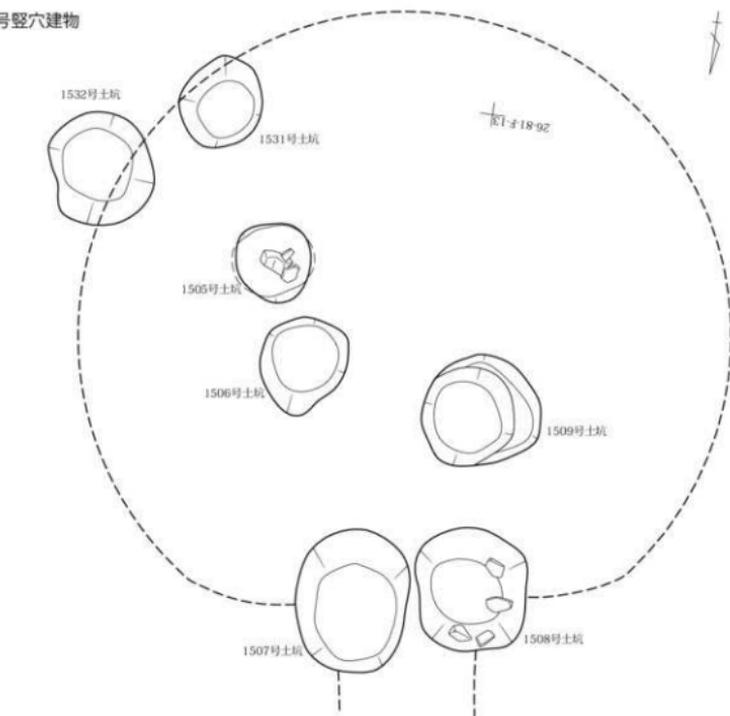
位に分割された土器を横位に据えられており、火熱状況などから、炉体土器と判断される(第307図-1)。

柱穴 なし。

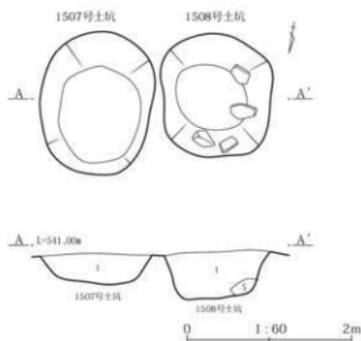
遺物 佐野式系の組線を有する粗製土器が、炉体土器として出土している(第307図-1)。

時期 晩期前葉

## 169号竪穴建物



## 1507・1508号土坑



第308図 169号竪穴建物

## 169号竪穴建物(第308図)

調査年度 平成29年度

**経過** 8区北東側の緩斜面で確認された。この地区も削平が大きく及んでおり、床面などを含めた上層部分を失っている。本例も調査時には個別の土坑として調査されたが、周囲には同様な状態で調査された138号・144号・145号竪穴建物があり、わずかな平坦部に縄文時代の遺構が集中している状況が看取される。

直径1.5m前後の1507号と1508号土坑が、傾斜する北西側に向かってほぼ接するように並んだ状態で確認されており、柄鏡形タイプの建物の対ビットであろうと判断した。土坑の深さは1507号が35cm前後、1508号が55cm前後と浅いが、いずれも確認面がかなり下がった状態で検出しており、本来は50cmも上から掘り込んでいたと想定する。

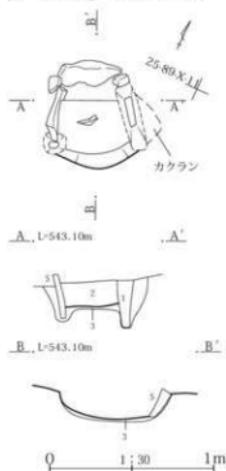
**遺物** 1508号土坑から後期縄文之内1式期の土器が出土し

第2章 発掘された遺構と遺物

第4表 竪穴建物振替詳細一覧

遺構名	振替前遺構名称	調査区	地区・区・グリッド	調査年度	形状	土軸方向	規模 (cm)	時期	9*	柱 (本)	備考
							長軸 短軸 深				
138号竪穴建物	1号方形穴 (1485号土坑、1488号土坑、1519号土坑、1523号土坑、1524号土坑、1525号土坑、1527号土坑、1528号土坑、1534号土坑)	8	25-80-X-Y-10、11、12 25-90-A-10、11、12	E09	(納貝形敷石 初穴建物)	N-14°-E	(800) (800) -	縄之内1式	(土器埋没石函等)	9本	1519号・1524号・1526号・1527号土坑から縄之内1式用の土器出土。
139号竪穴建物	953号土坑、955号土坑、977号土坑、1002号土坑、1004号土坑、1006号土坑、1009号土坑、1005号土坑、1009号土坑	7	25-80-Y-Y-14、19	E08	(納貝形敷石 初穴建物)	S-0°-E	(750) (740) -	縄之内1式か	(土器埋没石函等)	9本	965号土坑が砂。
140号竪穴建物	14号土坑、17号土坑、30号土坑、32号土坑、42号土坑、46号土坑、47号土坑、52号土坑、60号土坑、73号土坑	6	25-100-C-Y-4、5	E08	(納貝形敷石 初穴建物)		(740) (620) -	縄之内2式か	(土器埋没石函等)		32号・42号土坑が対ビットで、ここから敷石の石が散乱出土。
141号竪穴建物	6号埋没土器	5	25-90-C-Y-11、12	E09	未確認	-	(510) (540) -	加賀川E3式	(土器埋没石函等)		
142号竪穴建物	11号埋没土器	8	25-90-Y-Y-7、8	E09	未確認	-	(515) (515) -	加賀川E3式新	(土器埋没石函等)		
143号竪穴建物	12号埋没土器	5	25-90-S-T-10、11	E09	未確認	-	(515) (515) -	加賀川E3式	(土器埋没石函等)		94号埋没土器の口辺に炭粒結核。
144号竪穴建物	17・18号埋没土器	8	26-81-B-C-10、11	E08	(納貝形敷石 初穴建物)	-	(510) (485) -	縄之内1式	土器埋没等		埋没土器の周囲に多量の焼土。
145号竪穴建物	19号埋没土器	5	26-81-D-E-11、12	E09	(納貝形敷石 初穴建物)	-	(490) (485) -	縄之内1式	(土器埋没石函等)		埋没土器に炭粒結核。
146号竪穴建物	22号埋没土器	7		E09	(納貝形敷石 初穴建物)	-		縄之内1式	(土器埋没石函等)		埋没土器の周囲に多量の焼土。
147号竪穴建物	24号埋没土器	7	25-80-Q-R-16、17	E09	(納貝形敷石 初穴建物)	-	(495) (490) -	縄之内2式か	(土器埋没石函等)		
148号竪穴建物	25号埋没土器	7	25-80-S-18、19	E09	未確認	-	(500) (500) -	縄之内1式	(土器埋没石函等)		埋没土器に炭粒結核。
149号竪穴建物	27号埋没土器	8	25-90-R-S-24、25	E09	(納貝形敷石 初穴建物)	-	(500) (495) -	後期前半			
150号竪穴建物	28・29号埋没土器	8	25-90-P-Q-24、25	E09	(納貝形敷石 初穴建物)	-	(510) (510) -	後期前半			2個体の埋没土器の上面に敷石あり。出入り口埋没と判断。
151号竪穴建物	30号埋没土器	8	25-90-Y-Y-21、22	E09	未確認	-	(490) (490) -	加賀川E3式古	(土器埋没石函等)		
152号竪穴建物	31号埋没土器	8	25-90-Y-Y-20、21	E09	(納貝形敷石 初穴建物)	-	(495) (485) -	後期か			
153号竪穴建物	32号埋没土器	6	25-100-A-B-4、5	E09	未確認	-	(475) (470) -	埴野土器	(土器埋没石函等)		
154号竪穴建物	34号埋没土器	7	25-80-Q-R-24、25	E09	(納貝形敷石 初穴建物)	-	(575) (560) -	縄之内1式新 土器埋没石函等か			南側溝壁に弧状灰石が散る。
155号竪穴建物	37号埋没土器	7	25-90-Q-R-16、17	E09	未確認	-	(475) (470) -	加賀川E3式	土器埋没等		
156号竪穴建物	48号埋没土器	7	25-80-E-F-24、25	E08	(納貝形敷石 初穴建物)	-	(580) (540) -	後期前半か?			15号列石に伴う納貝形建物も想定。
157号竪穴建物	49号埋没土器	7	25-80-E-24、25、F-23 ~25、G-24、25	E09	(納貝形敷石 初穴建物)	-	(720) (675) -	後期前半か?			15号列石に伴う納貝形建物も想定。94中に焼土。
158号竪穴建物	51号埋没土器	7	25-80-A-B-23 25-90-A-B-1	E09	(納貝形敷石 初穴建物)	-	(525) (500) -	縄之内2式	(土器埋没石函等)		10号列石に伴う可能性が高い。
160号竪穴建物	101号焼土	7	25-80-X-Y-10、11	E09	(納貝形敷石 初穴建物)	-	(520) (510) -	後期前半	(土器埋没石函等)		12号列石の段上で確認。
161号竪穴建物	102号焼土	7	25-80-X-Y-10、11	E09	(納貝形敷石 初穴建物)	-	(520) (500) -	後期前半	(土器埋没石函等)		12号列石の段上で確認。
162号竪穴建物	103・104号焼土	7	25-80-X-Y-10 ~ 12	E01	(納貝形敷石 初穴建物)	-	(700) (660) -	後期前半	(土器埋没石函等)		12号列石の段上で確認。
163号竪穴建物	105号焼土	7	25-80-X-10、11、Y-10 ~ 12、25-90-A-1	E01	(納貝形敷石 初穴建物)	-	(720) (700) -	後期前半	(土器埋没石函等)		12号列石の段上で確認。
164号竪穴建物	3号配石、53号配石・80号配石・81号配石・83号配石・84号配石、2233号土坑、2254号土坑	7		E01	長方形平地式建物		740 600	夷期か	方石石函等		建物の輪郭に沿って礎を配置。
165号竪穴建物	2363号土坑、2364号土坑	7		E01	(納貝形敷石 初穴建物)	-	(525) (550) -	縄之内1式古			10号列石に伴う可能性あり。
166号竪穴建物	6号土坑、12号土坑、13号土坑、21号土坑、22号土坑、23号土坑、34号土坑、38号土坑、40号土坑、44号土坑、76号土坑	6	25-100-I-S-5、7、J、K-4、7、L-5 ~ 7	E09	(納貝形敷石 初穴建物)		(1280) (980) -	縄之内2式 ~ 加賀川E3式		9本以上か	9本以上とした12号土坑内に礎土あり。赤土坑から多量の遺物出土。
167号竪穴建物	30号配石	7	25-90-L-11、12、M-12	E09	長方形平地式建物	N-54°-E	(410) (360) -	後期後葉	石函等		水堀跡だと確認。
168号竪穴建物	31号配石	7	25-90-L-M-11、12	E09	長方形平地式建物	N-69°-E	(430) (380) -	夷期か	石函等		水堀跡だと確認。
169号竪穴建物	1505号土坑、1506号土坑、1507号土坑、1508号土坑、1509号土坑、1531号土坑、1532号土坑	7	26-81-D-13、14、E-F-12 ~ 14	E09			(965) (900) -	縄之内1式			1508号土坑から縄之内1式土器出土。
170号竪穴建物	2号配石 (2897号土坑)	7	25-89-X-10	E01	(納貝形敷石 柱)		(464) (460) -	後期前半か?	方石石函等		12号列石の段上であり、94の形跡は重複する137号埋没建物と近似。
171号竪穴建物	2153号土坑、2175号土坑	7	25-90-C-R-2 ~ 4、I-2、3	E09	(納貝形)		930 (770) -	後期後葉	不明		4本の柱穴に組込礎を伴う。

## 炉 (2397号土坑) 平面図



第309図 170号竪穴建物

ている。

**時期** 出土土器から、後期堀之内1式期に比定されよう。

**170号竪穴建物(2397号土坑)** (第309図、PL103-7、8)

**調査年度** 平成31年度

**経過** 7区の北西側、12号列石の段上で160号～163号竪穴建物の炉の調査最終段階に、137号建物の北西側で確認した。調査時は土坑と判断されたが、137号の石囲炉と規模・構造が同じであり、竪穴建物の炉と判断した。

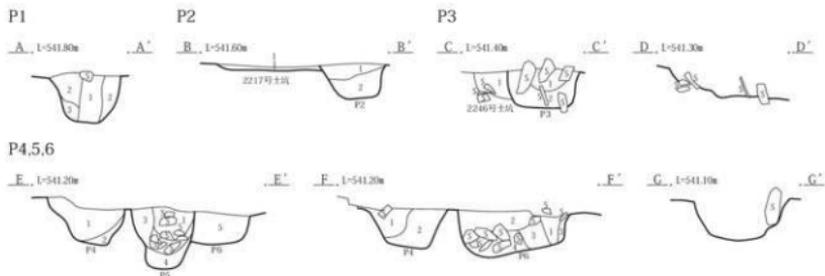
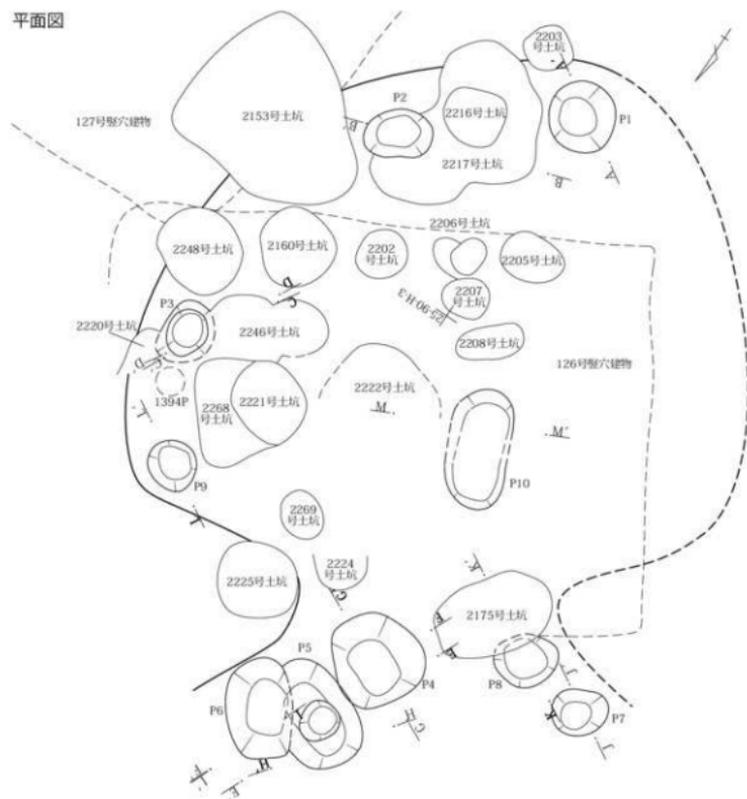
**重複** 137号・160号～163号竪穴建物との重複が想定される。

**炉** 鉄平石を方形に組んだ石囲炉と判断する。南側の炉石を失っているが、その他の3方は残っており炉石を合わせたコーナー部分に小さな石を添えている。炉内に焼土は残っていない。

**遺物** 炉の覆土中から後期前半期の土器の小破片がわずかに出土した。

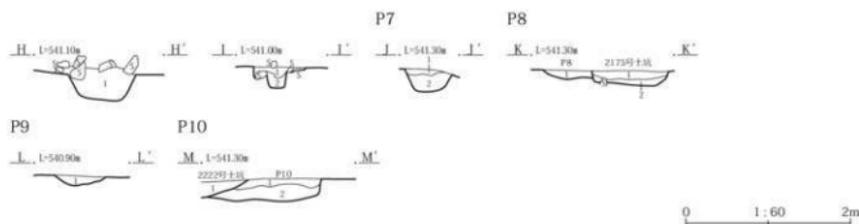
**時期** 後期前半期に比定しておきたい。

平面図



0 1:60 2m

第310図 171号壁穴建物(1)



第311図 171号竪穴建物(2)

**171号竪穴建物(第310、311図)****調査年度** 平成30年度**位置** 90区H・I-3・4

**経過** 171号竪穴建物は、7区調査区東側に位置し、6号列石の上段に面する。大部分は126号竪穴建物によって壊されており、整理作業時に確認した。整理作業時、126号竪穴建物の北側に対ビット状の掘り込みを確認した(P4～P8)ことから、竪穴建物の対ビットと認知し、P1～3、P9を柱穴として、171号竪穴建物として想定を行った。

**規模** 長軸800cm×短軸750cm(想定)

**重複** 126号竪穴建物、7号掘立柱建物に切られている。

**形状** D字状の柄を有する柄鏡形平地式建物

**床面** 大部分が126号竪穴建物によって壊されており、全体像は不明瞭であるが調査状況から平地式建物の可能性がある。

**炉** 確認されていない。**方位**

**柱穴** 入口部を含めて、P1は2204号土坑、P2は2215号土坑、P3は2245号土坑、P4は2230号土坑、P5は2231号土坑、P6は2238号土坑、P7は2174号土坑、P8は2176号土坑、P9は2239号土坑を想定している。P3～P6では、柱穴側面に根詰め礫と考えられる礫が確認されている。

**入口部** 北側に土坑が「八」字状に並んでいたことから、対ビットと考えられた。規模は、直径100cm、深さ50cmを有する。

**遺物** Pit内から加曾利B3式土器が出土している。遺物図は、第10項の土坑を準拠されたい。

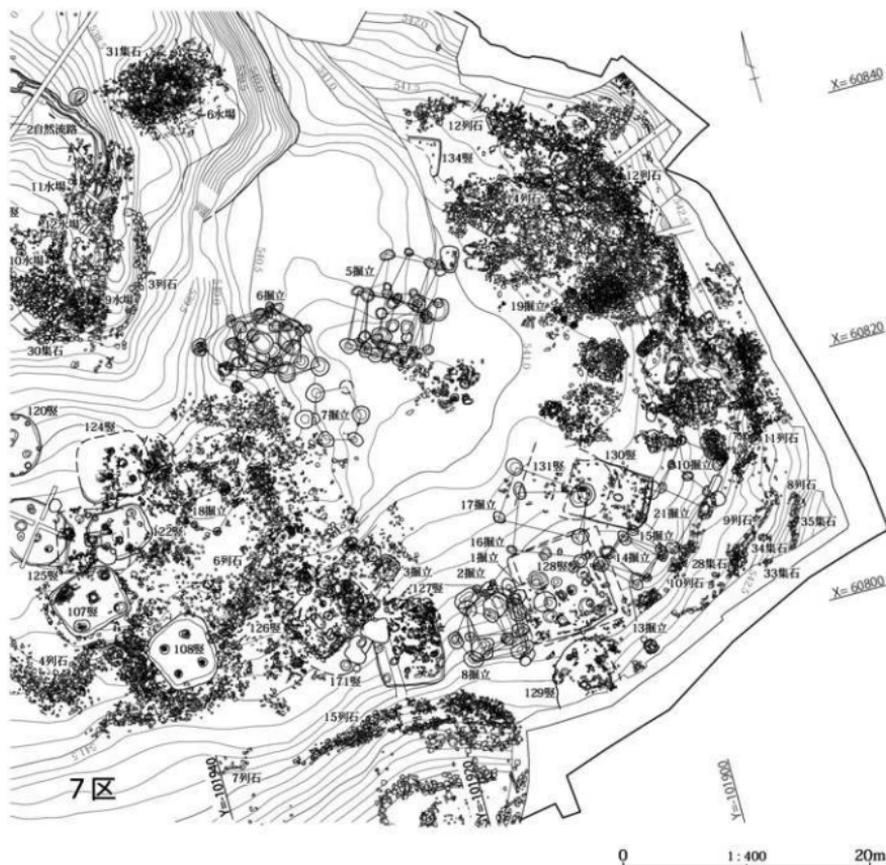
**時期** 出土遺物は後期前葉から出土しているが、土坑の堆積状況や周辺の遺構との関係から後期後葉と比定されよう。

## 第2項 掘立柱建物

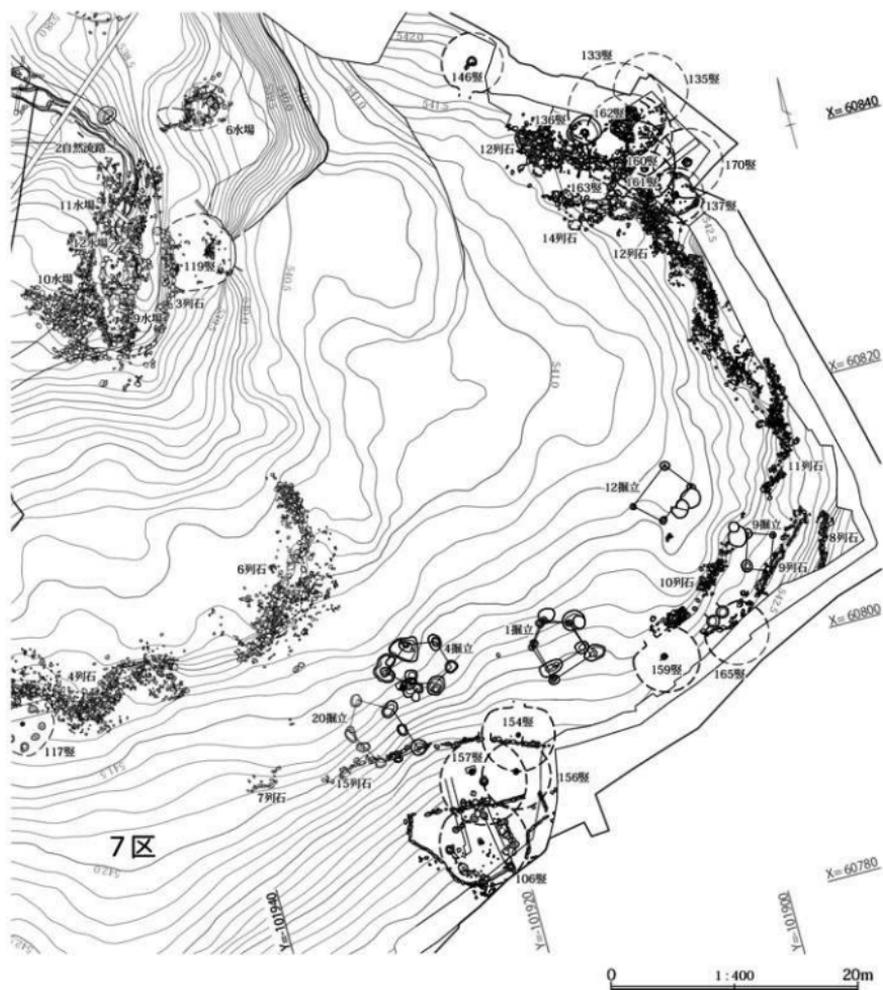
掘立柱建物は、7区南東部の平坦面を中心として、展開していた。平成30年度調査では柱痕を有し、取り囲むように根積み石が組まれた土坑が複数確認され、柱痕の大きさなどから掘立柱建物であると想定した。しかし複数棟の重複が想定され、調査期間・工程上、掘立柱建物として認定した上で、調査することが困難であった。

そのため、整理作業時に掘立柱建物の検討することを踏まえて、土坑として調査を行った。検討の結果、棟数

は立て替えを含めて、44棟を認定した。時期は後期初頭が2棟、後期前葉が3棟、後期中葉が2棟、後期後葉が8棟、晩期前葉が2棟、晩期前葉から中葉が25棟、晩期中葉2棟であった。立地は、等高線に直行または平行するように構築され、竪穴建物とは別空間で構築されていた。形態についても方形や亀甲形などがみられたため、規格及び性格を含めて第4章で扱う。掘立柱建物の法量は、第983図のように計測を行った。遺物は、柱穴と想定した帰属の土坑に掲載したので、各土坑の図を参照されたい。



第312図 掘立柱建物全体図(後期後葉～晩期)



第313図 掘立柱建物全体図(後期前葉~中葉)

第5表 掘立柱建物一覧表①

遺構名称	No	調査年度	調査区	地区	グリッド	時期	主軸方向	平面形態	類型	長軸	短軸	遺構の重複		柱頭方相図め	柱頭	備考
												(新)	(古)			
1号掘立柱建物 a	800	7	25	90	C・D・1～3	後期中葉	N-70°-E	5本柱	B	240	330	365	1号掘立柱建物b,c 2号掘立柱建物	○	○	
1号掘立柱建物 b	800	7	25	90	C・D・1～3	後期中葉	N-70°-E	5本柱	B	310	360	440	1号掘立柱建物c 2号掘立柱建物	○	○	
1号掘立柱建物 c	800	7	25	90	C・D・1～3	後期後葉	N-83°-E	4本柱	A	210	250		1号掘立柱建物、 b,128号掘立柱建物	○	○	
2号掘立柱建物 a	800	7	25	90	C・D・1～3	晩期前葉～中葉	N-94°-W	7本柱	B	470	440	610	1号掘立柱建物 8号掘立柱建物	○	○	
2号掘立柱建物 b	801	7	25	90	C・D・1～3	晩期前葉～中葉	N-101°-W	5本柱	B	410	440	560	1号掘立柱建物 8号掘立柱建物	○	○	
2号掘立柱建物 c	800	7	25	90	C・D・1～3	晩期前葉～中葉	N-100°-W	5本柱	B	420	440	570	1号掘立柱建物 8号掘立柱建物	○	○	
2号掘立柱建物 d	800	7	25	90	C・D・1～3	晩期前葉～中葉	N-88°-E	5本柱	B	360	290	510	1号掘立柱建物 8号掘立柱建物	○	○	
2号掘立柱建物 e	800	7	25	90	C・D・1～3	晩期前葉～中葉	N-88°-E	5本柱	B	310	220	460	1号掘立柱建物 8号掘立柱建物	○	○	
2号掘立柱建物 f	800	7	25	90	C・D・1～3	晩期前葉～中葉	N-104°-W	5本柱	B	310	390	380	1号掘立柱建物 8号掘立柱建物	○	○	
3号掘立柱建物	800	7	25	90	F・G・3・4	晩期中葉	N-44°-E	5本柱	B	410	380	450	126号掘立柱建物	○	○	
4号掘立柱建物	800	7	25	90	F・G・1・2	晩期前葉	N-80°-W	5本柱	C	220	380	540	45号埋設土器	○	○	
5号掘立柱建物 a	800	7	25	90	D・9・10	後期後葉	N-62°-W	4本柱	A	380	340			○	○	
5号掘立柱建物 b	800	7	25	90	D・7・8 D・7～9	後期後葉	N-68°-W	4本柱	A	330	320			○	○	
5号掘立柱建物 c	800	7	25	90	D・8～10 D・9	後期後葉	N-40°-E	4本柱	A	380	270			○	○	
5号掘立柱建物 d	800	7	25	90	D・E・8・9	晩期前葉～中葉	N-28°-E	4本柱	A	430	300			○	○	

第5表 掘立柱建物一覽表②

遺構名称	No	調査年度	調査区	地区	グリッド	時期	主軸方向	平面形態	類型	長軸	短軸	発出部 長軸	遺構の重複		柱間方 相関係	柱間	備考
													(新)	(古)			
5号掘立柱建物 e		E00	7	25	90 C・E・B・9 D・7・9	縄明前期～中葉	N-26°-E	6本柱	B	400	520	490			○	○	○
5号掘立柱建物 f		E00	7	25	90 C・E・B・9 D・7・9 E・8	縄明前期～中葉	N-26°-E	6本柱	B	440	400	460			○	○	○
5号掘立柱建物 g		E00	7	25	90 C・E・B・9 D・7・9 E・9	縄明前期～中葉	N-26°-E	6本柱	B	440	390	470			○	○	○
5号掘立柱建物 h		E00	7	25	90 C・D・B・9	縄明前期～中葉	N-35°-E	5本柱	B	330	300	350			○	○	○
5号掘立柱建物 i		E00	7	25	90 C・D・B・9	縄明前期～中葉	N-27°-E	6本柱	B	380	410	410			○	○	○
6号掘立柱建物 a		E00	7	25	90 E・9 G・H・B・9	縄明前期～中葉	N-33°-E	4本柱	A	380	350				○	○	○
6号掘立柱建物 b		E00	7	25	90 C・H・B・9	縄明前期～中葉	N-30°-E	5本柱	B	360	300	660			○	○	○
6号掘立柱建物 c		E00	7	25	90 C・H・B・9	縄明前期～中葉	N-71°-E	5本柱	B	330	360	570			○	○	○
6号掘立柱建物 d		E00	7	25	90 C・H・B・9	縄明前期～中葉	N-88°-W	5本柱	B	380	270	480			○	○	○
6号掘立柱建物 e		E00	7	25	90 C・H・B・9	縄明前期～中葉	N-30°-W	6本柱	C	380	330	500			○	○	○
6号掘立柱建物 f		E00	7	25	90 C・H・B・9	縄明前期～中葉	N-48°-W	6本柱	C	410	360	680			○	○	○
6号掘立柱建物 g		E00	7	25	90 C・H・B・9	縄明前期～中葉	N-44°-W	6本柱	C	330	340	630			○	○	○
6号掘立柱建物 h		E00	7	25	90 C・H・B・9	縄明前期～中葉	N-47°-W	6本柱	C	380	450	780			○	○	○
6号掘立柱建物 i		E00	7	25	90 C・H・B・9	縄明前期～中葉	N-72°-W	6本柱	C	480	380	740			○	○	○
7号掘立柱建物		E00	7	25	90 F・6・7	縄明前期～中葉	N-24°-W	6本柱	C	260	360	490			○	○	○

第5表 掘立柱建物一覧表③

遺構名称	No	調査年度	調査区	地区	ゾーン	時期	主軸方向	平面形態	類型	長軸	短軸	遺構の重複		柱間	備考
												(新)	(古)		
8号掘立柱建物	800	7	25	90	C・D・1～3	晩期前葉～中葉	N-69°-E	4本柱	A	210	320	2号掘立		○	○
9号掘立柱建物	800	7	25	89	X・Y・3・4	後期初頭	N-37°-E	4本柱	A	430	380		9号列石 Z276, 2319, 2345土		○
10号掘立柱建物	800	7	25	89	X・Y・2・3	晩期中葉	N-20°-E	4本柱	A	290	210		Z261土		○
11号掘立柱建物	800	7	25	90	X・Y・3・4 Y・2・4	後期初頭	N-47°-E	4本柱	A	450	370	Z343土			○
12号掘立柱建物	800	7	25	90	Y・4 A・3・5	後期前葉	N-54°-E	4本柱	A	420	280				○
13号掘立柱建物	800	7	25	90	A・B・2・3	後期後葉	N-46°-W	4本柱	A	360	300	14, 15掘立			○
14号掘立柱建物	800	7	25	90	A・B・2・3	後期後葉	N-55°-W	4本柱	A	400	280	15掘立			○
15号掘立柱建物	800	7	25	90	A・B・2・3	後期後葉	N-39°-W	4本柱	A	310	250		13, 14掘立		○
16号掘立柱建物	800	7	25	90	B・C・3・4 D・3	晩期前葉	N-72°-W	4本柱	A	560	540	17掘立			○
17号掘立柱建物	800	7	25	90	B・3・4 C・3・5, D・4	晩期前葉	N-59°-W	4本柱	A	660	450		16掘立		○
18号掘立柱建物	800	7	25	90	I・J・3・6	晩期前葉～中葉	N-44°-E	5本柱	B	280	280	370			○
19号掘立柱建物	800	7	25	90	A・7・8	晩期前葉～中葉	N-38°-E	6本柱	C	210	190	280	22重石		○
20号掘立柱建物	800	7	25	90	G・1, H・1・2 G・H・25	後期前葉	N-20°-W	6本柱	C	380	350	580	52埋設土器		○
21号掘立柱建物	800	7	25	90	A・2～4 K・3, Y・3・4	後期後葉	N-45°-E	4本柱	A	520	370		130号部穴建物		○

## 1号掘立柱建物(第314、315、318、319図)

調査年度 平成30年度

位置 90区C・D-1～3

**経過** 127号竪穴建物と128号竪穴建物間に、複数の土坑を確認した。土坑内には、根巻石が確認され、柱穴と判断した。根巻石を伴った柱穴は、等間隔に配置されており、掘立柱建物と判断した。これらの柱穴、切り合っていることから、複数棟立てられたと判断し、整理作業時に3棟の重複を想定した。

**重複** 2号掘立柱建物よりも新しく、3棟のうち、c、a、bの順に変遷する。1号掘立柱建物cと128号竪穴建物の関係は、上面に128号竪穴建物の埋費が構築されていることから、後者の方が新しい。

**形状** 緩傾斜地の等高線方向に直交する形で建てられ、aとbは5本柱の片側に棟持ちを伴い、cは4本柱の方形を呈する。両者ともに規模は一間×一間である。aは、長軸240cm、短軸330cm、張り出し部長軸365cm、bは、長軸310cm、短軸360cm、張り出し部長軸440cm、cは、長軸210cm、短軸250cmを測る。

**柱穴** 1号掘立柱建物a～cは、楕円形または不整形形を呈し、各柱穴は長軸120～140cm、短軸90～100cm、深さ100cm前後を測る。柱穴内には、多量の礫が詰まっており、中央部には柱痕が確認された。aとbの柱痕は、30cm前後、cは、50cm前後を測る。柱痕の周囲には、柱を取り巻くように根積めがされていた。

**所見** 1号掘立柱建物a、bは、主軸方向が同一であり、同一の柱穴を用いて、利用されていることから、短期間で、改築されたと想定される。

時期 a、b：後期中葉、c：後期後葉

## 2号掘立柱建物(第314、316～319図)

調査年度 平成30年度

位置 90区C・D-1～3

**経過** 127号竪穴建物と128号竪穴建物間に、複数の土坑を確認した。土坑内には、根巻石が確認され、柱穴と判断した。根巻石を伴った柱穴は、等間隔に配置されており、掘立柱建物と判断した。これらの柱穴、切り合っていることから、複数棟繰り返して建てられたと判断し、整理作業時に7棟の重複を想定した。

重複 1号掘立柱建物、8号掘立柱建物よりも古い。2

号掘立柱建物の内訳は、aからfへと変遷する。

**形状** 緩傾斜地の等高線方向と直交する形で、建てられ、張り出し部を北方向へ築造する。構造は、片側に棟持ちを伴う掘立柱建物で、aは7本柱、b～fは、5本柱と想定される。前者は、一間×二間、後者は一間×一間であった。最大はaで、長軸470cm、短軸440cm、最小はeで、長軸310cm、短軸220cm、張り出し部長軸460cmであった。

**柱穴** 楕円形または不整形形を呈する。各柱穴は長軸150cm前後、短軸120cm前後、深さ100cm前後を測る。柱穴内には、多量の礫が詰まっており、中央部には柱痕が確認された。柱痕は、50cm前後をはかる。柱痕の周囲には、柱を取り巻くように根積めがされていた。

**所見** 2号掘立柱建物は、主軸方向が同一であり、同一の柱穴を用いて、利用されていることから、短期間で、改築されたと想定される。

時期 晩期前葉～中葉

## 8号掘立柱建物(第314、316～319図)

調査年度 平成30年度

位置 90区C・D-1～3

**経過** 127号竪穴建物と128号竪穴建物間に、複数の土坑を確認した。土坑内には、根巻石が確認され、柱穴と判断した。根巻石を伴った柱穴は、等間隔に配置されており、掘立柱建物と判断した。これらの柱穴が切り合っていることから、複数棟建てられたと判断した。

整理作業時に想定した2号掘立柱建物とは、規格が異なることから、8号掘立柱建物として扱った。

重複 2号掘立柱建物よりも新しい。

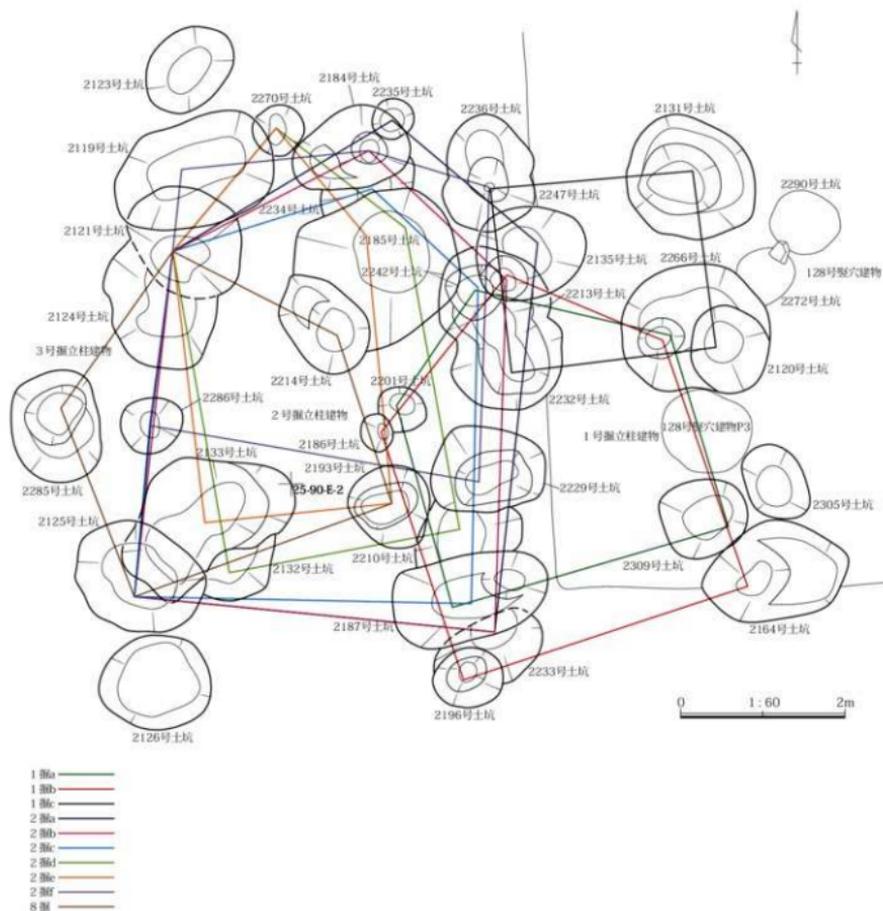
**形状** 緩傾斜地の等高線方向に直交する形で建てられ、5本柱の片側に棟持ちを伴う。規模は、長軸210cm、短軸320cm、張り出し部380cmを測る。

**柱穴** 柱穴は、楕円形または不整形形を呈し、各柱穴は長軸130cm前後、短軸100cm前後、深さ100cmを測る。柱穴内には、部分的に礫が詰まっており、中央部には柱痕が確認された。

柱痕は、50cm前後をはかる。柱痕の周囲には、柱を取り巻くように根積めがされていた。

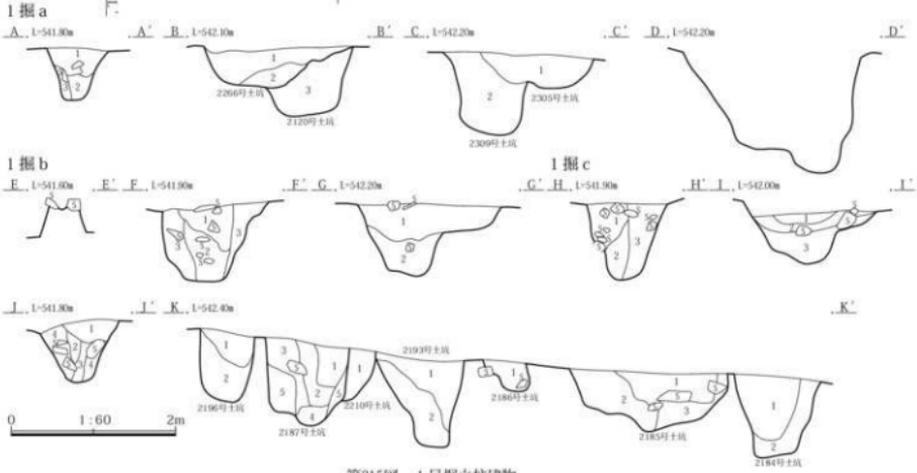
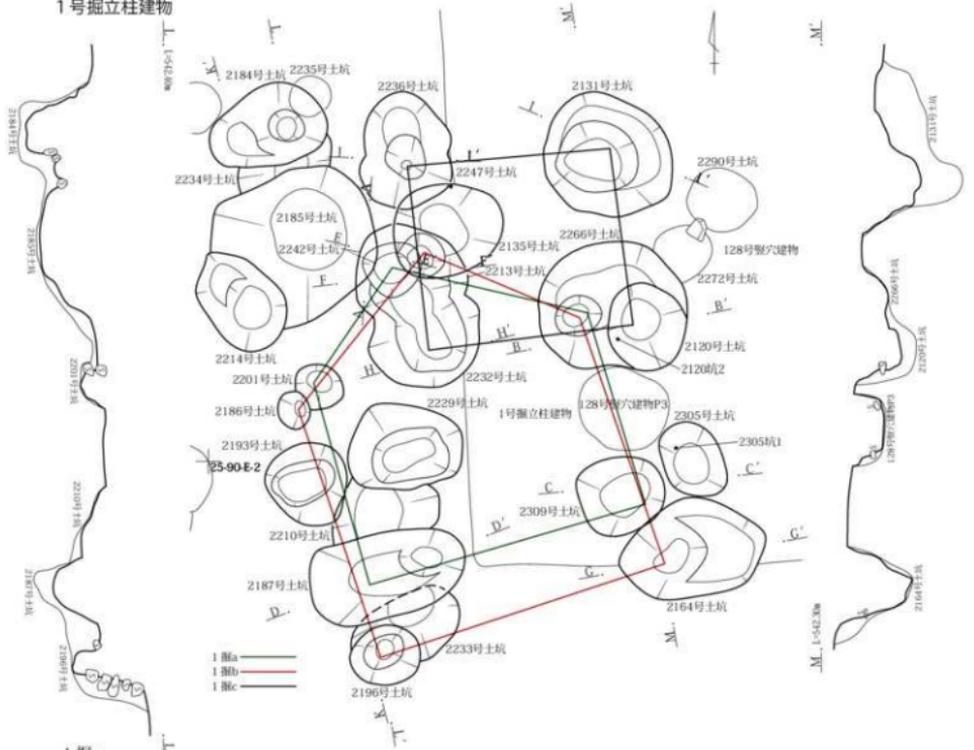
**所見** 2号掘立柱建物廃絶後、2号掘立柱建物の柱穴を使用して構築されたと想定した。

時期 晩期前葉～中葉



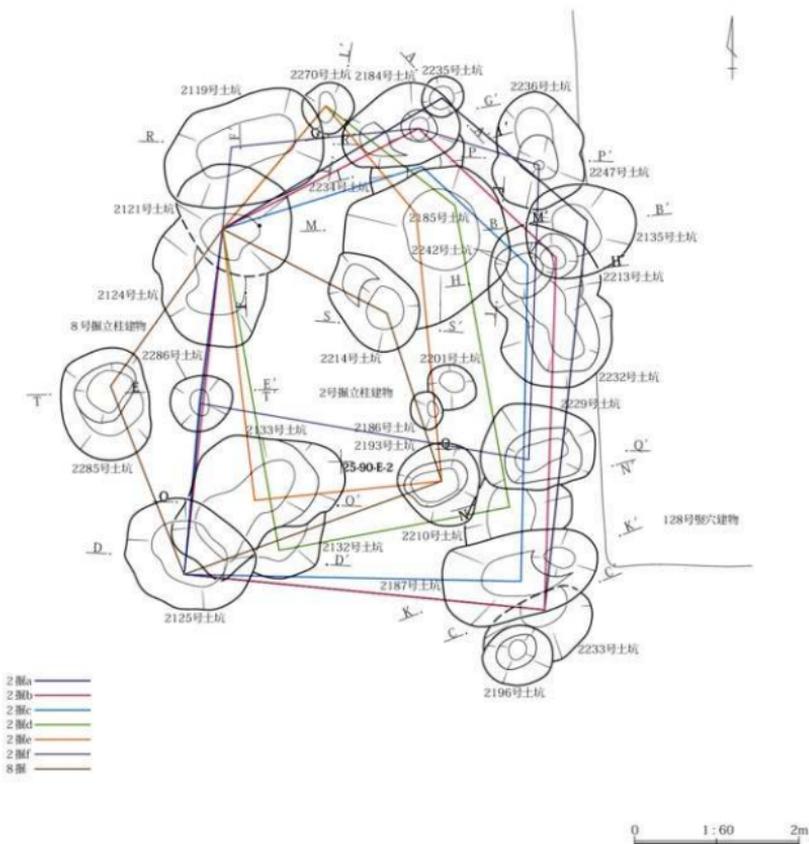
第314図 1・2・8号掘立柱建物

1号掘立柱建物



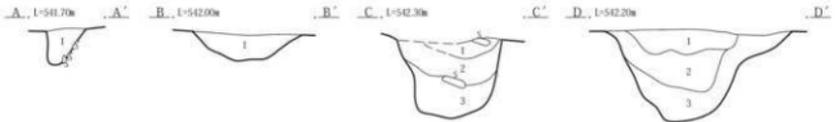
第315図 1号掘立柱建物

2・8号掘立柱建物

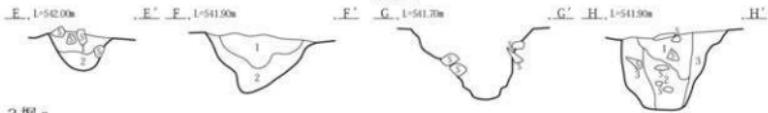


第316図 2・8号掘立柱建物(1)

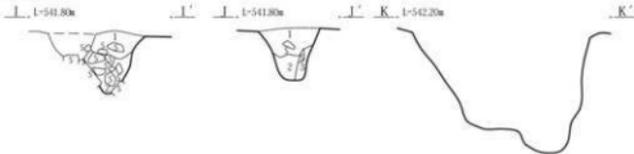
2掘 a



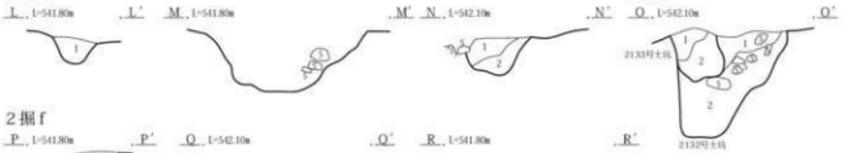
2掘 b



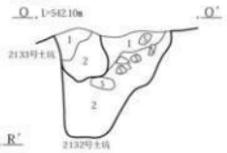
2掘 c



2掘 d



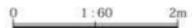
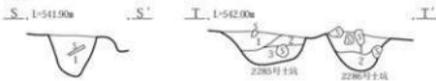
2掘 e



2掘 f

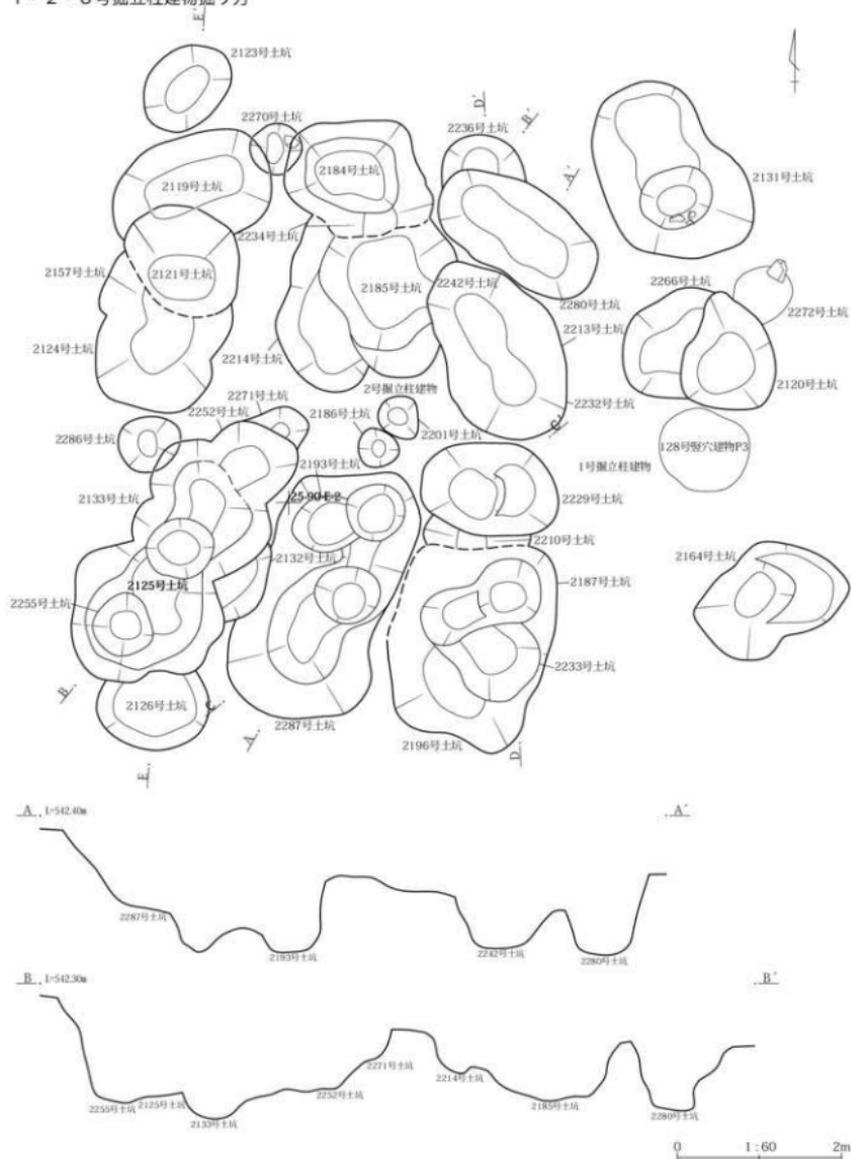


8掘

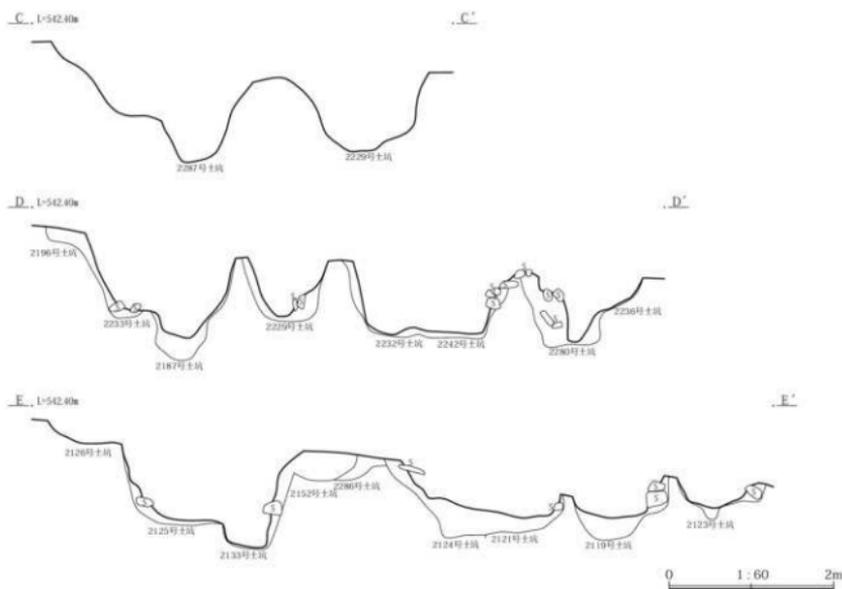


第317図 2・8号掘立柱建物(2)

1・2・8号掘立柱建物掘り方



第318図 1・2・8号掘立柱建物掘り方(1)



第319図 1・2・8号掘立柱建物跡方(2)

## 3号掘立柱建物(第320図)

調査年度 平成30年度

位置 90区C・D-1~3

**経過** 126号竪穴建物周辺の遺構確認を行った際、根巻石を伴う土坑を確認した。根巻石を伴う土坑は、73号配石として調査した2404号土坑も同様の傾向が見られ、規則的に配列することから、整理作業時に3号掘立柱建物として判断した。

**重複** 土層や切り合い関係から126号竪穴建物廃絶後、造られたと想定される。

**形状** 緩傾斜地の等高線方向に直交する形で建てられ、6本柱の両側に棟持ちを伴う亀甲形の掘立柱建物である。規模は、長軸410cm、短軸380cm、張り出し部長軸450cmを測る。

**柱穴** 3号掘立柱建物の柱穴は、楕円形または不整形を呈し、各柱穴は長軸が最大のものは200cmを測り、平均として130cm前後を測る。短軸は、100cm前後、深さ100cm前後を測る。柱穴内には、多量の礫が詰まっており、中央部には柱痕が確認された。柱痕は、50cm前後を測る。

柱痕の周囲には、柱を取り巻くように根積めがされていた。

**所見** 土層関係などから、126号竪穴建物を調査時廃絶時に構築されたと想定される。棟持ち部の柱穴に左右にビットが確認でき、一連とした施設の可能性もある。

時期 晩期中葉

## 4号掘立柱建物(第321図)

調査年度 平成30年度

位置 90区C・D-1~3

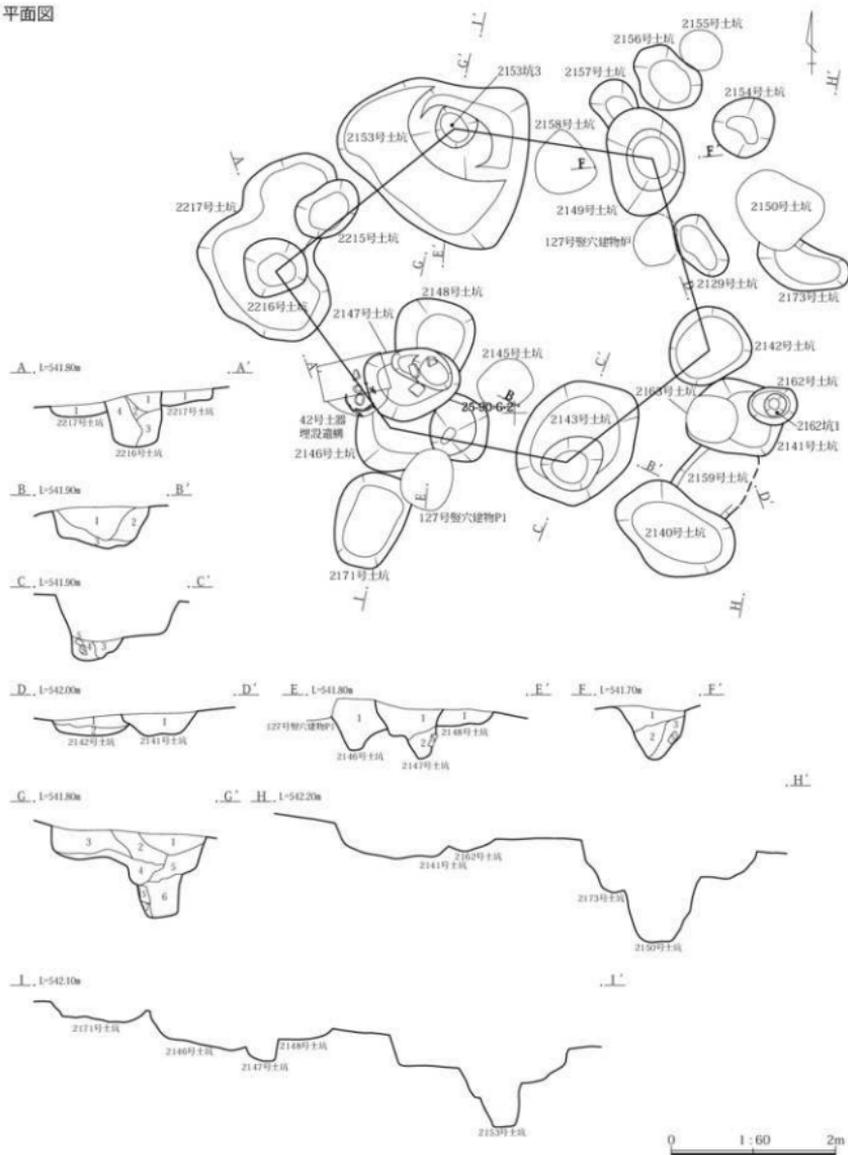
**経過** 127号竪穴建物調査時に複数の土坑を確認した。土坑内には、根巻石が確認され、柱穴と判断した。根巻石を伴った柱穴は、等間隔に配置されており、掘立柱建物と判断した。整理作業時に1棟を想定した。

**重複** 127号竪穴建物よりも新しく、42号埋設土器よりも古い。1号掘立柱建物、2号掘立柱建物よりも古い。

**形状** 緩傾斜地の等高線方向と直交する形で、建てられ、張り出し部を北方向へ築造する。構造は、亀甲形の掘立柱建物で、一間×一間5本柱と想定される。



## 平面図



第321図 4号掘立柱建物

**柱穴** 楕円形または不整形形を呈する。各柱穴は長軸100cm前後、短軸80cm前後、深さ100cmを測る。棟持ち部の幅は540cmを測る。柱穴内には、多量の礫が詰まっており、中央部には柱痕が確認された。柱痕は、50cm前後をはかる。柱痕の周囲には、柱を取り巻くように根積めがされていた。

**所見** 柱を抜き取った痕跡が認められる。

**時期** 後期前葉

5号掘立柱建物(第322～325図、PL.104、105)

**調査年度** 平成30年度

**位置** 90区C・D-1～3

**経過** 127号竪穴建物調査時に複数の土坑を確認した。土坑内には、根巻石が確認され、柱穴と判断した。根巻石を伴った柱穴は、等間隔に配置されており、掘立柱建物と判断した。整理作業時に1棟を想定した。

**重複** 127号竪穴建物よりも新しく、42号埋設土器よりも古い。a～iの順に変遷が想定される。

8号掘立柱建物、2号掘立柱建物よりも古い。

**形状** 緩傾斜地の等高線方向と直交する形で、建てられ、張り出し部を北方向へ築造する。5号掘立柱建物の構造は、方形と亀甲形の掘立柱建物で確認できる。方形は、4本柱で、長軸380cm前後、短軸300cm前後の建物を3棟確認した。亀甲形の掘立柱建物は、5本柱と想定される。長軸240cm、短軸330cm、張り出し部長軸365cmを測る。

**柱穴** 楕円形または不整形形を呈する。各柱穴は長軸120～140cm、短軸100cm前後、深さ100cm前後を測る。棟持ち部の幅は180cmを測る。柱穴内には、多量の礫が詰まっており、中央部には柱痕が確認された。柱痕は、50cm前後を測る。柱痕の周囲には、柱を取り巻くように根積めがされていた。

**所見** 8号掘立柱建物の柱穴は、使用後に2号掘立柱建物の柱穴としても利用されており、埋没過程ですぐに再利用されたと考えられる。

**時期** a～c：後期後葉、d～i：晩期前葉～中葉

6号掘立柱建物(第322、326～328図、PL.104、105)

**調査年度** 平成30年度

**位置** 90区C・D-1～3

**経過** 調査区西側の沢縁辺部において、複数の根積み石を伴う土坑を確認した。根巻石を伴った土坑は、柱穴と考えられ、等間隔に配置されており、掘立柱建物と判断した。整理作業時に9棟の重複を想定した。

**重複** 6号掘立柱建物aからiの順に変遷を遂げると想定される。

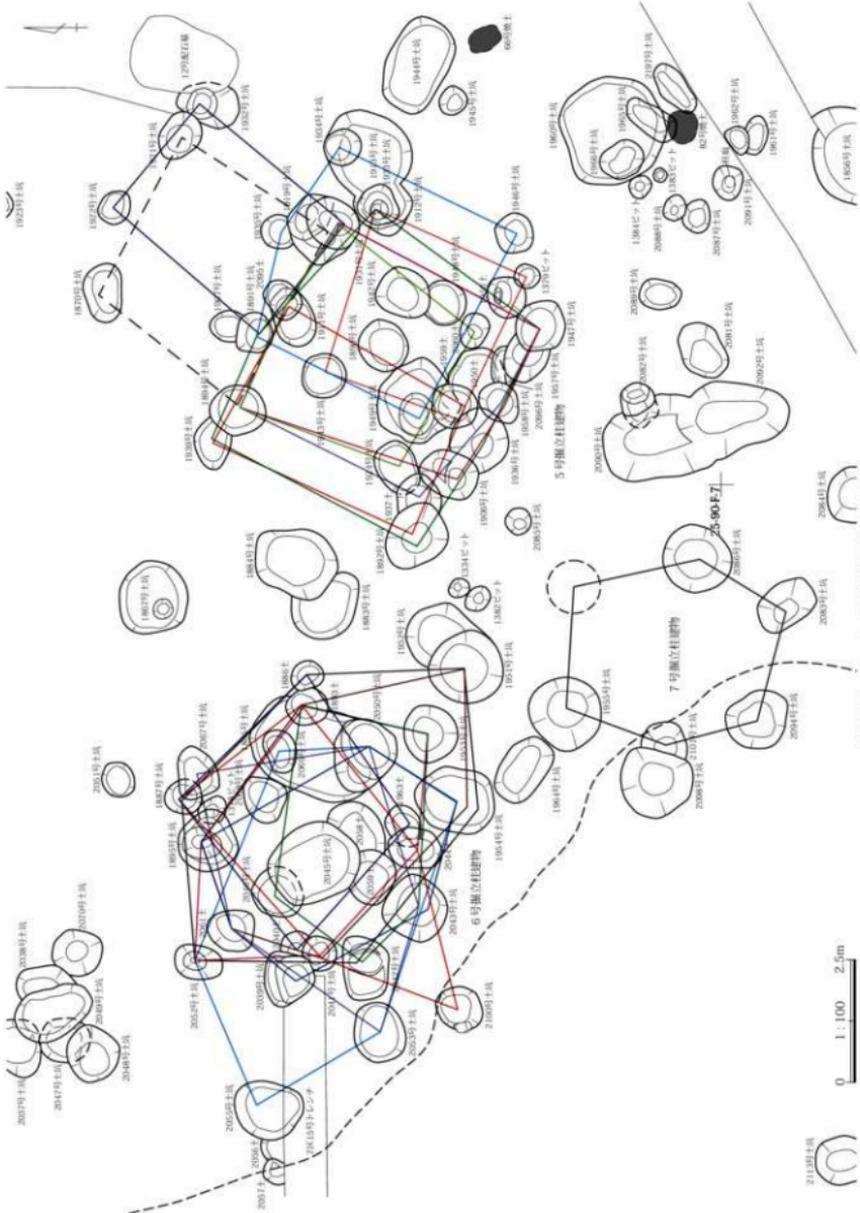
**形状** 緩傾斜地の等高線方向と直交する形で、建てられ、張り出し部を北方向へ築造する。構造は、亀甲形の掘立柱建物で、一間×一間6本柱と想定される。規模は、長軸380～480cm、短軸270～450cm、張り出し部長軸480～680mを測る。

**柱穴** 楕円形または不整形形を呈する。各柱穴は長軸150cm前後、短軸120cm前後、深さ100cm前後を測る。棟持ち部の幅は200cm前後を測る。柱穴内には、多量の礫が詰まっており、中央部には柱痕が確認された。柱痕は、50cm前後をはかる。柱痕の周囲には、柱を取り巻くように根積めがされていた。

**遺物**

**所見** 7号掘立柱建物と同時期に構築されたと想定される。

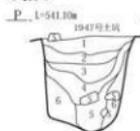
**時期** 晩期前葉～中葉



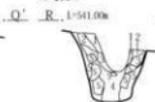
第322図 5・6・7号掘立柱建物全体図



5掘e



5掘f



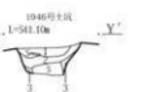
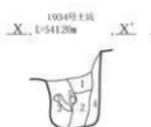
5掘g



5掘h



5掘i



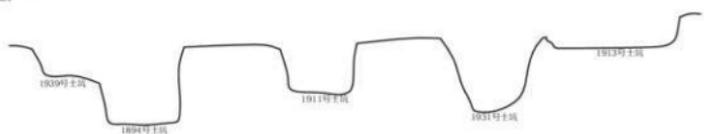
1, L-541.20m



2, L-541.00m



3, L-541.20m



4, L-541.00m

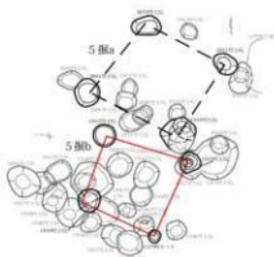


0 1:60 2m

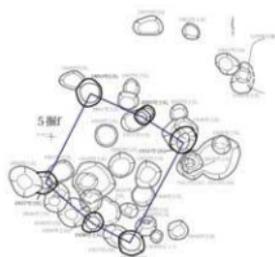
第324図 5号掘立柱建物(2)

第2章 発掘された遺構と遺物

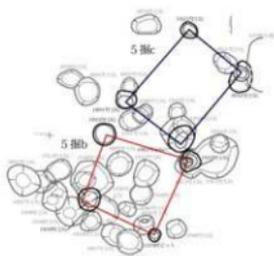
1期



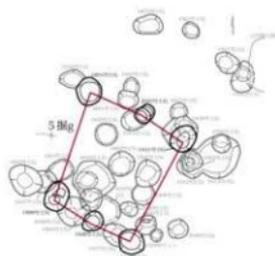
5期



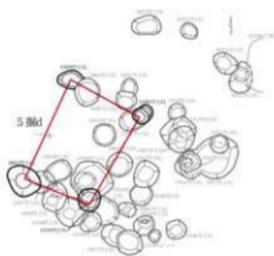
2期



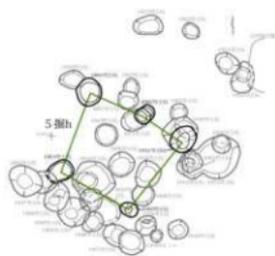
6期



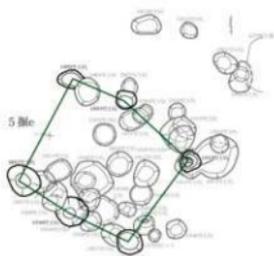
3期



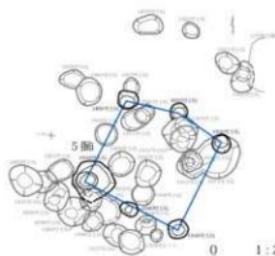
7期



4期



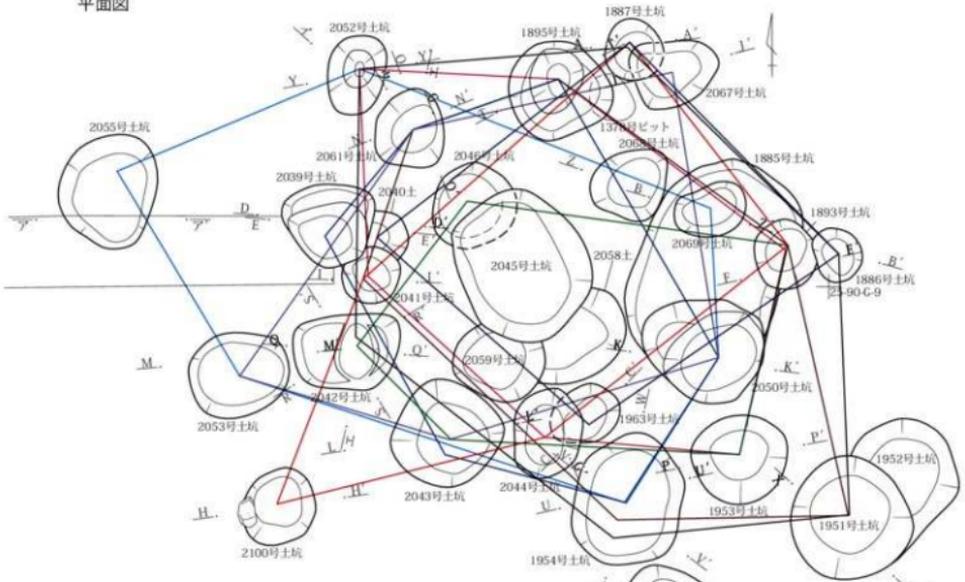
8期



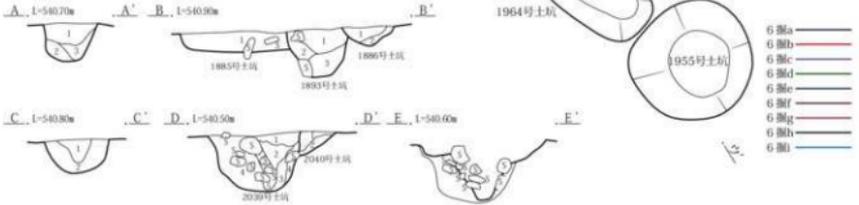
0 1:200 5m

第325図 5号掘立柱建物変遷想定図

平面図



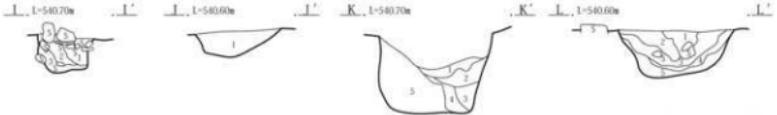
6掘 a



6掘 b

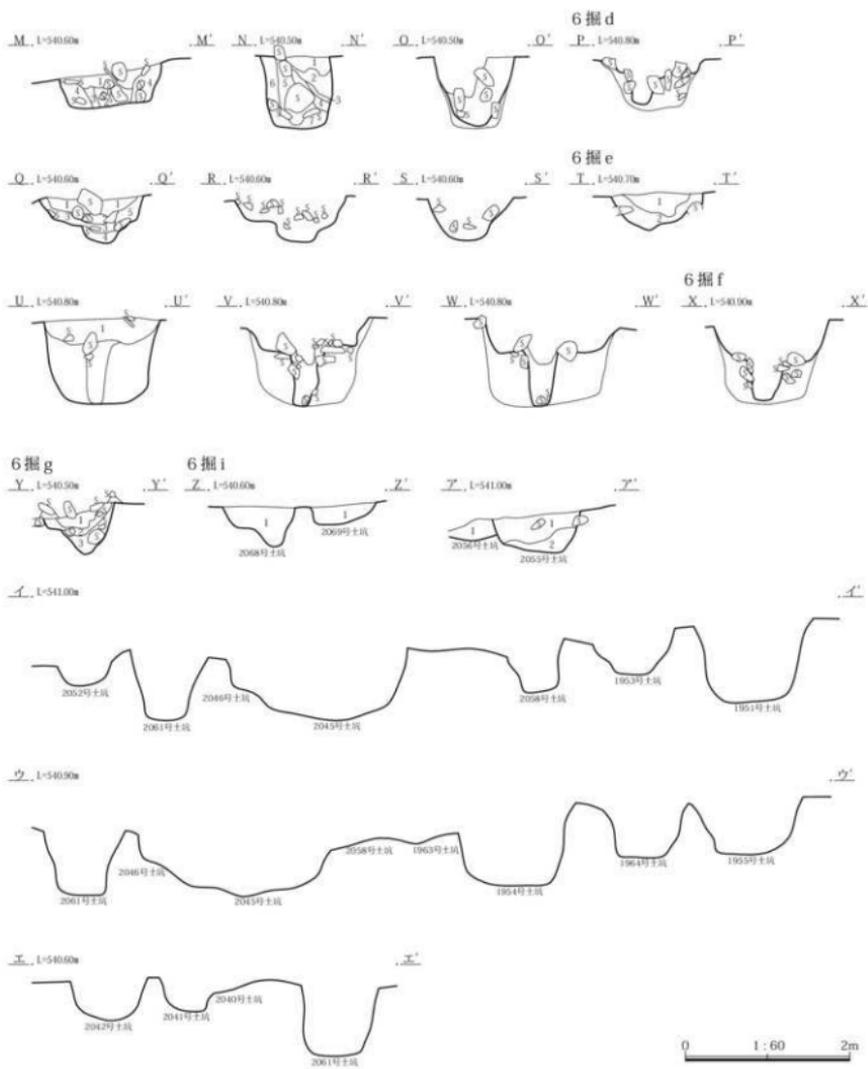


6掘 c



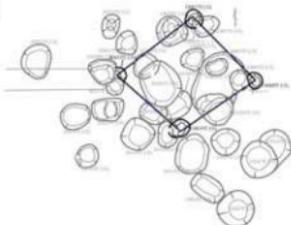
第326図 6号掘立柱建物(1)

第2章 発掘された遺構と遺物

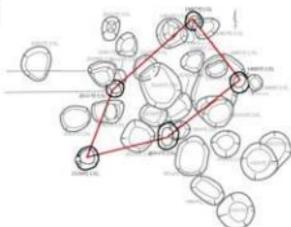


第327図 6号掘立柱建物(2)

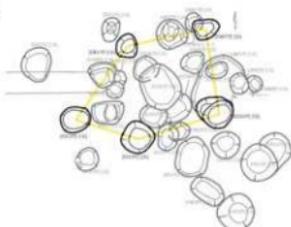
1期



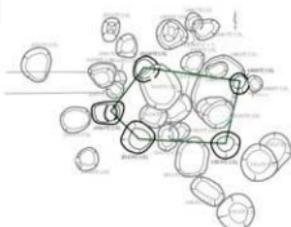
2期



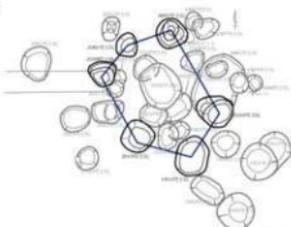
3期



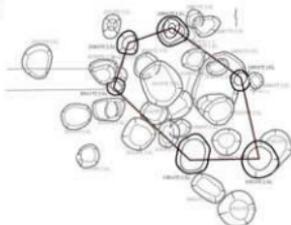
4期



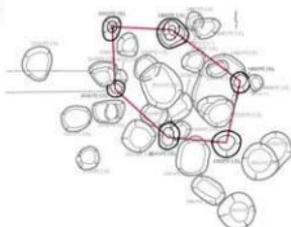
5期



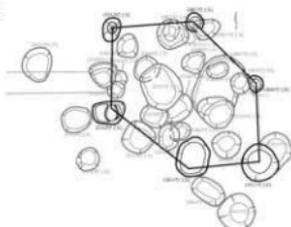
6期



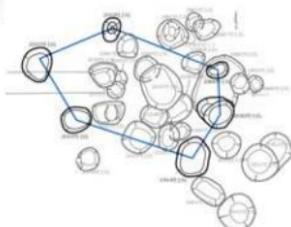
7期



8期



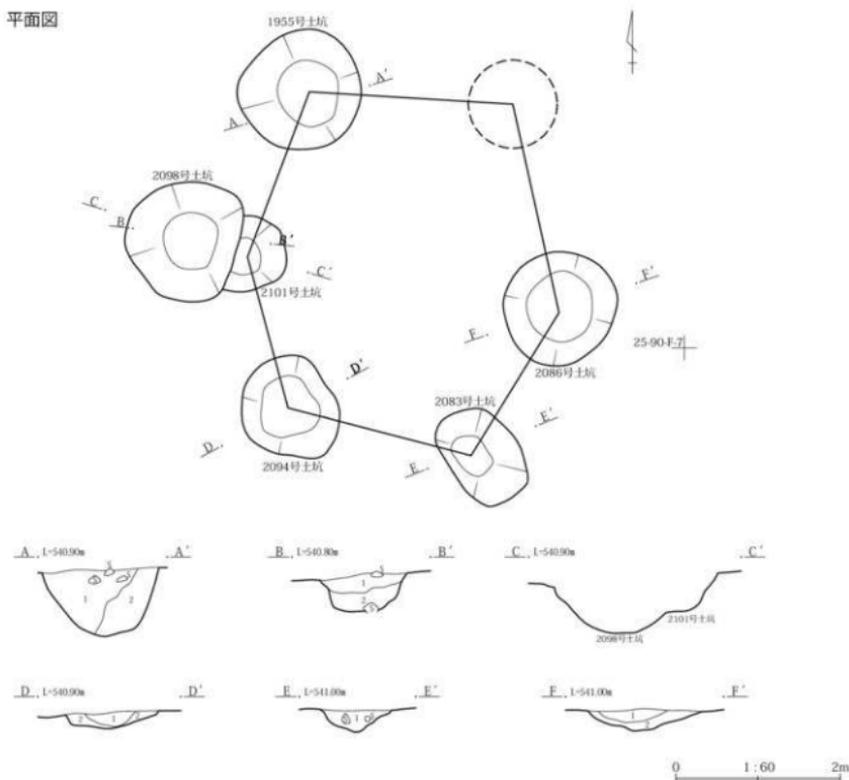
9期



0 1:200 5m

第328図 6号掘立柱建物変遷想定図

平面図



第329図 7号掘立柱建物

7号掘立柱建物(第322、329図、PL.104)

調査年度 平成30年度

位置 90区C・D-1～3

経過 遺構確認時に複数の土坑を確認した。土坑内には、根詰め石が確認されていないが、堆積状況や等間隔に並ぶ位置関係などから、掘立柱建物と考えられた。整理作業時に7号掘立柱建物として扱った。

重複 なし。

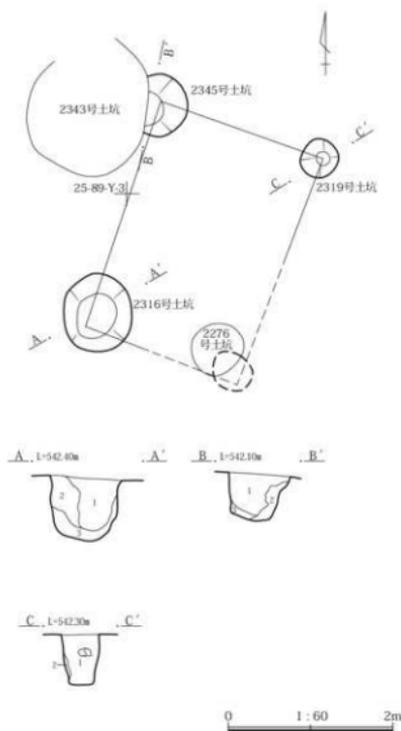
形状 緩傾斜地の等高線方向と直交する形で、構築される。構造は、北東側で柱穴が確認できなかったものの、六角形の掘立柱建物で、6本柱と想定される。

柱穴 楕円形または不整形を呈する。各柱穴は長軸140cm前後、短軸120cm前後、深さ50cm前後を測る。柱穴内には、根積み石は確認できない。柱穴間は、90cmを測り、等間隔に配置されている。

所見 掘立柱建物として想定したが、各柱穴及び柱穴間の規模から柱穴列の可能性も考えられる。また周囲には複数の土坑が確認できており、他にも掘立柱建物あるいは柱穴列が複数存在した可能性がある。

時期 晩期前葉～中葉

## 9号掘立柱建物平面図



第330図 9号掘立柱建物

## 9号掘立柱建物(第330図)

調査年度 平成30、31年度

位置 90区C・D-1～3

経過 7区南東部の丘陵裾から中段段丘面へ下る若干勾配のある緩傾地に位置し、9号列石と10号列石に挟まれた状態に隣接する。平成30年度調査では、2316、2319、2345号土坑として調査を行った。整理事業時には遺構の配列に規則性がみられたこと、土層堆積状況などから掘立柱建物と判断して、9号掘立柱建物として扱った。

重複 9号列石、2276号土坑、2343号土坑よりも古い。10号列石との関係は、別土坑によって切られており、不明である。

形状 緩傾斜地の等高線方向と少しずれるものの、長軸が平行するように掘立柱建物が構築されていた。

掘立柱建物の形状と規模は4本柱の長方形を呈し、長軸270cm、短軸230cmの間×間の規模で構築されていた。

柱穴 柱穴の平面形態は、不整形円ないし円形を呈する。2316号土坑と2319号土坑については、縦位堆積が確認できることから、柱穴と捉えられる。2319号土坑は、縦位堆積が確認できなかったが、形状や、他の柱穴との関係から、本掘立柱建物の柱穴と判断した。南東部の柱穴は、確認できなかったが、想定される位置に隣接する。2276号土坑が柱穴だった可能性も考えられる。

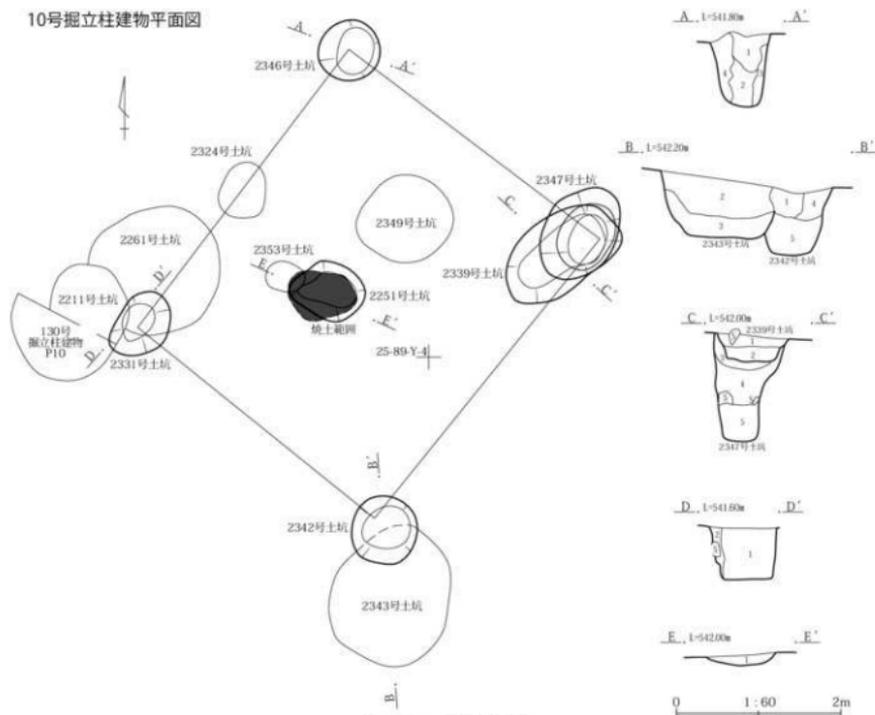
各柱穴の規模は、第10項の土坑一覧表の通りで、平均して50～80cmを測る。柱痕は、30cmを測り、根詰め石はみられない。2345号土坑、2319号土坑間は140cm、2316号土坑、2345号土坑間は180cmを測る。

所見 覆土に共通して、ロームブロックがみられること、南東側の柱穴が不明瞭であるが、等間隔で配置されていることから掘立柱建物と想定される。9号掘立柱建物周辺では、列石に併行するように2315、276号、2278号土坑が形成されている。これらの遺構の関係性を踏まえると変遷過程は、上面に9号列石の構築材が掘えられていることから、9号掘立柱建物が廃絶後、2315、276号、2278号土坑の配列を構築し、さらに9号列石を構築したと想定される。9号列石との関係は、軸方向が異なることから、関係性は希薄と考えられる。一方で2315、276号、2278号土坑と9号列石は平行した位置に構築されており、関連性が考えられる。

時期は、2319号土坑から称名寺2式末段階(第342図-1)が出土しており、後期初頭に比定される。後期以前の掘立柱建物は確認されておらず、9号掘立柱建物の構築は、他の掘立柱建物よりも簡素な作りを呈しており、構築初期段階の様相を呈していると考えられる。南西部には、同じく後期初頭に比定される159号竪穴建物や165号竪穴建物が構築されており、本掘立柱建物との関連性が想定される。

時期 後期初頭

10号掘立柱建物平面図



第331図 10号掘立柱建物

10号掘立柱建物(第331図)

調査年度 平成30年度

位置 90区C・D-1~3

経過 整理作業時に土坑としていた遺構に規則性がみられたことから、10号掘立柱建物とした。

重複 2261号土坑よりも新しい。2347号土坑は、74号配石墓よりも古い。

形状 緩傾斜地の等高線方向に平行する形で構築される。4本柱の長方形を呈し、規模は、長軸440cm、短軸380cmの間×一間の掘立柱建物である。

柱穴 柱穴の平面は、不整形円形で、長軸90~110cmを測る。柱痕は、40~50cmを測り、2331号土坑は断面が、箱形状を呈する。根詰め石は、2347号土坑のみで確認され、底面に柱を囲むように1層確認された。その他は素掘りの柱穴と考えられ、2346、2331号土坑は縦位堆積が確認できた。

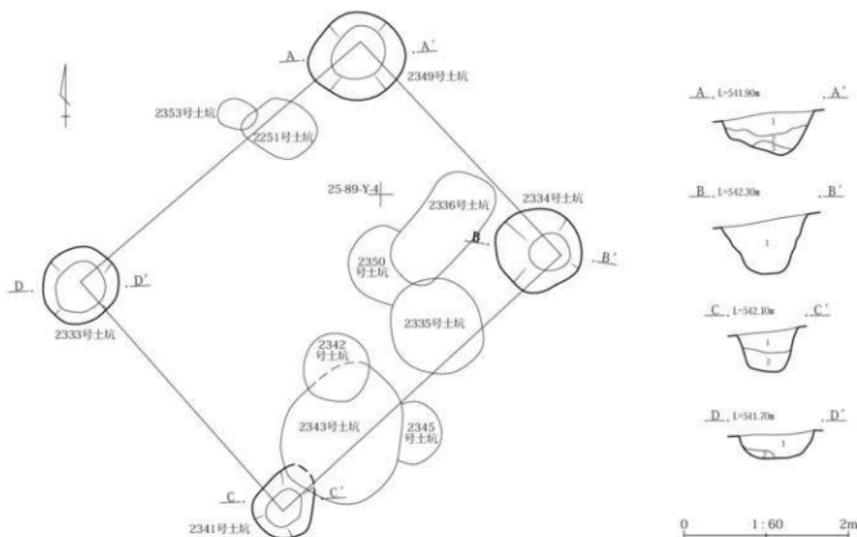
2347号土坑に隣接した2339号土坑は、土坑の形状から2347号土坑の柱の抜き取り痕と想定され、2343号土坑も同様の性格に位置づけられる。

所見 本掘立柱建物の柱穴は、2347号土坑で根積み石を伴い、他は素掘りの柱穴で形態が異なることから、2347号土坑は別の掘立柱建物の可能性も考えられる。

また2347号土坑の抜き取り痕と考えられる2339号土坑は、隣接して74号配石墓が構築されており、配石墓構築時に抜き取られたと考えられる。

本掘立柱建物の中央部に位置する225号土坑では焼土が確認されている。が体土器等は確認できなかったが、掘立柱建物との関係から、<sup>4)</sup>の可能性が考えられ、本掘立柱建物と一連とした平地式建物のような遺構だった可能性もあり得る。

時期 晩期中葉



第332図 11号掘立柱建物

## 11号掘立柱建物(第332図)

調査年度 平成30年度

位置 90区C・D-1～3

**経過** 7区南東部の緩傾地に位置し、10、11号列石の南側、10号掘立柱建物、21号掘立柱建物の間に隣接する。平成30年度調査では、2333、2334、2341、2349号土坑として調査を行った。整理作業時に根積み石は確認できなかったもの、土坑の配列に規則性がみられたことから、11号掘立柱建物として扱った。

**重複** 2343号土坑、76号配石墓、10号掘立柱建物よりも古い。10号掘立柱建物との切り合い関係は不明だが、周辺遺構との関係性や出土遺物から、本掘立柱建物が古いと考えられる。

**形状** 緩傾斜地の等高線方向に平行する形で構築される。4本柱の長方形を呈し、規模は、長軸450cm、短軸350cmの間×一間である。

**柱穴** 柱穴の平面は、不整形形を呈する。各柱穴の規模は、第10項の土坑一覧表の通りで、最大の長軸は100cm前後を測る。柱痕は、50cmを測る。根巻石は、2347号土坑のみで確認され、底面に柱を囲むように1層確認され

た。その他は素掘りの柱穴である。2347号土坑に隣接した2339号土坑は、2347号土坑の柱の抜き取り痕と想定される。

**所見** 素掘りの柱穴を有する形態や2333号土坑、2341号土坑、2349号土坑で称名寺1式が出土していることから、称名寺1式期に属すると考えられる。9号掘立柱建物よりも古いと考えられ、出現期の様相を呈している。11号掘立柱建물에隣接している10号列石との関係は、平行して構築され、上面に石がみられない空間を有しているが、出土遺物から列石は晩期中葉と考えられ、空間も後世の遺構によるものと判断される。

時期 後期初頭

12号掘立柱建物(第333図)

調査年度 平成30年度

位置 90区C・D-1~3

経過 整理作業時に2283、2322、2323土坑、130号竪穴建物として調査した遺構に規則性がみられたことから、12号掘立柱建物とした。

重複 130、131号竪穴建物よりも古い。

形状 緩傾斜地の等高線方向に平行する形で構築される。4本柱の長方形を呈し、規模は、長軸400cm、短軸280cmの間×一間である。

柱穴 柱穴の平面は不整形形で、各柱穴の規模は、第10項の土坑一覧表の通りで、平均して50cm前後を測る。柱痕は、30cm前後を測る。2283、2323土坑、130号竪穴建物P8の覆土中には、20cm程の礫が縁辺部に積まれた状態で出土しており、根積み石と判断した。130号竪穴建物P8は縦位堆積が認められることを踏まえると、柱穴と想定される。

所見 2322号土坑には、素掘りの柱穴であるが、根積みの柱穴を主体とした掘立柱建物だったと想定される。土坑内からは、遺物は出土していないが、周辺の遺構との関係から後期後葉以前と考えられる。

時期 後期前葉以前

13号掘立柱建物(第333図)

調査年度 平成30年度

位置 90区C・D-1~3

経過 整理作業時に土坑としていた遺構に規格外がみられたことから、2295、2307、2312、2317号土坑の組み合わせを13号掘立柱建物とした。

重複 13→14→15号掘立柱建物の順に変遷する。

形状 緩傾斜地の等高線方向に平行する形で構築される。4本柱の方形を呈し、規模は、長軸350cm、短軸320cmの間×一間である。

柱穴 柱穴の平面は円形で、各柱穴の規模は、第10項の土坑一覧表の通りで、最大で100cm前後を測る。柱痕は、30cm前後を測り、根巻石はみられない。

所見 14、15号掘立柱建物と重複しており、出土遺物の時期も差異がないことから短期間に立て替えを行ったと想定される。

時期 後期後葉

14号掘立柱建物(第333図)

調査年度 平成30年度

位置 90区C・D-1~3

経過 整理作業時に土坑としていた遺構に企画性がみられたことから、2293、2295、2307、2318号土坑の組み合わせを14号掘立柱建物とした。

重複 13→14→15号掘立柱建物の順に変遷する。

形状 緩傾斜地の等高線方向に平行する形で構築される。4本柱の方形を呈し、規模は、長軸400cm、短軸380cmの間×一間である。

柱穴 柱穴の平面は円形で、各柱穴の規模は、第10項の土坑一覧表(第18表)の通りで、最大で100cm前後を測る。柱痕は、不明瞭だが30cm前後を測り、根詰め石はみられないことから素掘りの掘立柱建物だと想定される。

所見 13、15号掘立柱建物と重複しており、出土遺物の時期も差異がないことから短期間に立て替えを行ったと想定される。

時期 後期後葉

15号掘立柱建物(第333図)

調査年度 平成30年度

位置 90区C・D-1~3

経過 整理作業時に土坑としていた遺構に規格外がみられたことから、2275、2293、2307、2313号土坑の組み合わせを15号掘立柱建物とした。

重複 13→14→15号掘立柱建物の順に変遷する。

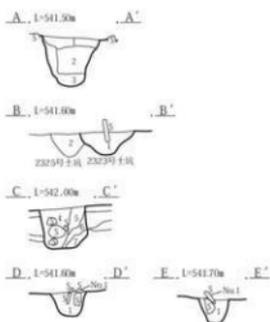
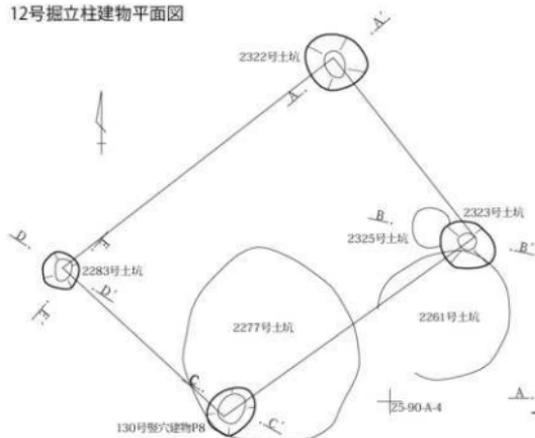
形状 緩傾斜地の等高線方向に平行する形で構築される。4本柱の一边が約300cm前後の方形を呈する。

柱穴 柱穴の平面は円形で、各柱穴の規模は、第10項の土坑一覧表(第18表)の通りで、最大で100cm前後を測る。柱痕は、30cm前後を測り、根詰め石はみられないことから、素掘りの掘立柱建物だと想定される。

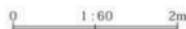
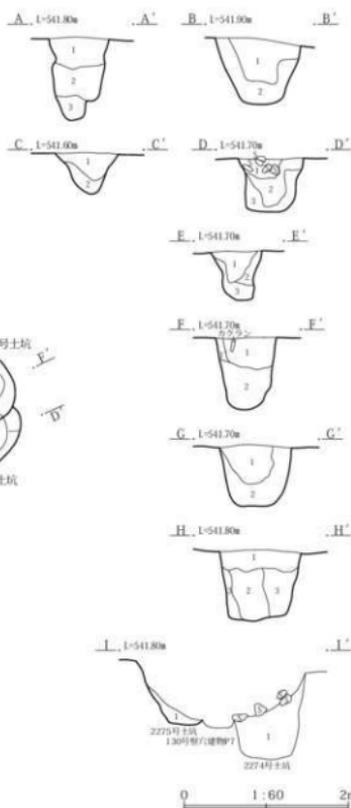
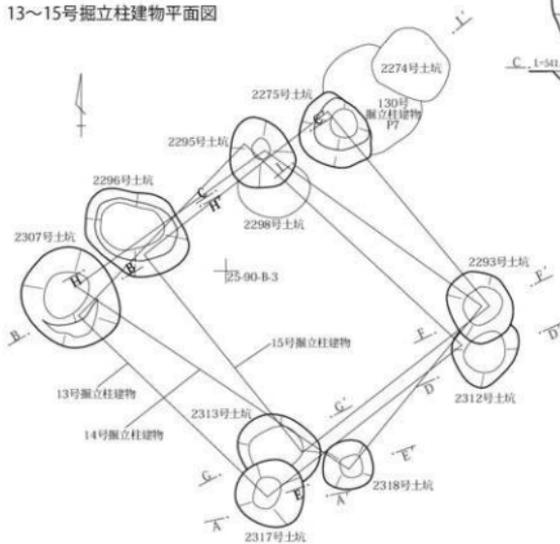
所見 13、14号掘立柱建物と重複しており、出土遺物の時期も差異がないことから、短期間に立て替えを行ったと想定される。

時期 後期後葉

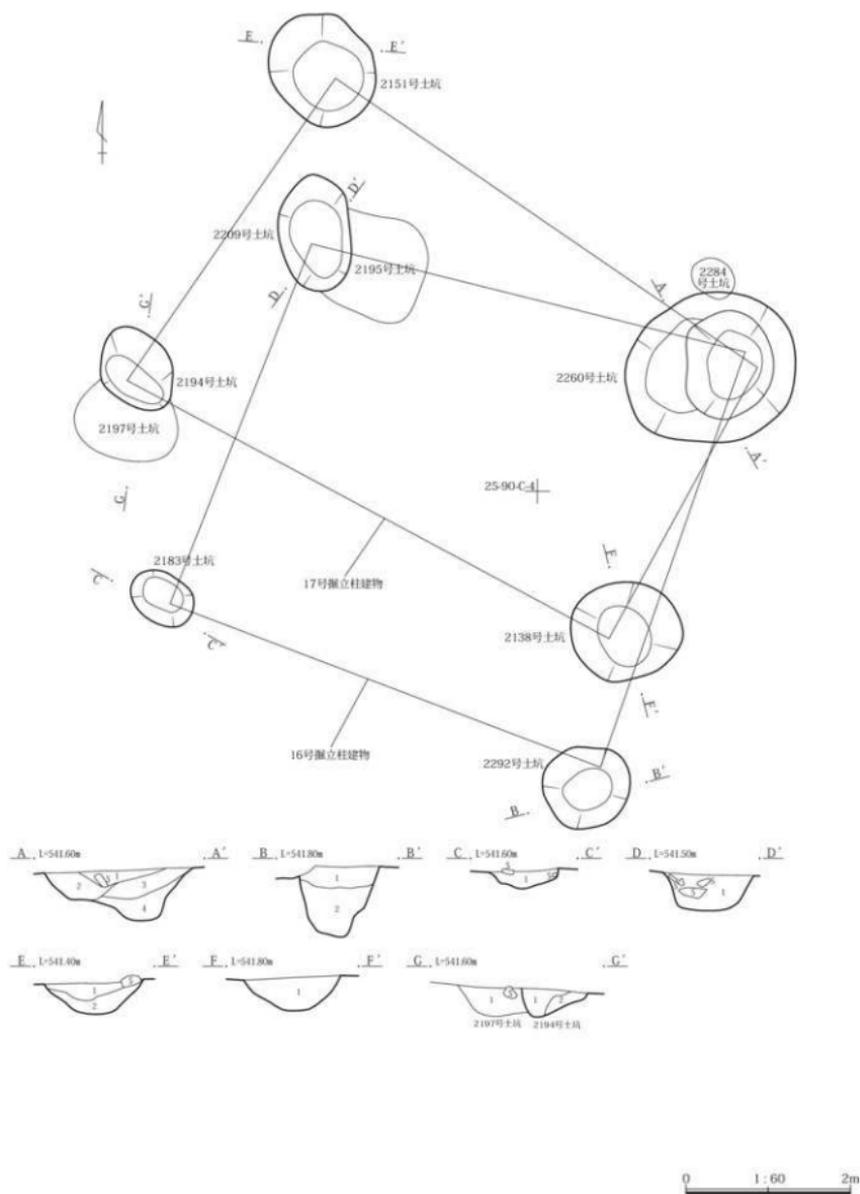
12号掘立柱建物平面図



13~15号掘立柱建物平面図

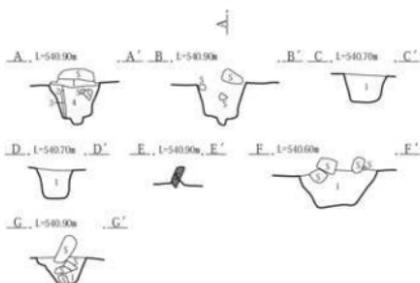
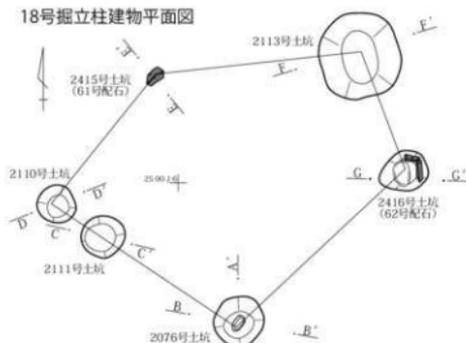


第333図 12～15号掘立柱建物

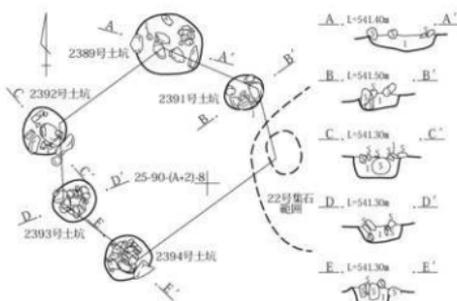


第334図 16・17号掘立柱建物

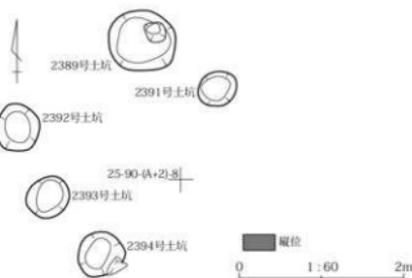
18号掘立柱建物平面図



19号掘立柱建物平面図



19号掘立柱建物掘り方



第335図 18・19号掘立柱建物

## 16号掘立柱建物(第334図)

調査年度 平成30年度

位置 90区C・D-1~3

経過 整理作業時に2183、2209、2260、2292土坑としていた遺構に規格外がみられたことから、16号掘立柱建物とした。

重複 16→17号掘立柱建物の順に変遷する。

形状 緩傾斜地の等高線方向に直交する形で構築される。4本柱の長方形を呈し、規模は長軸630cm、短軸450cmの間×一間である。

柱穴 柱穴の平面は、不整形形で、各柱穴の規模は、第10項の土坑一覧表(第18表)の通りで、平均して130~140cmを測る。柱痕は、80cm前後を測り、根詰め石はみられないことから素掘りの掘立柱建物と判断される。

所見 131号縦穴建物廃絶後、構築されたと想定され、土坑の出土遺物から晩期前葉に帰属する。

時期 晩期前葉

## 17号掘立柱建物(第334図)

調査年度 平成30年度

位置 90区C・D-1~3

経過 整理作業時に2138、2151、2194、2260土坑としていた遺構に規格外がみられたことから、17号掘立柱建物とした。

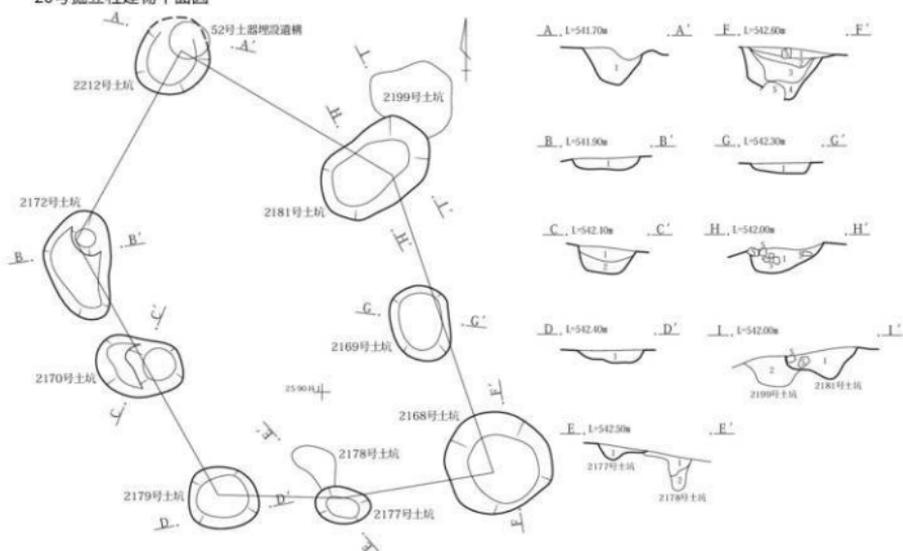
重複 16→17号掘立柱建物の順に変遷する。

形状 緩傾斜地の等高線方向に直交する形で構築される。4本柱の長方形を呈し、規模は長軸570cm、短軸500cmの間×一間である。

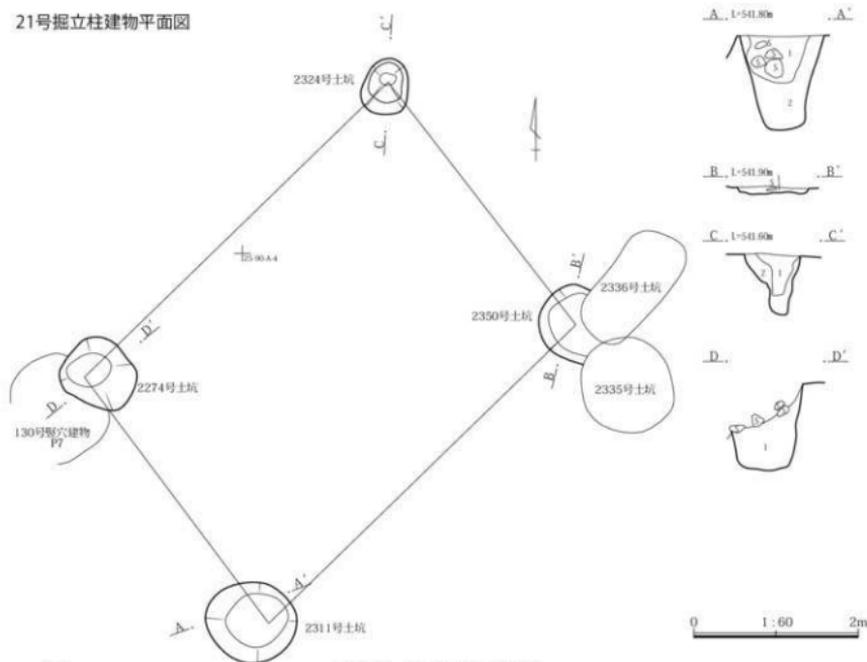
柱穴 柱穴の平面は、不整形形で、各柱穴の規模は、第10項の土坑一覧表(第18表)の通りで、平均して80~100cmを測る。柱痕は、2260号土坑から判断して、80cm前後を測り、根詰め石はみられないことから素掘りの掘立柱建物と判断される。

所見 131号縦穴建物廃絶後、構築されたと想定される。16号掘立柱建物の柱穴を利用したと考えられ、再利用して、

20号掘立柱建物平面図



21号掘立柱建物平面図



構築したと想定される。土坑出土遺物から晩期前葉に帰属する。

**時期** 晩期前葉

#### 18号掘立柱建物(第335図)

**調査年度** 平成30年度

**位置** 90区C・D-1～3

**経過** 整理作業時に土坑(2076、2110、2111号土坑)もしくは配石(61、62号配石)として調査した遺構に規格性がみられたことから、18号掘立柱建物とした。

**形状** 緩傾斜地の等高線方向に直交する形で構築される。7本柱の五角形を呈し、規模は長軸200cm、短軸160cmの間×一間である。

**柱穴** 柱穴の平面は、不整形形で、各柱穴の規模は、第10項の土坑一覧表(第18表)の通りで、平均して40cm前後を測る。柱痕は、20cm前後を測り、柱痕の周囲には、根詰め石が認められる。2415号土坑は、根積み石のみ残存するが本来は2416号土坑ほどの規模を有していたと考えられる。

**所見** 18号掘立柱建物として認定したほかにも根巻石を伴った土坑が確認されており、複数棟存在した可能性がある。

**時期** 晩期前葉～中葉

#### 19号掘立柱建物(第335図)

**調査年度** 平成30年度

**位置** 90区C・D-1～3

**経過** 整理作業時に土坑としていた遺構に規格性がみられたことから、19号掘立柱建物とした。

**重複** 22号集石に壊されており、本掘立柱建物が古い。

**形状** 緩傾斜地の等高線方向に直交する形で構築される。6本柱の亀甲形掘立柱建物と想定される。規模は長軸200cm、棟持ち部の長軸は250cmを測る。

**柱穴** 柱穴の平面は、不整形形で、50cm前後を測る。柱痕は、30cm前後を測り、周囲に根巻石を詰め込む。

**所見** 南東側は、22号集石によって消失している。出土遺物から晩期前葉～中葉に帰属する。亀甲形の掘立柱建物は、7号掘立柱建物等で確認されているが、本掘立柱建物の規模は小さく、配石群と隣接することから、祭祀的な別用途での利用が想定される。

**時期** 晩期前葉～中葉

#### 20号掘立柱建物(第336図)

**調査年度** 平成30年度

**位置** 90区C・D-1～3

**経過** 整理作業時に2181、2212、2168、2169、2177、2170、2172土坑としていた遺構に規格性がみられたことから、20号掘立柱建物とした。

**重複** 52号土器埋設遺構、15号列石に切られており、両遺構よりも古い。

**形状** 緩傾斜地の等高線方向に直交する形で構築される。8本柱の亀甲形を呈し、規模は長軸300cm、短軸250cmの間×一間である。片側に棟持ちを伴い、長軸は380cmを測る。

**柱穴** 柱穴の平面は、不整形形で、各柱穴の規模は、第10項の土坑一覧表(第18表)の通りで、100cm前後を測る。柱痕は、80cm前後を測り、根詰め石はみられなく、素掘りの掘立柱建物と考えられる。

**所見** 本掘立柱建物は、出土遺物から後期前葉に帰属する。北側には隣接して106号竪穴建物が構築されており、関連性が想定される。

**時期** 後期前葉

#### 21号掘立柱建物(第336図)

**調査年度** 平成30年度

**位置** 90区C・D-1～3

**経過** 整理作業時に2274、2311、2324、2350土坑としていた遺構に規格性がみられたことから、21号掘立柱建物とした。

**重複** 130号竪穴建物よりも古く、10号掘立柱建物よりも新しい。

**形状** 緩傾斜地の等高線方向に直交する形で構築される。4本柱の長方形を呈し、規模は長軸520cm、短軸370cmの間×一間の掘立柱建物である。

**柱穴** 柱穴の平面は、不整形形で、各柱穴の規模は第10項の土坑一覧表(第18表)の通りで、100cm前後を測る。縦位堆積は確認できないが、2359号土坑以外で柱痕が確認できた。柱痕は、80cm前後を測り、根詰め石はみられない。2350号土坑は、2335、2336号に切られており、全容は不明だが、柱痕を有していたと想定される。

**所見** 出土遺物から後期後葉に帰属する素掘りの掘立柱建物と考えられる。

**時期** 後期後葉

### 第3項 水場遺構関連施設の調査

本項では、平成30年度に埋没沢内に確認した水場遺構と水場遺構に関連する低湿性土坑やトチ塚について扱う。下記では、まず水場遺構及び関連施設が確認された埋没沢の立地と調査経過について述べ、水場遺構を調査するに至った経緯、埋没沢の埋没過程について述べる。次に個別遺構について解説を行う。

#### 埋没沢の立地と調査経過

本遺跡は、吾妻川上流域右岸の中段段丘面上に位置し、吾妻川とは比高27mを測り、段丘崖を形成している。中段段丘面には、南側の丘陵部から延びる沢がいくつも形成され、流入した土砂や山体崩落によって生じた堆積で、緩やかな緩傾斜面を形成している。埋没沢は緩傾斜面の中央部に位置している。

埋没沢は、7区の南西から北東に向かった延び、南西が上流、北東が下流に位置する。上流部の幅は細く、下流に向かって広がっている。埋没沢の縁辺部には、後期前葉から晩期までの堅穴建物が発見され、沢水の生活用水としての利用が想定される。石川原遺跡周辺では、不動沢などの複雑な地形によって、形成された沢が丘陵部から吾妻川へ沢水を注ぎ込んでいる。確認された埋没沢も同じような様相だったと想定され、涇々と沢水が流れていたと考えられる。

埋没沢の存在は、調査当初から確認されており、埋没沢が立地する箇所は、谷状地形となっており、湧水を利用した水田が形成されていた。発掘調査時は、近世(1面)から中世(3面)にかけての水田が確認されており、湧水を利用して、中世から現代に至るまで水田として使用されてきたことが明らかとなった。

平成29年度には、中世の水田面の調査時に、中世相当面以前の遺構有無の確認のため、谷想定部に2本のトレンチを入れて確認調査を行った。トレンチ調査時には、遺構、遺物は確認できず、地山層とみられる礫層が確認でき、礫層からしみ出した地下水がトレンチ内にあふれている状況であったとされている。

トレンチ調査の結果から、埋没沢部分には遺構はないと判断され、谷想定部の調査は、調査工程や工事日程な

どを考慮して、トレンチ調査による確認のみにとどめる方針となった。

#### 水場遺構関連施設の立地と調査経緯

水場遺構関連施設は、平成30年度調査で沢部の中間地点にあたる箇所を確認した。平成30年度調査では、中世相当面(水田)の調査終了後に重機で3本の下部遺構確認のためのトレンチ調査を行った。トレンチ調査の結果、縄文土器片は出土するものの、遺構の確認には至らなかったため、調査を終了する予定であった。

しかし水田面の3-d面の遺構確認や標高に関して、一部調査が終了していないことが判明し、重機による掘り下げを試みた。3-4面の調査時には、調査時に50cmほどの礫に混じって木材片が出土したため、「3-4面石積み」として調査を行った。所見では、円礫を主体として集積しており、土師器、須臾器などが出土していたため、古代の遺構ととらえた。

さらに「3-4面石積み」の北側には木材が東側に傾いて刺さった状態で確認された。1386号ピットとして断ち割った結果、層的には3-4面で掘り込んだもの、打ち込まれたものではなく5面(縄文時代相当面)から掘り込まれていたことが明らかになった。1386号ピットが柱穴だとすれば、5面における遺構が存在する可能性が高く、集積されていた礫も1号列石に用いられていた石に類似しており、下部に遺構がある可能性は高かった。3-4面から5面相当面までの層位は60cm程あり、また土層が砂礫層であったため、人力による掘削は困難を極めたため、調査工程上早急に判断する必要がある。そのため、重機の稼働日数に余力があったことから、遺構が想定される範囲を5面上面まで重機で掘削を行った。

重機による遺構確認の際、5面相当面において人為的に組まれた石とともに土器片が出土した。形態は、みなかみ町矢瀬遺跡の水場遺構(第989図)の形態に類似していたが、当初は、上面のみ確認できたため、確証を得ることはできなかった。しかし人為的な遺構であることは確かなため、周辺を人力による掘削作業に切り替え、調査を行った。

人力による調査の結果、トチノキの外皮を中心とした堅果類の集中を確認し、塚状に堆積していたことから、1号トチ塚として調査を行い、配石遺構も1号水場遺構

として調査するに至った。1号水場遺構の調査時では、配石内にトチ塚と同様、堅果類や木材が多量に出土し、水場遺構としての性格を確認できた。1号水場遺構の発見より以前に確認していた北側に位置する9～11号水場遺構(調査当時は23～26、32、35号配石)は1号水場遺構発見以前に確認されたが、性格不明の配石遺構として、23～27号配石と個々に調査していた。植物遺存体は確認できなかったものの、形態が1号水場遺構と類似することから、水場遺構として認定した。その後の調査では、沢部内に水場遺構13基、トチ塚1基。低湿性土坑13基を確認し、規模としては関東地方でも最大規模のものだと明らかとなった。

#### 埋没沢の形状と埋没過程

水場遺構及び関連施設が構築された埋没沢は、先に述べたように、7区西部に位置し、南西から北西に向かって蛇行しながら等高線に沿って沢水が流れ、吾妻川に注ぎ込んでいた(第338図)。埋没沢の形状や規模は、調査工程上すべて調査できていない為、断片的な情報のみであり、想定の域を出ない。

上流域は90区S-24方向から流れていたと想定され、さらに南西部は山体崩落などによる土砂崩れによって、削平され、復元はできないが、南西部に延びていたと想定される。90区S-24から北東部へ細長い形状を呈し、等高線も密になっていることから、比較的急な水流だったと想定され、90区-R-2とR-8で蛇行しながら下る様相がみられた。90区-P-7、8では、沢水の出水によって形成された1号自然流路が確認された。1号自然流路は、鉄砲水のような出水によって一時的に形成されたと捉えられる。

埋没沢の中流域にあたる90区I-N-10～24付近では、等高線が開けて緩やかになっているため、沢水も緩やかな流れになっていたと想定される。緩やかな流れとなった箇所には、水場遺構と関連した施設が形成されており、流れの緩やかになった場所を選択的に利用したと想定される。90区N-O-22より北東部は未調査のため不明であるが、100区-P-R-22～24から南西部は等高線が密となっており、中段段丘面から下位段丘面へと下る部分では滝のように水流が急になっていたと想定される。

埋没沢の形成時期は、1号自然流路内から中期初頭の土器が出土しており、中期初頭には沢が形成されたと想定されるが、水場遺構の関連施設は形成されていない。中期前葉には、1号トチ塚の下部土坑が形成されており、土砂堆積によって中流域が緩やかになったため、水場の利用が可能となったと想定される。水場遺構は構築されておらず、低湿性土坑を主体とした様相を呈している。水場遺構の土層堆積状況からは、何度も砂層及び砂礫層によって埋没していることが明らかになっており、中期後葉から後期前葉における水場利用は、埋没を繰り返しながら、構築され、最終的に1号水場遺構周辺は機能しなくなったとみられる。後期中葉から後葉は、1号水場遺構の上流域にあたる箇所にて9～11号水場を形成している。埋没沢の埋没時期は、9～11号水場遺構の廃絶時期などを考えると、後期末葉には埋没し、機能しなくなったと想定される。平坦面となった埋没沢には、30号集石や168号堅穴建物など構築がされるようになったと考えられる。

#### 水場遺構関連施設の概要

水場遺構関連施設は、中流域に集中し、縄文時代中期前葉から後期後葉にかけて形成された(第338～340図)。中期前葉では、1号トチ塚の下部土坑が確認された、この段階の水場遺構は、低湿性土坑を主体としたもので、初期水場利用の様相を呈している。中期後葉になると3、5号水場遺構が挙げられ、低湿性土坑と水場遺構がセットとなって利用され、後期前葉までみられる。後期前葉からは1号水場遺構や9～11号水場遺構のように水場遺構が大型化し、トチ塚など堅果類外皮の廃棄場を伴うようになる。中期前葉から後期後葉の約1000年間の長期間の中で、埋没沢の沢水を利用し、堅果類の水さらしに特化した遺構ではなく、堅果類、木材・木製品の水漬け、生活用水など多機能的な利用を行っていたと想定される。埋没沢の氾濫も度々起こった発生したとみられ、1号自然流路が氾濫過程を物語っている。縄文人は、自然災害により水場遺構が埋没するそのたびに復旧を試み、水場利用を続けてきたと想定される。最終的には、水場遺構のあった6号水場遺構、9～11号水場遺構上面では、丸石や特殊遺物の集積など、儀礼の目標物となったと想定される。

第6表 水母遺構一覧表

遺構 No	調査区	地区	区	グリッド	調査年度	規模(m)			遺構の重複		施設の機能	振替前遺構名称
						長軸	短軸	深さ	(新)	(古)		
1	6	25	90	L-10・17 M-17・18	E30	貯水部	780	680	70			7区1号水場
							900	220	45			
2	6	25	90	L-8・15・16	E30		330	280	52		7区2号水場	
3	6	25	90	N-0・19・20	E30		520	260	54	4水	7区3号水場	
4	6	25	90	M-17・18	E30	貯水部	340	280	42			7区4号水場
						排水部	130	120	26		3水	
5	6	25	90	N-18	E30		(200)	(190)	54		7区5号水場	
6	7	25	90	G-8・14	E30		378	366	70	31風	34号配石	
7	6	25	90	M-15・16	E30		164	148	30	2, 4, 9 低阻性土	54号配石	
8	6	25	90	N-17・18 0-17	E30		340	310	22			59号配石
									2, 4, 9 低阻性土			
9	7	25	90	J-K-10・11	E30		390	390	54			32号配石
						排水部	(175)	310			30風	
10	7	25	90	J-K-1・11・12	E30		890	650	75		11水	25～26号配石
11	7	25	90	I・J-12・13	E30		380	360	28			35号配石
12	7	25	90	J-K-11・12	E30		590	380	38		12水	36号配石
13	6	25	90	0-18・19	E30		—	—	18			55号配石